

嘉数トウンヤマ遺跡Ⅱ

—個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査—

2009年（平成21年）3月
沖縄県宜野湾市教育委員会

嘉数トウンヤマ遺跡Ⅱ

— 個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査 —

2009 年（平成21年）3月

沖縄県宜野湾市教育委員会

序

本報告書は、周知の遺跡である嘉数トゥンヤマ遺跡の包蔵地内において、個人農地の土地造成が計画されたことから、それに先立って、平成 18 年度に宜野湾市教育委員会が実施した本発掘調査の成果をまとめたものであります。

嘉数地域は、嘉数高台公園等の整備事業のほか、昨今の宅地開発等の市街地化が著しい中で、いまなお碁盤目状の集落形態を呈しており、旧来の面影を残した数少ない地域であります。また、集落の北側には嘉数高台として名高いウィーヌヤマがあり、さらに北麓には比屋良川が流れ、県指定有形文化財「小禄墓」を主として、流域沿いには断崖を利用した古墓群が連なっており、その他にも拝所や石獅子、湧泉等が確認されております。嘉数トゥンヤマ遺跡の後背にも、トゥン（嘉数之殿）とジトウヒヌカン（地頭火の神）と称される祠が配置されており、これらが地域の財産として大切に継承されております。

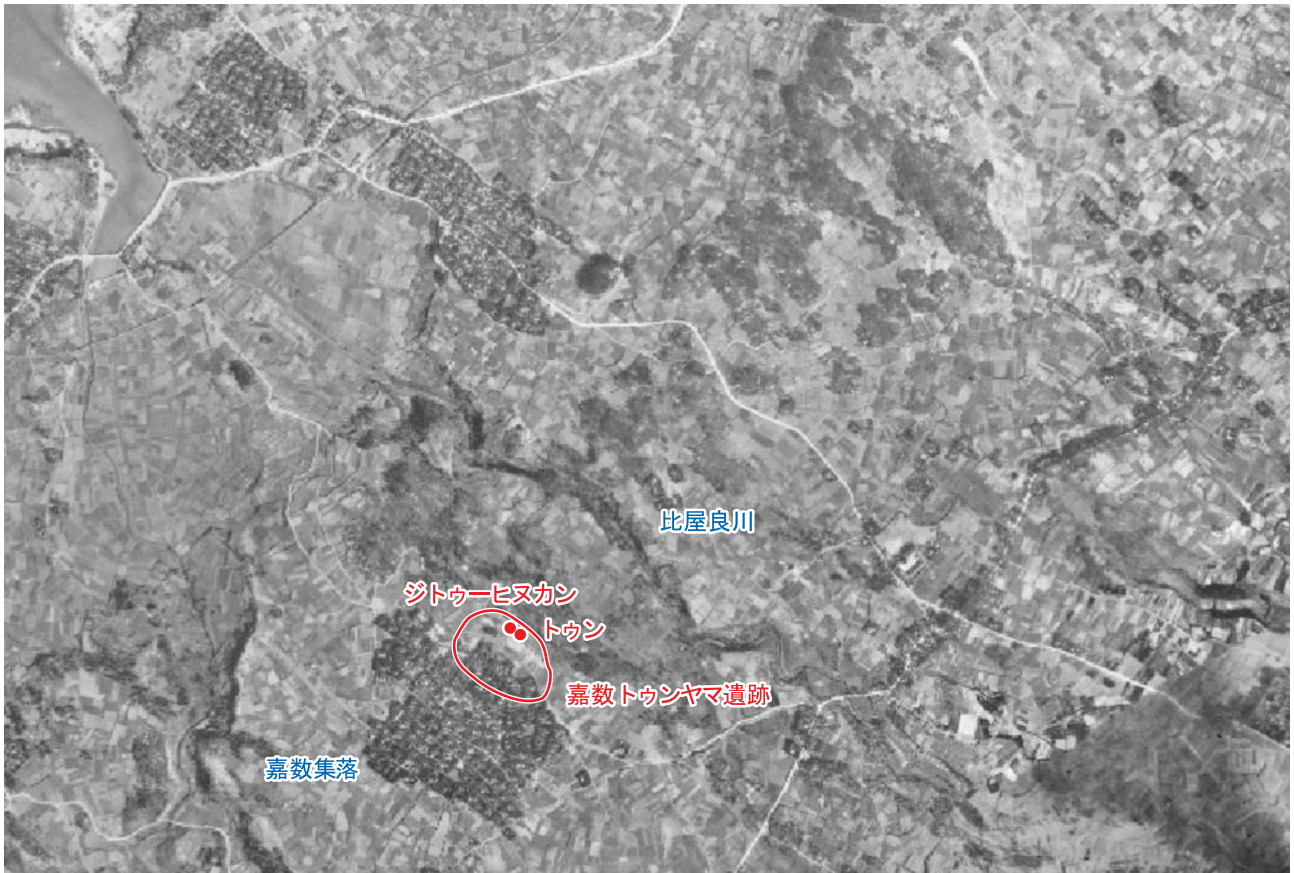
今回の本発掘調査により、掘立柱建物跡や倉庫跡と思われる多数の柱穴群や中世（グスク時代）の畑跡として検討されている小穴群のほか、近世嘉数村の溝状礫敷遺構も確認されております。特に溝状礫敷遺構の造成時に遺構内に充填された沖縄製陶器は数量、器種、復元資料とも突出しており、近世末の村落における沖縄製陶器の組成を把握する上で重要な事例であります。今回の報告書では近世以降の沖縄製陶器を中心に、関連する遺構を報告しています。これらの調査成果からは、中世から近世を経て、近代へと連綿と営まれてきた往時の嘉数村の様相について窺い知ることができると言えます。

今回の調査成果が、広く市民の歴史的教材ないしは文化財の保護・活用資料として生かされ、歴史学等の学術資料として御検討いただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、多大な御指導を賜りました文化庁文化財部と沖縄県教育庁文化課、並びに貴重な御指導・御助言を賜りました市文化財保護審議会の先生方と嘉数区自治会、その他関係各位に対しまして心から感謝申し上げます。

2009（平成 21）年 3 月

沖縄県 宜野湾市教育委員会
教育長職務代行者
教育部長 新田 和夫



巻頭図版1 嘉数トウシヤマ遺跡（昭和20年撮影空中写真オルソ）



巻頭図版2 嘉数トウシヤマ遺跡（平成10年撮影空中写真オルソ）



卷頭図版3 調査区全景（溝状礫敷遺構完掘状況）



①南・北溝状礫敷遺構地山造成状況



②南・北溝状礫敷遺構の延長



③南溝状礫敷遺構礫充填状況



④礫充填土坑No.1 礫充填状況1



⑤礫充填土坑No.1 礫充填状況2



⑥礫充填土坑No.2 断面



⑦礫充填土坑No.2 完掘状況



⑧南溝状礫敷遺構と溝1の連続

例 言

1. 本報告書は、個人農地の土地造成に先立ち、宜野湾市教育委員会が国・県の補助を受けて、平成 18 年度に実施した、嘉数トゥンヤマ遺跡の緊急発掘調査の近世から近代にかけての成果を収録したものである。
2. 現地調査の実施にあたっては、嘉数区自治会及び地権者、隣地地権者の協力を得た。
3. 発掘調査並びに本文中における遺跡の基準方位は、国土座標系（旧座標系）第 XV 座標系の座標北を用い、層位・遺構は海拔高（那覇）を基準とした高さである。
4. 本書に掲載した地図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図（1：2,500）を使用しており、他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営している GIS データを使用している。
5. 本書で使用した層名は、農林水産省水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
6. 出土遺物のうち、沖縄産陶器の胎土分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
7. 本書の執筆は、豊里友哉・仲村 健・城間 肇・伊藤 圭・玉城夕貴・上田圭一・矢作健一があたり、執筆分担は下記する一覧に記してある。

仲村 健（宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 主事）

第 I 章

城間 肇（宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 主事）

第 II 章—第 1・2・3・4・6 節

玉城夕貴（宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 副主任嘱託員）

第 II 章—第 5 節

豊里友哉（宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 係長）

第 II 章—第 4 節、第 III 章—第 3 節 1、第 V 章

伊藤 圭（宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 主任嘱託員）

第 III 章—第 3 節、第 3 節 2～6、第 V 章

上田圭一・矢作健一（パリノ・サーヴェイ株式会社）

第 IV 章

8. 現地調査・資料整理にて得られた遺物・実測図・写真・デジタルデータ等の各種調査記録は、すべて宜野湾市教育委員会文化課にて保管している。

目次

序	
巻頭図版	
例言	
第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第1節 遺跡の位置と環境	5
第2節 自然的環境	6
第3節 歴史的環境	7
第4節 嘉数地域の位置と環境	8
第5節 嘉数区の聖地と祭祀	9
第6節 嘉数タウンヤマ遺跡と周辺遺跡	11
第Ⅲ章 発掘調査の成果	13
第1節 調査区の設定と層序	13
1. 調査区の設定	13
2. 基本的層序	14
第2節 遺構	21
1. 溝状礫敷遺構	21
第3節 遺物	31
1. 沖縄産施釉陶器	33
2. 沖縄産無釉陶器	56
3. アカムヌー	69
4. 沖縄産瓦質土器	84
5. 本土産陶磁器	84
6. その他の近世～現代遺物	86
第Ⅳ章 自然科学分析調査の成果	90
第Ⅴ章 結語	97
参考文献	98
図版	101
報告書抄録	

巻頭図版目次

- 巻頭図版1 嘉数トゥンヤマ遺跡（昭和20年撮影空中写真オルソ）
- 巻頭図版2 嘉数トゥンヤマ遺跡（平成10年撮影空中写真オルソ）
- 巻頭図版3 調査区全景（溝状礫敷遺構完掘状況）
- 巻頭図版4 遺構・遺物検出状況

挿図目次

第1図	宜野湾市の位置図	5	第28図	沖縄産施釉陶器10 鍋、安瓶、壺	55
第2図	宜野湾市遺跡変遷図	7	第29図	嘉数トゥンヤマ遺跡における甕の文様	56
第3図	宜野湾間切嘉数村全圖（明治36年）一部加筆	8	第30図	沖縄産無釉陶器の組成と各分類の出土状況	57
第4図	嘉数区の聖地	9	第31図	沖縄産無釉陶器1 壺、甕	63
第5図	嘉数周辺地域の遺跡情報図1	11	第32図	沖縄産無釉陶器2 甕	64
第6図	嘉数周辺地域の遺跡情報図2	12	第33図	沖縄産無釉陶器3 甕	65
第7図	発掘調査地区位置図（S=1/5000）	13	第34図	沖縄産無釉陶器4 播鉢	66
第8図	グリッド設定図（S=1/1000）	13	第35図	沖縄産無釉陶器5 播鉢	67
第9図	調査区設定状況（S=1/1000）	14	第36図	沖縄産無釉陶器6 鉢、皿？、急須、火鉢、蓋	68
第10図	断面図1	15	第37図	鍋身の器形と鍋蓋との対応関係	70
第11図	断面図2	17	第38図	アカムヌーの組成と各分類の出土状況	71
第12図	断面図3	19	第39図	アカムヌー1 鍋蓋、鍋	76
第13図	全体平面図1	23	第40図	アカムヌー2 鍋	77
第14図	全体平面図2	25	第41図	アカムヌー3 羽釜、鉢	78
第15図	全体平面図1（オルソ画像）	27	第42図	アカムヌー4 鉢、播鉢、急須蓋、急須	79
第16図	全体平面図2（オルソ画像）	29	第43図	アカムヌー5 火炉	80
第17図	口径計測位置	31	第44図	アカムヌー6 火炉	81
第18図	近世以降の人工遺物組成と遺構別の出土状況	31	第45図	アカムヌー7 火炉	82
第19図	沖縄産施釉陶器1 碗	46	第46図	アカムヌー8 火炉、不明	83
第20図	沖縄産施釉陶器2 碗	47	第47図	沖縄産瓦質土器	84
第21図	沖縄産施釉陶器3 碗	48	第48図	本土産陶磁器の出土割合	84
第22図	沖縄産施釉陶器4 小碗	49	第49図	本土産陶磁器	85
第23図	沖縄産施釉陶器5 鉢	50	第50図	その他の遺物1 円盤状製品	88
第24図	沖縄産施釉陶器6 鉢	51	第51図	その他の遺物2 ビーズ、煙管、簪、古銭	89
第25図	沖縄産施釉陶器7 皿	52	第52図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）	94
第26図	沖縄産施釉陶器8 灯明皿、急須蓋、急須、瓶、瓶子	53	第53図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）	95
第27図	沖縄産施釉陶器9 香炉、花生け、火入れ、酒器	54	第54図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）	96

図版目次

図版1	調査経過	4	図版12	沖縄産施釉陶器7 鉢	107
図版2	戦前の旧嘉数村（昭和20年米軍撮影）	8	図版13	沖縄産施釉陶器8 鉢	108
図版3	イーヌヤマの祠	10	図版14	沖縄産施釉陶器9 皿	109
図版4	トゥンヤマのトゥンの祠	10	図版15	沖縄産施釉陶器10 灯明皿、急須蓋、急須	110
図版5	トゥンに隣接する地頭火又神の祠	10	図版16	沖縄産施釉陶器11 瓶、瓶子、香炉、花生け	111
図版6	沖縄産施釉陶器1 碗	101	図版17	沖縄産施釉陶器12 火入れ、酒器	112
図版7	沖縄産施釉陶器2 碗	102	図版18	沖縄産施釉陶器13 鍋、安瓶、壺	113
図版8	沖縄産施釉陶器3 碗	103	図版19	沖縄産無釉陶器1 壺	114
図版9	沖縄産施釉陶器4 碗	104	図版20	沖縄産無釉陶器2 壺	115
図版10	沖縄産施釉陶器5 小碗	105	図版21	沖縄産無釉陶器3 甕	116
図版11	沖縄産施釉陶器6 鉢	106	図版22	沖縄産無釉陶器4 甕	117

図版 23	沖縄産無釉陶器 5 播鉢	118	図版 37	アカムヌー 11 鉢	131
図版 24	沖縄産無釉陶器 6 播鉢	119	図版 38	アカムヌー 12 鉢	132
図版 25	沖縄産無釉陶器 7 鉢	120	図版 39	アカムヌー 13 播鉢、急須蓋、急須	133
図版 26	沖縄産無釉陶器 8 皿?、急須、火鉢、蓋、火入れ	121	図版 40	アカムヌー 14 急須	134
図版 27	アカムヌー 1 鍋蓋、鍋	122	図版 41	アカムヌー 15 急須	135
図版 28	アカムヌー 2 鍋	123	図版 42	アカムヌー 16 火炉	136
図版 29	アカムヌー 3 鍋	124	図版 43	アカムヌー 17 火炉	137
図版 30	アカムヌー 4 鍋	125	図版 44	アカムヌー 18 火炉	138
図版 31	アカムヌー 5 鍋	126	図版 45	アカムヌー 19 火炉、不明	139
図版 32	アカムヌー 6 鍋	127	図版 46	アカムヌー 20 火炉	140
図版 33	アカムヌー 7 鍋	128	図版 47	沖縄産瓦質土器	141
図版 34	アカムヌー 8 鍋	127	図版 48	本土産陶磁器	142
図版 35	アカムヌー 9 鍋	129	図版 49	その他の遺物 1 シーサー、不明	143
図版 36	アカムヌー 10 鍋、羽釜、鉢	130	図版 50	その他の遺物 2 円盤状製品、ビーズ、煙管、簪、古銭	144

挿表目次

第 1 表	嘉数周辺地域の埋蔵文化財包蔵地一覧	11	第 12 表	本土産陶磁器集計表	84
第 2 表	嘉数周辺地域の遺跡	12	第 13 表	沖縄産瓦質土器観察一覧	85
第 3 表	近世以降の遺物集計表	32	第 14 表	本土産陶磁器観察一覧	85
第 4 表	沖縄産施釉陶器集計表	37	第 15 表	赤瓦集計表	86
第 5 表	沖縄産施釉陶器観察一覧	42	第 16 表	円盤状製品集計表	86
第 6 表	沖縄産無釉陶器分類一覧	57	第 17 表	陶製置物の類観察一覧	87
第 7 表	沖縄産無釉陶器集計表	58	第 18 表	円盤状製品観察一覧	87
第 8 表	沖縄産無釉陶器観察一覧	61	第 19 表	煙管観察一覧	87
第 9 表	アカムヌー分類一覧	70	第 20 表	簪観察一覧	88
第 10 表	アカムヌー集計表	72	第 21 表	古銭観察一覧	88
第 11 表	アカムヌー観察一覧	74	第 22 表	胎土分析試料一覧および胎土分類	91

第 I 章 調査に至る経緯

第 1 節 調査に至る経緯

嘉数タウンヤマ遺跡は、『土に埋もれた宜野湾』（1989 年）・『宜野湾市文化財情報図』（2002 年）等にて報告がなされている「周知の遺跡」である。同遺跡が所在する嘉数地域は、比屋良川護岸整備、嘉数高台公園、比屋良川流域公園整備等の各種開発事業のほか、戦後の外人住宅建設や昨今の宅地開発等の市街地化によって旧来の姿を失いつつあり、同遺跡についても遺跡の性格を把握するための詳細な確認調査が必要とされていた。

嘉数タウンヤマ遺跡の個人農地の土地造成に伴う保護調整と緊急発掘調査の実施

嘉数タウンヤマ遺跡の包蔵地一帯の当該用地において、文化財パトロールによって、国有地管理処分に伴う競売計画がなされていることが判明した。市教育委員会では競売計画を担当している内閣府沖縄総合事務局財務部と調整し、当該用地での試掘・確認調査の事前実施についての理解を得た。その結果を県教育庁文化課に対して報告し、開発調整用資料の取得を目的として、文化庁国庫補助事業による試掘・確認調査の実施について承諾を得て、平成 16 年 8 月 9 日より試掘・確認調査に着手し平成 16 年 11 月 15 日調査を完了した。調査の結果、管理処分の対象となった国有地全域に埋蔵文化財が包蔵されていることが確認された。（その成果については平成 19 年度刊行した「嘉数タウンヤマ I」で報告している。）

確認された埋蔵文化財の取り扱いについて、沖縄総合事務局との調整を行い、地下遺構への影響等によっては記録保存のための「本発掘調査の措置」が必要とされる旨、競売物件調書に記載された。当該用地の落札者である地権者は当該用地において、切土造成を実施し、高さ 1 m 程度の擁壁を設置し、畑地の造成は重機により深さ 1 m 程度、攪拌して土地改良して使用する。」とのことであった。平成 18 年 4 月 24 日これらの経緯を県文化課へ報告し、今後の取り扱いについて確認した。個人の農地土地造成であるため、文化庁国庫補助事業として発掘調査を実施することになった。

同日、地権者より文化財保護法第 99 条の規定に基づき、当該用地の発掘調査の依頼が宜野湾市教育委員会へあり、平成 18 年 4 月 28 日付け、地権者から同法第 93 条第 1 項により、沖縄県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘届が提出された。市教育委員会では同法第 99 条第 1 項の規定に基づき、平成 18 年 6 月 26 日付け宜教文第 2 号により発掘調査通知を沖縄県教育委員会教育長へ提出し、緊急発掘調査の実施に向けた事務手続きを終了した。

以上の経緯により、市教育委員会は調査担当者 1 名、臨時職員 14 名を充て、平成 18 年 6 月 1 日から緊急発掘調査を開始し、平成 19 年 1 月 15 日に発掘調査を完了した。同年 1 月 26 日付け宜教文第 2 号文書にて、宜野湾警察署長宛に埋蔵文化財発見届を提出したほか、県教育庁文化課には埋蔵文化財保管証を発掘調査終了報告をそれぞれ提出した。その後、沖縄県教育委員会より埋蔵文化財認定通知があった旨の事務連絡が宜野湾警察署長より、平成 19 年 3 月 13 日付け文書にて宜野湾市教育委員会宛に提出された。

第2節 調査体制

嘉数トゥンヤマ遺跡包蔵地内の個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査については、平成18年度に実施し、資料整理および報告書作成に係る整理業務は、平成19・20年度にかけて実施した。なお、調査体制は下記のとおりである。

事業主体	沖縄県宜野湾市教育委員会		
事業責任者	教育長		普天間朝光（平成18～20年度）
	教育長職務代行者		新田 和夫（平成20年度）
事業総括	教育部 教育部長		外間 伸儀（平成18年度）
	“ “		新田 和夫（平成18・19年度）
	“ 教育次長		新田 和夫（平成18年度）
	“ “		伊佐 友孝（平成18～20年度）
	文化課 課長		城間 盛久（平成18年度）
	“ “		和田 敬悟（平成19・20年度）
事業事務	文化課 文化財保護係長		呉屋 義勝（平成18年度）
	“ “		豊里 友哉（平成19・20年度）
	“ 文化財保護係主任主事		仲村 健（平成18～20年度）
	“ “ 主事		城間 肇（平成18～20年度）
	“ “ 主事		森田 直哉（平成18年度）
	“ 臨時職員		西銘 五月（平成18・19年度）
	“ “		野原 美幸（平成20年度）
調査業務	“ 文化財保護係主任主事		仲村 健（平成18～20年度）
	“ “ 主事		城間 肇（平成18～20年度）
	“ “ 主事		森田 直哉（平成18年度）
	“ 嘱託職員		伊藤 圭（平成19・20年度）
調査作業員	“ 臨時職員		上里やよい、仲松光子、米須富士江、伊波晴美 比嘉ムツ子、宮城常正、津波古美津江、德里末子 伊佐美幸、町田弘美、友利久美子、岸本静子 伊波加代子、渡久地美江子、上運天賢、村越克己 崎山幸子、宮城和江、宮城真由美、比嘉武也 （平成18～20年度） 宮里みどり（平成18年度）
資料整理業務	“ 文化財保護係主任主事		仲村 健（平成18～20年度）
	“ “ 主事		城間 肇（平成18～20年度）
	“ “ 主事		森田 直哉（平成18年度）
	“ 嘱託職員		仲田 初枝（平成19年度）
	“ “		伊藤 圭（平成19・20年度）
	“ “		杉村千重美（平成19・20年度）

資料整理業務	文化課	嘱託職員	許田 栄美（平成 20 年度） 伊禮さおり（平成 20 年度） 古謝 和美（平成 20 年度）
	//	//	
	//	//	
資料整理作業員	//	臨時職員	新田政江、伊波晴美、田盛謹代、古謝和美 喜名ひとみ、平川邦子、池田一美、真志喜正枝 山田葉月、原田円、伊佐祐姫、翁長和佳子 比嘉ムツ子、宮里みどり、宮平優子、新垣綾子 比嘉美香、稲嶺恵利奈（平成 18～20 年度） 杉村千重美（平成 18 年度）
委託業務	画像解析業務 自然科学分析調査 発掘労務作業		（財）京都市埋蔵文化財研究所 パリノ・サーヴェイ株式会社 社団法人宜野湾市シルバー人材センター

調査指導及び調査協力

調査指導および調査協力、調査指導および調査協力者として以下の方々に指導を仰いだ。

坂井 秀弥	文化庁文化財部記念物課	主任文化財調査官
清野 孝之	//	文化財調査官
島袋 洋	沖縄県教育庁文化課	記念物班長
盛本 勲	//	主幹
瀬戸 哲也	//	主任
中山 晋	埋蔵文化財文化財センター	調査課 主任
知念 隆博	//	// 主任
宮城 勲	嘉数区自治会長	
知花 良弘	嘉数区在住（地権者）	
知花 栄一	嘉数区在住（隣地地権者）	
嵩元 政秀	宜野湾市文化財保護審議会	会長
新垣 義夫	普天満宮 宮司	（宜野湾市文化財保護審議会 委員）
赤嶺 政信	琉球大学 教授	（ // 委員）
池田 榮史	// 教授	（ // 委員）
大城 逸朗	おきなわ石の会 会長	（ // 委員）

第3節 調査経過

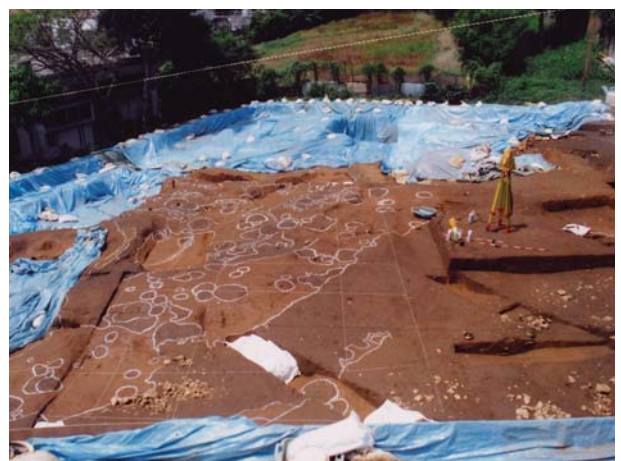
発掘調査の経過

嘉数タウンヤマ遺跡包蔵地内の個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査については、嘉数区自治会に対して事前の協力依頼を行い、伐採等の環境整備に始まって、実質的な現地調査は平成18年6月7日より着手した。今回の調査は、市文化課文化財保護担当職員1人・発掘作業員14人・発掘労務作業員（市シルバー人材センター会員）10人の計25人で実施し、調査面積は883㎡であった。

調査区設定については、平成16年度の範囲確認調査区のグリッドを流用して行った。タウン（嘉数之殿）と称される嘉数集落の拝所から南方向の軸線を基軸とし、それに直交する形で東西に任意の作業軸を設けてグリッドを設定した。グリッドの規模は5m×5mである。

調査はプレハブ設置前に南東側にトレンチ1を設けて、重機による掘削と礫敷遺構の検出、諸記録を行い埋め戻しプレハブを設置した。次に西側にL字状のトレンチ2を設けて掘削し、溝状遺構と多数のピットを検出した。その後、調査は北西隅から南西に広げる形でグリッド掘りを行い、層序を確認しながら進めていった。主要なグリッド断面図を作成しつつ、畦を撤去して、9月初旬には15ライン以西の全体的な遺構が検出された。調査区中央部分のM14・15、N15、O15グリッドからはグスク時代に想定される多数の柱穴、土坑が、また、その北側から東にかけて柱穴等を切る形で溝状遺構が検出された。調査区南側からは重機による攪乱が広範囲にみられた。全体写真は作業状況に合わせてグリッド毎にオルソ画像を作成していき最終的にそれらをつなぎ合わせて完成させた。

調査を進めると溝状遺構は北側と南側に2基あり、それぞれ礫敷されており、溝礫敷内からは近世の遺物が多数出土した。10月初旬からは調査区中央部分の柱穴や土坑を半裁または4分割しながら調査を進めていったが、予想以上に柱穴、土坑の切り合いが多く、12月末に15ライン以西の調査が終了し、翌年1月に残土置き場であった16、17ラインのグリッドを掘削し、2基の溝状礫敷遺構の東側とその他の柱穴、土坑の検出、掘削や諸記録を行い。平成19年1月15日に埋め戻し、原状回復作業をもって発掘調査を終了した。



図版1 調査経過

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

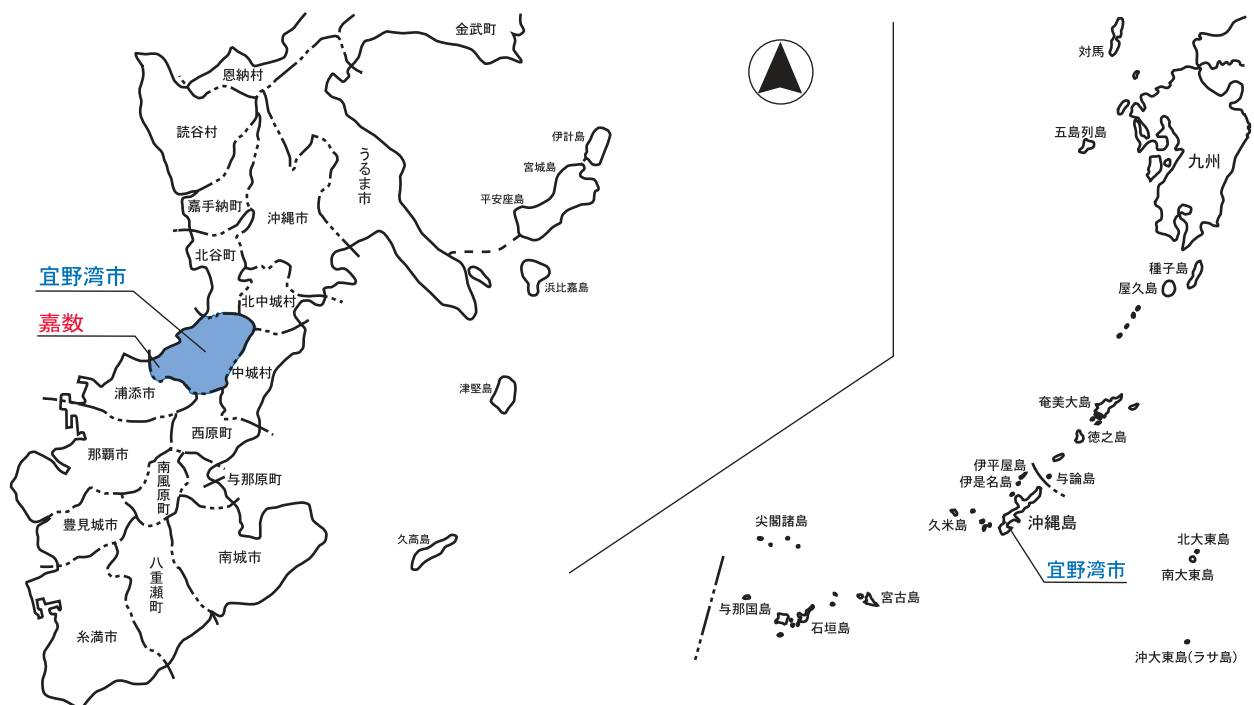
第1節 遺跡の位置と環境

宜野湾市の位置と環境

宜野湾市は、沖縄本島中部西海岸にあって東シナ海に面し、周辺には北谷町・北中城村・中城村・西原町・浦添市が隣接する。那覇市からは北に 12.4 km 離れた地点に位置し、市域には国道 58 号線、330 号線等の主要幹線が、普天間飛行場基地の外縁部に廻っている。さらに、沖縄自動車道北中城 IC・西原 IC へのアクセス道路として、県道宜野湾北中城線や 34 号線などの県内主要幹線道路も展開し、本島中南部と北部地域を結ぶ要所となっている。

総面積は 19.69k m²で、略東西 6.1 km、略南東 5.2 km の略長方形を呈す。市域北側にキャンプ瑞慶覧、中央に普天間飛行場基地が占拠し、市民居住区域は普天間飛行場基地の外縁部に展開するドーナツ状をなす。地目比率は、米軍基地が 32.4%、民間地の宅地 38%、田畑 5%、原野 2%、その他 23% となっている(2007 現在)。

地形は、ひな壇状の 4 つの段丘面を形成し、海岸沿いの沖積低地、内陸側の 3 つの段丘面は大半が琉球石灰岩層で成り立つ。琉球石灰岩層の段丘縁には洞穴と湧泉が点在し、本市の自然及び人文的景観の特徴となっている。また、中城と接する範囲では、クチャと称される泥岩の島尻層群が見られる。海拔高度の最高位は、中城村・西原町・本市の 3 市町村界にあたるサンカホージリと称する 146 m の地点である。河川は浦添市と西原町の境に比屋良川、北谷町・北中城村・中城村との境に普天間川が流れている。気候は亜熱帯性で、年間平均気温は 22.7℃ と温暖である。雨量は春から夏が多く、夏から秋は台風が多い。年間降水量は 1800 ～ 2500 mm 程である。



第 1 図 宜野湾市の位置図

前身の「宜野湾間切」は、1671年に浦添・中城・北谷の三間切から13村を割き、新たに1つの村を設けて、14村で新設された。1649年編纂『絵図郷村帳』には、宜野湾間切新設以降の“村名”として、浦添間切に「かよく・宜湾・かミ山・加数・志やな・大志やな・内ミな・喜友名・あら城・いさ」、中城間切に「前ふてま・寺ふてま」、北谷間切に「あきな」がある。先の三間切から割かれた“村”がそれらの“村々”に相当し、「真志喜」村が新たな“村”に相当する。

1908年（明治41年）「沖縄県及島嶼町村制」の施行により、従来の間切は町・村に、村は字に改められた、宜野湾間切は宜野湾村となる。宜野湾村の戸数は2,401戸、人口は11,184人を数え、1939年（昭和14年）には、志真志・長田・愛知・赤道・中原・上原・真栄原の7つの屋取集落が新たな“字”として設置され、1943年（昭和18年）には真栄原から佐真下が分離して新たな“字”が設置された。今次大戦を経て、1955年段階で18,469人の人口も1960年3月には3万人を越え、1962年7月1日に宜野湾市に昇格し、1964年2月には戦後の混乱期の産物である対人的行政区を、地域を明確にした20の行政区に分割統合している。

市制施行後も市域の市街化傾向は急激をきわめ、嘉数ハイツ・大謝名団地・上大謝名区の自治会が新設されるにおよび、宜野湾市は都合23自治会20行政区によって編成されるようになった。さらに、「那覇広域都市計画圏」において軍用地を除く市全域が市街化区域に指定されることとなった。これに併せて、西海岸の公有水面埋め立てに伴うコンベンションセンター・市営球場などの公共施設の整備により、宜野湾市は新しい市街地として発達している状況にある。宜野湾市の総世帯数は、2009年12月現在、38,103世帯、人口は92,294人となっている状況で年々増加傾向にあると言える。現在、宜野湾市は将来の都市像“ねたてのぎのわん”の実現に向けて、経済の自立＝コンベンション・リゾート都市の形成、生活・居住の自立＝ハイアメニティ都市の形成、文化の自立＝国際学園文化都市の形成を柱とする諸公共事業が推進されている。

第2節 自然的環境

宜野湾市の地形は、4つの海岸段丘からなる。第1面は、比屋良川河口右岸から宇地泊・大山・伊佐に連なる標高3～30m（低位段丘下位面）の海岸低地で、第2面は、海岸低地から崖や急斜面となって比高5～10m程上方になる大山・真志喜・宇地泊・伊佐一帯で、標高30～40m（低位段丘上位面）の石灰岩段丘をなす。第3面は、キャンプ瑞慶覧から普天間飛行場基地へと延びる標高50～90m（中位段丘下位面）の石灰岩段丘で、普天間飛行場基地の滑走路建設の際に大部分が改変されたが、1950年米軍作成地形図では、標高60～80mの地形が500mの幅で続いている。第4面は、標高90m以上（中位段丘上位面）の高位置で、野嵩のヒージャーバンタ～沖縄国際大以東に残存し、代表的なのは赤道から宜野湾の緑地帯である。石灰岩段丘縁辺部には、洞穴・湧泉が発達し、洞穴は第3段丘や第4段丘の周縁に点在、湧泉は第2段丘や第4段丘の麓部に多い。

地質は、泥岩（クチャ）の島尻層群と、不整合に覆う琉球石灰岩層、海岸低地の沖積層で形成される。島尻層群は、標高80～120mの位置の丘陵地に発達しており、その上層には肥沃なジャーガルが被さっている。琉球石灰岩層は、第3面以下に発達する。石灰岩層上部にはマージが堆積し、島尻層群と石灰岩層の境界一帯は、地質・地形の湾入・起伏が著しく、シマシガーやシリガーラなどの小河川によりブロックが分かれる。

第3節 歴史的環境

沖縄諸島に人類が住み着いたのは現在から約3万年前とされ、宜野湾市では大山洞穴から「大山洞人」と称される20歳前後の男性の下顎骨片が発見されている。このほかにも、普天満宮洞穴遺跡等においてリュウキュウムカシキオンやムカシキオン等の化石動物が発見されている。

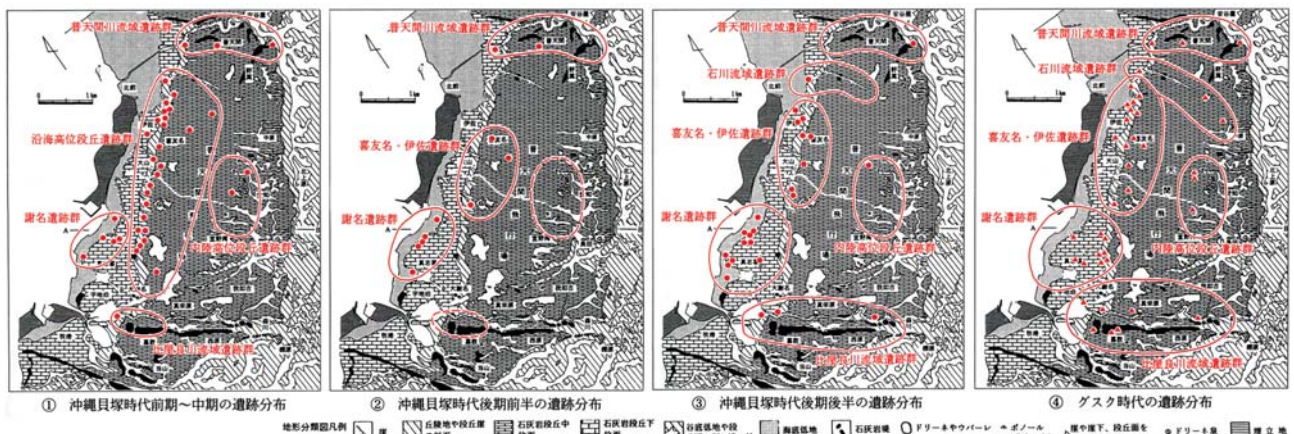
現在から6,000～7,000年前より、沖縄諸島に土器や石器などの技術を用いた生活文化が登場する。この文化は、沖縄固有の独自性が強いことから、九州や本州の縄文・弥生等の時代区分とは別に沖縄貝塚時代と称され、同時代は遺跡の立地・出土遺物等の違いから早期・前期・後期に大別されている。前期は、沖縄諸島域に当時の土器形式が広く分布することから、定着的な集団が各地域に形成される時期と考えられ、中期は、拠点的な大規模集落が平地帯に展開し、小規模遺跡が周縁に点在する。後期は、海岸低地の砂地にも居住域が拡散し、その規模も一律的に大きくなっていくようである。

12～15世紀に及ぶグスク時代は、農耕を基礎とする社会が形成・発達した時期である。農耕の基盤である土地・その生産を支える道具の入手や製作・同時期に展開された日本や中国・朝鮮・東アジア地域との交易などを通して各地域の集団は共同化し、その中から“按司”と称される在地支配者層が出現する。按司を中心とした各地域の集団は、互いの在地の権益を守り、且つ、それを拡大させるために相互に抗争を繰り返しながら淘汰していき、14世紀頃には中山・山北・山南の3つの勢力が拮抗するようになる。市域のグスク時代の遺跡は、迫地や河川流域の谷底低地を控える平地・丘陵斜面・段丘縁の高所に立地しており、市域の伝統的集落である近世の“村”の形態がこの時期に端緒が求められる。

グスク時代以降は、第一尚氏、第二尚氏王統による中央集権的古代国家の確立、1609年の薩摩藩島津氏の侵攻等、幾通りかの過程を経て近世基盤型集落へと変化させ市域の伝統的村落や18世紀以降の屋取集落が形成されていく。

近代以降は、1872年に琉球藩、1879年には沖縄県の設置が強行され、1881年(明治14)6月には沖縄県庁の中部支所として中頭郡役所が普天間に移設された。併せて中頭郡教育事務所、中頭郡組合農事試験場などの官公署が設置され、市域は本島中部地域の政治・経済・教育の中心となる。1902年(明治35)には首里から普天間に至る普天間街道、1922年(大正11)には県営鉄道嘉手納線(軽便鉄道)が開通し、利便性は一層高まりをみせた。1908年(明治41)の「沖縄県及び島嶼町村制」の施行により間切は町・村に、村は字に改められ宜野湾村となる。また、屋取人口の社会的増加等もあり、新たな字が分離・新設された。

先きの大戦により本市域も壊滅的な打撃を被り、戦後の軍用地接收と度重なる基地造成によって市域の景観は大きく変貌した。他地域に比べ、僅かに焼失を免れた野嵩地区が市域住民をはじめ以南の戦闘地域住民の収用所となった。1946年9月以降、帰住が許可され、社会基盤の復活が果たされると米軍基地関連産業の活況により市域の人口も急増した。1962年7月1日には市に昇格し、1964年2月には対人的行政区の地域を明確にした20行政区に分割統合された。



第2図 宜野湾市遺跡変遷図

第4節 嘉数地域の位置と環境

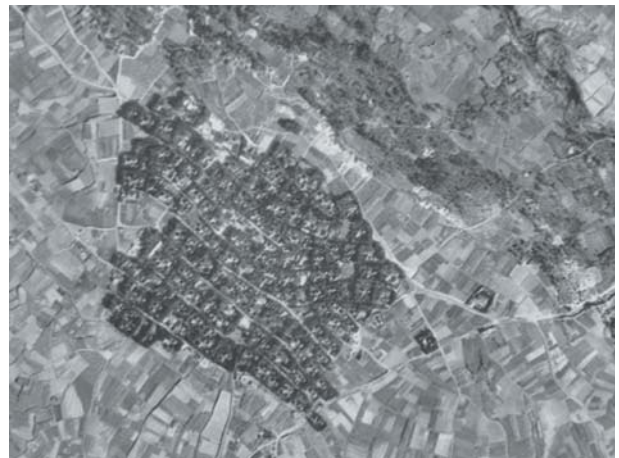
嘉数地域の概況

嘉数地域は、方言で「カカジ」と称されており、近世の首里王府によって編纂された『おもろさうし』巻十五には、「かかずもりぐすく」と聖地ウィーヌヤマの歌謡が見られることでも知られている地域である。

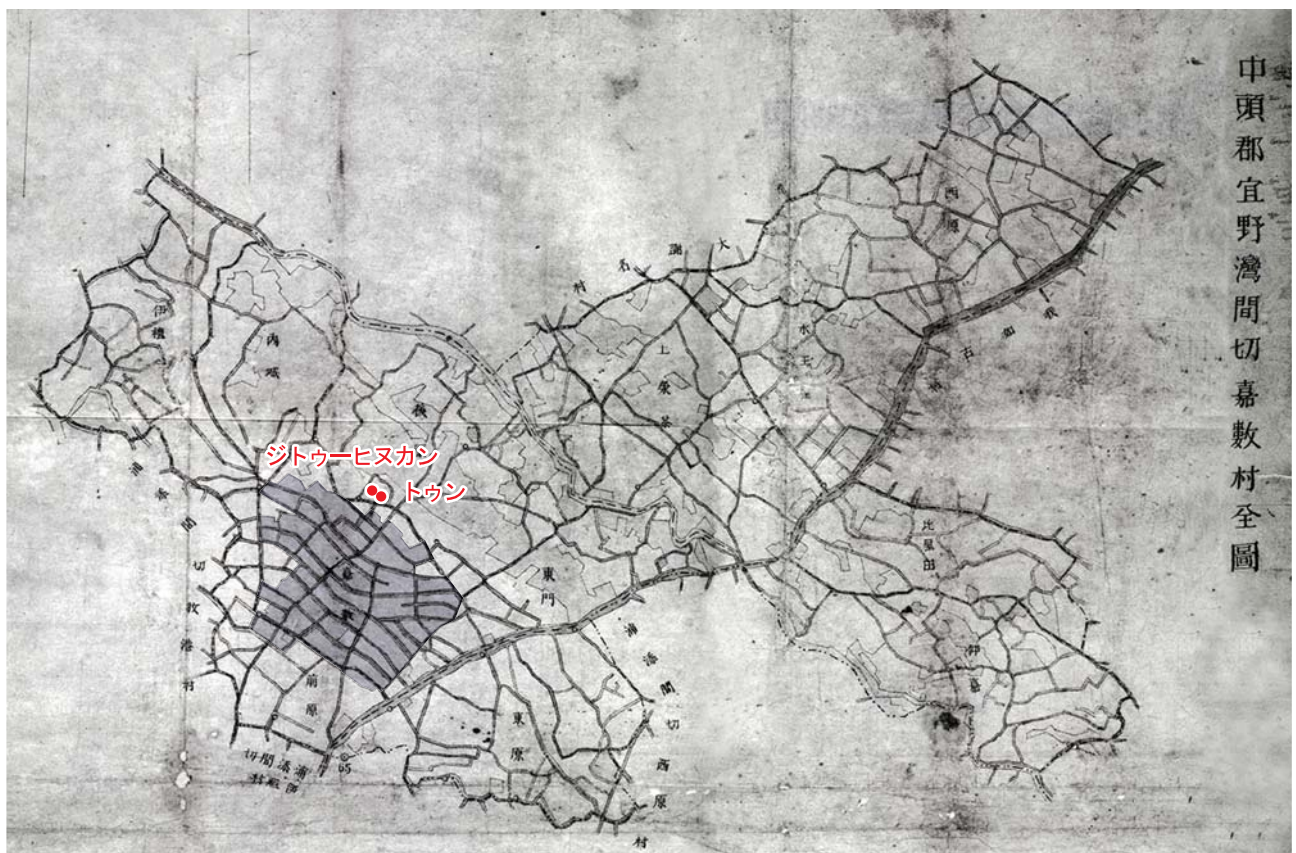
嘉数集落の北側には大謝名、北東側には真栄原・佐真下、西側から南東側にかけて浦添市に隣接しており、旧嘉数村の頃の小字には伊礼原・内城原・後原・嘉数原・前原・東原・東門原・仲嘉原・比屋田原・上栄茶原・水玉屋原・西原があったが、昭和14年の村行政区画設置に基づき、西原が佐真下に、仲嘉原・比屋田原・上栄茶原・水玉屋原が真栄原に分離されている。旧集落は嘉数原にあり、旧来の碁盤目型集落の面影を残した数少ない集落である。集落の後方にはウィーヌヤマ（嘉数高台）があり、その北麓を比屋良川が流れ、東側のウシヌクス坂から浦添当山に至る道路は、旧並松街道であった。

嘉数地域に残る伝承によると、小字後原と同内城原に集落があり、その2つの集団が嘉数原に移動合併して旧嘉数村を形成したとされ、慶長検地時には既に「賀数」（浦添間切）は存在していたとされている。現在の嘉数集落の大半は伊礼原・内城原・嘉数原に集在しており、1979（昭和54）年には伊礼原を中心とした新興住宅地に嘉数ハイツ自治会が設置されている。

戦前までの嘉数は、ほとんどが純農業集落で家畜も盛んであった。畑作は甘藷が主で、ミーゾーキ（箕）等の竹細工も盛んで、嘉数ソーキとしても有名であった。



図版2 戦前の旧嘉数村（昭和20年米軍撮影）



第3図 宜野湾間切嘉数村全圖（明治36年）一部加筆

第5節 嘉数区の聖地と祭祀

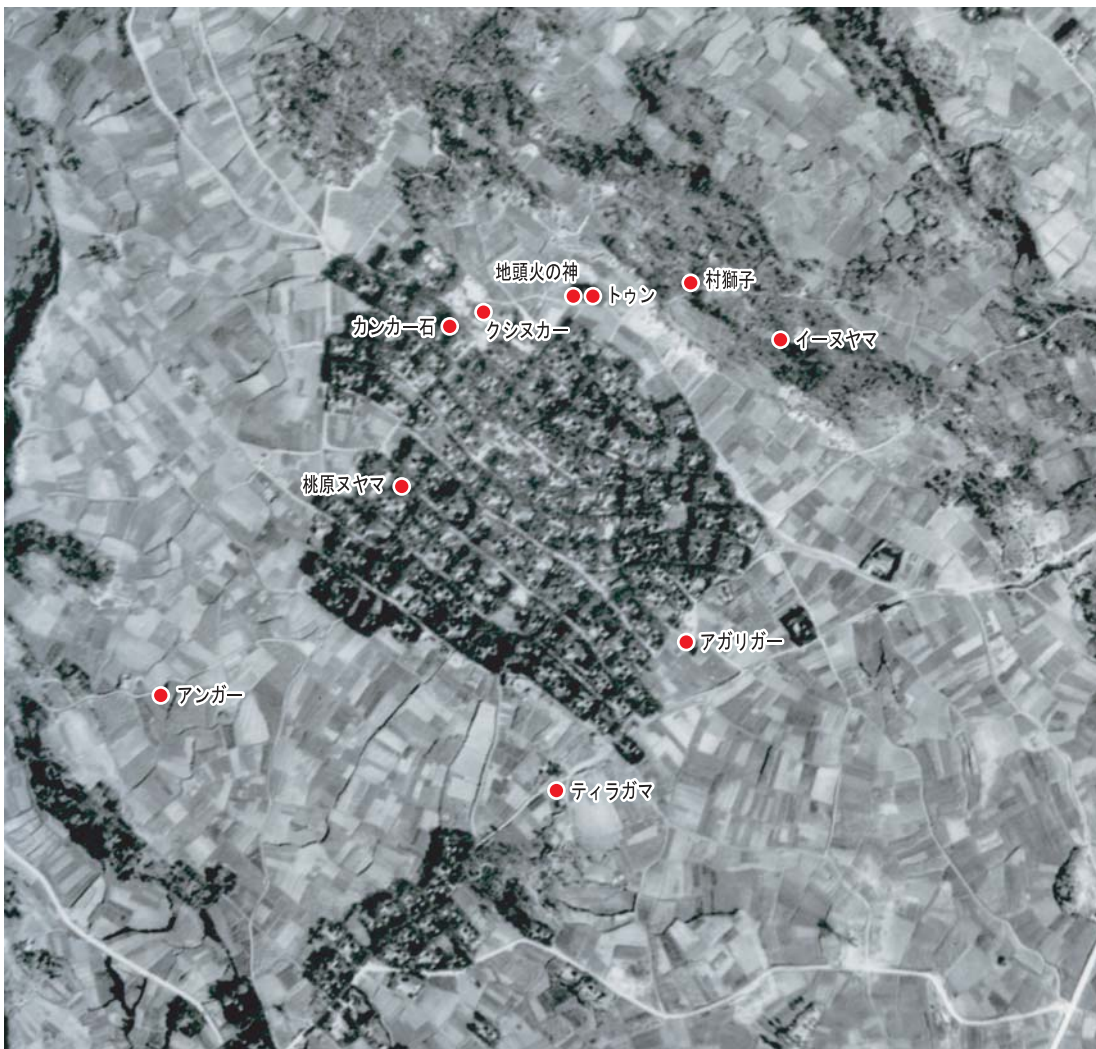
嘉数区の聖地

嘉数区には御嶽と呼ばれる4箇所の聖地が存在する。卯ヌ嶽とされるイーヌヤマ、西ヌ御嶽とされる桃原ヌヤマ、午ヌ御嶽とされるティラガマ、子ヌ御嶽とされるトウンの聖地である。嘉数区で最も重要視されているイーヌヤマは、集落東方にある現在の嘉数高台に所在する。集落北方にあるトウンヤマにはトウンの祠があり、そこには地頭火ヌ神の祠も隣接している。集落西方にある嘉数区の主な宗家の一つである桃原(屋号)の屋敷内には桃原ヌヤマがあり、集落南方の前原(小字)にティラガマが位置する。

共同湧泉としては、アガリガー、ミーガー、エーガー等があり、ミーガーと嘉数区の産泉であるアガリガーは拝所となっている。また、旧暦8月10日に行われる集落の厄払いと安全祈願を目的としたコーヌユエー(龕の祝い)の行事には、供物となる牛一頭を屠り、その肉をカンカー石に供えていた。その他に、現在イーヌヤマに所在する村獅子は、かつてはイーヌヤマとトウンヤマの中間にあたるシーサーモーに鎮座していたようだ。

文献史料からみる嘉数区の聖地

嘉数区の聖地の中でも、イーヌヤマとトウンの聖地が首里王府の編纂史料に登場する。イーヌヤマの呼称は史料によって異なり、『おもろさうし』(1623年)に「かゝずもりぐすく」、『琉球国由来記』(1713年)に「スバナリノ嶽」、『琉球国旧記』(1731年)に「鈴鳴嶽」と記されている。『おもろさうし』の中でイーヌヤマは以下のように謡われており、イーヌヤマを聖地として讃えている。



第4図 嘉数区の聖地

- | | |
|----------------|---------------|
| 一 かゝもりぐすく | (嘉数杜ぐすく) |
| ねたてもりぐすく | (根立て杜ぐすく) |
| なよくら てづて あまやかせ | (神女 祈って 甘やかせ) |
| 又 けおのよかるひに | (今日の吉き日に) |
| けおのきやがるひに | (今日の輝く日に) |
| 又 あらがみは てづて | (新神を祈って) |
| おりなぐは てづて | (降り女を手摩りて) |

また、戦時中においてイーヌヤマは日本軍の陣地として、嘉数高地あるいは九一高地とも呼ばれた激戦地でもあった。現在では嘉数高台の中央にある祠をイーヌヤマと呼んでいるが、かつては嘉数高台の森全体を含めた呼称でもあった。

一方、イーヌヤマの西方に位置するトゥンヤマのトゥンの祠は、『琉球国由来記』に「嘉数之殿」と記されており、トゥンでの祭祀に関する記述を確認することができる。さらに『琉球国日記』に記された神殿の「嘉数殿」はトゥンヤマのトゥンと同一であると思われる。



図版3 イーヌヤマの祠



図版4 トゥンヤマのトゥンの祠



図版5 トゥンに隣接する地頭火ヌ神の祠

文献史料からみるトゥンの祭祀

『琉球国由来記』をもとに、トゥンでのかつての祭祀の様相を捉えてみる。宜野湾間切時代、女性神役である宜野湾ノロ、野嵩ノロ、謝名ノロの三者は管轄する村々の司祭者となり、宜野湾ノロは嘉数の祭祀を取り仕切っていた。

また、『琉球国由来記』には「麦稻四祭」の祭祀行事に関する記述がみられ、麦稻四祭にはトゥンヤマの嘉数之殿（トゥン）に花米、五水、神酒、穂の供物を供えて、宜野湾ノロが祭祀を司っていたようである。

第6節 嘉数タウンヤマ遺跡と周辺遺跡

嘉数地域にて確認されている遺跡には、テラガマ洞穴遺跡・前原遺跡・内城原遺跡・内城原第二遺跡・内城原洞穴遺跡・内城原遺物散布地・後原遺物散布地・ウィーグスク遺跡・タウンヤマ遺跡・ウチグスク遺跡・ミーガー遺跡・ジトゥーヒヌカン祭祀遺跡・トーバルヌヤマ祭祀遺跡・比屋良川流域古墓群・後原古墓群・内城原古墓群・後原石畳道・シュイワタンジ古道・嘉数91高地戦跡の19遺跡が確認されており、これらの遺跡の時代や時期・立地・内容・現況・保存状況等の詳細については、第4図及び下記する一覧(第1表)を参照されたい。

周辺遺跡としては、昭和14年の村行政区画設置以前の旧嘉数村の小字であった上栄茶原(現真栄原)のアガリイサガマ洞穴遺跡・比屋川橋、水玉屋原(現真栄原)や比屋田原(現真栄原・我如古に分割)のナガサクガマ遺物散布地がある。周辺地域の遺跡としては、大謝名前原第一・第二遺物散布地のほか、大謝名黄金森グスク遺跡・大謝名カンジャーガマ岩陰遺跡がある。

第1表 嘉数周辺地域の埋蔵文化財包蔵地一覧

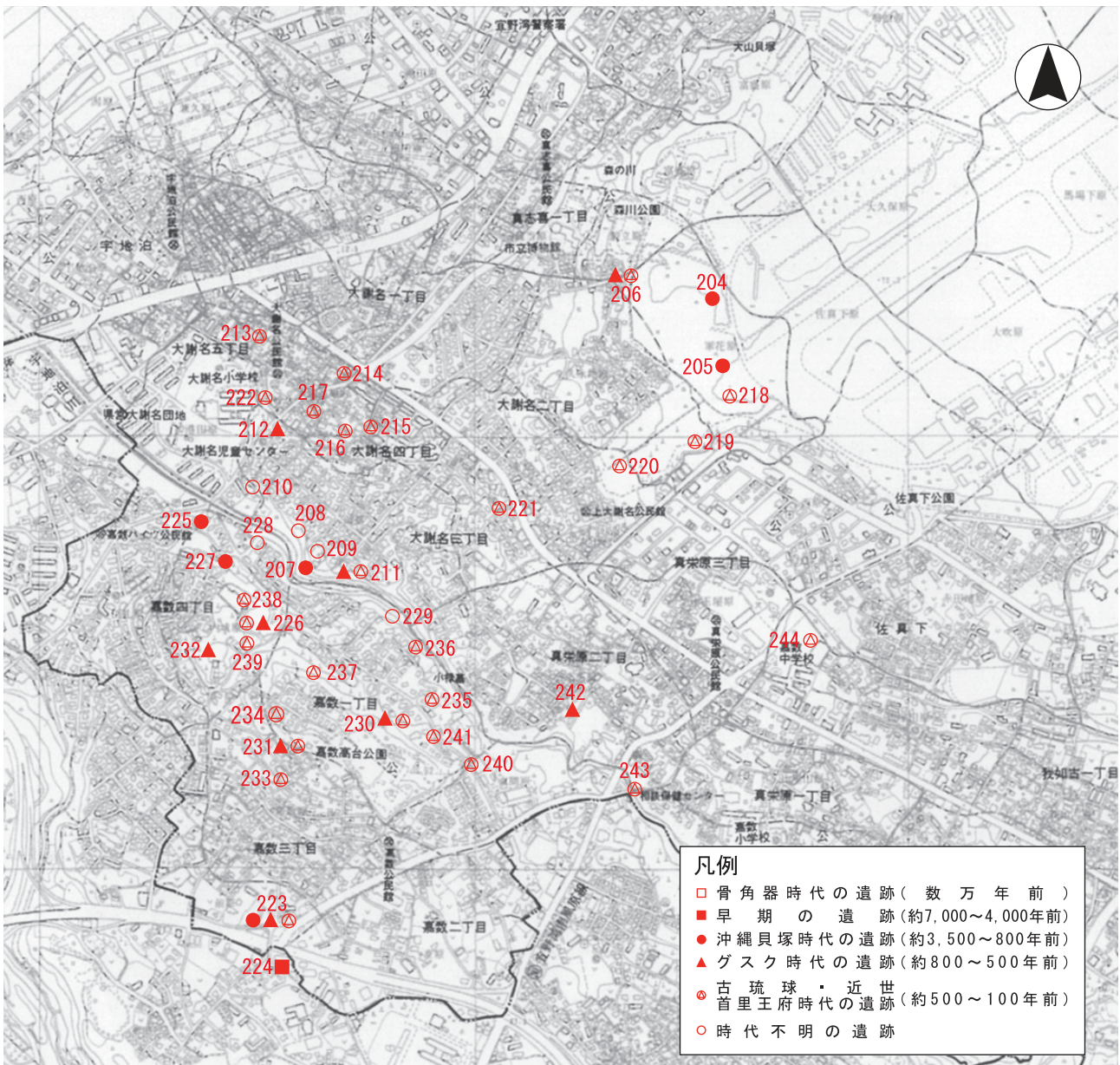
大字	遺跡名	非内原時代	早期	詳細貝塚時代				縄文時代古墳	近世琉球	近代沖縄	立地 (右上数値は標高、単位:m)	内容説明	現況	保存状況
				前期	中期	後期前半	後期後半							
	223 テラガマ洞穴遺跡		?			◎ ¹		+	◎ ²	◎ ²	中位段丘下位面の石灰岩丘、洞穴 ⁷⁷	* ¹ 石器製作跡?、* ² 祭祀場跡	拝所	良好
	224 前原遺跡		+	*							中位段丘下位面の石灰岩丘、洞穴 ^{73~80}	*性格不明	原野、国道	不明
	225 内城原遺跡				+	*					中位段丘下位面の丘陵斜面 ^{6~21}	*性格不明	原野、宅地	不明
	226 内城原第二遺跡					+			◎ ¹	◎ ¹	中位段丘下位面の平地 ²⁷	*生産遺跡	原野	良好
	227 内城原洞穴遺跡							+	*		中位段丘下位面の段丘崖、洞穴 ¹⁰	*地点具塚形成	宅地	不明
	228 内城原遺物散布地							?	*		中位段丘下位面の活断層 ^{29~28}	*遺物散布地	宅地	不明
	229 後原遺物散布地							?	*		中位段丘下位面の活断層 ⁴⁰	*遺物散布地	宅地	不明
	230 ウィーグスク遺跡							+	*	— * ²	中位段丘下位面の石灰岩丘 ^{79~84}	*城跡跡?、* ² 祭祀場跡	公園、拝所	変更
嘉数	231 トウンヤマ遺跡								◎	◎	中位段丘下位面の石灰岩丘斜面 ^{62~75}	*祭祀場跡	拝所、原野	良好
	232 ウチグスク遺跡								+	*	中位段丘下位面の石灰岩丘 ^{60~73}	*性格不明	原野、私立病院	不明
	233 ミーガー古湧泉								..*	◎*	中位段丘下位面の石灰岩丘斜面 ⁵⁸	*井泉跡、祭祀場跡	洞穴、原野	残存
	234 ジトゥーヒヌカン祭祀遺跡								..*	..*	中位段丘下位面の石灰岩丘斜面 ⁷¹	*祭祀場跡	拝所、原野	変更
	235 トーバルヌヤマ祭祀遺跡								..*	..*	中位段丘下位面の平地 ⁵⁷	*祭祀場跡	宅地、拝所	変更
	236 比屋良川流域古墓群								◎*	◎*	中位段丘下位面の活断層 ^{12~61}	*墓地	墓地、原野	良好
	237 後原古墓群								◎*	◎*	中位段丘下位面の石灰岩丘 ^{51~82}	*墓地	墓地	良好
	238 内城原古墓群								◎*	◎*	中位段丘下位面の石灰岩丘 ^{41~73}	*墓地	墓地	良好
	239 後原石畳道								..*	◎*	中位段丘下位面の石灰岩丘 ^{53~84}	*伝道跡、石畳道	里道	残存
	240 シュイワタンジ古道								..*	◎*	中位段丘下位面、同の丘陵斜面 ^{66~68}	*伝道跡、石畳道	里道	残存
	241 嘉数91高地戦跡									◎*	◎*	中位段丘下位面の石灰岩丘 ^{79~84}	*戦争遺跡	公園



第5図 嘉数周辺地域の遺跡情報図1

第2表 嘉数周辺地域の遺跡

大字	遺跡名	大字	遺跡名	大字	遺跡名
大謝名	204 軍花原遺跡	大謝名	218 軍花原古墓群	嘉数	231 トウシヤマ遺跡
	205 久永地原遺物散布地		219 久永地原第一古墓群		232 ウチグスク遺跡
	206 軍花原第二遺跡		220 久永地原第二古墓群		233 ミーガー古湧泉
	207 大謝名洞穴遺跡		221 東原古墓群		234 ジトゥーヒヌカン祭祀遺跡
	208 前原第一遺物散布地		222 カンジャーガマ岩陰遺跡		235 トーバルヌヤマ祭祀遺跡
	209 前原第二遺物散布地(旧称比屋良川沿い①地点)	223 テラガマ洞穴遺跡	236 比屋良川流域古墓群		
	210 港田原遺物散布地	224 前原遺跡	237 後原古墓群		
	211 黄金森グスク遺跡	225 内城原遺跡	238 内城原古墓群		
	212 大謝名原古瓦散布地	226 内城原第二遺跡	239 後原石畳道		
	213 ヤマトゥガー古湧泉	227 内城原洞穴遺跡	240 シュイワタンジ古道		
	214 クシヌカー古湧泉	228 内城原遺物散布地(旧称比屋良川沿い②地点)	241 嘉数91高地戦跡		
	215 ウィーヌヤマ祭祀遺跡	229 後原遺物散布地(旧称比屋良川沿い③地点)	242 アガリイサガマ洞穴遺跡(旧称新町洞穴遺跡)		
	216 ウカマ祭祀遺跡	230 ウィーグスク遺跡(旧称嘉数遺跡)	243 比屋良川橋		
	217 ジトゥーヒヌカン祭祀遺跡		佐真下 244 ナガサクガマ遺物散布地		



第6図 嘉数周辺地域の遺跡情報図2

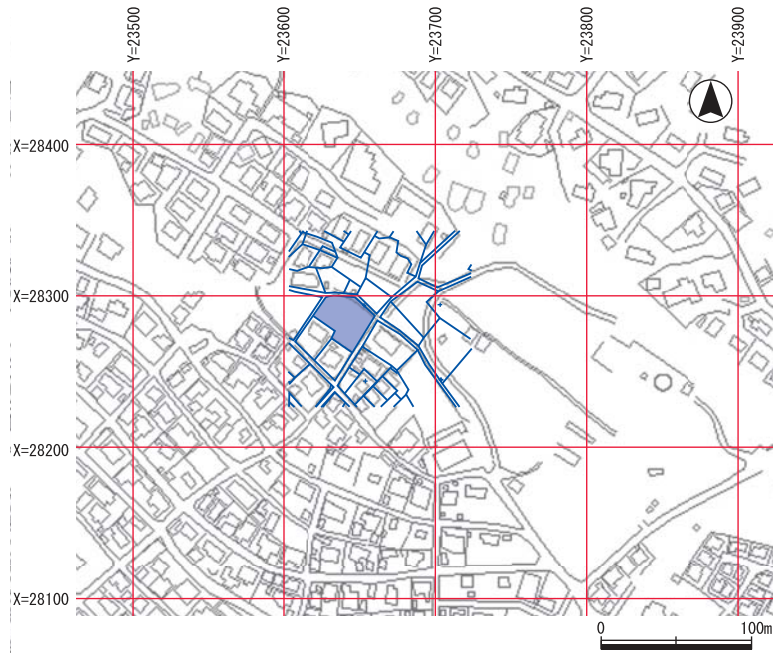
第Ⅲ章 発掘調査の成果

第1節 調査区の設定と層序

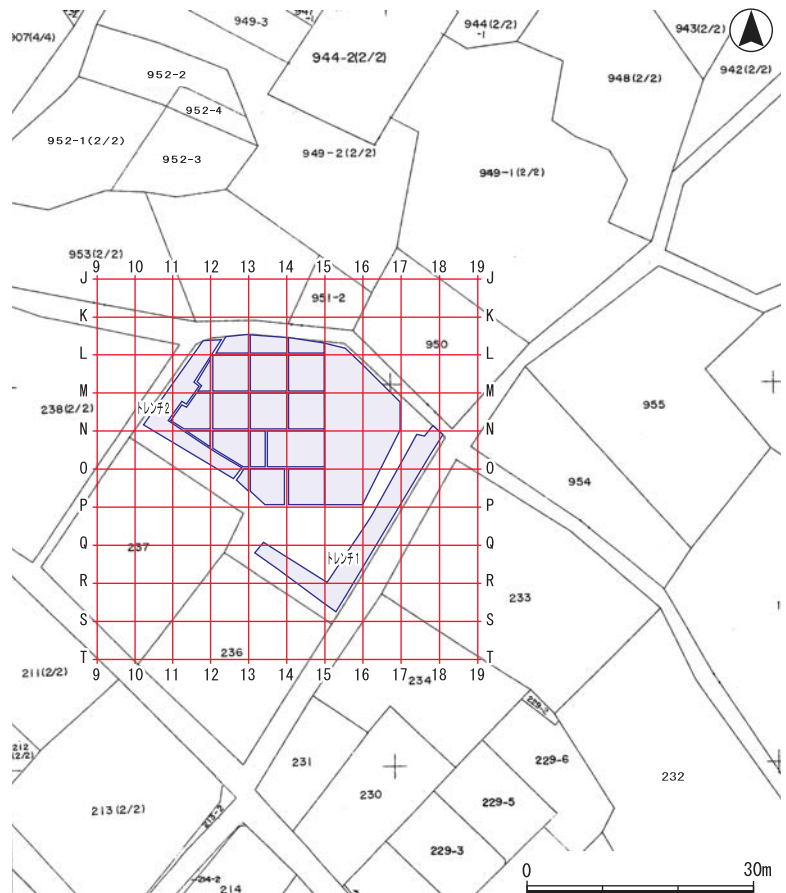
調査区の北側はウィーヌヤマ、通称、嘉数高台と称される丘陵であり、ふもとにトウン（嘉数之殿）、ジトウーヒヌカン（地頭火の神）と称される嘉数集落の拝所が設けられ、地域の方々に大切に継承されており、その南側のなだらかに傾斜する一帯に嘉数集落は形成されている。調査区はトウンの南隣地にあり、嘉数集落の重要な区域である。

調査区の設定については、調査精度を維持するため平成16年度に実施した範囲確認調査の際に設定したグリッドを流用した。トウンと称される拝所から、南方向の軸線を基軸としてアルファベット数字を、それに直交する形で東西に算用数字をともに5m毎に付して任意の作業軸を設定した後に、北東隅の交点に各グリッド番号をL-15・M-15のように指示している。さらに、地籍併合図や登記簿図面等をもとに境界測量を行い、隣接する住宅塀や市道・里道等との境界を把握し、その損壊防止に努めたほか、GPS測量を導入して調査区内の基準点測量と水準点観測も併せて実施することで、国土座標系（旧座標第XV座標系）の座標値を確認し、調査範囲並びに位置を確定した。また、南側隣地との境界地付近についても、地権者より調査の実施についての許可を得たことから、トレンチ等を設定した後に調査を実施した。

前回の調査は範囲確認調査であったことから、基軸となる15ラインを中心とした4グリッドの調査を実施したが、今回は対象地すべてが開発されることとなるため、1筆すべてを本発掘調査として実施している。



第7図 発掘調査地区位置図 (S=1/5000)



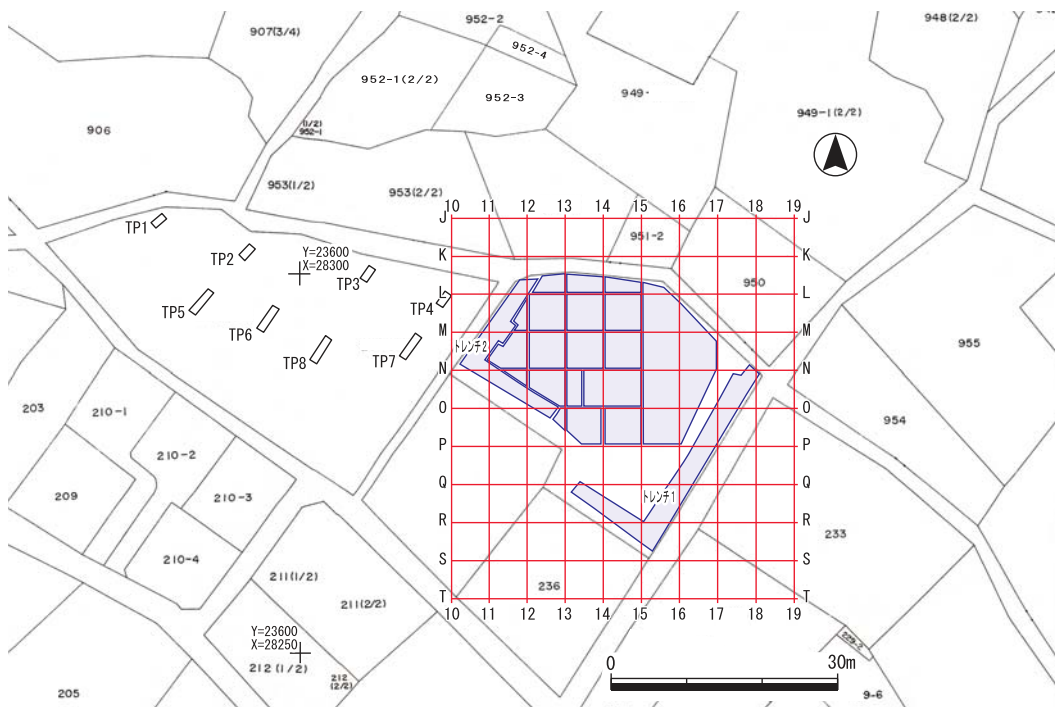
第8図 グリッド設定図 (S=1/1000)

2. 基本的層序

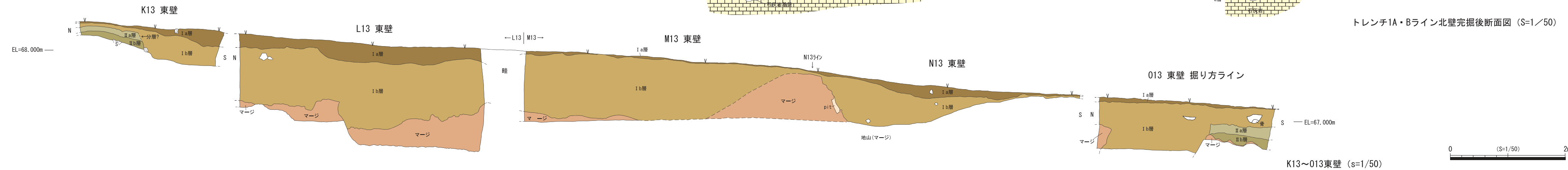
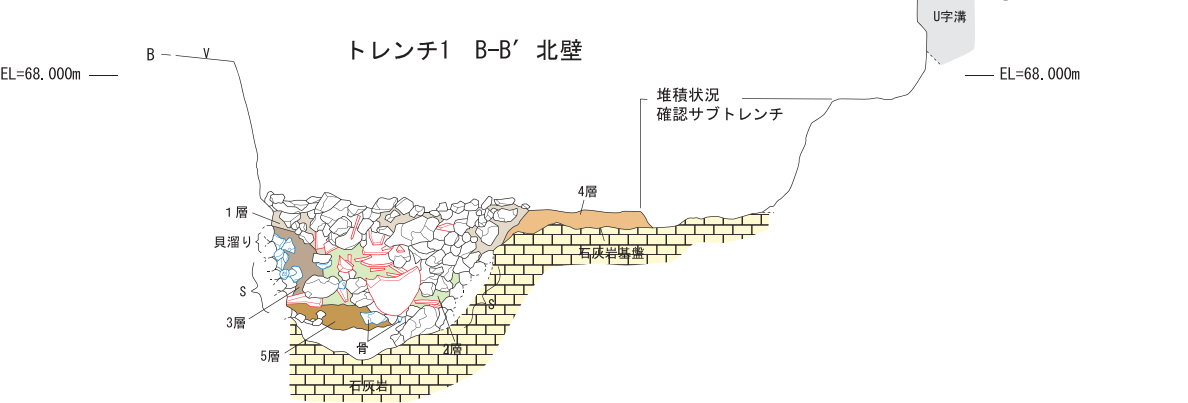
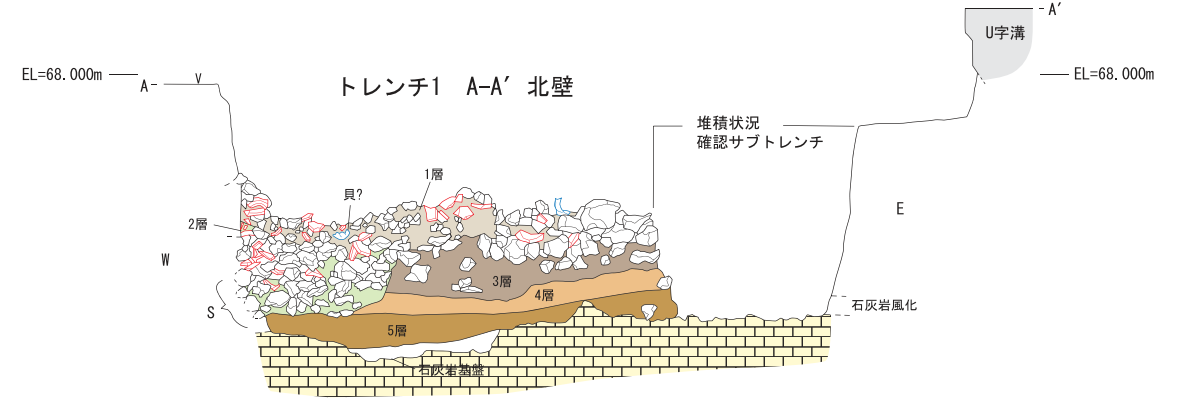
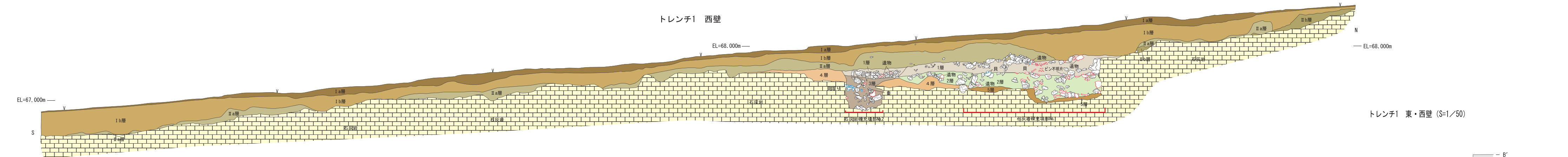
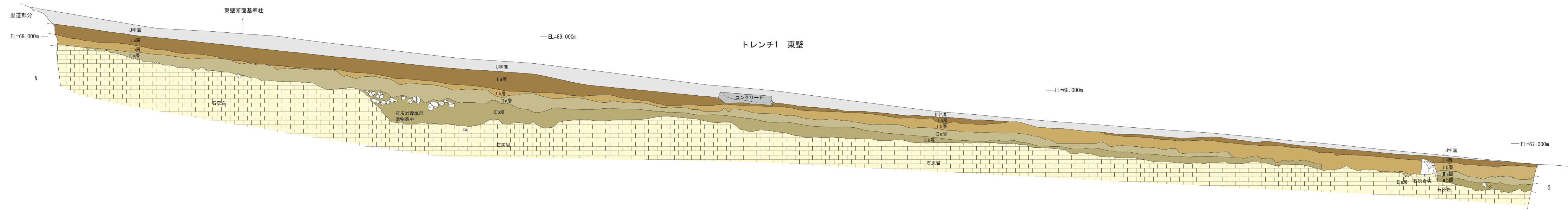
嘉数タウンヤマ遺跡は嘉数高台公園が所在する石灰岩堤の丘陵の南側に広がる緩傾斜地に立地している。今回の調査地区における土層堆積状況も丘陵地形を反映しており、基盤から堆積層に至るまで、丘陵の傾斜に沿った北東—南西軸の勾配を示す。しかし、調査地区は戦前来の耕作地であり、その後の重機などによる改変が著しく、自然地形や堆積状況を示す地点は確認されなかった。調査地区においては、表土層、攪乱層、旧耕作土層、地山赤土、石灰岩基盤が基本的な土層として把握される。遺構面は地山赤土面で確認されたものが多い。以下に基本的層序と遺構内の層序を記述する。

《基本的層序》

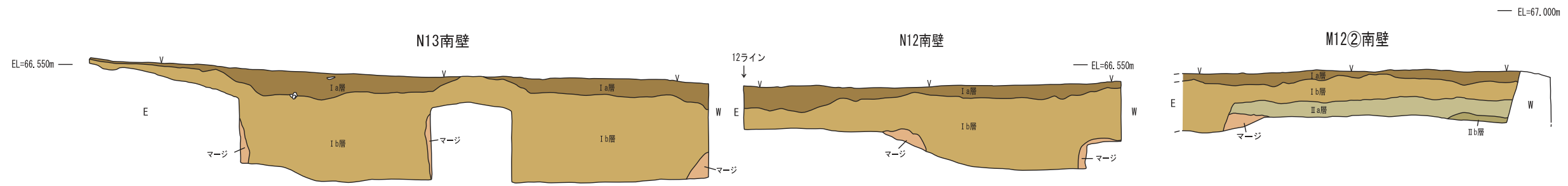
- I a層 表土層。暗褐色混礫土層で、改変後の客土・攪乱層の上層が腐食土壌化した層。
- I b層 客土・攪乱層。茶褐色混礫土層で、重機による掘削や、土壌の移動により攪乱されている。
- II a層 旧耕作土層①。灰褐色土層で1 cm程度の石灰岩礫のほか、焼土や炭化物も含んでいる。
- II b層 旧耕作土層②。II a層以前の耕作土。暗灰褐色混礫土層で、1 cm程度の石灰岩礫のほか、粒形の小さい焼土を多量に含んでいる。
- III層 暗褐色土層 土坑群内に堆積する。グスク時代の遺物を包含する。土地改変により土層が失われた可能性がある。
- IV層 暗褐色土混赤土層（暗褐色土+島尻マージ） III層からV層への漸移層。
- V層 地山赤土層（島尻マージ）
石灰岩岩盤



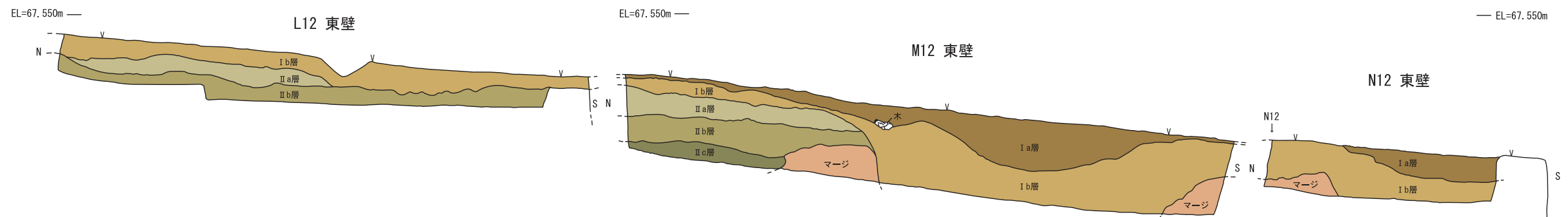
第9図 調査区設定状況 (S=1/1000)



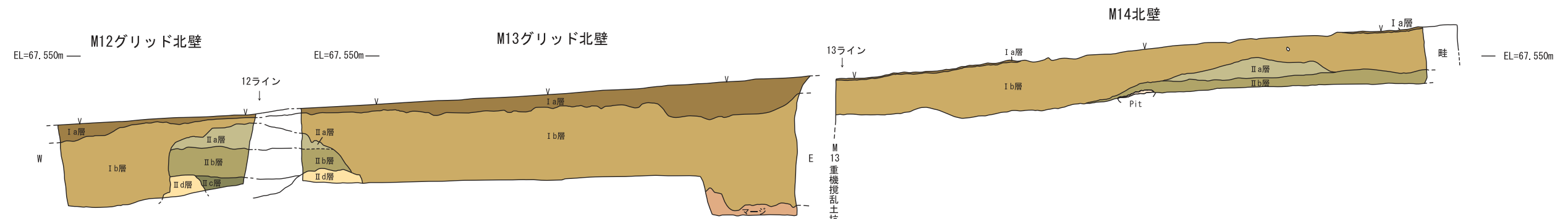
第10図 断面図1



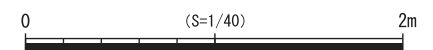
N12~N13・M12畦②南壁 (S=1/40)

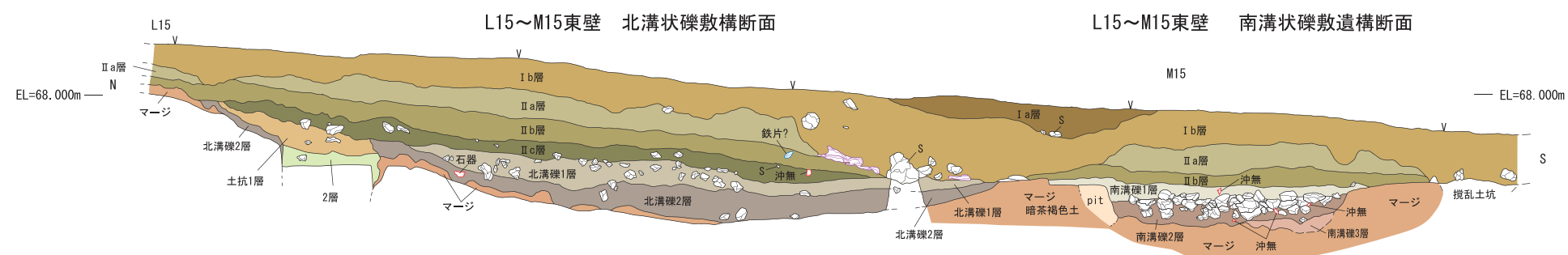


L12~N12東壁 (S=1/40)

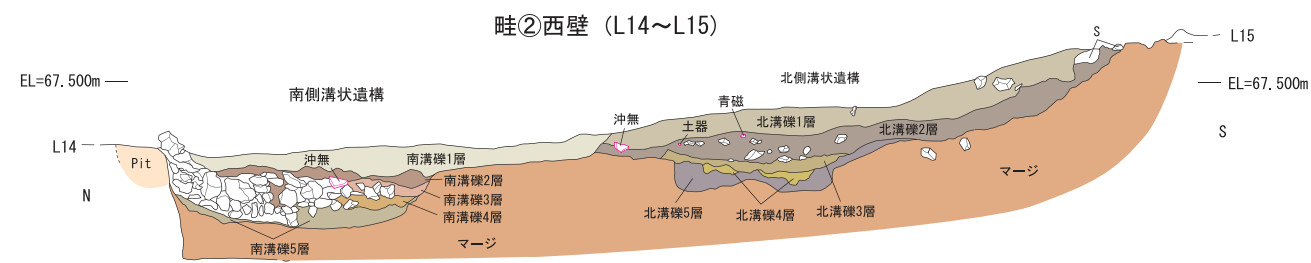
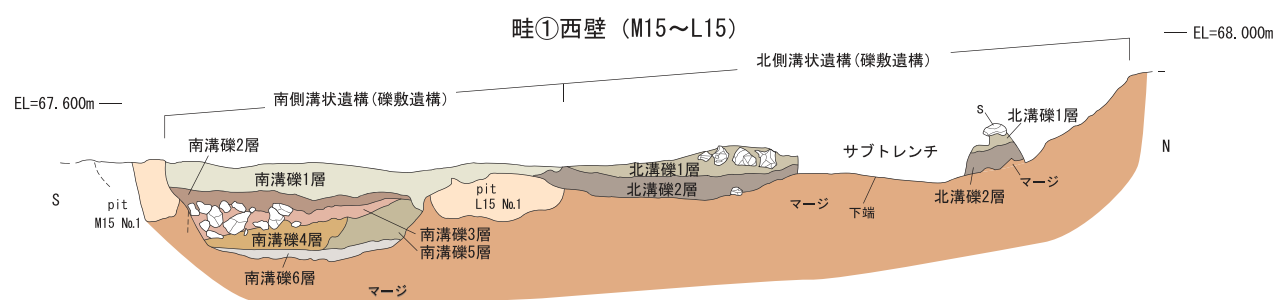


M12~M14北壁 (S=1/40)

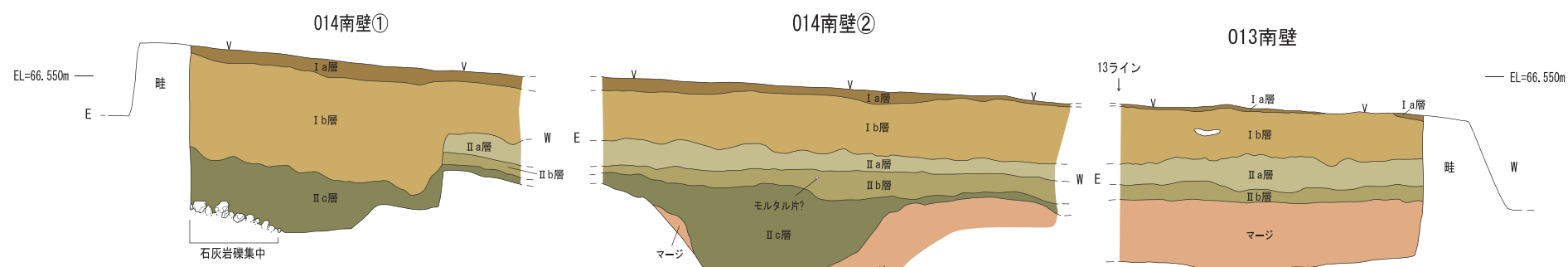
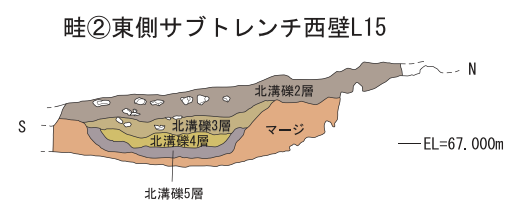




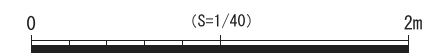
L15~M15東壁 北・南溝状礫敷遺構断面 (S=1/40)



L14~M15グリッド畦①・②西壁 (S=1/40)



013~014南壁①・② (S=1/40)



遺構

嘉数タウンヤマ遺跡は嘉数高台公園が所在する石灰岩堤の丘陵下に広がる緩斜面に立地している。同地には嘉数区の御嶽である「嘉数ウィーヌヤマ」や「嘉数タウン」、「地頭火の神」が所在しており、集落発祥の伝承が残されている。嘉数タウンヤマ遺跡の南面には、近世来の地割制集落である嘉数集落が位置しており、嘉数タウンヤマはいわゆる“クサティムイ”として典型的な近世集落の聖地である。今回の調査地区は嘉数タウンや地頭火の神の南側、旧道を隔てた緩斜面で、調査前は休耕地であった。同地の旧状は市指定有形文化財の「明治土地台帳付属地図」（明治36年）や昭和20年1月撮影米軍空中写真により確認することができる。今回の発掘調査により、溝状礫敷遺構、溝状遺構、土坑群などが確認されているが、今回は溝状礫敷遺構を中心に報告する。

溝状礫敷遺構は丘陵緩斜面の等高線にほぼ並行して造成されている2基の溝遺構で、北側のものを北溝状礫敷遺構、南側のものを南溝状礫敷遺構とする。また、2基の溝遺構にはそれぞれに土坑が付属しており、北溝状礫敷遺構の土坑をレキ充填土坑No.1、南溝状礫敷遺構の土坑をレキ充填土坑No.2とする。さらに、丘陵の傾斜に沿う溝があり、これを溝1、溝2、溝3とする。

北溝状礫敷遺構

本遺構はO18グリットからK13グリットを結ぶラインにおいて確認されている。検出された遺構面は幅約3.5m、長さ約30m、深度約50cmであるが、調査区端の断面層からさらに略東西に延長するものと考えられる。溝遺構の勾配は南東から北西に傾斜しており、凡そ地形に沿った勾配を示している。本遺構の構築にあたっては嘉数タウンなどが所在する丘陵の傾斜面を切り、露出した地山（マージ）を平坦に造成した上で、溝を構築している（巻頭図版4①）。本遺構の構造は検出面で確認された外輪溝とその内側の内輪溝の二重構造となっている。溝の南側については南溝状礫敷遺構の1層により切られている（第10図トレンチ1西壁）。遺構内の堆積層は丘陵から流入した土壌である北溝礫1層と、5cm内外の粒形の揃った礫や壺屋陶器などの遺物が混入する北溝礫2層、礫や遺物の少ない北溝礫3層～5層があり、1・2層が外輪溝に、3～5層が内輪溝に堆積する。O18グリットからM16グリットを結ぶラインまでは地山（マージ）を掘削して溝を造るが、N17グリット以東は石灰岩盤が露出しており、岩盤を掘削して溝を構築している。本遺構の機能としては丘陵側からの雨水排水溝が考えられる。これは、後述の南溝状礫敷遺構と本遺構に付属して構築されているレキ充填土坑No.1の礫充填構造が共通していることを考慮した見解である。O18グリットのレキ充填土坑No.1は石灰岩盤を掘削し、礫や陶器を充填した土坑で本遺構の排水枒と考えられる遺構である。同遺構については別項目で説明する。

南溝状礫敷遺構

本遺構はK13グリットからO17グリットを結ぶラインにおいて確認されており、これも調査区端の断面層からさらに略東西に延長するものと考えられる。検出された遺構面は幅約2.3m、長さ約33m、深度約50cmで、底部はなべ底状を呈する。その勾配は南東から北西に傾斜しており、ほぼ地形に沿った勾配を示している。本遺構は北溝状礫敷遺構と同じく外輪溝と内輪溝の二重構造で、検出面全体を通して遺構の輪郭は明瞭である。本遺構の構築にあたっては、北溝状礫敷遺構を構築する際に造成した平坦な地山（マージ）面を掘削して構築されている。よって、本遺構は北溝状礫敷遺構の南側に並列している。第12図畦②西壁L14～L15によれば、本遺構の外輪に当たる南溝礫1層が北溝状礫敷遺構の外輪（北溝礫1層）を切っていることが分かる。遺構内の堆積層は基本的に5～10cmの粒形の揃った石灰岩礫と壺屋陶器破片であり、その上を丘陵からの流入土壌である南溝礫1層が覆っている。M15グリット一帯の礫層の希薄な部分では遺構構築後に丘陵から流入した土壌南溝礫1層～4層が堆

積している。5・6層及び礫層は遺構構築時に充填されたものと考えられる。本遺構の機能として丘陵側からの雨水排水溝が考えられる。これは本遺構が溝であること。礫や陶器の充填は丘陵からの土壌の流入により、溝が埋没しないための工夫であり、排水性を高める機能が考えられること。また、本遺構に付属する排水枡と考えられるレキ充填土坑No.2においても同様の堆積構造が見られること。さらに、丘陵の傾斜に沿った排水溝である溝3がK 12・13グリッドにおいて本遺構と連続していることから、雨水排水溝の可能性が高い。尚、No.2土坑及び溝3については別項目で詳しく説明する。

レキ充填土坑No.1

本遺構はO 17・18グリッドの北溝状礫敷遺構の下層から確認された土坑である。石灰岩岩盤を2.5 m×1.5 m、深度が60 cmほどの掘削で、石灰岩基盤を掘削した土坑中に、5～10 cm大の粒形の揃った礫と壺屋陶器等が充填されている。第10図トレンチ1西壁を見ると基盤の石灰岩を直に70 cm掘削し、1 m幅の平坦な床面を持つ土坑を造っている。土坑の西側の立ち上がりは20 cm程しかなく、層は土坑の範囲を超えて西側に拡大している。本遺構の1層は北溝状礫敷遺構からの延長部分に相当する礫層であるが、同断面層からは溝状の形態は確認されない。1層には多量の礫や陶器が充填され、隙間が多く出来ている。その隙間には多少の土壌が堆積するものの、目詰まりする程ではない。2層は北溝状礫敷遺構の延長である1層の下層に連続しており、1層に比較して礫の粒形や陶器破片が大きい。そのため隙間が大きくなるが土壌の流れ込みや目詰まりはない（巻頭図版4⑤）。本遺構の1層、2層の充填状況は時期差と言うよりも、遺構内の構造として捉えることができる。礫や陶器の充填は土壌を濾過し、排水機能を高めるための工夫で、1層と2層の粒形の異なりも濾過機能を高めるための構造と考えられる。よって、本遺構は北溝状礫敷遺構の排水枡としての機能が考えられる。

レキ充填土坑No.2

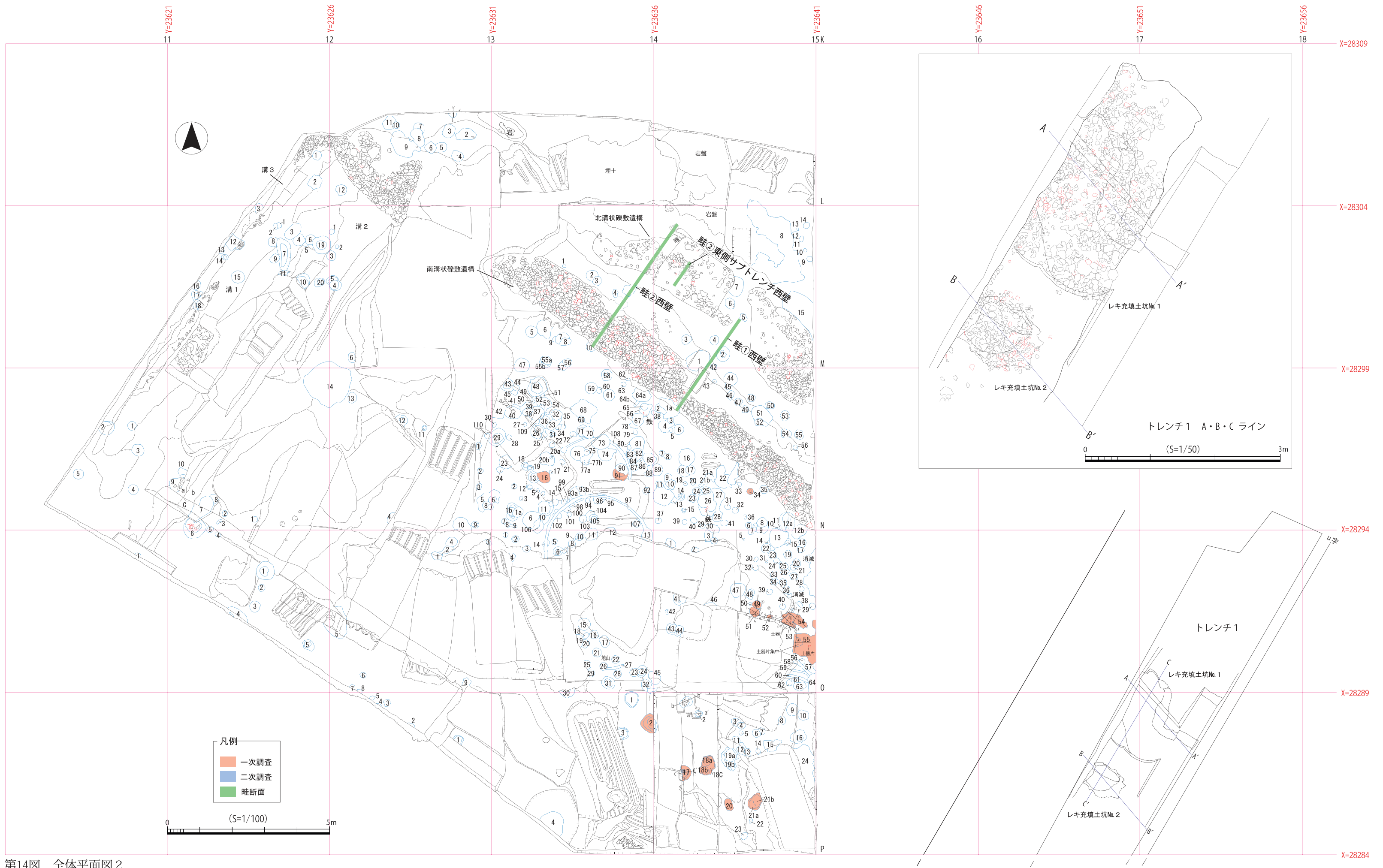
本遺構はO 17グリッドの南溝の下層から確認された土坑である。4層及びレキ充填土坑No.1 1層から掘り込まれ、石灰岩岩盤を掘削している。検出面では1.1 m×1 mの略方形を呈し、深度は60 mを測る。本遺構の1層は南溝状礫敷遺構の延長部分に相当する礫層で、溝状の断面形態が明瞭である。その下層に連続して3層がある。土坑内には5～10 cm大の粒形の揃った礫や壺屋陶器等を混ぜ充填している。上層の1層に小礫が多く、下層の2・3層は壺屋陶器が主体に充填されている（巻頭図版4⑥）。本遺構の礫充填状況もレキ充填土坑No.1と同じく、時期差と言うよりも遺構内の構造として捉えることができる。遺構内の堆積状況は排水機能を高めるための濾過構造で、本遺構は南溝状礫敷遺構の排水枡としての機能が考えられる。

溝3

本遺構はK 12グリッドからM 11グリッドを結ぶラインにかけて確認された旧道沿いの溝で、丘陵の傾斜に沿った排水溝である。溝2・3により大部分が破壊されているが、部分的に溝の輪郭線が残っており、旧形を想定することができる。検出面での法量は長さ約12 m、幅約50 cmを測る。本遺構の北端はK 12・13グリッドにおいて南溝状礫敷遺構の西端と連結しており、同溝遺構の排水に関わる溝の可能性が高い。「明治土地台帳付属地図」（明治36年）には現在も残る旧道の脇に水路が記載されており、今回検出された溝もそれに関連する遺構の可能性がある。

溝1・溝2

溝1・溝2はK 13グリッドからM 12グリッドを結ぶラインにおいて確認された排水溝である。検出面で約12 mを測り、丘陵の傾斜に沿う溝である。両溝遺構は近現代の溝ではあるが、同地が排水に適した場所であることを示す遺構である。



第14図 全体平面図2



第15図 全体平面図1 (オルソ画像)

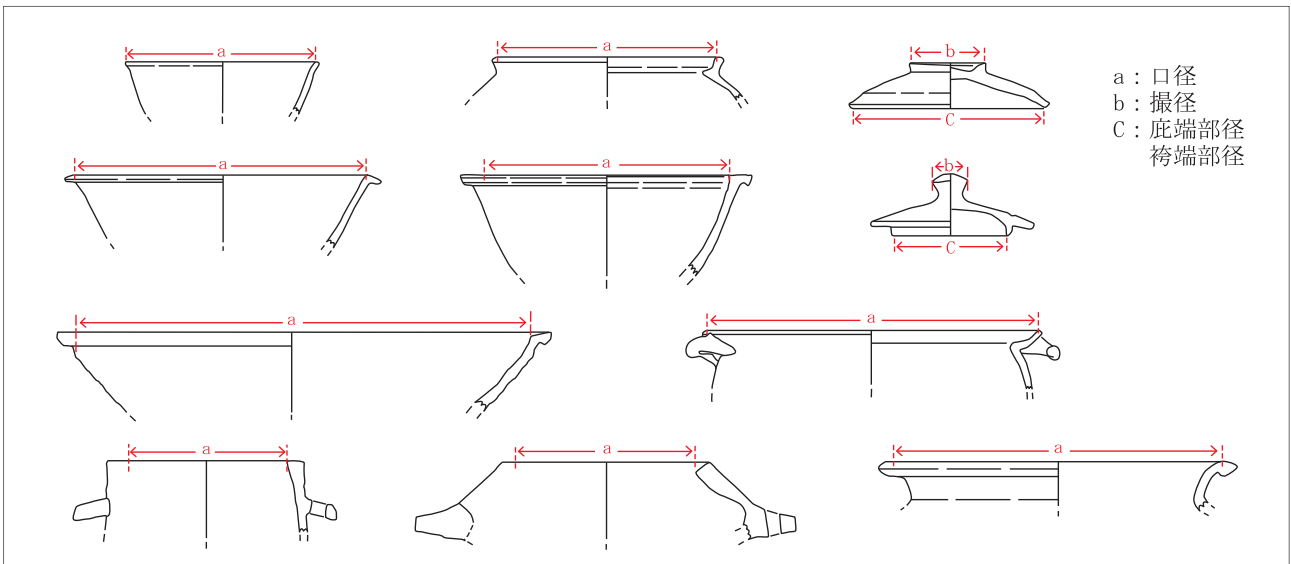


第16図 全体平面図2（オルソ画像）

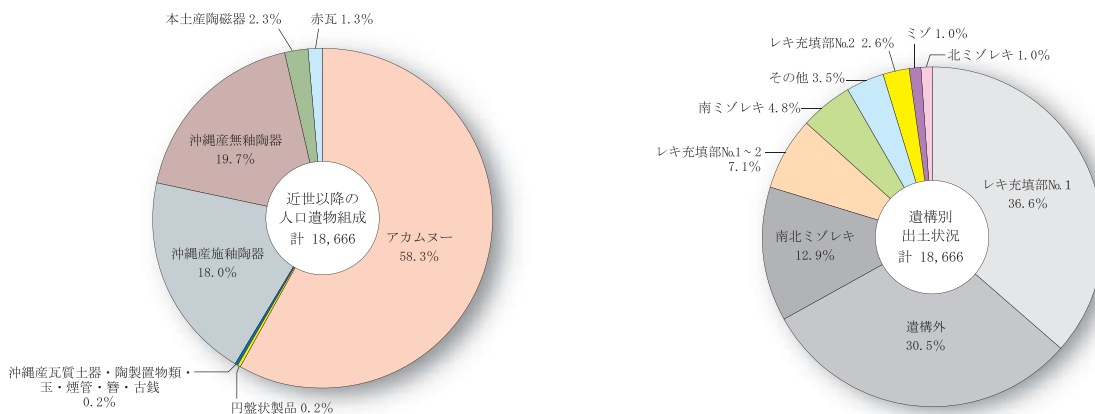
第3節 遺物

既に前節までに述べているように、本報告では嘉数タウンヤマ遺跡における近世以降の様相を詳述している。本節においても近世以降の遺物の報告を行い、中世に比定される資料については次年度の報告を予定している。当該遺跡の2次調査で得られた近世以降の人工遺物は、総計 18666 点に上る。その内訳は、沖縄産施釉陶器 3359 点、沖縄産無釉陶器 3682 点、アカムヌー 10887 点、沖縄産瓦質土器 5 点、本土産陶磁器 427 点、赤瓦 247 点、円盤状製品 33 点などである。なお、本書で報告する瓦質土器は、後述するように沖縄産を想定した。一般に、瓦質土器は中世に比定されるが、沖縄産の瓦質土器は凡そ 17 世紀代に焼かれた可能性が指摘される（金城 1995、新垣 2000、瀬戸 2004a）。そのため、得られた瓦質土器は本書で取り上げると共に、沖縄産の陶器やアカムヌーとの胎土分析による比較を試みた（第IV章参照）。

さて、以上に示した遺物組成からもわかるように、当該遺跡ではアカムヌーの出土量が最も多く、近世以降の人工遺物全体の約 58% を占める（第 18 図）。また、遺構別の出土率を概観すると、レキ充填部 No.1（レキ充填部 No.1）からの出土量が最も多く、その割合は約 37% である（第 18 図）。遺構外からの出土量を大きく上回る資料が当該遺構から出土しており、他の遺構からの出土量を圧倒する。以下に、主な遺物を報告する。観察表における口径は、第 17 図に示したような基準で実測図から計測した。なお、自然遺物については現在整理中であり、次年度の報告予定である。



第 17 図 口径計測位置



第 18 図 近世以降の人工遺物組成と遺構別の出土状況

第3表 近世以降の遺物集計表

種類 出土位置・層位		沖繩産 施釉陶器	沖繩産 無釉陶器	アカムヌー	沖繩産 瓦質土器	本土産 陶磁器	陶製 置物類	赤瓦	円盤状製品	玉	煙管	簪	古銭	合計	
表採		33	80	51		20		68						252	
I	a	49	60	92		25		14	1		1			242	
	b	267	287	443		83		68			2	1	1	1152	
	a～b	601	365	1740		70		27	5		2			2810	
I a～II a		8	4	13		4		2						31	
I b～II a		2	7	3		1		2						15	
I b～II b		18	22	20		5								65	
II	a	75	93	273	1	29		9	1	1	1		1	484	
	b	95	105	203		19		8				1		431	
	a・b		1	1										2	
	a～l	50	62	83		11		2	3					211	
南溝状磔敷	1層	37	65	163		8		2			1	1		277	
	1～2層	12	17	15		1		3						48	
	2層	26	40	57		7			1				2	133	
	3層	22	121	105	1	1		3						253	
	3～4層	10	38	39	1	2		5						95	
	4層	9	47	5		2								63	
	磔中		3	2										5	
	遺構内	2	8	23		1								34	
北溝状磔敷	1層	11	12	12	1	1								37	
	2層	20	51	16		4	2	2						95	
	2～3層	1	3			1								5	
	3層	1	8	6							1			16	
南北溝状磔敷	1層	3	11	10		6								30	
	遺構内	436	708	1187		22	1	11	7					2372	
溝	1	1層	9	8	4		2		1		1			25	
		2層			2									2	
		3層	1											1	
	2	遺構内	6	4	6				3						19
		遺構内	2	4	2										8
		遺構内	2	4	2										8
3	1層	1	1	4		2								8	
	3層	20	27	64			1	1						113	
	遺構内	1		2										3	
レキ充填部	No.1	1層	729	683	3722		41		6	7		1		5189	
		1～2層	39	29	147		3		5	1				224	
		2層	187	286	738		14			4				1229	
		3層	3		7										10
		遺構内	12	50	111		4								177
	No.2	1層	14	14	162					1					191
		1～2層		2	2										4
		2層	8	27	7		2								44
		3層	14	13	139		1		1						168
		4層			5										5
		5層	5	20	39				1						65
遺構内		1	3										4		
No.1～2遺構内	234	138	936		12	1	3	2					1326		
不明		24	6	70	1	4								105	
接合資料		252	126	149		17		1						545	
M14	No.37 3層												1	1	
	No.88 直上												1	1	
L14	No.6 3層		1											1	
合計		3359	3682	10887	5	427	6	247	33	1	9	4	6	18666	

1. 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器は3,359点出土しており、器種は碗・小碗・皿・鉢・鍋・壺・瓶・急須・酒器・香炉・火入・灯明皿・袋物が得られている。出土状況は調査区全域のⅠ層（近現代層）で29%、Ⅱ層（旧耕作土）で6.5%、遺構内出土遺物の内、南北礫溝とそれに関連するレキ充填部を併せると全体の55%に及び、出土状況の偏りが見られる。これは前回の範囲確認調査で指摘されたように、陶器が溝遺構の造成建材として再利用されたことを裏付けている。

沖縄施釉陶器の分類については、下記のとおり施釉技法によりⅠ～Ⅲ類に、釉薬の種類により（イ）～（ハ）に大分類した。細分類については器種ごとに口縁形態や腰の張り具合などにより分類した。

施釉技法

Ⅰ類 釉薬を単掛けするもの

器面に一種類の釉薬をそのまま施釉するもので、施釉範囲は器面の内外面或は外面のみに及ぶ。

Ⅱ類 内外器面の釉薬を掛け分けるもの

外器面に（ロ）鉄釉や（ハ）黒釉などを施釉した後、内器面に灰釉を掛けるもので、①内器面に白化粧を施さないものと、②内器面に白化粧を施した後で灰釉を掛けるものがある。

Ⅲ類 内外器面に白化粧し、透明釉を施すもの。

器面の内外に白化粧土を施し、さらにその上から透明釉（灰釉）を施すもの。

釉薬の種類

基本的な釉薬には（イ）灰釉、（ロ）鉄釉、（ハ）黒釉がある。

（イ）灰釉は透明・半透明で、微かに灰色、褐色、オリーブ褐色などを呈する。（ロ）鉄釉と（ハ）黒釉は鉄を基本とした釉薬であり調合や焼成等によっては判別が微妙となる。よって、今回は発色により褐色から暗褐色を鉄釉、黒色のものを黒釉とした。また、不透明・光沢のない褐色のものを錆釉とした。

碗

碗は2,124点得られており、口縁形態でA直口するもの、B外反するもの、C玉縁のものに分類され、さらに胴部の腰が張らないもの（a）と腰が張るもの（b）がある。また、施釉技法では（1）フィガキーするもの。（2）錆釉による同心円を施すもの。（3）蛇の目釉剥ぎを行うものに細分した。

碗Ⅰ類（第19図1～16）

Ⅰ類（イ）は高台径が大きく、胴部は直線的に開く形状で、口径も大きい（第19図1～4）。第19図5・6のようにやや腰の張る形状もある。いわゆる湧田灰釉碗と呼称されてきた碗である。口縁はA直口するもの（第19図1～4）とB外反するもの（第19図5・6）がある。施釉技法は（1）フィガキー（浸し掛け）により灰釉が施釉される。焼成は良く、還元焼成のためか素地は灰色系のものが目立つ。見込みや高台畳付には砂目が認められる。鉄絵が描かれるものもある。

Ⅰ類（ロ）はⅠ類（イ）の形状を踏襲した碗で、口縁部の外反や胴部（腰）が張りだす傾向が見られる（第19図9～16）。施釉工程は先ず、内面の見込に（2）錆釉による同心円を施し、次ぎに内外面の口縁から胴部に鉄釉を施す。高台と見込みには施釉しない。内面の施釉範囲は基本的に同心円外を意識している。

碗Ⅱ類（第20図17・18）

Ⅱ類の器形もⅠ類（口）と同じく、口縁部の外反や腰が張りだす傾向が見られる。施釉は器面の外面に鉄釉を施し、内面には①直に灰釉を施すものと、②白化粧を施し、透明釉を施すものがある。②の場合、白化粧の範囲は内面から外面口縁まで及び、口縁部の白化粧は鉄釉によって覆われている。施釉の工程は内面から外面口縁まで白化粧を施した後、外面に（口）鉄釉か（ハ）黒釉を施す。高台まで施釉しないものと（第20図17）、施釉するもの（第20図18）がある。見込みは蛇の目釉剥ぎを行う。見込と畳付にはアルミナが確認される。

碗Ⅲ類（第20図19～25・第21図）

Ⅲ類の器形もⅠ類（口）と同じく、口縁部の外反や腰が張りだす傾向が見られる。施釉工程は器面全面に白化粧した後、灰釉（透明釉）を施し、見込みを蛇の目釉剥ぎする。見込みと高台畳付にはアルミナが確認される。文様の施文技法は竹筒の先端を幾つかに割り、それぞれの先端に丸いスタンプをつけて押印すと第21図28・29のような点花文となる。また、線彫りにより白化粧土を剥ぎ、輪郭線を描き、淡いコバルトや緑釉薬、鉄釉で彩色するものがある（第21図31・34）。さらに、菊花文や家紋などを筆で手書きするものがある（第21図30・32・33）。

小碗

小碗は231点得られており、Ⅰ～Ⅲ類までである（第22図）。Ⅰ類は小破片のため割愛した。

小碗Ⅱ類の細分類は碗のⅡ類に準じており、口縁形態のA直口するもの、B外反するもの、C玉縁のものがある。さらに施釉技法により①白化粧なし（第22図36）と②白化粧あり（第22図35）に分類される。

小碗Ⅲ類の細分類も碗のⅢ類に準じ、口縁形態のA直口するものとB外反するものとし、それに加え、器面の①面取り無し（第22図37～39・41）と②面取りあり（第22図42～43）により分類した。

鉢

鉢は127点得られており（第22・23図）、器形は胴部から口縁にかけて立ち上がるものと（第23図44・46・第24図51）と播鉢のように開く形状がある。細分類は口縁形態によりA逆L字形のもの、B外反するもの、C波形のもの、D玉縁口縁の4つに分類される。

鉢Ⅰ類は器形が立ち上がるもの（第23図44）が得られており、施釉技法は灰釉をフィガキーにより施釉する。また、内器面には錆釉による鉄絵を施す。

鉢Ⅱ類には器形が立ち上がるもの（第23図46）と開くもの（第23図48・第24図49・50）があり、後者はワンプーと呼称される鉢である。口縁形態はA逆L字、B外反の二種が得られている。施釉技法は基本的に碗Ⅱ類に準じている。第23図46は内器面にイッチンによる文様を施している。

鉢Ⅲ類は器形が立ち上がるもので、口縁形態はすべてB外反している（第24図51）。施釉技法は基本的に碗Ⅲ類に準じている。

皿

皿は13点得られており、Ⅰ類からⅢ類に大分類される（第25図）。A直口するものと、B外反するものがある。

皿Ⅰ類は（口）鉄釉のみ得られている。施釉技法は基本的に碗Ⅰ類（口）に準じている（第25図53）。

皿Ⅱ類は（口）鉄釉・①白化粧無しと（第25図54）②白化粧有りが得られている（小片）。施釉技

法は基本的に碗Ⅱ類（ロ）に準じている。

皿Ⅲ類は口縁形態と施釉技法による細分類は基本的に碗Ⅲ類に準じている。有文資料には線彫りにより輪郭線を描くもの（第25図58）、線彫りに淡いコバルト鉄釉で彩色するもの（第25図55）、筆で手書きするものがある（第25図57）。赤絵で点花文を基本に施文するもの（第25図59）もある。

灯明皿

灯明皿はⅠ類（ハ）黒釉が2点得られている。黒釉を内面から外面口縁まで施す。見込みは蛇の目釉剥される（第26図60）。

急須

急須は轆轤引きによるもので、171点得られている（第26図62～65）。器形は球体に近い。Ⅰ類とⅢ類が得られている。

急須Ⅰ類は（イ）灰釉、（ロ）鉄釉、（ハ）黒釉を施釉する資料が得られている。第26図63は外面のみに黒釉を施している。

急須Ⅲ類は白化粧を施した後、透明釉を内外面に施釉するものと、外面のみに施釉するものがある。いずれも外面底部は施釉しない。注ぎ口や耳は硬質な白土を使用しており、器体の黄白色系の胎土とは異なる。また、注ぎ口や耳は白土であるため、白化粧は必要とされず、透明釉のみが施される。有文のものは、線彫りの幾何学模様には薄いコバルトや鉄釉で彩色され、注ぎ口や耳の継ぎ目は緑釉で彩色されている（第26図62・64）。

瓶

瓶には多様な形状のものがあり、41点得られている（第26図66～69）。Ⅰ類からⅢ類に分類される。瓶Ⅰ類の第26図66は（ハ）鉄釉の口頸部で、外面のみの施釉である。第26図67は黒釉の胴部で、高台を除く外面に施釉している。胴部は球体に近い形状で、口頸部は欠損しているが、口縁部まで轆轤引きしたと考えられる。

瓶Ⅱ類は（ロ）鉄釉の胴部で、胴上部は白化粧、胴下部は鉄釉を施している。内面は施釉されない（第26図68）。

瓶Ⅲ類は円錐形の器体に袴状の高台を接合する瓶子で、外面のみの施釉である。器面には線彫りの格子文などを施し、薄い鉄釉と緑釉で彩色している（第26図69）。

香炉

香炉はⅠ類とⅢ類があり3点得られている。成形はすべて轆轤引きで、口縁は逆L字を呈し、頸部は直立、胴部で強く張る。底部は平坦で脚を3つ貼り付けている。釉薬は外面のみに施釉している。

Ⅰ類は（ロ）鉄釉と（ハ）黒釉が得られている（第27図70・71）。施釉は口縁内側から外側胴部まで施し、底部と脚は無釉である。第27図71の脚は四つ指の龍が玉を握るデザインである。

Ⅲ類は全面に白化粧し外面のみに透明釉を施す。口唇部に薄い緑釉を施している（第27図72）。

花生

花生は筒状を呈するもので1点あり、Ⅲ類のみが得られている。第27図73がそれで、全面に白化粧をし透明釉を施す。文様は1.5cm間隔で縦位の線彫りを施し、その上から薄い鉄釉とコバルトで彩色している。底部は緩やかに凹んでいる。

火入

火入は36点得られている。火種入れで、煙草盆に入れ込んで使用する。火取とも言う。Ⅰ類からⅢ

類に大分類され、口縁部形態により a 直口のものとは b 内傾するものがある。

I 類は (口) 鉄釉で外面のみの施釉である。第 27 図 74 は筒状を呈し a 直口すると考えられる。

II 類は (口) 鉄釉と灰釉を掛け分けする。第 27 図 75 は外面のみの施釉である。b 口縁は内傾する。

III 類は筒状を呈し、口縁部が a 直口するものと b 内傾するものがある。第 27 図 76 ~ 78 は直口するもので、有文資料は線彫りで施文し、薄いコバルトで彩色している。

酒器

酒器には I 類と III 類がある。27 点得られている。

I 類は抱瓶 (ダチビン) と呼称される箱形、水筒状のもので、板状の粘土を組み合わせ成形している。外面には緑釉が施釉される (第 27 図 79)。

III 類はカラカラと呼称される注口形のもので (第 27 図 80a・80 b)、口頸部まで轆轤引き成形される。注ぎ口は急須同様、硬質な白土を使用している。やはり、白土のために白化粧は必要とされず、透明釉のみが施される。文様は放射線状の線彫りに濃いコバルトや鉄釉で彩色され、注ぎ口や耳の継ぎ目には緑釉で彩色している。

鍋

口縁部をくの字に屈曲させた円底の土鍋。66 点得られている。沖縄製無釉陶器のアカムヌーに分類されるサークー鍋と同様な器形を呈しているが、焼成は良く施釉されている。施釉範囲は口縁部から胴部で、外面底部は施釉されない。底部には円錐形の脚が付いている。胎土は耐火土を使用しているものと考えられる。施釉技法の他に胴部の張り具合で、a 張るものと b 張らないものに細分される。

I 類は内外面に (口) 鉄釉を施すもので、外面は光沢があるが、内面は錆釉である。a 胴の張るものと (第 28 図 81) b 張らないものが得られている (第 28 図 82)。

II 類は内面胴部から外面口縁に白化粧し、透明釉を施して後に外面に (口) 鉄釉を施す。口縁部は釉剥ぎされている (第 28 図 85)。第 28 図 83・84 は底部資料である。

水注 (按瓶)

水注は大型の急須で、アンビンと呼称されている。59 点得られている。成形は轆轤引きによるもので、器形は球体に近い。I 類には (ハ) 黒釉のものがあり、器面の内外に施釉する。急須の III 類が注口や耳の部分と器体との胎土が異なるのに対し、水注は器体と同じ胎土を使用している (第 28 図・86・87)。第 26 図 61 はアンビンの蓋で、内面は施釉されていない。

壺

壺は 91 点得られている。広口の壺で、アンダガーミと呼称される豚脂を保存する耳付きの壺である。I 類のみ得られており、(口) 鉄釉、(ハ) 黒釉を施す。胴部の張り具合で、a 張るものと b 張らないものに細分される。a の第 28 図 88・90 は直口する口頸部を有し、胴部に向けて球体に近い張り出しがある。b の第 28 図 89 は口縁部から明確な頸部を造らずに胴部に向けて徐々に径を増す器形である。

第5表 沖縄産施釉陶器観察一覧1

挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素地・焼成	釉色・施釉状況・貫入等	出土地			
第19図 図版6	I	碗	1	(イ) Aa(1)	口～底	12.6 6.5 6.6	灰釉碗。口縁直口。腰は張らず直線的。高台際削り痕明瞭。高台と見込に砂目あり。	灰白色の細粒子。焼成良好。素地に亀裂や気泡痕あり。	初ア 灰色の透明釉。内外面の口縁から胴部に施釉。高台に指跡。細い貫入。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層 1a～b層
			2	(イ) Aa(1)	口～底	13.6 5.9 6.4	灰釉碗。口縁直口。腰は張らず直線的。高台際削り痕明瞭。高台に砂目あり。	灰白色の細粒子。焼成良好。	初ア 灰色の灰釉。にぶい透明度。内外面の口縁から胴部に施釉。細い貫入。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層
			3	(イ) Aa(1)	口～底	13.4 6.4 6.8	灰釉碗。口縁直口。腰は張らず直線的。高台際削り痕不明瞭。高台に砂目あり。	灰白色の細粒子。焼成良好。	灰色の灰釉。透明。内外面の口縁から胴部に施釉。貫入なし。	南北ミゾレキ遺構内 レキ充填部No.1 1層 1a～b層
			4	(イ) Aa(1)	口～底	13.2 6.6 6.8	灰釉碗。口縁直口。腰は張らず直線的。高台際削り痕明瞭。高台に砂目あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。一部に石はぜあり。	初ア 灰色の灰釉。透明。内外面の口縁から胴部に施釉。高台際指跡。細い貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層 レキ充填部No.1遺構内 1a～b層
			5	(イ) Bb(1)	口～底	13.2 6.3 6.6	灰釉碗。口縁は外反。腰が張り丸みを帯びる。高台際削り痕明瞭。見込に砂目あり。重ね焼により別個体の口縁が付着。	灰白色の細粒子。焼成良好。	初ア 灰色の灰釉。透明。内外面の口縁から胴部に施釉。高台際指跡。細い貫入。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層 レキ充填部No.1～2遺構内 1a～b層
			6	(イ) Bb(1)	口～底	12.3 6.3 6.2	灰釉碗。口縁は外反。腰は張らず直線的。高台際削り痕不明瞭。高台に砂目あり。	灰白色の細粒子。焼成良好。	初ア 灰色の灰釉。透明。内外面の口縁から胴部に施釉。高台際指跡。貫入なし。	レキ充填部No.1 2層
			7	(イ) a(2)	胴～底	- 6.8	灰釉碗。腰は張らず直線的。高台際削り痕明瞭。高台に砂目あり。	灰白色の細粒子。焼成良好。	灰色の灰釉。にぶい透明度。外面まで施釉。高台際指跡。貫入なし。内部見込みに同心円。	南北ミゾレキ遺構内
			8	(イ) b(2)	底部	- 6.8	灰釉碗。腰は張らず直線的。高台際削り痕明瞭。見込は平坦で広い。高台に砂目あり。	淡灰白色の細粒子。焼成非常に良い。	灰白色の灰釉。半透明。胴部まで施釉。貫入なし。見込に灰白色の灰釉で同心円。	レキ充填部No.1～2遺構内
第19図 図版7	I	碗	9	(ロ) Ab(2)	口～底	13.2 5.9 5.6	直口する碗。腰が張り、丸みを帯び立ち上がる。高台際削り痕明瞭。見込は丸みを帯びる。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成良好。	暗褐色の鉄釉。光沢あり。①内外面の口縁から胴部に施釉。②見込にさび釉で同心円。施釉順②→①。高台に指跡あり。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層 レキ充填部No.1 3層 1a～b層
			10	(ロ) Bb(2)	口～底	13.4 6.8 6.6	口縁部に4mm幅の緑取り線を廻らし外反させる。腰が張り、丸みを帯び立ち上がる。胴部の削り粗雑。高台際削り痕明瞭。高台にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成良好。	暗褐色の鉄釉。光沢あり。①内外面の口縁から胴部に施釉。②見込にさび釉で同心円。その上から鉄釉の筆点あり。施釉順②→①。高台に指跡。	南北ミゾレキ遺構内 レキ充填部No.1 2層
			11	(ロ) Bb(2)	口～底	12.6 5.1 6.2	口唇は釉が流れ光沢がない。口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯び立ち上がる。高台際削り痕明瞭。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成良好。	暗褐色の鉄釉。光沢あり。①内外面の口縁から胴部に施釉。②見込にさび釉で同心円。施釉順②→①。高台に指跡。	レキ充填部No.1 1層
			12	(ロ) Bb(2)	口～底	13.0 6.5 6.2	口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯び立ち上がる。高台際削り痕明瞭。高台と見込にアルミナ痕あり。	淡橙白色の細粒子。焼成は良い。	暗褐色の鉄釉。光沢あり。①内外面の口縁から胴部に施釉。②見込にさび釉で同心円。施釉順②→①。高台に指跡。	レキ充填部No.1～2遺構内
			13	(ロ) Bb(2)	口～底	14.6 6.0 6.0	口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯び立ち上がる。高台際削り痕明瞭。重ね焼により別個体の口縁が付着。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成良好。	暗褐色の鉄釉。光沢あり。①内外面の口縁から胴部に施釉。②見込にさび釉で同心円。施釉順②→①。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層
			14	(ロ) Bb(2)	口～底	12.4 6.5 5.6	口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯び立ち上がる。高台際削り痕明瞭。	白黄色の細粒子。焼成良好。	暗褐色の鉄釉。光沢あり。①内外面の口縁から胴部と、外面は高台際まで施釉。②見込にさび釉で同心円。施釉順②→①。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層
			15	(ロ) Ca	口縁部	14.8 -	口縁は外反する。玉縁に肥厚する。	白黄色の細粒子。焼成良好。	暗褐色の鉄釉。光沢あり。内外面の口縁から胴部に施釉。	南北ミゾレキ遺構内
			16	(ハ) (2)	胴～底	- 6.2	腰が張り、丸みを帯び立ち上がる。高台際削り痕明瞭。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成良好。	黒褐色の鉄釉。光沢あり。①内外面の胴部に施釉。、外面高台と見込は施釉しない。②見込にさび釉で同心円。施釉順②→①。	南北ミゾレキ遺構内
第20図 図版8	II	碗	17	(ロ) B①	口～底	14.0 6.8 6.5	口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯び立ち上がる。高台際削り痕明瞭。高台と見込にアルミナ痕あり。	淡橙褐色細粒子。焼成はやや甘い。	①暗褐色の鉄釉を口縁から高台際まで施釉する。にぶい光沢あり。②内面には灰釉を施し、蛇の目釉剥ぎを行う。灰釉は白く発色。施釉順②→①。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層
			18	(ロ) B②	口～底	13.4 6.3 5.6	口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯び立ち上がる。高台際削り痕明瞭。見込は平坦。高台内は縮輪状の削り痕。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	①暗褐色の鉄釉を口縁から高台内まで施釉する。にぶい光沢あり。置付釉剥ぎ。②内面と口縁は白化粧を施し、透明釉施後、蛇の目釉剥ぎを行う。施釉順②→①。	レキ充填部No.1 1層
			19	B	口～底	14.0 6.2 6.2	口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯びる。胴部に轆轤目が目立つ。高台際削り痕明瞭。高台と見込にアルミナ痕あり。	淡橙白色の細粒子。焼成は良い。胎土の鉄分が器面に出ている。	全面に白化粧を施し、透明釉の後、見込と置付の釉剥ぎを行う。高台内の白化粧が収縮する。貫入なし。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.2 1層 レキ充填部No.2 2層 1a～b層
			20	B	口～底	13.6 6.6 6.7	口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯びる。高台は厚い。高台際削り痕明瞭。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	全面に粗雑な白化粧を施し、透明釉の後、見込と置付の釉剥ぎを行う。高台内の白化粧が収縮する。貫入なし。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層
			21	B	口～底	14.2 6.4 6.2	口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯びる。高台際削り痕明瞭。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と置付の釉剥ぎを行う。高台内の白化粧が収縮する。細かい貫入。わずかにコバルトの飛び散り痕あり。	レキ充填部No.1 1層 1a～b層
			22	B	口～底	14.0 6.4 6.2	口縁の縁取が明瞭で外反する。腰が張り、丸みを帯びる。高台際削り痕明瞭。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と置付の釉剥ぎを行う。高台内の白化粧が収縮する。荒い貫入。一部に釉の縮み。光沢がにぶい。	レキ充填部No.1 2層 1a～b層
			23	B	口～底	13.4 6.1 5.8	口縁は外反する。腰が張り丸みを帯びる。轆轤目が希薄。高台際削り痕明瞭。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と置付の釉剥ぎを行う。高台内の白化粧が収縮する。荒い貫入。	溝3 3層
第20図 図版8										
24	B	口～底	14.5 5.9 7.6	口縁の縁取が明瞭で外反する。腰が張り丸みを帯びる。轆轤目が希薄。高台が短い。高台際削り痕明瞭。高台と見込にアルミナ痕あり。重ね焼により別個体の口縁が付着。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と置付の釉剥ぎを行う。高台内の白化粧が収縮する。貫入なし。一部に釉の縮み。光沢がにぶい。	レキ充填部No.1 1層 1a～b層			

第5表 沖縄産施釉陶器観察一覧2

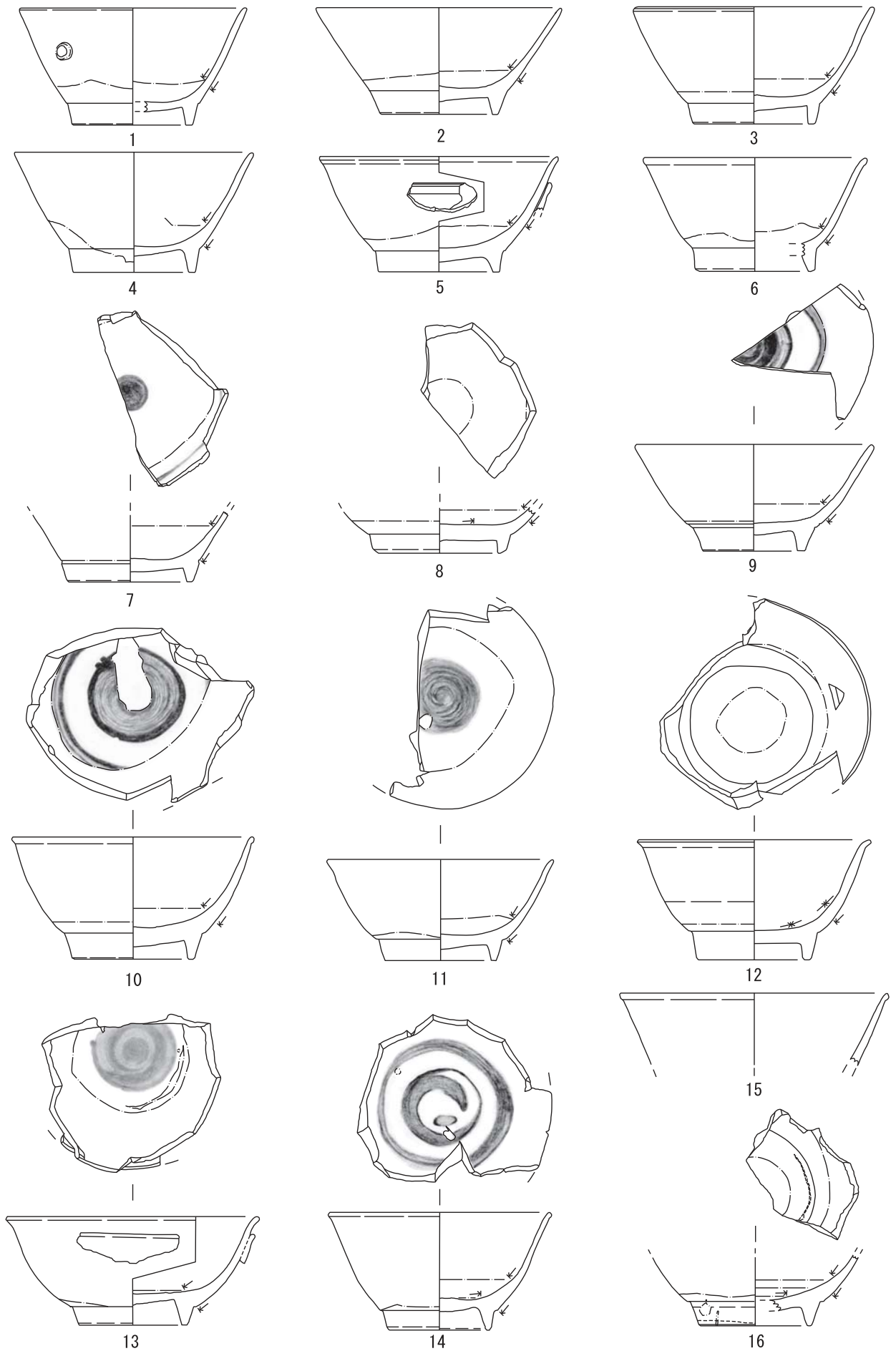
第20図 図版9	碗	III	B	口～底	12.2 5.9 5.8	口縁は強く外反する。腰が張り、丸みを帯びる。高台が短い。高台際削り痕不明瞭。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付の釉剥ぎを行う。高台に指跡。荒い貫入。	南北ミゾレキ遺構内
			B	口～底	14.0 6.6 6.4	口縁に2条の緑取り線。腰が張り丸みを帯びる。高台際削り痕不明瞭。高台と見込みにアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	前面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付の釉剥ぎを行う。高台に指跡。細かい貫入。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層 レキ充填部No.1～2遺構内
			B	口～底	12.4 5.9 5.8	口縁は強く外反する。口唇部には鉄釉を施す(口紅)。腰が張り丸みを帯びる。高台が短い。高台際削り痕不明瞭。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付の釉剥ぎを行う。高台に指跡。荒い貫入。	南北ミゾレキ遺構内
			文B	口縁部	13.6 -	口縁は外反する。点花文を施す。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	白化粧した後にコバルトと鉄釉で点花文を施文し、透明釉を施す。細かい貫入。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層
			文B	口縁部	13.4 -	口縁は外反する。点花文を施す。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	白化粧した後にコバルトと鉄釉で点花文を施文し、透明釉を施す。細かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ充填部No.1 1層
			文B	口～底	13.1 6.3 6.4	口縁の緑取が明瞭で外反する。腰が張り丸みを帯びる。高台際削り痕不明瞭。コバルトで筆描きの菊花文を外面に施す。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	白化粧した後にコバルトで菊花文を施文し、透明釉を施す。内面にはコバルトの飛び散り。細かい貫入。	レキ充填部No.1 2層 1a～b層
			文B	胴～底	- -	腰が張り丸みを帯びる。高台が短い。高台際削り痕不明瞭。コンパスで内を基調にした幾何学文を施す。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	白化粧した後にコンパスで線彫りし、薄い緑釉を施す。透明釉を施す。細かい貫入。	レキ充填部No.1～2遺構内
			文B	口～底	14.2 6.5 6.1	口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯びる。高台は短く、高台際削り痕不明瞭。コバルトで筆描きの巴文?を外面に施す。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	白化粧した後にコバルトで巴文?を施文し、透明釉を施す。内面には重ね焼による文様の写りがある。細かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内
			文B	口～底	14.2 6.5 6.3	口縁は外反する。腰が張り丸みを帯びる。高台は短く、高台際削り痕不明瞭。コバルトで筆描きの巴文?を外面に施す。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	白化粧した後にコバルトで巴文?を施文し、透明釉を施す。内面には重ね焼による文様の写りがある。細かい貫入。	レキ充填部No.1 2層
			文B	口～底	13.9 12.8 6.2	口縁は外反する。腰が張り丸みを帯びる。高台際削り痕不明瞭。線彫り。円中に弓の字?を描き、高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	白化粧した後に線彫りし、薄いコバルトと緑釉で施文し、透明釉を施す。荒い貫入。	レキ充填部No.1 1層
第22図 図版10	小碗	II	(口)B①	口～底	8.8 4.3 3.6	口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯び開く。高台際削り痕不明瞭。見込は平坦。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	①茶褐色で光沢のない鉄釉を口縁から高台際まで施釉。②内面は灰釉を施し蛇の目釉剥ぎを行う。細かい貫入。施釉順②→①	南北ミゾレキ遺構内 1a～b層
			(ハ)B②	口～底	8.4 4.5 3.6	口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯び立ち上がる。高台際削り痕不明瞭。見込は平坦。高台と見込にアルミナ痕あり。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	①黒釉を口縁から高台まで施釉。にぶい光沢。②口縁から内面に白化粧後、灰釉を施し蛇の目釉剥ぎを行う。細かい貫入。施釉順②→①	南北ミゾレキ遺構内
			Aa	口～底	8.4 4.3 3.8	口縁直口。腰が張り丸みを帯びる。高台際削り痕不明瞭。高台に指痕あり。高台と見込にアルミナ痕。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付の釉剥ぎを行う。高台内の白化粧が収縮する。細かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内
		Aa	口～底	8.6 4.1 4.0	口縁直口。腰が張り丸みを帯びる。高台際削り痕不明瞭。高台に指痕あり。高台と見込にアルミナ痕。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付の釉剥ぎを行う。高台内の白化粧が収縮する。貫入なし。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層	
		Ba	口～底	8.4 4.0 4.0	外反口縁で、緑取り線あり。腰が張り丸みを帯びる。高台際削り痕不明瞭。高台と見込にアルミナ痕。胴部に重ね焼の付着あり。	灰色の粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付の釉剥ぎを行う。高台内の白化粧が収縮する。貫入なし。	レキ充填部No.1 2層	
		Ba	口～底	9.0 4.2 3.6	外反口縁。腰が張り丸みを帯びる。高台は低い。	灰白色の粒子。焼成は非常に良い。	全面に薄く白化粧を施し透明釉の後、畳付の釉剥ぎを行う。細かい貫入。	1a～b層	
		Ba	口～底	9.4 4.4 4.1	外反口縁で、緑取り線あり。腰が張り丸みを帯びる。高台際削り痕不明瞭。見込は平坦。高台と見込にアルミナ痕。胴部に重ね焼の付着あり。	灰白色の粒子。焼成は非常に良い。	全面に薄く白化粧を施し透明釉の後、畳付の釉剥ぎを行う。細かい貫入。	レキ充填部No.1 2層 レキ充填部No.2 1層 レキ充填部No.2 3層	
		Bb	口～底	4.0 3.9 3.4	外反口縁で、緑取り線あり。胴部は1.2cm幅で面取りされる。高台際削り痕不明瞭。高台と見込にアルミナ痕。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付の釉剥ぎを行う。高台内の白化粧が収縮する。細かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内	
		Bb	口～底	8.6 4.4 3.2	外反口縁で、緑取り線あり。胴部は1.5cm幅で面取りされる。高台際削り痕不明瞭。高台と見込にアルミナ痕。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付の釉剥ぎを行う。見込の釉剥ぎは素地まで。細かい貫入。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層	
第23図 図版11	鉢	I	(イ)D (1)	口～胴	20.8 -	玉縁口縁の灰釉鉢。ドンブリの様な形状。胴部下と見込は施釉しない。内面に轆轤目がある。	灰白色の粒子。焼成は非常に良い。	外面に円文?内面は口縁に1条と見込立ち上がりには2条の線を廻らし、その間に草文様を筆描きする、フィガキーする。	南北ミゾレキ遺構内
			(口)(2)	底部	- 10.8	大鉢(ワンプー)の底部。高台際削り痕不明瞭。見込にさび釉による同心円を施す。	淡黄色の細粒子。焼成は良い。	暗褐色の鉄釉。光沢あり。①内外面の口縁から胴部に施釉。②見込にさび釉で同心円。施釉順②→①。	南北ミゾレキ遺構内
		(口)B①	口～底	24.2 12.5 10.6	鉄釉大鉢(ワンプー)。口縁部を外反させ、凸帯を貼り付ける。高台際まで施釉。内面はイッチンで見込から口縁に向けてジグザク文。見込は蛇の目釉剥ぎ。	淡黄色の細粒子。焼成は良い。	暗褐色の鉄釉。光沢あり。①素地にイッチンを施し、灰釉。②鉄釉を外面から内面口縁に施す。施釉順①→②。細かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ充填部No.1 1層 1a～b層	
		(口)B②	口縁	- -	鉄釉片口鉢。口縁部の一部を引き出して注ぎ口を成形。内面は白化粧。	淡黄色の細粒子。焼成は良い。	暗褐色の鉄釉。①内面と外面口縁の白化粧後、②外面から口唇まで鉄釉を施し、③透明釉を施す。施釉順①→③。細かい貫入。	南ミゾレキ遺構内 1b層	
第23図 図版12	II	(口)A②	口～底	30.0 18.0	鉄釉大鉢(ワンプー)。口縁部を逆L字に成形。高台内まで施釉。内面は白化粧。見込は蛇の目釉剥ぎ。高台と見込にアルミナ。内面にはコバルトの飛び散りが見られる。	灰白色の粒子。焼成は良い。	暗褐色の鉄釉。①内面と外面口縁の白化粧後、②外面から口唇まで鉄釉を施し、③透明釉を施す。施釉順①→③。細かい貫入。	レキ充填部No.1 2層 レキ充填部No.1～2遺構内	
(口)A②		口～底	24.0 11.4 8.8	鉄釉大鉢(ワンプー)。口縁部を先細りの逆L字に成形。高台内まで施釉。内面は白化粧。見込は蛇の目釉剥ぎ。高台と見込にアルミナ。	淡黄色の細粒子。焼成は良い。	暗褐色の鉄釉。①内面と外面口縁の白化粧後、②外面に鉄釉を施し、③透明釉を施す。施釉順①→③。細かい貫入。	南ミゾレキ 1層 溝3 3層 1b層 1a～b層 II a層		
(口)A②		口～底	27.8 13.1 10.2	鉄釉大鉢(ワンプー)。口縁部を逆L字に成形。高台際と高台内に施釉。内面は白化粧。見込は蛇の目釉剥ぎ。高台と見込にアルミナ。	淡黄色の細粒子。焼成は良い。	暗褐色の鉄釉。①内面と口唇の白化粧後、②外面に鉄釉を施し(一部口唇)、③透明釉を施す。施釉順①→③。細かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1～2遺構内 1a～b層		

第5表 沖縄産施釉陶器観察一覧3

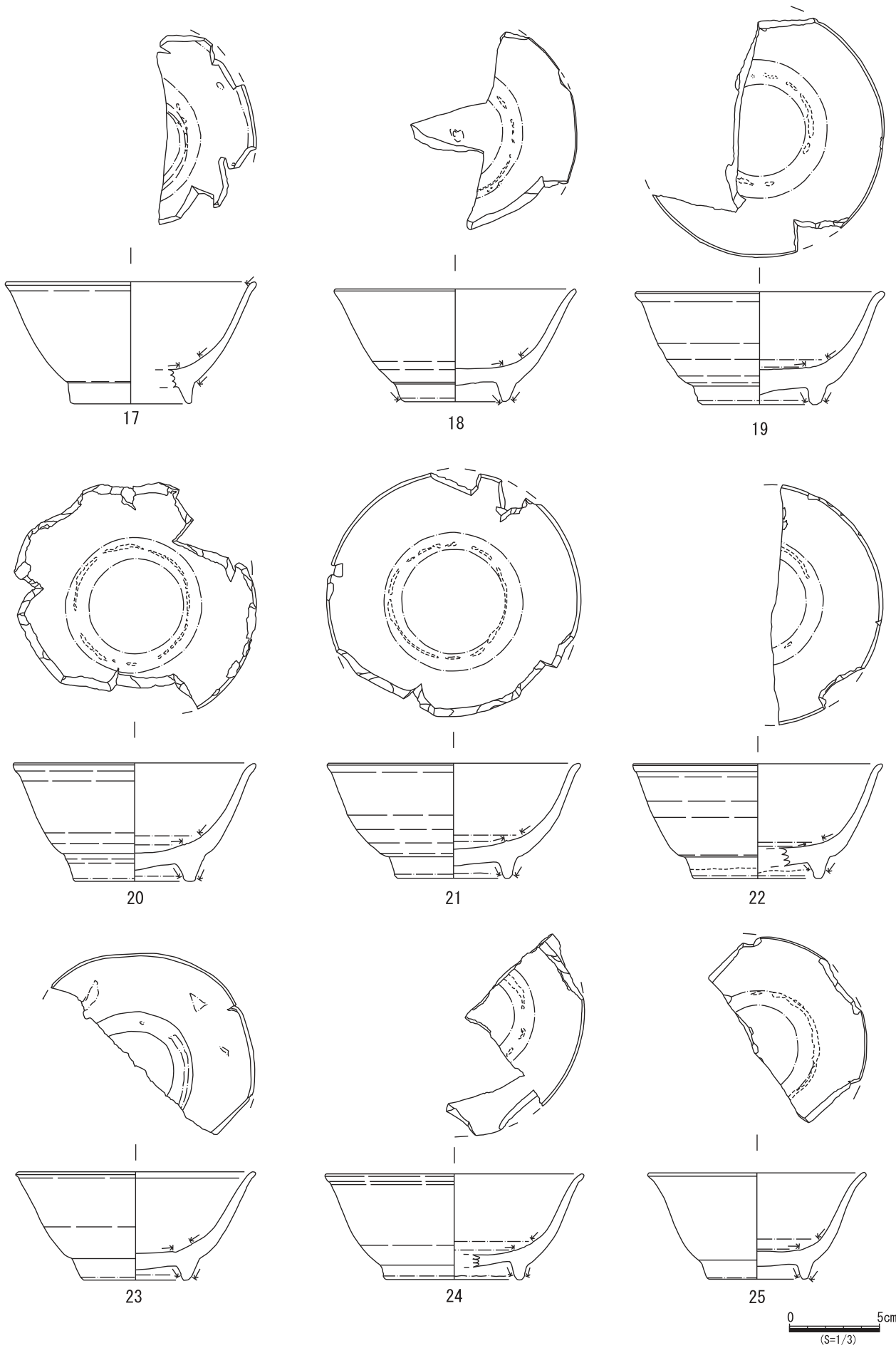
第24図 図版13	51	鉢	Ⅲ	B深	口～底	19.4 10.4 7.6	花卉形の鉢。コテで口縁から約9cm間隔で部分的に引き出し、花卉形に成形。高台際明瞭。内外面は白化粧。高台と見込にアルミナ。	淡黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付の釉剥ぎを行う。高台内の白化粧が収縮する。細かい貫入。見込は蛇の目釉剥。高台に指痕。	南北ミゾレキ遺構内 レキ充填部No1 2層 レキ充填部No2 5層
	52		-	不明	底部	- - 7.8	施釉は確認されないが、鉄釉大鉢の底部と考えられる。見込には鉄釉の点花文を施す。		無施釉の見込に鉄釉で点花文を施す。	南北ミゾレキ遺構内
第25図 図版14	53	Ⅲ	I	(口)中(2)	胴～底	- - 10.8	鉄釉皿又は浅鉢。高台と見込を除いて施釉する。見込にはさび釉による同心円を描く。高台と見込みにはアルミナ。高台際削りは明瞭。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	①暗褐色の鉄釉。外面は厚く、内面は薄い。②見込にさび釉による同心円を描く。施釉順②→①。荒い貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ充填部No1 1層
	54		II	(口)A中①	口～胴	22.2 -	鉄釉皿。口縁を強く外反させる。胴部は丸みを帯びる。外面は口縁から高台際まで鉄釉が施され、口縁の先端は拭き取られているが、口唇には鉄釉が残る。内面は見込を除いて灰釉が施され口縁に及ぶ。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	①外面は緑褐色の鉄釉。②内面は見込を除きオリーブ褐色の灰釉。施釉順①→②。細かい貫入。	レキ充填部No1 1層
	55		文B	口～底	19.4 5.3 9.2	白化粧皿。口縁を軽く外反させる。線彫りで房状の植物を描き、薄いコバルトで緑取りし中は鉄釉を塗る。高台にアルミナ。石はざらあり。高台削りは不明瞭。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付を釉剥する。細かい貫入。	レキ充填部No1 1層 レキ充填部No2 2層	
	56		A中	口～底	19.6 5.3 8.8	白化粧皿。口縁は直口する。口縁先端に縁取り線が廻らされ、白化粧が施されている。見込と高台にアルミナ。高台際削りは明瞭。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付を釉剥する。荒い貫入。蛇の目釉剥。	レキ充填部No1 2層	
	57		文B	口～底	15.6 3.7 7.0	染付け皿。口縁と立ち上がりにコバルトで同心円を描き、その間に文様を描く。見込にも同心円を描く。見込と高台にアルミナ。印判手の底部焼を意図している。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付を釉剥する。荒い貫入。	南北ミゾレキ遺構内	
	58		文A	口～底	13.0 3.9 6.9	白化粧小皿。口縁部を波状にして、口唇を切り取ることで、白化粧土と素地の色が互層に見えるデザイン。見込みには二重線が廻らされている。見込と高台にアルミナ。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付を釉剥する。荒い貫入。	レキ充填部No1 1層	
	59		文	胴～底	- - 6.8	白化粧赤絵皿。見込に点花文(赤)と蛇の目釉剥部分を赤で緑取りし、その中に赤と緑の点文を交互に配する。さらに胴部に向けて放射線状の線(赤)が描かれている。見込と高台にアルミナ。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込と畳付を釉剥する。焼成後に赤絵を施している。荒い貫入。	南北ミゾレキ遺構内	
第26図 図版15	60	急須	I	(ハ)3	口～底	10.0 3.8	黒釉灯明皿。口唇部は釉が流れ、縁取りのように見える。高台際には白化粧土による刷毛目が廻らされている。見込と高台にアルミナ。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	黒釉を内面から外面口縁まで施す。見込みは釉剥される。	南北ミゾレキ遺構内
	61		I	(ハ)大	蓋	1.9 4.2 11.4	水注(アンビン)の蓋。轆轤引き。外面とツバは削り出しで形成、つまみは貼付している。内面ツバ部分にアルミナ。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	黒釉を外面に施す。	溝33層 II a~1層
	62		III	文中	蓋	- 6.2 -	急須の蓋。轆轤引き後、削り出しで成形。空気孔は白化粧後に内外側から穿たれている。内側の孔は荒く大きい。幾何学模様線彫りされ、薄いコバルトと鉄釉で彩色されている。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧した段階で装飾し、空気孔を穿つ。その後、外面のみに透明釉を施す。細かい貫入。	レキ充填部No2 5層
	63		I	(ハ)中	胴～底	4.9 7.9 6.2	黒釉の急須。轆轤引き。球体に近い器形。注口と耳は器体と同じ。硬質の胎土。	灰色の細粒子。焼成は良い。	黒釉を外面に施す。底部は施釉しない。	レキ充填部No1 1層
	64		III	文中	口～底	7.4 9.1 -	白化粧の脚付き急須。轆轤引き。球体に近い器形。注口と耳は強度のある白土を使用し白化粧は不要。器体の孔は白化粧後に内外側から穿たれており、内側の穿ちが大きい。文様は三角を基調にした幾何学文で薄いコバルトと鉄釉で彩色。注口と耳の接合部に緑釉。底部は平坦で円錐形の脚を3つ付ける。	白黄色の細粒子。白色の細粒子(注口・耳)。焼成は良い。	本体内外面に白化粧し、注ぎ孔を穿つ。その後、注口と耳を着ける。底部を除き透明釉を施す。細かい貫入。	レキ充填部No1 1層 レキ充填部No1 2層 レキ充填部No1~2遺構内
65	中	胴～底	- - 5.4	白化粧の脚付き急須。轆轤引き。注口と耳は強度のある白土を使用し白化粧は不要。器体の孔は白化粧後に内外側から穿たれており、内側の穿ちが大きい。	白黄色の細粒子。白色の細粒子(注口・耳)。焼成は良い。	本体内外面に白化粧し、注ぎ孔を穿つ。その後、注口と耳を着ける。底部を除き透明釉を施す。細かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内			
第26図 図版16	66	瓶	I	(口)	口頸部	2.4 -	鉄釉瓶子の口頸部。口縁部は外反している。胴部の一部が残る。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	鉄釉は外面から口縁部の内面に及ぶ。	北ミゾレキ遺構内
	67		(ハ)	胴～底	- - 5.4	小型の黒釉瓶。口縁は欠損。球体に近い胴形。胴部内面の上面は轆轤目が密。高台際削り明瞭。高台に指痕。	灰白色細粒子。	黒釉を外面の高台際までと、高台内に施釉。貫入なし。	南ミゾレキ 2層 南ミゾレキ 3~4層 1a~b層	
	68		II	(口)②	胴～底	- - 7.1	鉄釉・白化粧掛分の瓶子。間延びした算盤玉のような器体に幅広い高台が付く。全体が轆轤引きと考えられる。	橙褐色の細粒子。焼成は良い。	胴上部に白化粧後に下部に鉄釉を施した後、白化粧部の透明釉を施す。貫入なし。	レキ充填部No1 1層 レキ充填部No2 2層
	69		III	文	胴～底	- - 7.4	瓶子。円錐形の器体に袴状の高台が付く。文様は放射線状の区画に格子文様を線彫り。胴下部には小さい円文を施す。文様には薄い鉄釉と緑釉で彩色される。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	外面に白化粧後、施文彩色し透明釉を施す。高台内は鉄釉を施す。貫入なし。	レキ充填部No1 1層 レキ充填部No2 2層 レキ充填部No1~2遺構内 1a~b層
第27図 図版16	70	香炉	I	(口)	口～底	15.6 9.3 10.2	鉄釉の香炉。轆轤引き。口縁は逆字で、頸部は直立し、胴部で強く張る。底部は平坦。頸部の中央には凸帯、脚は1つ確認される。	灰白色細粒子。焼成は非常に良い。	オリーブ褐色の鉄釉を口縁内側から外側胴部まで厚く施す。釉流れ。脚は無施釉。細かい貫入。	1a~b層
	71		(ハ)	口～底	18.2 11.9 -	黒釉の香炉。轆轤引き。口縁は逆字で、頸部は直立し、胴部で強く張る。底部は平坦。頸部の中央には凸帯、脚は3つ確認され、四指の龍が玉を握るデザイン。	灰白色細粒子。焼成非常に良い。	黒釉を口縁内側から外側胴部まで施す。脚は無施釉。貫入なし。	南ミゾレキ 1層 南ミゾレキ 3層 溝3 3層 溝3 3層	

第5表 沖縄産施釉陶器観察一覧4

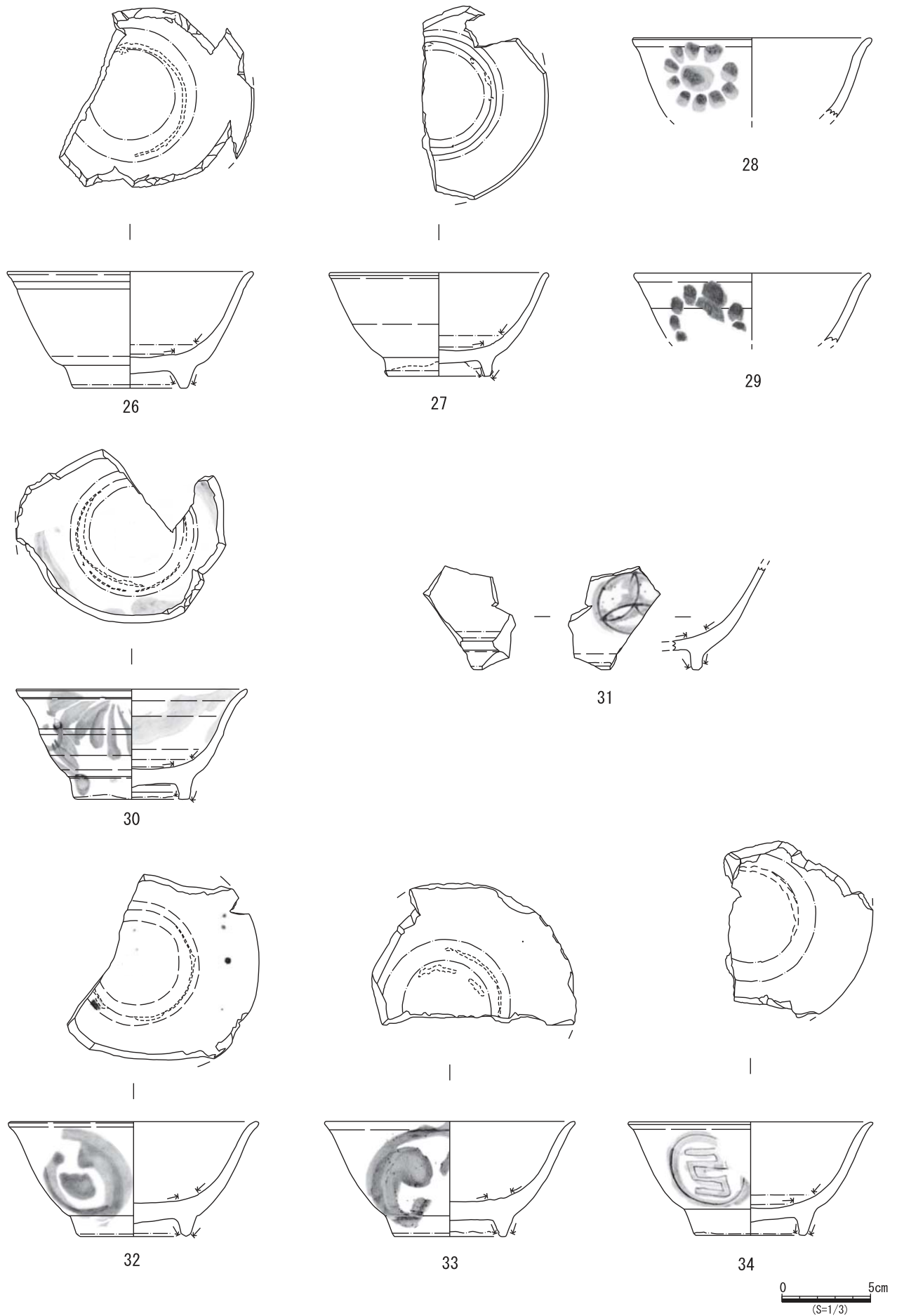
第27図 図版16	72	香炉	III	-	口～底	11.9 6.7 7.2	白化粧の香炉。轆轤引き。口縁は逆L字で、口唇部に薄い緑釉を施す。頸部は直立し、胴部で強く張る。底部は平坦。頸部の中央には凸帯、脚は1つ確認される。	灰色細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧し線彫り、彩色した上で、透明釉を施す。荒い貫入。	南北ミゾレキ遺構内	
	73	花生	III	文	胴～底	- - 9.2	白化粧の筒状の花瓶？。底部は内湾する。1.5cm間隔で縦位の線彫りを施し、その上から薄い鉄釉、線の間は薄いコバルトで彩色する。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧し透明釉を口縁内側から外側胴部まで施す。脚は無施釉。細かい貫入。	レキ充填部No.1 2層	
第27図 図版17	74	火入	I	(口) a	胴～底	- - 7.2	鉄釉の火入(火取)。筒状の胴部には轆轤目が顕著。高台は低い。底部及び胴部への立ち上がりは胎土が荒いために縮縮状になっている。	白黄色の細粒子。焼成は悪い。耐火土？	鉄釉を胴部に施す。高台と胴部への立ち上がりは無施釉。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 1～2層 レキ充填部No.1 2層	
	75			II	(イ・口) b	口～胴	11.6 - -	鉄釉灰釉掛け分け、丸みのある火入(火取)。焼口で内傾する。口縁には鉄釉、口縁下位に斜格子文で無釉。胴部には2条一對の沈線が間隔を置いて2本あり、灰釉が施される。	灰色細粒子。焼成は良い。	口唇部、口縁に鉄釉、胴部に薄いオリーブ褐色の灰釉を施し、内面は無釉。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層
	76		III	文a	口～底	10.6 7.0 7.6	白化粧筒状の火入。胴部には上下2条一對の線彫りの間に凹文と斜格子文を施す。沈線斜格子には薄いコバルトで彩色。高台は低い。	白黄色の細粒子。焼成は悪い。耐火土？	全面に白化粧し透明釉を施す。高台立ち上がり部、畳付、口縁内と見込は釉剥ぎされる。荒い貫入。	南ミゾレキ 1層 南ミゾレキ 2層 南ミゾレキ 3層 II a層	
	77			a	胴～底	- - 7.0	白化粧の火入。筒状の胴部で高台は低い。外面の透明釉は摩滅したのか。内面は白化粧のみ。	白黄色の細粒子。焼成は悪い。耐火土？	全面に白化粧し外面のみ透明釉を施す。貫入なし。	南北ミゾレキ遺構内 レキ充填部No.1 1層	
	78			文a	口～底	10.3 8.1 11.2	白化粧の火入。筒状の胴部にコンパスで円を基調にした幾何学文を線彫りし、薄いコバルト釉で彩色する。高台は低い。	灰白色の細粒子。焼成は良い。耐火土？	全面に白化粧し外面のみ透明釉を施す。貫入なし。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層 Ia～b層	
	79	酒器	I	(口)他	胴～底	- - -	酒器(抱瓶)。三日月形の底部に板状の粘土を組み立てて成形。	灰色細粒子。焼成は良い。	緑釉と藁灰釉か？	南北ミゾレキ遺構内	
	80a			文	頸～胴	- - -	酒器(カラカラ)。口頸部まで轆轤引き。放射線状に線彫りされた間を濃いコバルトと薄い鉄釉で彩色。注口は強度のある白土を使用し白化粧は不要。注口接合部に薄い緑釉。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	外面に白化粧後、線彫り、彩色し、注口を接合して透明釉を施す。	南北ミゾレキ遺構内	
	80b		文	胴～底	- - 8.2	酒器(カラカラ)。放射線状に線彫りされた間をコバルトと鉄釉で彩色。底部には高台は無く、1.5cm幅の凸帯が廻らされている。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	外面に白化粧後、線彫り、彩色し、底部を除いて透明釉を施す。	南北ミゾレキ遺構内 レキ充填部No.1 2層		
	第28図 図版18	81	鍋	I	(口) a	口～胴	17.0 - -	鉄釉の土鍋。口縁は「く」の字に屈曲し、口縁の外側からヒモ状の取手を貼り付ける。胴部は丸く張り出す。	灰褐色の細粒子。焼成は良い。耐火土。	薄い褐色釉薬を口縁から胴部にかけて施す。内面の口唇部は無施釉で、胴部は光沢の無い錆釉を施す。	不明
		82			(口) b	口～胴	18.2 - -	鉄釉の土鍋。口縁は「く」の字に屈曲し、内側の口唇部にヒモ状の取手を貼り付ける。胴部は張らない。	橙褐色の細粒子。焼成は良い。耐火土。	鉄釉が風化する。外面の口縁から胴部に施釉。底部は無釉。内面口縁は無釉。胴部は光沢の無い鉄釉を施す。	レキ充填部No.1 1層 Ia～b層
83		(口)			底部	- - -	鉄釉の土鍋底。円錐形の脚を貼り付ける。	淡灰茶褐色の細粒子。焼成は良い。耐火土。	底部に胴部からの鉄釉の流れが見られる。内面は薄い鉄釉を施す。	南北ミゾレキ遺構内	
84		(口)			底部	- - -	鉄釉の土鍋底。円錐形の脚を貼り付ける。内面底に轆轤目が顕著。	灰茶褐色の細粒子。焼成は良い。耐火土。	内面に光沢の無い鉄釉を薄く施す。	レキ充填部No.1 1層	
85		II	(口) a②	口～胴	17.6 - -	鉄釉の土鍋。口縁は「く」の字に屈曲し、内側の口唇部にヒモ状の取手を貼り付ける。胴部は丸く張り出す。	白黄色の細粒子。焼成は良い。耐火土。	①暗緑褐色の鉄釉を口縁から胴部に施す。胴下部は無釉。②口唇から内面は白化粧され、③その後、透明釉を施し口縁は釉土される。施釉順②③①。荒い貫入。	Ia～b層		
86		水注	I	(ハ)大	注口	- - -	黒釉水注(アンビン)の注ぎ口。円錐形に轆轤引きした後に、注ぎ口を接着部と斜めに切り成形。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	黒釉を外面と注ぎ口内の先端に施釉する。施釉は器体と接続後。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 2層	
87				(ハ)大	胴～底	- - 11.0	黒釉水注(アンビン)の底部。轆轤引き。胴部は球体に近い張り。高台際の削りは明瞭。内面の轆轤目は顕著。高台は低く1cmほどの挟りが2箇所に見られる。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	黒釉を外面は胴部と高台内に施し、高台と立ち上がり、畳付は施釉しない。内面底は施釉後に5cm径で荒く釉剥ぎし、アルミ痕がみられる。	レキ充填部No.1 2層	
88			壺	I	(口) da	口～胴	11.2 - -	鉄釉油壺(アンダガーミ)。口縁は逆L字状で、頸部は直口し、胴部から強く張り出す。胴上部に沈線を廻らし、耳を付ける。内面に指痕あり。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	鉄釉を外面口縁内面まで施し、口唇部は釉剥ぎを行う。内面は頸部を無釉にし、胴部に薄い鉄釉を施す。	レキ充填部No.1 2層
89		(口) db			口～胴	9.8 - -	鉄釉油壺(アンダガーミ)。小型で、頸部を作らず口縁から胴部に徐々に張り出す。口縁と胴上部に沈線を廻らし、耳を付ける。内面に指痕あり。	白黄色の細粒子。焼成はやや甘い。	鉄釉を内外面まで施し、口唇部は釉剥ぎを行う。内面の釉薬はやや薄い。	レキ充填部No.1 1層 レキ充填部No.1 1～2層	
90		(口) da			胴部	- - -	鉄釉油壺(アンダガーミ)。胴部が強く張り出す。胴上部に沈線を2条廻らし、耳を付ける。内面の轆轤目顕著。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	光沢の鈍い鉄釉を外面に施す。内面は光沢の無い薄い鉄釉を施す。	南ミゾレキ 3～4層 溝3 3層 Ib層 Ia～b層 II a層	



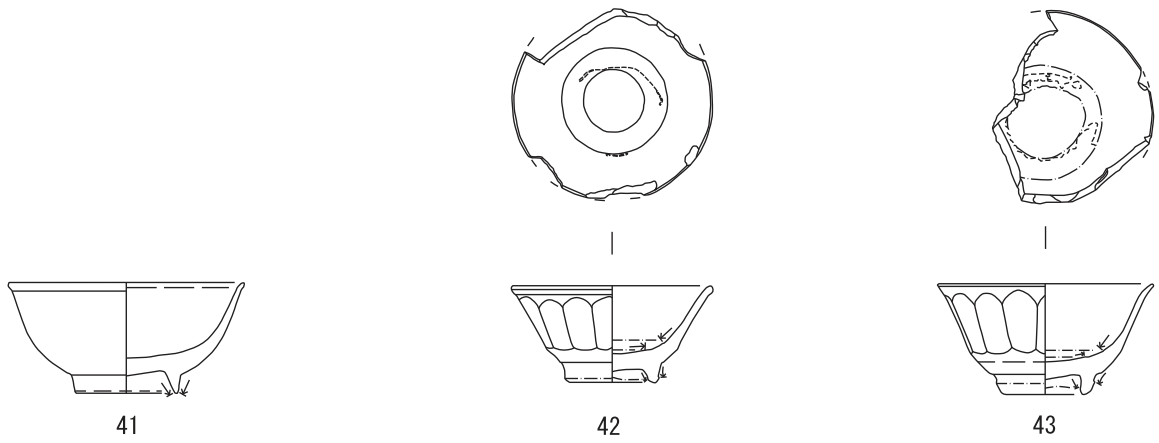
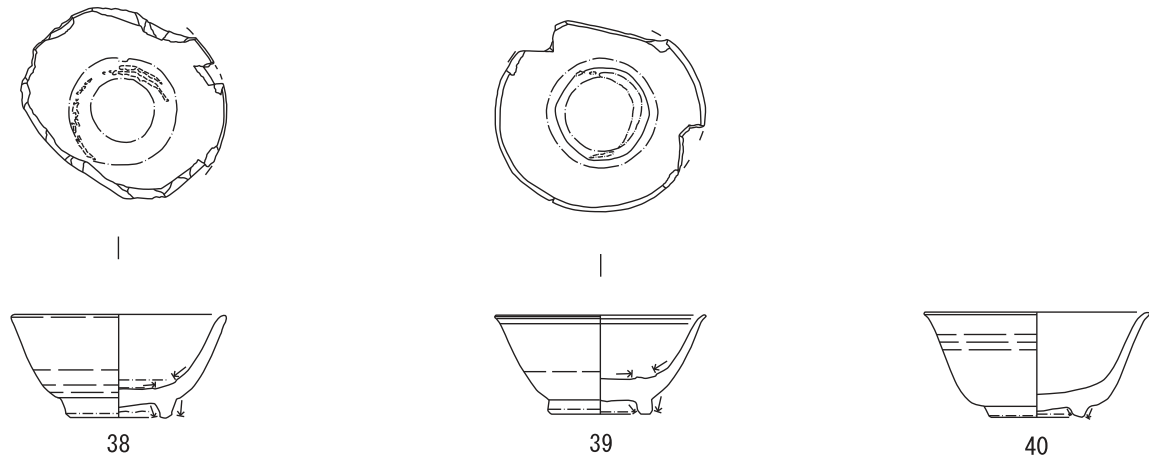
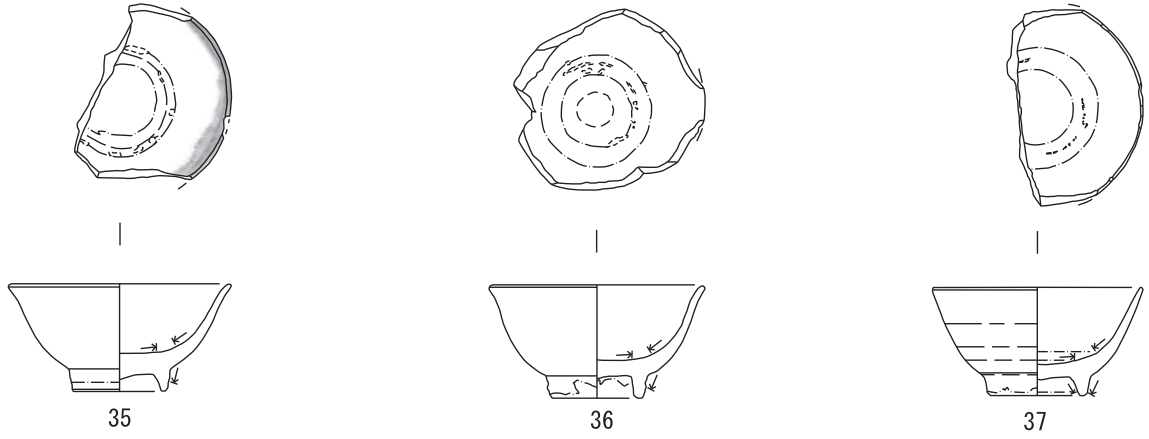
第 19 図 沖縄産施釉陶器 1 碗



第20図 沖縄産施釉陶器2 碗

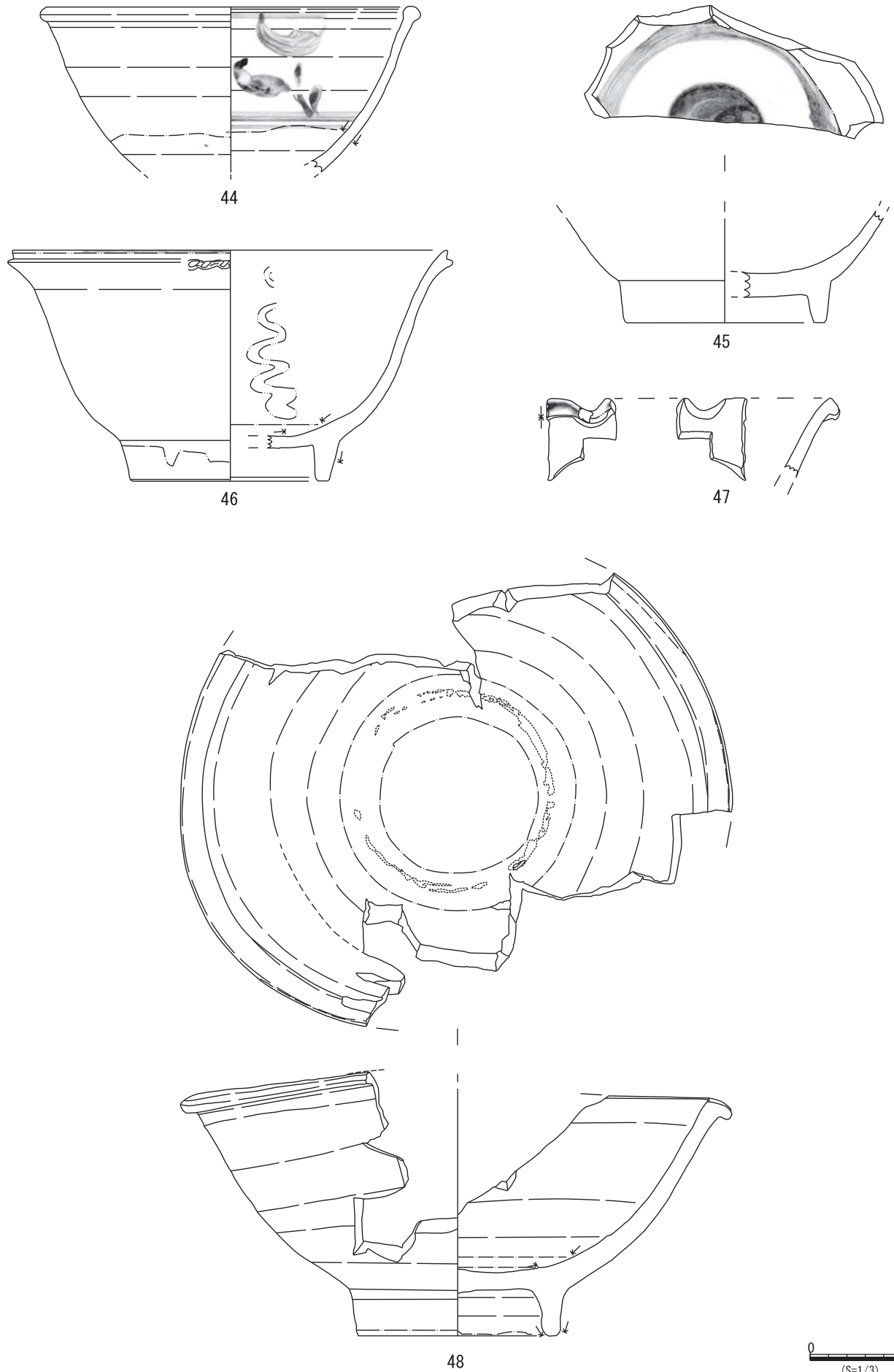


第 21 図 沖縄産施釉陶器 3 碗

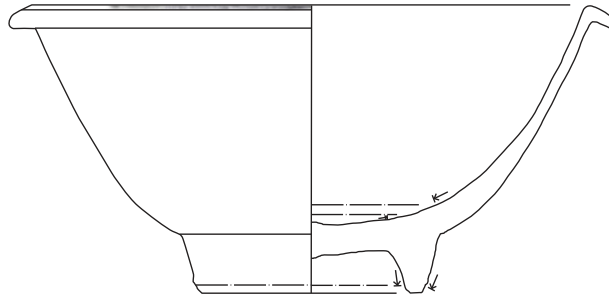


0 5cm
(S=1/3)

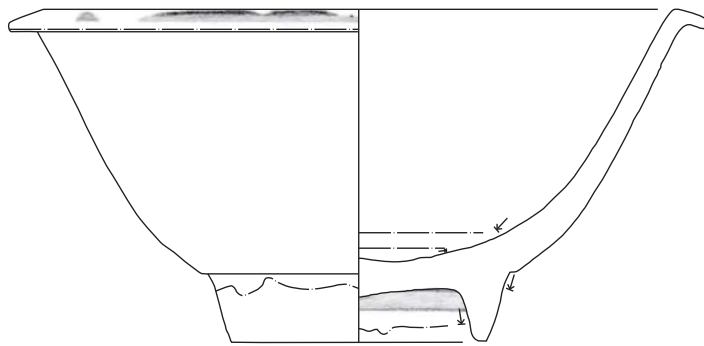
第 22 図 沖縄産施釉陶器 4 小碗



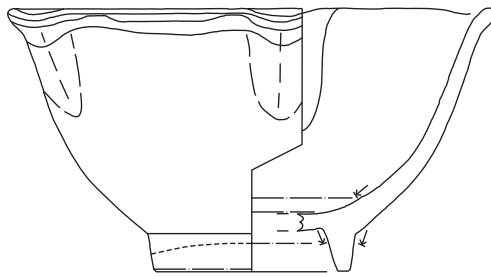
第 23 図 沖縄産施釉陶器 5 鉢



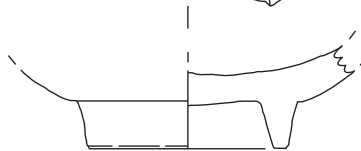
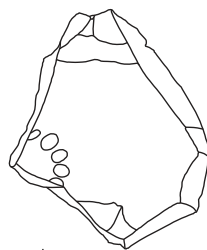
49



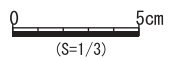
50



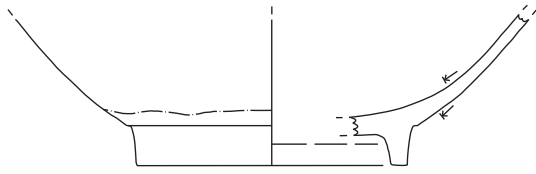
51



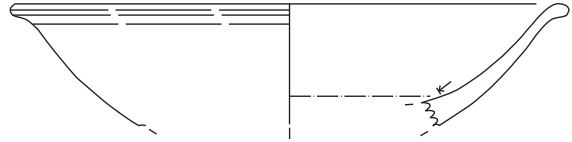
52



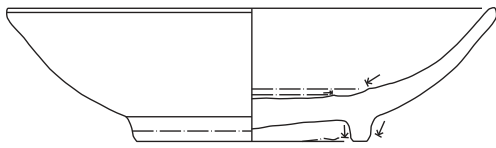
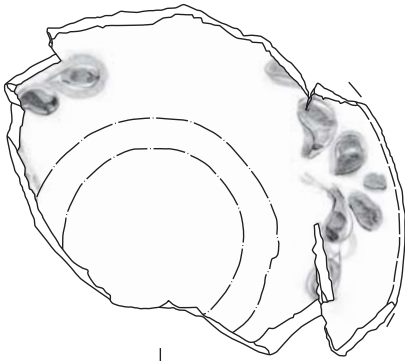
第 24 図 沖縄産施釉陶器 6 鉢



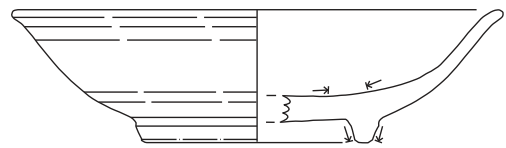
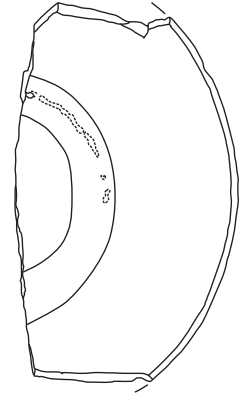
53



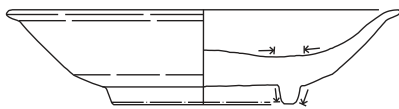
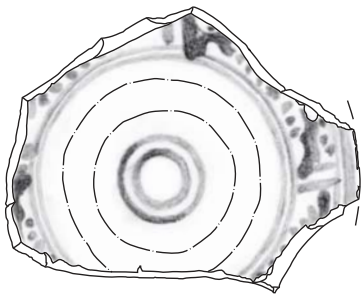
54



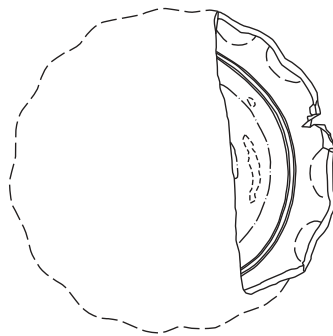
55



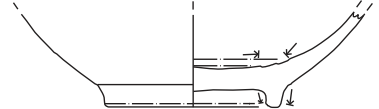
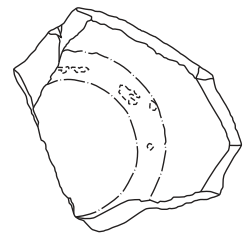
56



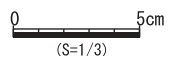
57



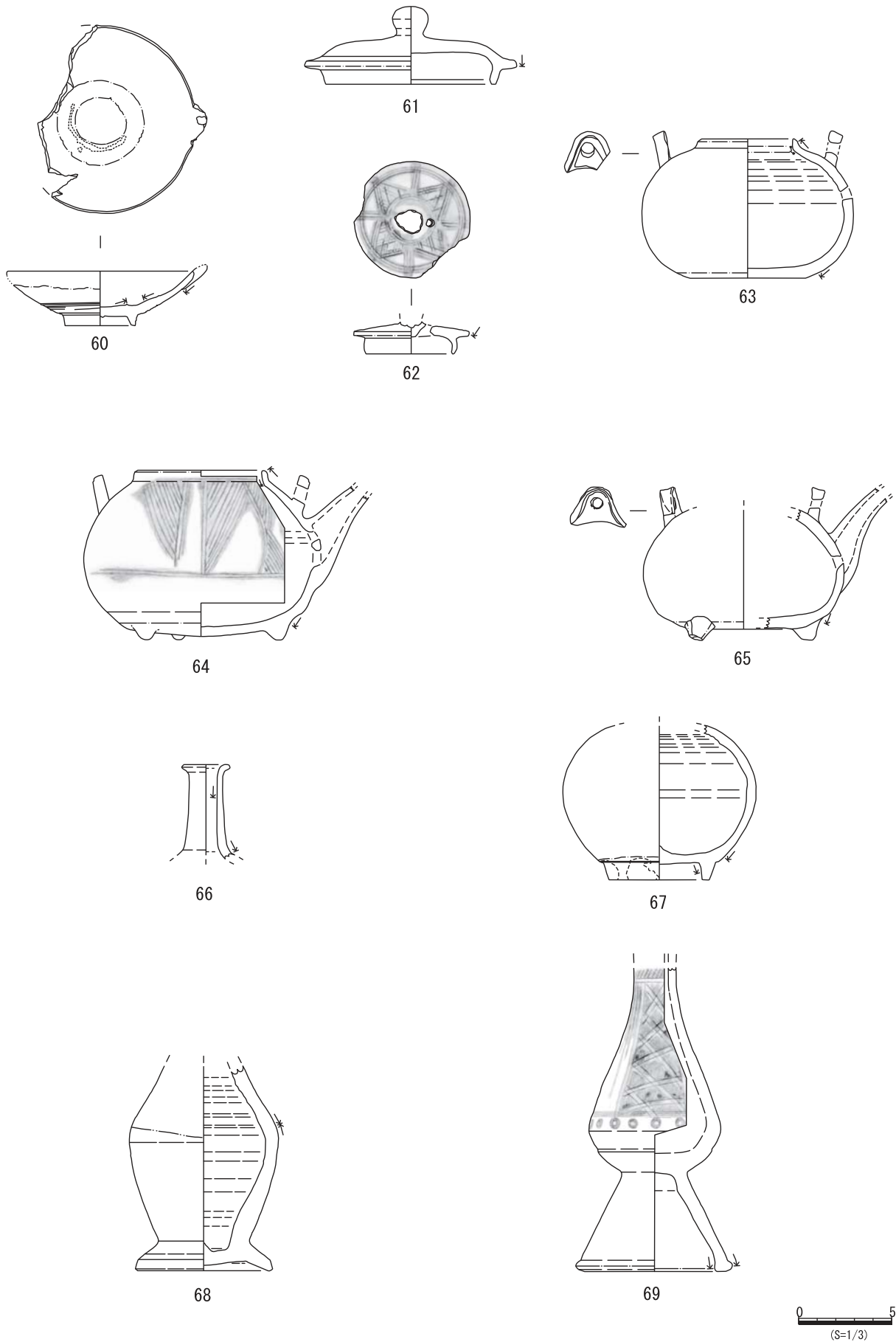
58



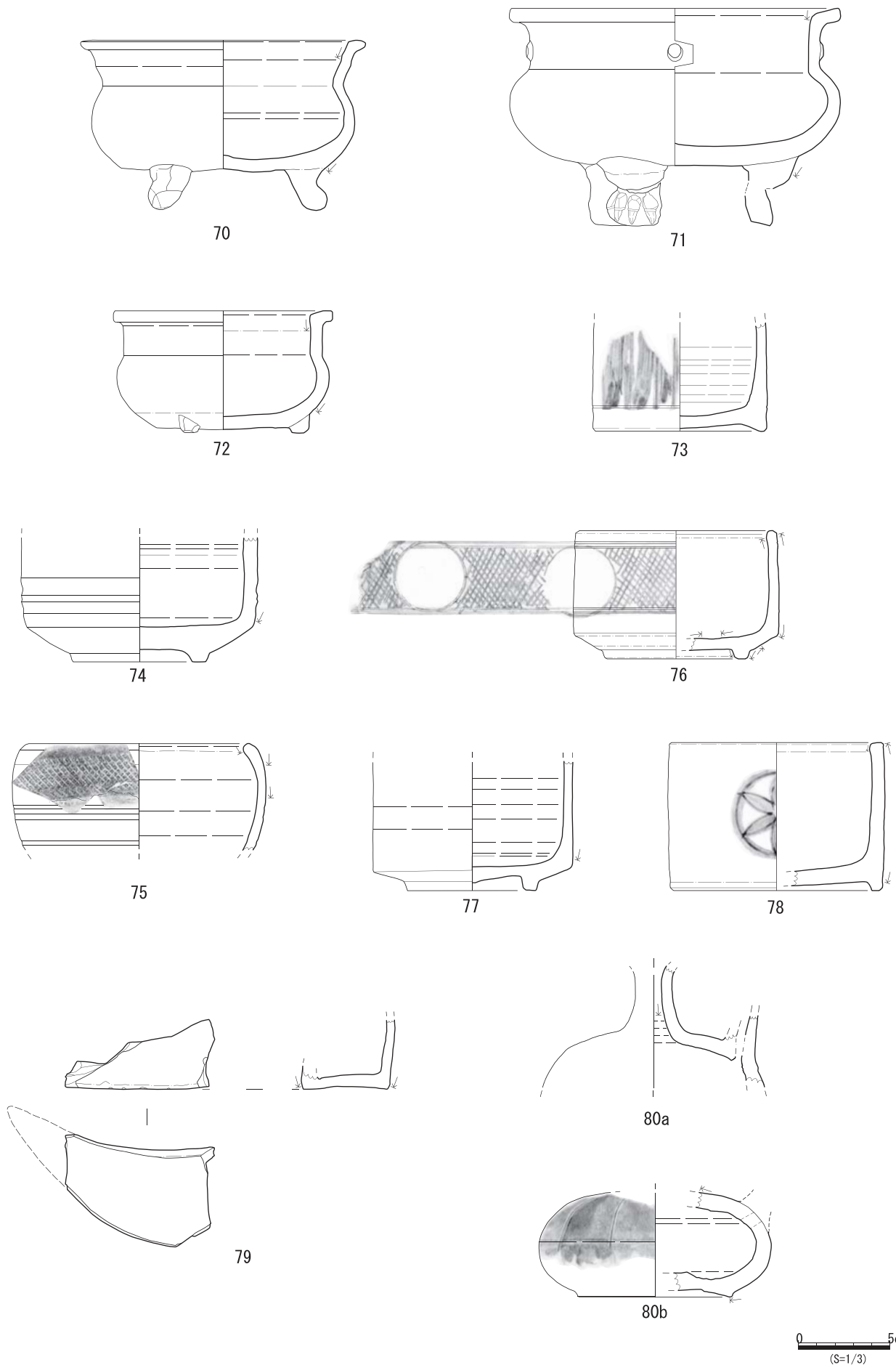
59



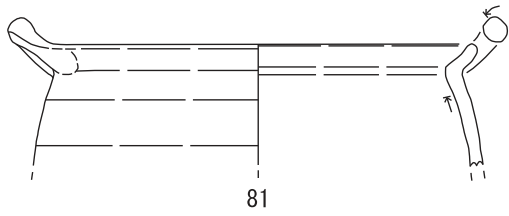
第 25 図 沖縄産施釉陶器 7 皿



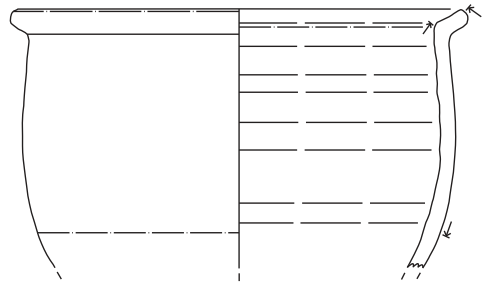
第 26 図 沖縄産施釉陶器 8 灯明皿 (60)、急須蓋 (61～62)、急須 (63～65)、瓶 (66～67)、瓶子 (68～69)



第 27 図 沖縄産施釉陶器 9 香炉 (70 ~ 72)、花生け (73)、火入れ (74 ~ 78)、酒器 (79 ~ 80)



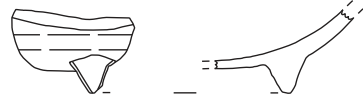
81



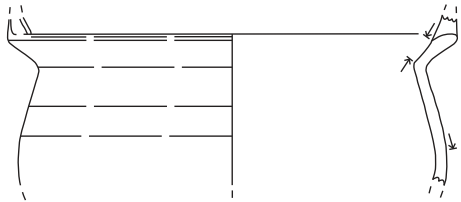
82



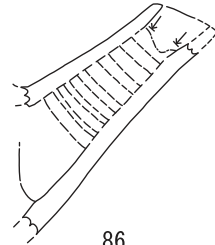
83



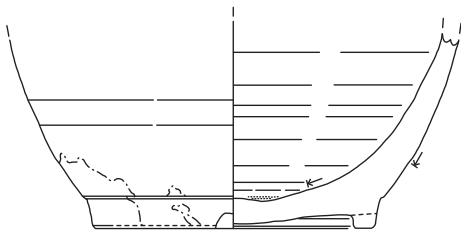
84



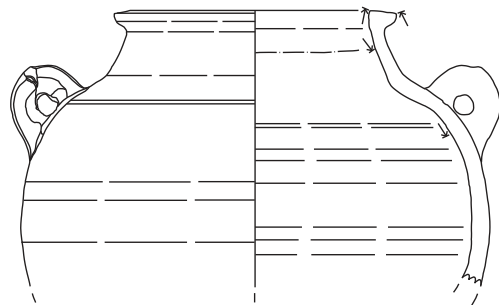
85



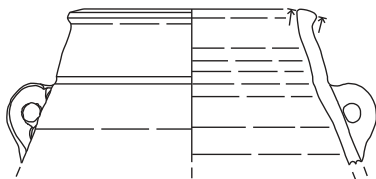
86



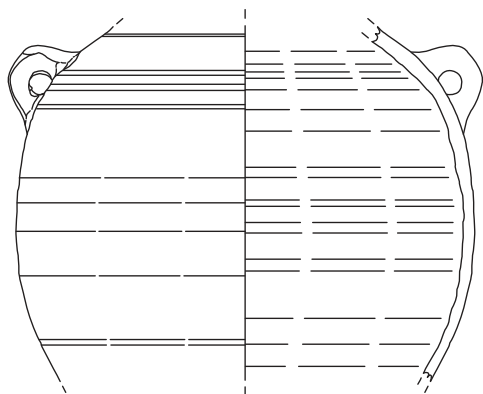
87



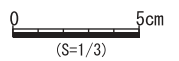
88



89



90



第28図 沖縄産施釉陶器 10 鍋 (81～85)、安瓶 (86～87)、壺 (88～90)

2. 沖縄産無釉陶器

方言では「アラヤチ（荒焼）」と呼称されるもので、無釉ないし泥釉やマンガンを掛けた焼締め陶器の総称である（宮城 1983）。戦前は沖縄産陶器の主流で、大型の甕類を中心として小型の日用雑器なども作られた。

当該遺跡では 3682 点が出土した。その主な組成は、壺・甕・播鉢・鉢・火炉で、壺・甕が最も多く、沖縄産無釉陶器全体の約 77% を占める（第 30 図）。出土地別に概観すると、沖縄産無釉陶器の約 30% が表採を含む遺構外から出土した。次いでレキ充填土坑 No.1（レキ充填部 No.1）からの出土量が多く、沖縄産無釉陶器の約 29% を占める。南北の溝状礫敷遺構（南北ミゾレキ）全体からの出土割合は約 31% である。両者を比較すると、南溝状礫敷遺構からの出土量が多く、北溝状礫敷遺構の約 3 倍の資料が出土した。

壺（第 31 図）

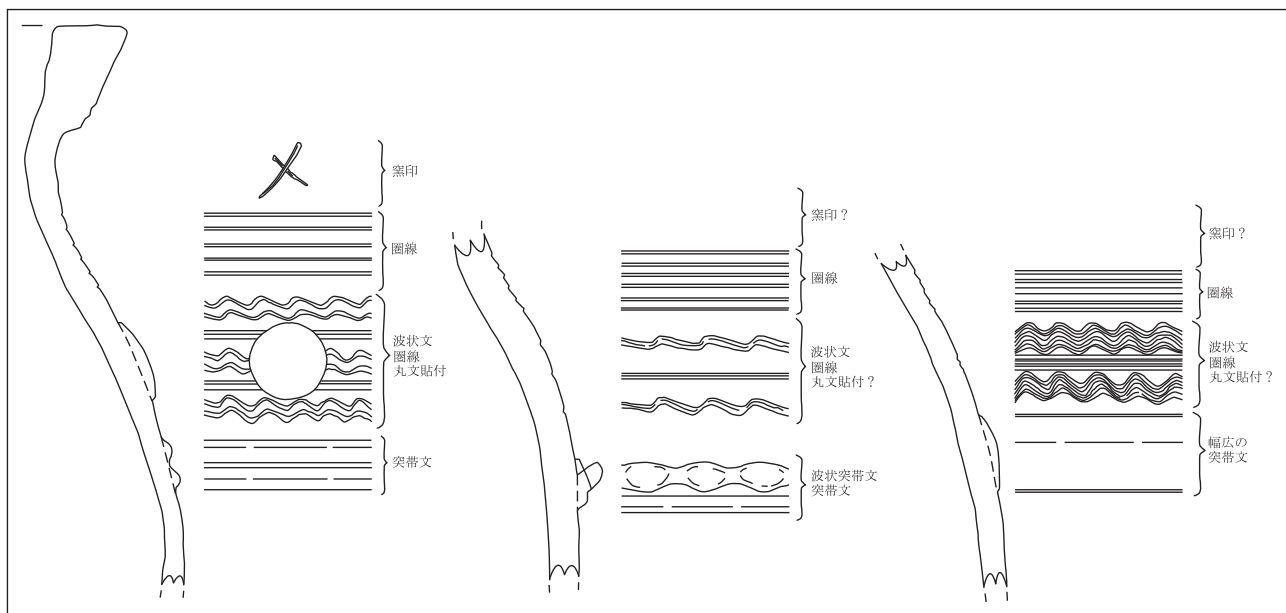
甕と区別のつかない胴・底部片を除いて、183 点が出土した。これらは、大きく 4 類に分けられる（第 6 表）。Ⅰ類が最も多く、当該器種の約 16% を占める（第 30 図）。なお、Ⅱ類全体の出土割合は約 25% であり、Ⅱ類各分類の出土量は概ね同様である。出土量が極めて少ないⅢ類を除いて、各分類を口径の大きさに細分した（第 6 表）。これによって、Ⅰ類は大型のものから比較的小型のものまで幅広い種類が確認できた。また、Ⅱ類は、a 1 類→a 2 類→b 類の順に従って概ね小型になる傾向が窺える。加えて、Ⅳ類は口径を小さく作ることの特徴として挙げることができるため、液体を入れる容器としての機能が考えられる。

第 31 図 2 は、口縁断面が逆 L 字状に屈曲しないが、頸部が直状に立ち上がって長頸となるため、便宜上Ⅰ類に含めた。また、同 6 はボタン状の浮文が貼付される資料で甕に多い文様であるが、長谷部言人の正方形九等分法を参考にすると、頸径が最大胴径の約 56% となるため当該器種に分類した。

甕（第 32 図～第 33 図）

壺と区別のつかない胴・底部片を除いて、150 点が出土した。1 次調査の成果に倣って大きく 3 類に分類した（第 6 表）。ただし、Ⅰ類は出土せずⅡ類の出土量は 1 点のみである。Ⅲ類は、出土した口縁部片から口径の大きさを細分した（第 6 表）。Ⅲ類は小型の資料でも、当該遺跡出土の大型の壺に並ぶ程の大きさになる。

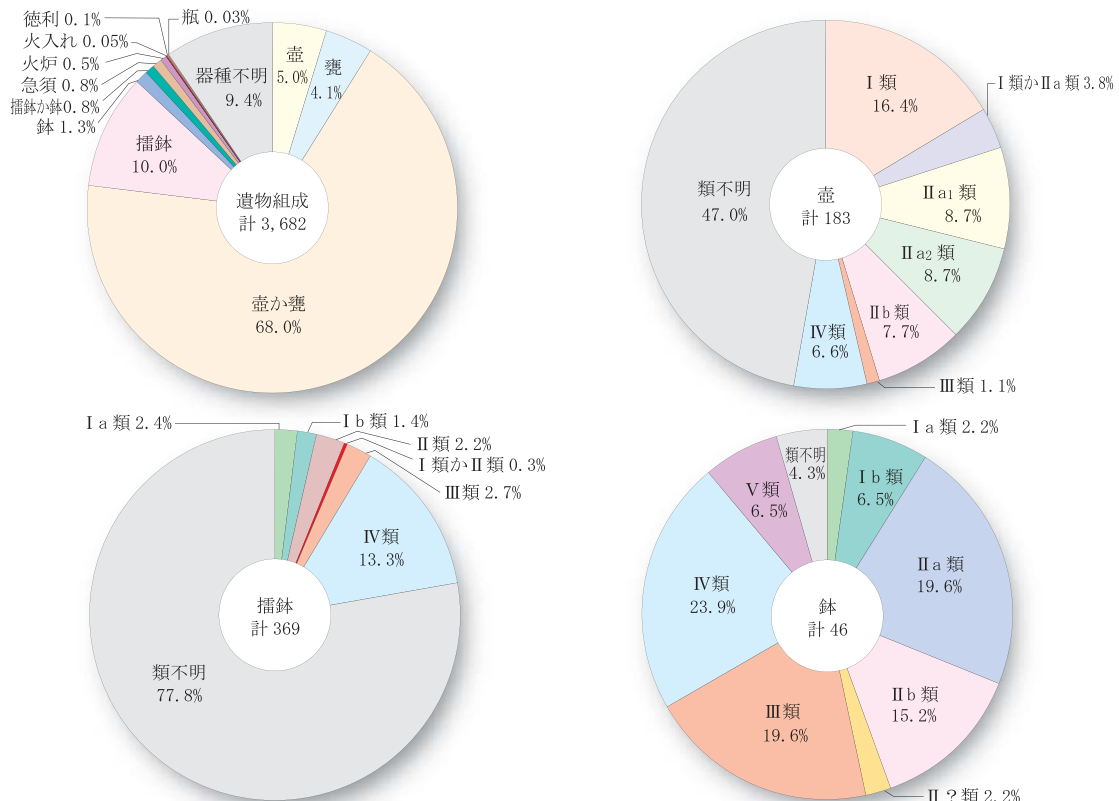
第 32 図 11（Ⅱ類）とⅢ類の文様構成は同様である。当該遺跡における甕の文様は、第 29 図に示すような構図が確認できる。図に示したように文様構成は大きく変わらず、肩から胴上部にかけて波状文や圏線、突帯文が貼付される。これは、類例資料から当該器種に多く見られるものである。



第 29 図 嘉数トウンヤマ遺跡における甕の文様

第6表 沖縄産無釉陶器分類一覧

器種	分類		備考	
	記号	基準		
壺	I類	口縁断面が逆L字状を呈す長頸のもの。	大 口径20 cm前後	
			中 口径12 cm前後	
			口径9 cm前後	
			小 口径6 cm前後	
	II類	a	有頸で口縁断面玉縁状を呈し、直状に立ち上がるもの。	大 口径21 cm前後
				小 口径15 cm前後
		b	有頸で口縁断面玉縁状を呈し、外反するもの。	大 口径17 cm前後
				小 口径13 cm前後
		—	無頸で口縁断面玉縁状を呈すもの。	大 口径16 cm前後
				小 口径12 cm前後
III類	口縁断面が逆L字状を呈する短頸あるいは無頸のもの。	出土数2点のみ。		
IV類	口縁が僅かに肥厚し（あるいは無肥厚）、外反するもの。口径は概ね10 cm以内。	大 口径7 cm前後 小 口径4 cm前後		
甕	I類	口縁が断面三角状を呈し、口縁部からすぐに胴部へと移行するもの。	得られていない。	
	II類	口縁断面が逆L字状で、口縁上面の幅が広いもの。	出土点数1点のみ。	
	III類	口縁断面が方形に肥厚するもの。	大 口径32～35 cm 中 口径26～30 cm 小 口径21～25 cm	
挿鉢	I類	a 口縁断面が「く」の字状で、口縁直下に稜が施されるものうち、口縁がやや直状に角度を変えて立ち上がるもの。		
		b 口縁断面が「く」の字状で、口縁直下に稜が施されるものうち、口縁が外傾するもの。		
	II類	I類に比して、口縁断面が緩やかに「く」の字状をなすもの。		
	III類	口縁断面が逆L字状で口唇の幅が狭いもの。櫛目の上端ラインが一様で整然と施される。		
	IV類	口縁断面が逆L字状で口唇の幅が広いもの。口唇部に圏線が廻る。		
鉢	I類	a 口縁部が内彎し、外面に筥描きの波状線を描くもの。	ミジクブサー（水鉢）。	
		b 口縁部が内彎するもので、無文のもの。	ミジクブサー（水鉢）。	
	II類	a 口縁部が内彎し、断面形が玉縁状を呈するもので有文のもの。	ミジクブサー（水鉢）。	
		b 口縁部が内彎し、断面形が玉縁状を呈するもので無文のもの。	ミジクブサー（水鉢）。	
	III類	口縁断面が逆L字状を呈すもの。		
	IV類	口唇を平坦に成形し、口縁両端が張り出すもの。	『嘉数トゥンヤマ遺跡』Iの甕IV類。	
	V類	水鉢同様に、口縁が底部から開いて立ち上がるが、口縁は内彎しないもの。大型の浅鉢。		



第30図 沖縄産無釉陶器の組成と各分類の出土状況

第6表 沖縄産無釉陶器集計表

出土位置・層位	種類	壺										甕				甕or甕				播鉢					
		口縁部		頸部		腹部		胴部		底部		口縁部		胴部		底部		口縁部		胴部		底部			
		II類		III類	IV類	I類	類不明	IV類	類不明	II類	III類	類不明	IV類	類不明	II類	III類	類不明	IV類	類不明	II類	III類	IV類	類不明		
		I類	a	b	or	IIa類	II類	III類	IV類	a	b	or	II類	III類	IV類	a	b	or	II類	III類	IV類	類不明			
表採		1		1																			9		
I	a					1									2	37	1						6		
	b	1			1	2									6	172	14						19		
	a~b	2	2	3		1									1	14	215	16			1	1	27		
I a~II a															2	1									
I b~II a						1									4	1							1		
I b~II b															12	1							3		
II	a	1													1	48							10		
	b	3				1									61	1							7		
	a・b														1								1		
	a~l														1	34	1						9		
南溝状礫敷 (南ミゾレキ)	1層														2	42	6						4		
	1~2層															12	2								
	2層														31	1						1	3		
	3層														1	85	12						1		
	3~4層														1	21	9						1		
	4層														2	36	3								
	遺構内															3									
北溝状礫敷 (北ミゾレキ)	1層			1											1	6							2		
	2層				1											28	4					1	4		
	2~3層														3										
	3層														7										
南北溝状礫敷 (南北ミゾレキ)	1層															11	4						3		
	遺構内	9	4	5	4	3	2	3	19	1	8	26	436	81								1	19		
溝	1															7									
	遺構内															2									
	2															3							1		
レキ充填部	1																								
	1層															1	21	2							
	3層																								
レキ充填部	No1	1層	1	3	1										1	21	459	36				2	3	9	
		1~2層															19	1						3	
		2層	6		1	3											178	25						5	
	No2	遺構内		1	1												7	1						4	
		1層															1	7	1					1	
		1~2層															2								
		2層	2			1											1	13	4					3	
		3層															1	6	2						
		5層																							
		遺構内				1											11	3						3	
No1~2遺構内	1														5	85	5					7			
南ミゾレキ・北ミゾレキ																							1		
南ミゾレキ・北ミゾレキ・南ミゾレキ・I a~b																1									
南ミゾレキ・北ミゾレキ・ミゾ3																									
南ミゾレキ・南ミゾレキ																									
南ミゾレキ・ミゾ3																									
南ミゾレキ・ミゾ3・I a																									
南ミゾレキ・レキ充No1																									
南ミゾレキ・レキ充No1・I a~b																									
南ミゾレキ・I a																									
南ミゾレキ・II a																									
南ミゾレキ・II b																									
南ミゾレキ・II a~1																									
北ミゾレキ・南ミゾレキ																									
南北ミゾレキ・レキ充No1	1	1		1												3	4	9				1	2		
南北ミゾレキ・レキ充No1・レキ充No2・I a~b																									
南北ミゾレキ・レキ充No1・レキ充No1~2	1																								
南北ミゾレキ・レキ充No1・レキ充No1~2・I a~b																									
南北ミゾレキ・レキ充No2・レキ充No1~2																									
南北ミゾレキ・レキ充No2・レキ充No1~2・I a~b																									
南北ミゾレキ・I b																									
南北ミゾレキ・I a~b																									
ミゾ3・II a																									
レキ充No1・レキ充No2																									
レキ充No1・レキ充No1~2																									
レキ充No1・I b																									
レキ充No1・I a~b	1																								
レキ充No1・I a~b・II b																									
レキ充No2・レキ充No1~2																									
レキ充No2・I a~b																									
レキ充No1~2・I a~b																									
I b・I a~b																									
I b・II a																									
I b~II b・II a~1																									
不明																									
合計		30	16	16	14	2	12	7	7	76	1	2	1	33	116	2229	274	1	9	5	1	8	10	48	
																								60	
																								369	

鉢										播鉢 I or II類 or 鉢 III類	播鉢 IV類 or 鉢 III類	鉢?	急須				火鉢			火入	德利	瓶?	器種不明			合計
口縁部					底部	底部	口~底	口縁	胴部				底部	口縁	胴部	底部	底部	胴部	底部	蓋	口縁	胴部	底部			
I類	II類																									
a	b	a	b	不明	III類	IV類	V類	底部	口縁	口縁																
	1				1																18	80				
		1	1																		10	60				
					1				1	5			1	1							58	287				
		2	3		1			1		8			1	2							44	365				
																					1	4				
																						7				
																					6	22				
			1										1								30	93				
				1	1					1											25	105				
		1													1						11	1				
																					8	65				
		1										1									1	17				
		1	1																		1	40				
					1								1								11	121				
																					1	38				
																					4	47				
																						3				
																						8	339			
																						12				
									1			1		1	1					1	6	51				
																						3				
																					1	8				
					1																3	24				
																					1	11				
1	2				2	5	1			5			7	1		1	1	2			1	16	708			
																1							1	8		
		1																				1	4	12		
																								4		
																					1		1			
																						2	27	28		
		1			1	2	1			5			8		1	1					3	40	683			
																						4	29			
		1			1	1		1		1			1									6	286			
																							1	50	1048	
																							1	14		
																								2		
													1											27		
																						3	13			
																						1	20			
																							1	77		
									2				3			1						24		138		
																								1		
																								1		
																								1		
																								7		
																								6		
																								1		
					1																			3		
																								1		
																								1		
																								2		
																								1		
																								1		
																								2		
																								1		
																								1		
																								27		
																								1		
																								3		
																								2		
																								3		
																								3		
																								1		
																								4		
																								1		
																								5		
																								1		
																								5		
																								10		
																								1		
																								15		
																								2		
																								3		
																								2		
																								5		
																								1		
																								3		
																								1		
																								1		
																								6		
1	3	9	7	1	9	11	3	2					1	3	24	1	10	5	4				1	6		
								46	1	28	1													346	3682	

播鉢（第 34 図～第 35 図）

369 点が出土しており、安里進による分類を参考に、大きく 4 類に分類した（安里ほか 1987）。本報告では、安里Ⅱ式をⅠ類及びⅡ類に、安里Ⅲ式をⅢ類に、安里Ⅳ式をⅣ類に当てはめたが、安里Ⅰ式が本報告Ⅰa類に相当するか明確ではない。いずれにしても、当該 5 類は器形から、その変遷が窺える。つまり、Ⅰa類のように直状に成形された口縁は、徐々に外傾してⅠb類に至り、Ⅱ類に遷ると稜線が不明瞭となる。Ⅲ類では稜線は完全に無くなり、口縁は徐々に起きてⅣ類に至る。なお、Ⅱ類とⅢ類、Ⅲ類とⅣ類のそれぞれ中間的な特徴を持つものも認められた（第 34 図 20、第 35 図 23）。

鉢（第 36 図 28～35）

46 点が出土した。大きく 5 類に分けられる（第 6 表）。Ⅰ・Ⅱ類がいわゆるミジクブサー（水鉢）で、それぞれ文様（波状文）の有無で 2 類に細分した。これらは、鉢の中で最も多く出土しており、約 46% を占める。中でもⅡ類が多く、その出土割合は約 37% である。また、Ⅲ類やⅣ類も多く散見することができる。

Ⅳ類は、1 次調査では小片のみが得られた程度であったため、類例資料を参考にして甕として報告した。しかし、御茶屋御殿跡で全形が復元された資料が報告されているため（知念・新垣 2003）、これを参考にして当該器種に含めた。御茶屋御殿跡で出土した資料は、茶亭跡の基壇外側に設けられた区画内に埋設されており、手洗い用の水甕的な役割が推測されている。口径は 46.0 cm と報告されるが、この種の資料は概して大型であり、口径が 60 cm を超すものも報告されている。Ⅴ類は大型の浅鉢である。首里城跡の継世門周辺地区や城郭南側下地区などに類例資料を見ることができる（新垣 2002・2004）。いずれも、口縁は外傾して水鉢のようなベタ底になる。第 36 図 34 の口縁は、これら程外傾しないが、同様の器形を呈すと思われる。

その他（第 36 図 36～39）

以上に挙げた他に、急須、火炉、蓋、徳利などが得られた。徳利は、胴長を呈すものを壺や瓶と区別して整理した。ただし、口縁部は壺Ⅳ類に含まれると考えられる。他にも、瓶と思われる底部片も得られているが、小片であるため図化しなかった。

第 36 図 36 は、急須である。アカムヌーの急須と同様の器形を呈し器壁も薄いため、他の沖縄産無釉陶器とは様相が異なる。しかし、アカムヌーに比べると高温焼成であることや、アカムヌーに認められる赤色粒子の混入が見られないことから本項で扱った[※]。アカムヌーと沖縄産無釉陶器の陶土は、ジャーガルと島尻マージを混ぜることで共通するため、胎土分析の結果も両者に大きな差は認められない（第Ⅳ章参照）。このことから、両者を明確に区別するものは焼成の仕方であると考えられる。アカムヌーの焼成温度は約 600℃（曾根 1983）、沖縄産無釉陶器の焼成温度は約 900～1100℃（大城 1983）とされる。当該資料は、色調が灰色系を呈すため、還元焼成が起きた可能性があることから、焼成温度は 900℃を超えと思われる。なお、把手は上手で、ススの付着も観察できることから、土瓶としての利用が推測できる。また、横手になるとと思われる急須の把手も出土した。北溝状礫敷遺構 2 層からの出土で、同 36 と同様に焼成良好で器面は灰褐色を呈し、素地は明茶褐色を呈す。器壁は約 0.6 cm で、把手の長さは約 4.0 cm である。

第 36 図 37・38 は火炉である。アカムヌーの火炉Ⅱa類と同様の器形を呈す。土瓶などを置くための五徳の代わりになるような受け部は類例資料からも見受けられない。このタイプは、アカムヌーではベタ底になるものが殆どであるが、陶器では同 38 のように三足となるものが多い。

第 36 図 39 は蓋で、対応する蓋物の器種は不明である。底端部の径は 13.8 cm を測るため、大型の器種に対応することが推測される。

[※]ただし、赤色粒子は鉱物ではないため、焼成温度によって認められ難くなる可能性も考えられる。

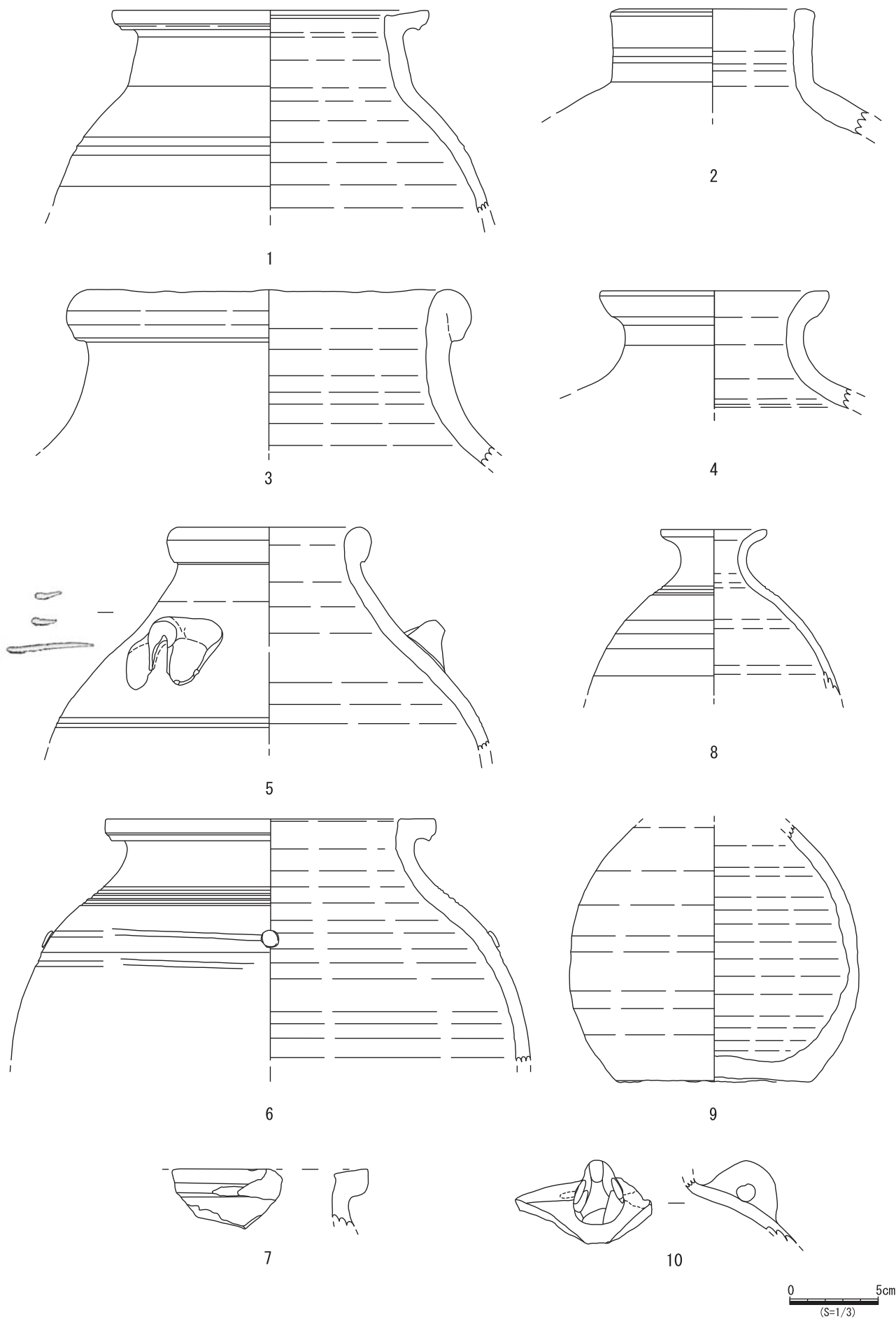
第7表 沖縄産無釉陶器観察一覧1

単位: cm, (): 復元値、蓋の法量は上から順に撮径・器高・底端部径。

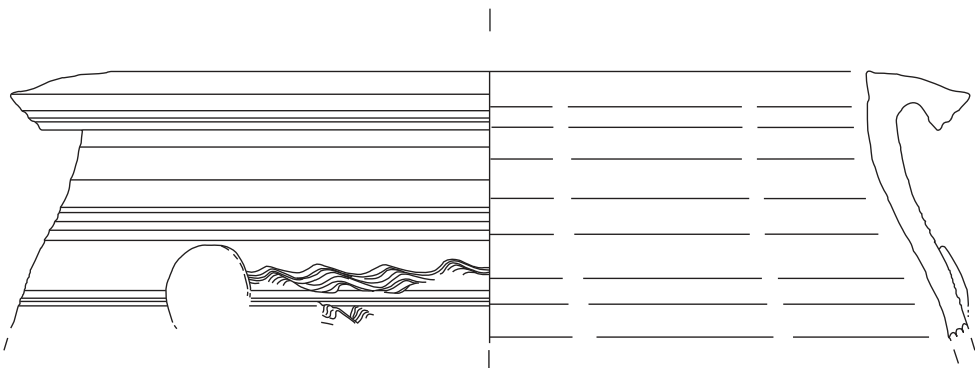
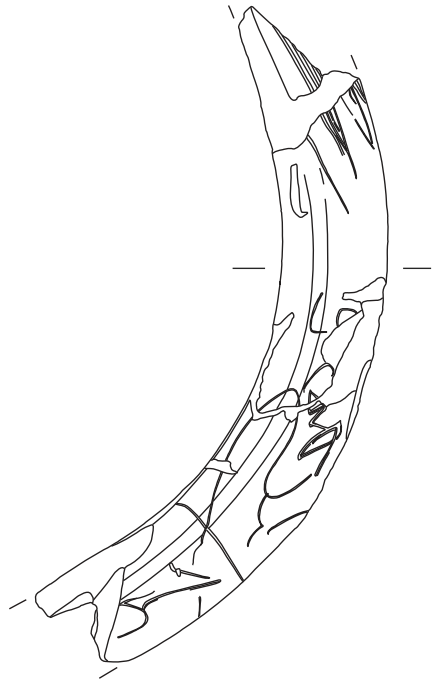
挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器色	素地	観察事項	出土地	
第31図 図版19~20	壺	I類	口縁部	(13.0) — —	外面 濁った明茶褐色 内面 明茶褐色	明茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。頸部はやや内傾し、頸部はやや内傾し、口縁下縁は鉤状に突出する。肩部は緩やかにナデ肩状を呈して胴部に至る。肩部には2条の圏線が廻る。いわゆるナーカヌムンと呼ばれる資料で、その名の通り、I類の中では中型のタイプに属す。用途は、砂糖や塩などを入れるものであったらしい。	レキ充填部 No.1 2層 レキ充填部 No.1~2 南北ミゾレキ
				(9.6) — —	内外 赤茶褐色	赤茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	轆轤痕明瞭。ナデ調整。口縁直状に立ち上がり、口唇を平坦に成形する。典型的なI類ではないが、頸部を長く立ち上がらせることから便宜上I類とした。I類の中では中型のタイプ。本土産陶器の可能性あり。	レキ充填部 No.1 2層 南北ミゾレキ
		II a ₁ 類	口縁部	(20.0) — —	外面 白濁した灰褐色 内面 にぶい灰褐色	胎土対象分析資料。 黒色砂粒・白色砂粒	ナデ調整。口縁は直状に立ち上がる。また、肥厚は明瞭で玉縁状を呈す。口唇は丸味を帯びる。II a ₁ 類の中では大型のタイプに属す。	南北ミゾレキ
				(11.4) — —	外面 白濁した灰褐色 内面 灰褐色	暗茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。口縁は頸部を作って外反する。また、肥厚は微弱で稜線を作る。口唇は平坦。これらの特徴から、トゥックイグチと呼ばれるものと思われる。用途は、主に酒甕として利用されたようである。II a ₂ 類の中では小型のタイプに属す。	レキ充填部 No.2 2層 南北ミゾレキ
		II b類	口縁部	10.4 — —	外面 白濁した明茶褐色 内面 明茶褐色	明茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	ナデ調整。内面には把手の位置に対応して指の押痕が3箇所残る。肩部から頸部を作らず口縁に至る。口縁は明瞭に肥厚し、玉縁状を呈す。口唇丸味を帯びる。三耳甕。把手直下に2条の圏線廻る。「三」の窯印を記す。II b類の中では小型のタイプに属す。	レキ充填部 No.2 1・2・3層
				(14.8) — —	外面 濁った明茶褐色 内面 明茶褐色	胎土対象分析資料。 明茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	ナデ調整。口縁は逆L字状を呈すが、口唇の幅は比較的狭い。頸部は短く、肩からすぐに口縁へ移行する。口縁下縁は1と同様に、鉤状に突起する。肩部には、間隔に広狭の差のある圏線を 条単位で計 条廻る。胴部上位には、圏線上にボタン状浮文が施される。	レキ充填部 No.2 1層 南北ミゾレキ
		III類	口縁部	— — —	外面 灰褐色 内面 赤茶褐色	暗赤茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。口縁は逆L字状を呈すが、口唇の幅は比較的狭い。頸部は短く、肩からすぐに口縁へ移行する。口縁内面上部は大きく窪み、口唇直下に括れを作る。	K14 I a~b層
				6.0 — —	外面 白濁した暗茶褐色 内面 明茶褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。頸径は約3.7cmと狭いが、口縁は外反して開く。口唇丸味を帯び、口縁断面は舌状を呈す。ナデ肩を呈すことから、器形は9のような洋梨状ではなく、やや細長になると思われる。肩部上位4には 条の圏線が廻る。これらの特徴から、ミワカサーと呼ばれる資料であると思われる。	レキ充填部 No.1 1層 南北ミゾレキ
		IV類	肩~底部	— — 10.8	外面 濁った明茶褐色 内面 灰褐色	胎土対象分析資料。 暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	内面約0.9cm幅の轆轤痕が明瞭に残る。外面ナデ調整。洋梨状の器形を呈す。口縁部は、8と同様の形状を呈すとされる。これらの特徴から、ヒラチビーと呼ばれる資料であると思われる。	レキ充填部 No.1 2層 レキ充填部 No.2 1層
				— — —	外面 白濁した灰褐色 内面 赤茶褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	ナデ調整。把手は縦位に貼付されており、アンダガーミに似るが、怒り肩となる点でこれと異なる。本土産の可能性あり。	南北ミゾレキ
第32図 図版21	甕	II類	口縁部	(30.0) — —	外面 にぶい茶褐色 内面 暗茶褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。口縁は逆L字状に屈曲し、口唇を広くする。口縁下縁は鉤状に突出する。口縁の屈曲を頸部として、口縁から直ぐに肩部へ移行する。肩部には6条の圏線が廻り、その下位には2条の圏線を挟んで、目程の櫛状工具による波状文が廻りその間にボタン状の浮文(ミンタマー)が施される。器形や大きさなどから、ハンドウグラーと呼ばれる資料であると思われる。水を溜めるために用いられたものであったらしい。文様構成はIII類と同様だが、口唇部にも文様が施される。	レキ充填部 No.1 1・2層
				(26.2) — —	外面 にぶい明茶褐色 内面 明茶褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。口縁は断面縦長の方形状に肥厚し、その下位に2条の圏線が廻る。肩部には9条の圏線が廻り、その下位には5目の櫛状工具による波状文が施される。貼付文は欠損のため確認できない。III類の中では中型のタイプに属す。	レキ充填部 No.1 1・2層 南北ミゾレキ
第33図 図版22	甕	III類	口縁~ 胴部中央	(32.6) — —	外面 にぶい明茶褐色 内面 明茶褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 赤色砂粒。	ナデ調整。口縁は断面縦長の方形状に肥厚し、その下位に2条の圏線が廻る。肩部には6条の圏線が廻る。その下位には2条1組の波状文と1条の圏線が交互に廻り、この間にボタン状の浮文(ミンタマー)が施される。胴中央部には下位の無文帯とを区画するようにして2条の突帯文が廻る。III類の中では大型のタイプに属する。	レキ充填部 No.1 2層 南北ミゾレキ
				(35.0) — —	外面 濁った明茶褐色 内面 にぶい灰褐色	胎土対象分析資料。 暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	ナデ調整。口縁は断面縦長の方形状に肥厚し、その下位に2条の圏線が廻る。肩部には5条の圏線が廻る。その下位には1条の圏線を挟んで4条程の波状文がやや雑に廻り、この間にボタン状の浮文(ミンタマー)が施される。胴中央部には下位の無文帯とを区画するようにして 条の突帯文が貼付される。III類の中では大型のタイプに属す。	南ミゾレキ 3・4層 北ミゾレキ 南北ミゾレキ 1トレ I a~b層
第34図 図版23	挿鉢	I a類	口縁部	— — —	外面 暗赤褐色 内面 赤褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	ナデ調整。傾きは約60°を呈し、口縁は直状に立ち上がる。口唇やその外縁部はやや丸味を帯び、口縁も丸味を作って屈曲する。この下位はヨコナデによる凹線を施すため、屈曲部との間に突帯状の稜線が明瞭に成形される。内面には、口唇内縁約2.7cm下から播目が施される。	レキ充填部 No.2 2層
				(25.5) — —	外面 灰褐色 内面 濁った暗赤褐色	胎土対象分析資料。 暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。傾きは65°を呈し口縁は直状に立ち上がる。口唇やその外縁部はやや丸味を帯び、口縁も丸味を作って屈曲する。この下位はヨコナデによる凹線を施すため、屈曲部との間に突帯状の稜線が明瞭に成形される。内面には、口唇内縁約2.9cm下から10目の播目が施される。	レキ充填部 No.1 1~2層
		I a類	口縁部	(31.2) — —	外面 灰褐色 内面 暗赤褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。傾きは約60°を呈し、口縁は直状に立ち上がる。口唇やその外縁部はやや丸味を帯び、口縁も丸味を作って屈曲する。この下位はヨコナデによる凹線を施すため、屈曲部との間には幅み上げたような突帯状の稜線が明瞭に成形される。内面には、口唇内縁約1.4cm下から幅約1.5cmで11目の播目が施される。	レキ充填部 No.1 2層
				(30.2) — —	外面 灰褐色 内面 暗赤褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	ナデ調整。傾きは約45°を呈し、口縁は極めて外傾する。口唇やその外縁部はやや丸味を帯び、口縁も丸味を作って屈曲する。この下位はヨコナデによる凹線を施すため、屈曲部との間には突帯状の稜線が明瞭に成形される。この突帯は上位が剥落しており、貼付されていることがわかる。内面には口唇内縁約1.3cm下から播目が施される。	レキ充填部 No.1 2層 南北ミゾレキ

第7表 沖縄産無釉陶器観察一覧2

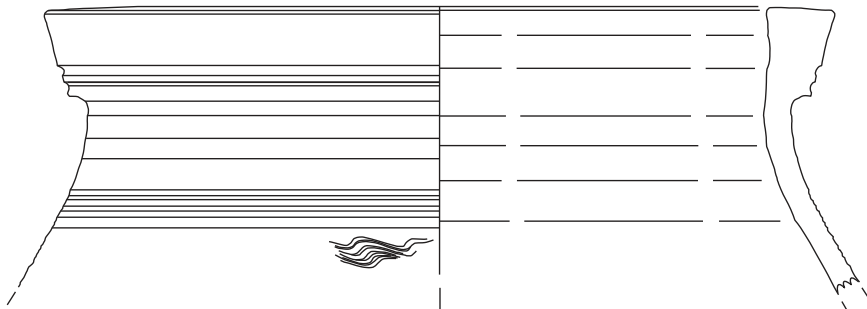
挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器色	素地	観察事項	出土地				
第34図 図版23	II類	口縁部	(32.2) — —	外面 明赤褐色 ・暗赤褐色	明茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	ナデ調整。外面成形痕明瞭。傾きは約55°を呈して外傾する。口唇平坦。口縁下端はやや下方に張り出し、口縁外縁部を若干広くする。口縁は丸味を作って屈曲する。この下位にヨコナデは施されないため、突帯状の稜線は成形されない。内面には、口唇内縁約2.0cm下のラインから右下がりの描目が施される。	レキ充填部 No.1 1層 南北ミゾレキ				
				内面 暗赤褐色							
				III類				口縁部	(31.4) — —	外面 にぶい灰褐色 内面 灰褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 赤色粒子。
第35図 図版24	III類	口縁～ 胴下部	(29.0) — —	内外 にぶい灰褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。外面成形痕明瞭。口唇は平坦。口縁の屈曲部にヨコナデは施されない。口縁下端はやや尖る。内面は口唇内縁約2.7cm下のラインから右下がりの描目が整然と施される。	南北ミゾレキ				
				III類	口縁部	— — —	内外 にぶい灰褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。口唇は平坦。口縁は下端にやや肥厚する。口縁下端はやや尖る。内面は口唇内縁約2.1cm下のラインから右下がりの描目が整然と施される。	南北ミゾレキ	
				III類	口縁部	(22.6) — —	内外 明赤褐色	明茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	片口が残る口縁部片。ナデ調整。傾きは約70°を呈し、口縁はやや直状に立ち上がる。口唇部に1条の圏線が廻る。内面は口唇内縁約2.0cm下のラインから描目が施される。焼成は良くない。櫛目の施し方や、色調、口唇部に圏線が施されることから、IV類に似る。	レキ充填部 No.1 2層	
				IV類	口縁～底部	(21.6) 11.5 9.0	外面 赤褐色 内面 明茶褐色	胎土対象分析資料。 明茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁部は大きく歪む。屈曲した口縁部は21～23に比べて薄く、断面は横長の方形状を呈す。口唇部には圏線が1条廻る。内面には、口唇内縁約2.3cm下から描目が施される。	レキ充填部 No.1 1・2層 レキ充填部 No.1～2 南北ミゾレキ	
				IV類	口縁～ 底部付近	(25.0) — —	内外 明茶褐色	明茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	回転ヘラ成形とナデ調整。屈曲した口縁部は29～31に比べて薄く、断面は横長の方形状を呈す。口唇部には圏線が1条廻る。内面には、口唇内縁約2.5cm下から描目が施される。焼成は良くない。	レキ充填部 No.1 1・2層 レキ充填部 No.1～2	
				I b類 または II類	底部	— — (10.0)	外面 灰褐色 内面 暗赤褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	外面工具痕によって凹凸する。底面調整せず。細かく明瞭な描目を施す。立ち上がり角度は約45°を測り、極めて外傾するため、I b類かII類の底部を想定した。	1トレ Ia～b層	
				III類?	底部	— — (12.0)	外面 濁った灰褐色 内面 赤褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	轆轤痕明瞭。ナデ調整。やや幅広く明瞭な描目を施す。碗を伏せたような高台を作る底部片。高台際は、断面平つ。月状の棒状工具によって1.1×0.5cm程の孔を外面から穿立ち上がり角度は約55°を測る。立ち上がりや素地などから、III類の底部が想定される。	南北ミゾレキ	
第36図 図版 25～26	II類	口縁～ 底部付近	(20.6) — —	内外 明茶褐色	胎土対象分析資料。 明茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。口縁やや内彎して口唇は丸味を帯びる。胴上部には、2条の圏線の間を7目程の櫛状工具による波状文が廻る。波状文の上下端はナデによって消される。当該資料向かって右端で波状文が重なる。この切り合いから、この波状文は時計回りに施されたと考えられる。	南北ミゾレキ				
				II a類	口縁～ 胴下部	(24.0) — —	内外 赤茶褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁やや内彎して肥厚する。口唇丸味を帯びる。胴上部には6目程の櫛状工具による波状文が廻る。波状文の上下端はナデによって消される。	レキ充填部 No.1 2層	
				II b類	口縁～ 胴下部	(14.0) — —	外面 にぶい明褐色 内面 にぶい褐色	褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁直下の挿れ部には工具痕が廻り、口縁外縁部に粘土のヨレができる。口縁やや内彎して肥厚する。口唇丸味を帯びる。	L14 No.6 3層 (年度報告予定)	
				III類	口縁部	(36.6) — —	外面 灰褐色 内面 明茶褐色	胎土対象分析資料。 暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母・赤色粒子。	ナデ調整。屈曲した口縁部は、断面円形の棒状工具側面を押圧したと思われる刻目が施される。口縁内面には、1条の圏線が廻る。器壁は約1.3cmを測り、大型になると思われる。	表採	
				IV類	口縁部	(37.6) — —	内外 にぶい灰褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	ナデ調整。口唇は内外に肥厚し、口縁断面ラップ状を呈す。口縁部には、2条の波状文とボタン状の浮文が施され、これを区画するようにしてこの上に2条の圏線、下に1条あるいは2条の突帯文が廻る。図版に示した32a・32bは、接合しないが同一個体と考えられるもので、両者を合成して図化した。	32a 南ミゾレキ 2層 32b レキ充填部 No.1 1層 南ミゾレキ 3層	
				IV類	口縁部	— — —	外面 にぶい灰褐色 内面 明茶褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 石灰質砂粒(貝殻含む)。	ナデ調整。口唇は内外に肥厚し、口縁断面ラップ状を呈す。口縁部には、1条の波状文とボタン状の浮文が施され、これを区画するようにしてこの上に2条の圏線、下に1条の突帯文が廻る。口縁を回転復元することはできなかったが、類似資料から口径40cm程の大型の鉢になると思われる。	北ミゾレキ	
				V類	口縁～ 胴下部	(26.8) — —	外面 濁った暗茶褐色 内面 明茶褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	ナデ調整。口唇平坦。口唇外縁部はヨコナデによって鋭角状に張り出す。口縁はやや直状に立ち上がる。器形などから鉢を想定した。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.1～2	
				鉢?	—	底部	— — (7.0)	内外 灰褐色	暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 赤色砂粒。	ナデ調整。内面轆轤痕明瞭。立ち上がりは極めて緩やかになるため皿の可能性もあるが、復元した底径の値から鉢を想定した。	北ミゾレキ 2層
				急須	—	口縁～底部	(6.2) — —	内外 灰褐色	胎土対象分析資料。 灰褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	回転ヘラ成形とナデ調整。内面轆轤痕明瞭。無頸タイプで、口唇は丸味を帯びる。肩部は丸味を帯びるが、胴部はやや内彎し、明瞭な稜線を作って底部に屈曲する。注口欠損。外底面にススが付着する。	レキ充填部 No.1 1～2層 レキ充填部 No.1～2 南北ミゾレキ
				火 炬	—	口縁～ 胴下部	(11.8) — —	内外 灰褐色	胎土対象分析資料。 暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母・赤色粒子	回転ヘラ成形とナデ調整。口唇丸味を帯びる。内側に屈曲した口縁の幅は約4.7cmで、アカムヌーの火炬II類と比べて長い。ただし、口径は同様と言える。口縁には丸彫りの圏線が3条廻る。	ミゾ3 3層
—	底部	(12.8) — —	内外 赤褐色		暗赤褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。内底面はやや雑に成形される。三足の底部で、脚は円錐台形状を呈す。37と同様の器形を呈すと思われる。ススの付着は認められない。	南北ミゾレキ				
蓋	—	甲～底	— — (13.8)		内外 明茶褐色	明茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。轆轤痕明瞭。轆轤は反時計回り。甲部は平坦。撮み欠損。底端部はやや肥厚する。急須の蓋にしては大きいため、対応する器種は不明。	L14 Ib層			
図版26	火 入れ	—	底部	— — (10.8)	外面 濁った灰褐色 内面 赤褐色	灰褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	ナデ調整。器形は円筒形状で高台を作る。外面には丸彫りの凹文が施される。凹文は41に比べて密に施される。本土産や、沖縄産施釉陶器の可能性もある。	南北ミゾレキ			
		—	底部	— — (12.2)	外面 濁った明茶褐色 内面 赤褐色	明茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・ 雲母。	ナデ調整。器形は円筒形状で高台を作る。外面には丸彫りの凹文が施される。本土産や、沖縄産施釉陶器の可能性もある。	南北ミゾレキ			



第31図 沖縄産無釉陶器1壺



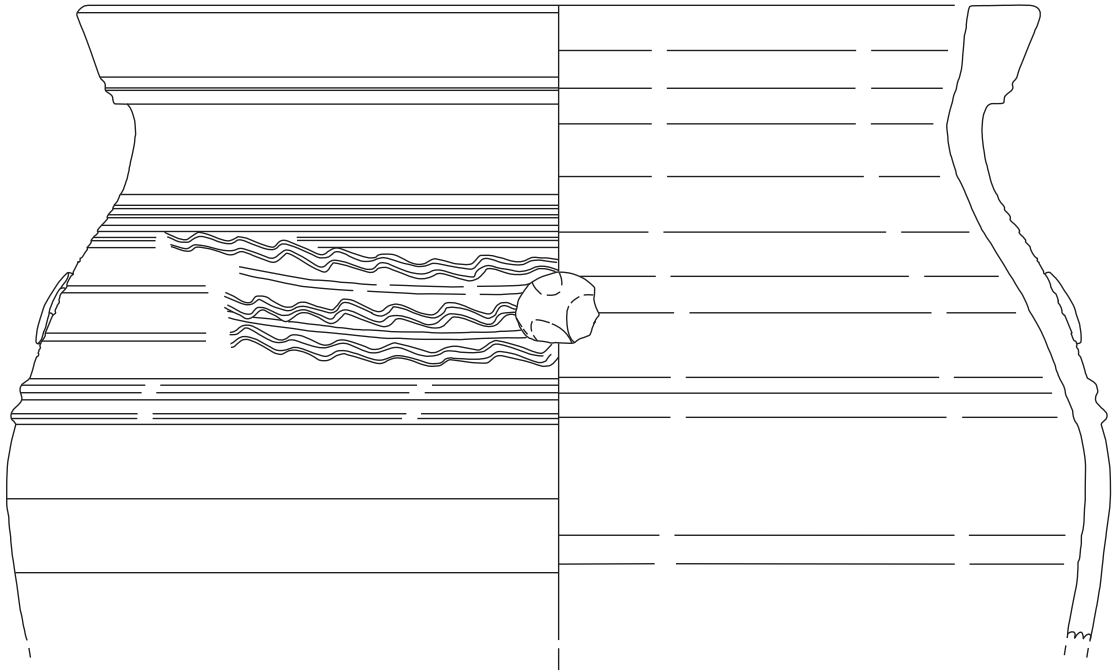
11



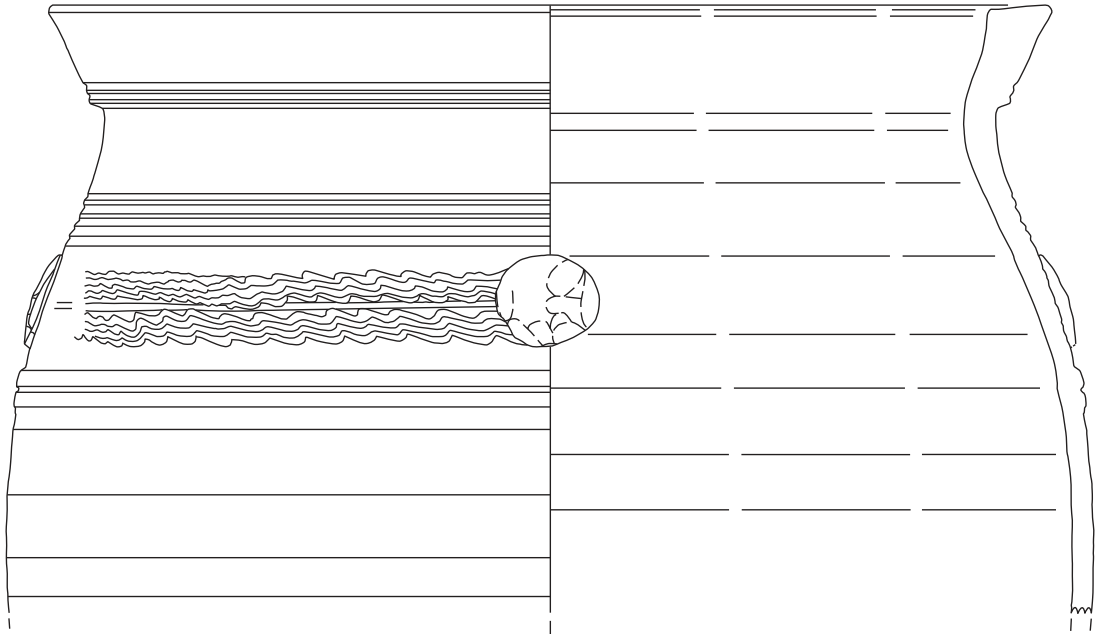
12

0 5cm
(S-1/3)

第 32 図 沖縄産無釉陶器 2 甕



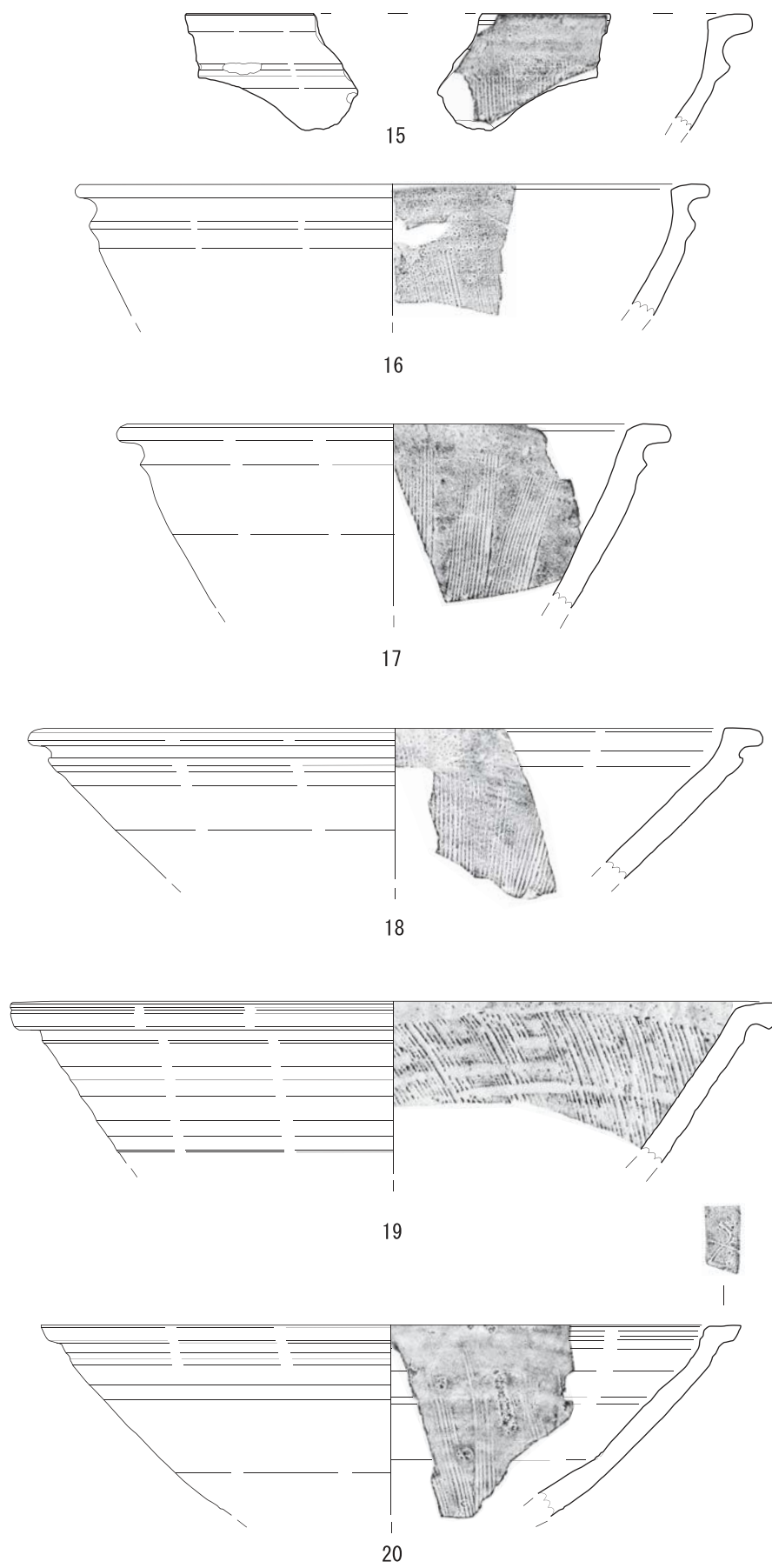
13



14

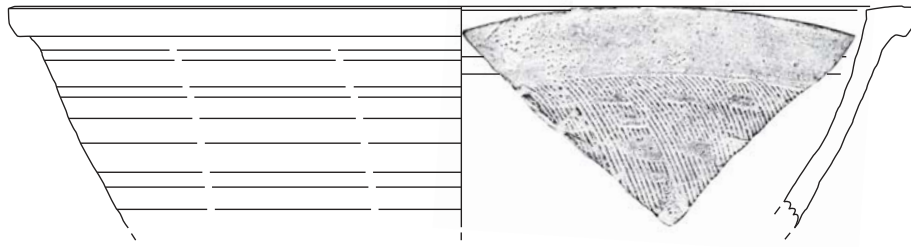
0 5cm
(S=1/3)

第33図 沖縄産無釉陶器3 甕

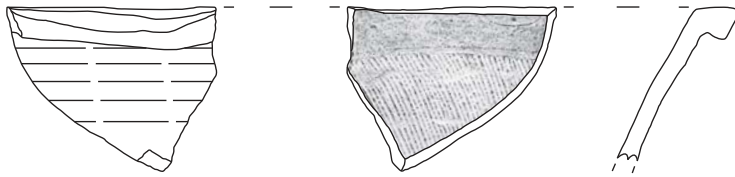


0 5cm
(S=1/3)

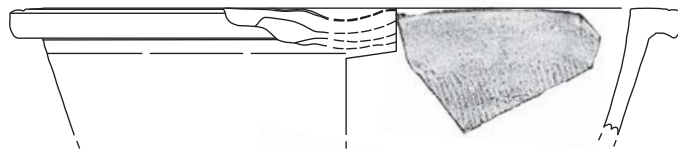
第 34 図 沖縄産無釉陶器 4 搗鉢



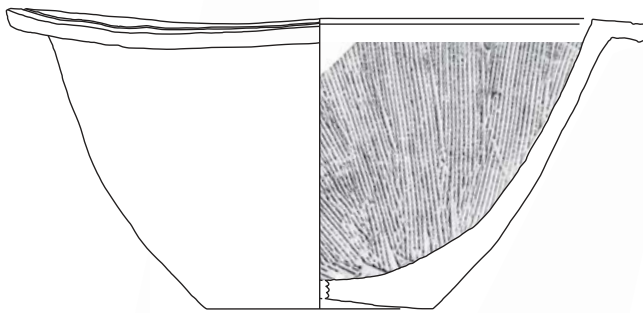
21



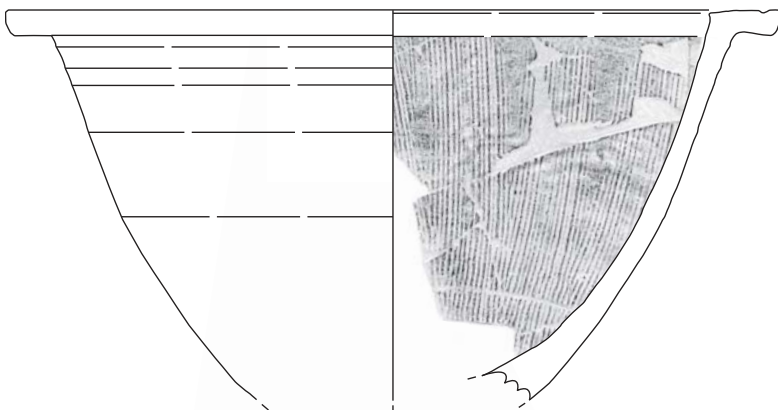
22



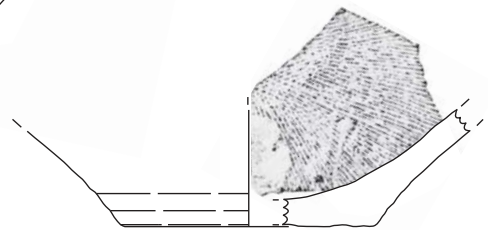
23



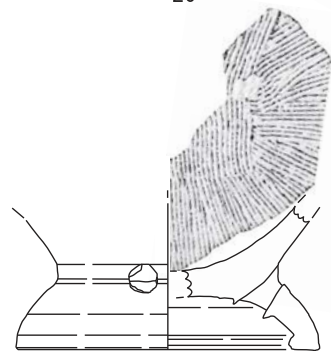
24



25



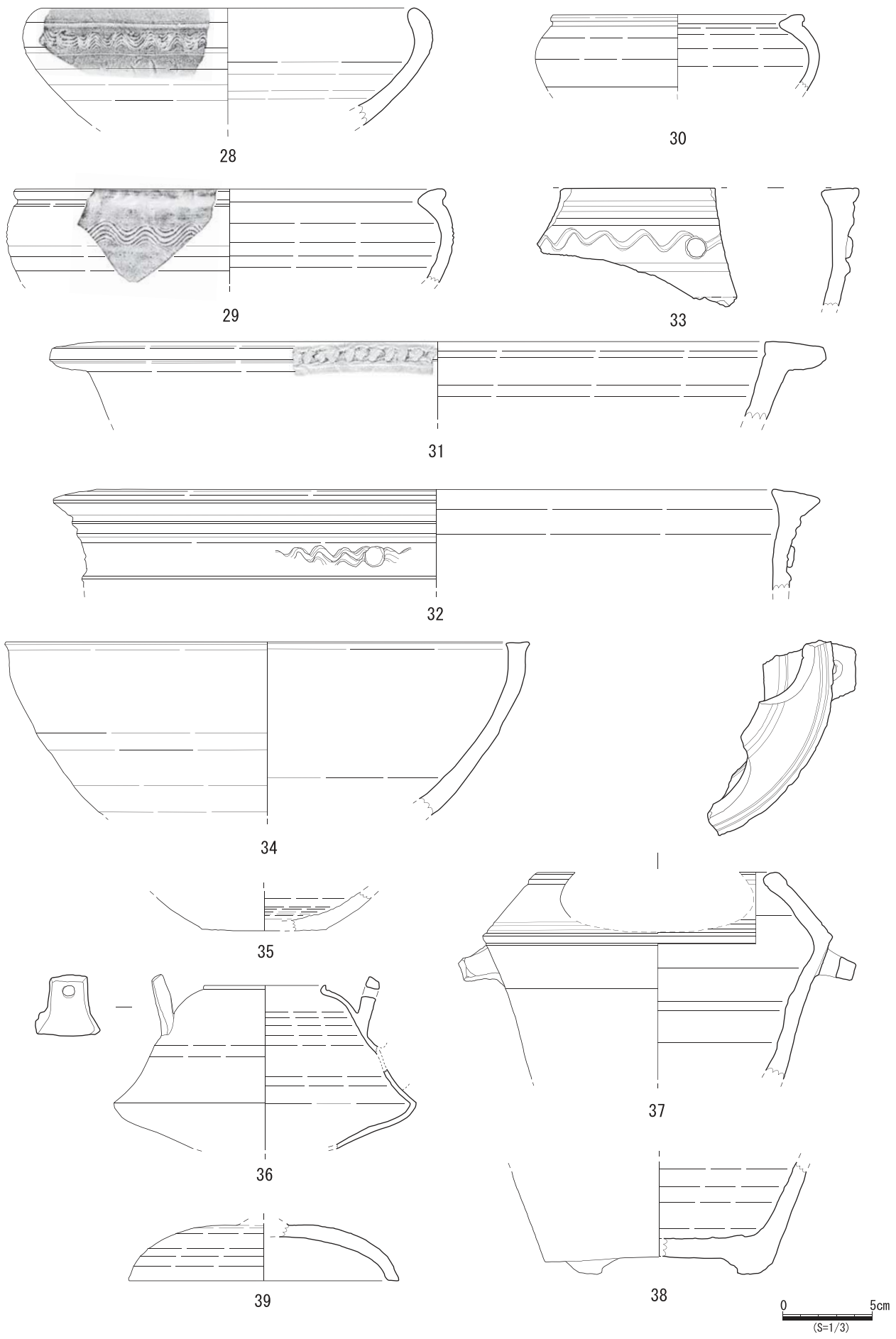
26



27



第 35 図 沖縄産無釉陶器 5 播鉢



第36図 沖縄産無釉陶器6 鉢(28~35)、急須(36)、火鉢(37~38)、蓋(39)

3. アカムヌー

従来、陶質土器として整理されるものである。小型の登り窯で焼かれるため（曾根 1983）、典型的なものは焼成不良で軟質となる。ただし、焼成温度の影響によって、硬質になるものもある。硬質のものは、赤瓦に似た様相を呈すものもあり、瓦質土器の範疇に収まるものもある。しかし、本土産のいわゆる「瓦質土器」とは異なるため、硬質を呈すものも全て本項に含めて扱った。なお、中には焼成不良の沖縄産無釉陶器の可能性が考えられるものもあるが（第 42 図 26・27・32）、「焼成不良」という点で、これらも全て本項に含めた。詳しくは、順を追って報告する。

アカムヌーは、当該遺跡では 10887 点が出土しており、近世以降に比定される遺物全体の約 58% を占めており、最も出土量が多い。その主な組成は、鍋・鉢・急須・火炉で、鍋・急須が最も多く、アカムヌー全体の約 79% を占める（第 38 図）。遺構別の出土割合では、アカムヌーの約 43% にあたる 4724 点が礫充填土坑 No.1（レキ充填部 No.1）で出土しており最も多い。一方で、レキ充填土坑 No.2 での出土率は僅か 3% に留まっており、アカムヌーが主に土坑 No.1 に廃棄されたことが窺える[※]。また、南溝状礫敷遺構（南ミゾレキ）でのアカムヌーの出土率は約 12% に対して、北溝状礫敷遺構（北ミゾレキ）での出土率は 0.3% に過ぎない。

※前節でも述べられているように、アカムヌーの大量廃棄は礫充填土坑 No.1 の排水機能を高めるための工夫と思われる。

鍋（第 39 図～第 40 図）

身は、口縁部片だけでも 996 点が得られており、様々な特徴が認められた。特に、口径を復元できるものが比較的多く得られたため、第 9 表のように大きさで細分している。当該遺跡では、口径 19 cm のものと 25 cm のものが極めて少なかったため、この前後で大きく大・中・小に分けた。大きさが分かるものの中では中型が最も多く、鍋全体の約 23% を占める。ただし、中型は大きさの幅が広いため、さらに大～小に細分した。また、蓋の大きさについても加味して、どの大きさの身にどの大きさの蓋が対応するかを勘案した。蓋は、鍋身の蓋受けより小さくなく、頸部内径より小さくないものを選ぶ必要があり、蓋受け端部の中央付近に収まることを理想とした。つまり、第 37 図のように、蓋受け部の大きさ（a）と頸部括れの程度（b）に応じて蓋の位置が蓋受け部の中央付近に収まるように蓋の大きさを設定し、当該遺跡における統計値から対応する蓋の大きさを推算した（第 9 表）。なお、当該遺跡では底端部の直径が 23 cm を超えるものは出土していないため、鍋蓋は小型と中型の身に対応するものに限られた。

蓋受け部端部に作られる滑り止めの有無の細分も行った（第 9 表）。第 38 図に示すように、小型のものは I・II 類の別に大きく左右されないが、大型は I 類では殆ど見られず、II 類に多いことがわかる。また、胴部の張りや把手の向きについても第 37 図のように整理した。

羽釜（第 41 図 16・17）

4 点が出土した。いずれも小片で、器形が窺える資料は得られていない。

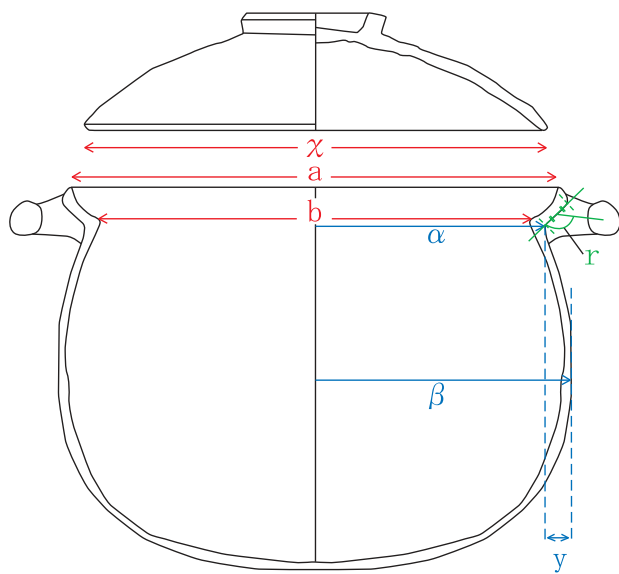
鉢（第 41 図 18～第 42 図 25）

203 点が出土した。大きく 3 類に分けられるが、この内 I・II 類は水鉢で、鉢全体の約 98% を占める（第 38 図）。なお、1 次調査における鉢 II 類は、玉縁口縁を呈す水鉢であるが、これについては認められなかった。代わりに、1 次調査では得られていない平口縁の水鉢を II 類とした。明確に II 類に分けられる資料は僅か 1 点のみの出土であるため、今次調査における鉢は実質 I 類に占められる。

I 類は文様（波状文）の有無によって細分している。概して、有文の資料は無文の資料より大型になる傾向にあるが、第 41 図 22 のように、無文でも大型になるものも若干認められる。出土量については、有文の資料が多い。

第9表 アカムヌー分類一覧

器種	分類			備考		
	属性	記号	基準			
鍋	蓋受け	I類	滑り止めがないもの。			
		II類	a		蓋受け部をヨコナデによって窪ませることで、滑り止めを作るもの。	
			b		蓋受け端部を成形することによって、ツメ（滑り止め）を作り出すもの。	
	大きさ	大	口径26cm以上のもの。	撮径約9cm以上、または底端部径約23cm以上の鍋蓋が概ね対応。		
		中	大	口径24～25cmのもの。	撮径約8cm～9cm、または底端部径約21～23cmの鍋蓋が概ね対応。	
			中	口径21～23cmのもの。	撮径約7cm～8cm、または底端部径約19～21cmの鍋蓋が概ね対応。	
			小	口径19～20cmのもの。	撮径約6cm～7cm、または底端部径約18～19cmの鍋蓋が概ね対応。	
		小	口径18cm以下のもの。	撮径約6cm以下、または底端部径約18cm以下の鍋蓋が概ね対応。		
	鉢	口縁部	I類	a	口縁部が内彎し、外面に簡描きの波状線を描くもの。	ミジクプサー（水鉢）。
				b	口縁部が内彎するもので、無文のもの。	ミジクプサー（水鉢）。
II類			内彎口縁で、口唇が平坦のもの。	ミジクプサー（水鉢）。『嘉教トウヤマ遺跡』IでII類として報告されている口縁断面玉縁状のものは本調査では得られていない。		
III類		口縁断面が逆L字状を呈すもの。				
急須	頸部	I類	無頸のもの。			
		II類	有頸のもの。			
	口縁	a類	蓋受けを作らないもの。			
		b類	蓋受けをつくるもの。			
火炉	器形	I類	器形球状で、胴部中央から口縁へ大きく内傾するもの。			
		II類	a		胴部から「く」の字状に折れて口縁が内傾するもの。	
			b		胴部から「く」の字状に折れて口縁が内傾するもので、口縁に突帯が廻るもの。	
			c		胴部上位で「く」の字状に折れて口縁が直状に立上るもの。	
		III類	円筒状の器形を呈すもの。			
		IV類	浅鉢状になるもの。			
V類	上面観が馬蹄形を呈し、大型のもの。					



- xは鍋身に対応する蓋の大きさ

$$x = \frac{a+b}{2} \text{ cm}$$
- yは頸部に対して胴部が張る割合

$$y = \left(\frac{\beta}{\alpha} - 1 \right) \times 100\%$$
- rは蓋受けに対する把手の角度
 $r \leq 95^\circ$: 把手は下方を向く。
 $100^\circ \leq r \leq 115^\circ$: 把手はやや下方を向く。
 $r \geq 120^\circ$: 把手は起きる。

第37図 鍋身の器形と鍋蓋との対応関係

播鉢（第 42 図 26・27）

48 点が得られた。器形は、沖縄産無釉陶器の播鉢Ⅳ類に属するものに限られる。その多くが硬質で、焼成不良の沖縄産無釉陶器とも思えるものである。しかしながら、胎土分析の結果からも、アカムヌーと沖縄産無釉陶器の区別は困難であると言えることから、本報告では焼成温度が低いと思われる資料はアカムヌーの範疇で整理した。ただし、具体的な焼成温度を推測することができないため、明確にアカムヌーに区別できるとは言えない。このような資料の整理については今後の課題である。

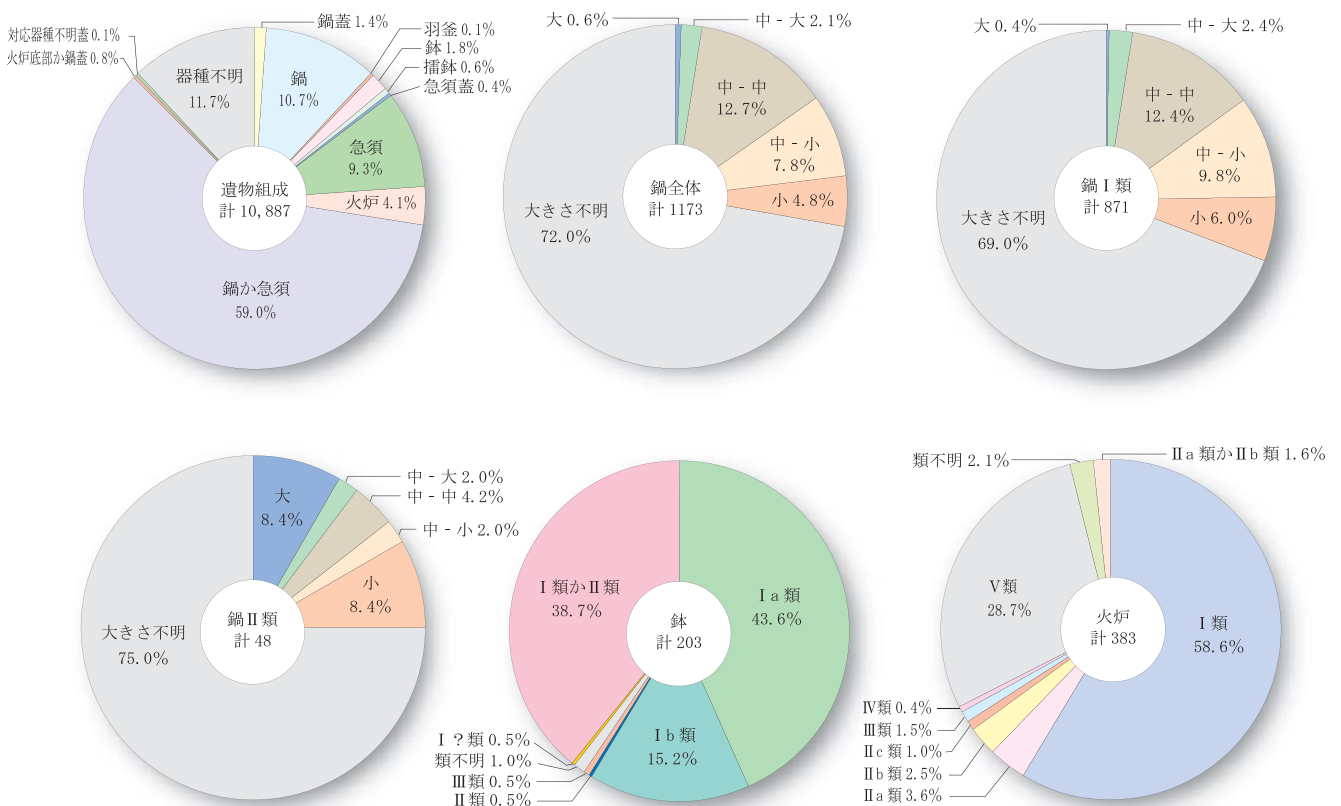
急須（第 42 図 28～35）

身は、鍋との区別がつかない胴・底部片を除いて 1022 点が出土した。頸部の有無と蓋受けの有無で大きく分類したが（第 9 表）、全て上手の土瓶である。加えて、器形も若干の違いはあるものの、概ね同様である。また、蓋受けが作られるものは 1 点のみで、大半を 1 類が占める。

火炉（第 43 図～第 46 図 53）

383 点が出土した。器形から大きく 5 類に分けられる（第 9 表）。Ⅰ類が最も多く、火炉全体の約 59%を占める。次いでⅤ類が多く、その割合は約 29%である。

Ⅰ類・Ⅲ類・Ⅴ類は土瓶などを置くための受け部が貼付されるものであるのに対して、Ⅱ類・Ⅳ類はこれを貼付しない。ただし、Ⅱ類はⅠ類と同様の火窓が設けられる他、器形は角張るか丸味を帯びるかの違いはあるものの、口縁が内側に傾くことで共通する。なお、Ⅳ類については本項の中でもやや異質に思えるが、ススの付着や器形から火鉢などの用途が想定できる。



第 38 図 アカムヌーの組成と各分類の出土状況

第11表 アカムヌー観察一覧1

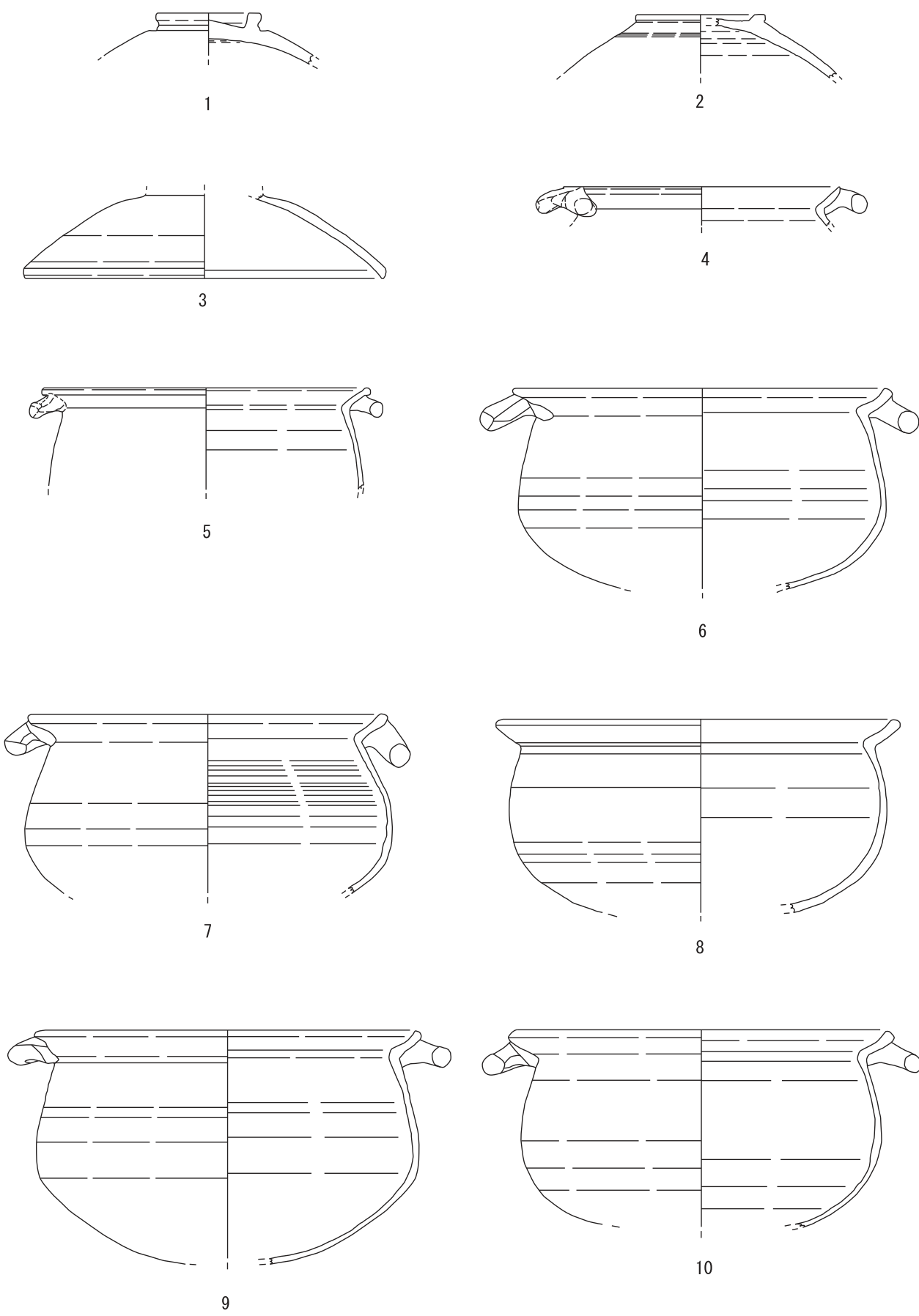
単位: cm、(): 復元値、差の法は上から順に撮径・器高・底端径(あるいは袴端径)。

挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器色	素地	観察事項	出土地
第39図 図版 27~32	銅蓋	1	— — 5.6 — —	内外 明橙褐色	やや硬質。明橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。撮みの成形は粗い。撮み内側は円錐状を呈す。統計から推算できる底端部の径は約15.1cmを計り、口径16~17cm程度の小型の銅に対応すると思われる。	レキ充填部 No.1 1層
		2	— — 7.0 — —	内外 淡橙褐色	やや硬質。明黄褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。撮みの成形は粗い。撮み内側欠損。統計から推算できる底端部の径は約18.9cmを計り、口径20~21cm程度の中型の銅に対応すると思われる。	レキ充填部 No.1 1層
		3	— — — — (19.4)	内外 淡橙褐色	やや硬質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	ナデ調整。端部外縁は丸味を帯びる。撮みは貼付面に欠損する。統計から推算できる撮みの径は約7.2cmを計り、口径20~21cm程度の中型の銅に対応すると思われる。	レキ充填部 No.1 2層
	銅	4	I類小 — — — — (15.0)	内外 淡橙褐色	軟質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	ナデ調整。口唇舌状に尖る。把手は蓋受けに対して約125°に位置し、起きる。頸部内径12.4cmで、底端部径約13.7cmの蓋が対応すると思われる。大部分が欠損しており、ススの付着は見られない。	レキ充填部 No.1 1層 1トレ Ia~b層
		5	I類小 — — — — (17.6)	内外 明橙褐色	やや硬質。明橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子・石灰質砂粒(貝殻含む)。	回転ヘラ成形とナデ調整。頸部に対する胴部の張りは約10%で、やや張る。口縁外縁部は玉縁状に肥厚する。把手は蓋受けに対して約115°に位置し、やや下方向を向く。焼成良好。頸部内径4.8cmで、底端部径約6.2cmの蓋が対応すると思われる。大部分が欠損しており、スス付着は把手にのみ見られる。	レキ充填部 No.1 1・2層
		6	IIa類中・小 — — — — 19.8 — [丸底]	内外 淡橙褐色	やや硬質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子・石灰質砂粒(貝殻含む)。やや粗い。	回転ヘラ成形とナデ調整。頸部に対する胴部の張りは約11%で、やや張る。蓋受け部端部は断面三角状を呈して滑り止めを作る。把手は蓋受けに対して約115°に位置し、やや下方向を向く。焼成良好。底部と把手を含む頸部付近にスス付着。頸部内径16.6cmで、底端部径約18.2cmの蓋が対応すると思われる。特に底部のススは著しく、内面にも炭化物が付着。	レキ充填部 No.1 1層
		7	IIa類中・小 — — — — 19.4	内外 淡橙褐色	やや硬質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。内面成形痕明瞭。頸部に対する胴部の張りは約19%で、張りは極めて強い。蓋受け部のヨコナデ浅い。把手は蓋受けに対して約95°に位置し、下方向を向く。頸部内径15.8cmで、底端部径約17.6cmの蓋が対応すると思われる。ススの付着は胴下部のみ(底部不明)。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.2 3層
		8	IIa類中・小 — — — — 20.8	内外 淡橙褐色	やや硬質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。頸部に対する胴部の張りは約7%。把手2つ欠損。焼成良好。頸部内径7.6cmで、底端部径約9.2cmの蓋が対応すると思われる。主に底部にススが付着する。把手は欠損するため、スス付着の有無は不明。内面にも炭化物は認められない。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.2 3層
9		IIa類中・中 — — — — 20.3 — [丸底]	外面 淡橙褐色 内面 淡橙褐色 明橙褐色	やや硬質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。頸部に対する胴部の張りは約11%で、比較的張りは強い。把手は蓋受けに対して約120°に位置し、起きる。頸部内径17.4cmで、底端部径約18.9cmの蓋が対応すると思われる。底部と把手を含む蓋受け下面にスス付着。底部のススは著しいが、胴上部や頸部には殆ど見られず、内面にも炭化物は付着しない。	レキ充填部 No.1 2層 レキ充填部 No.2 1・3層	
10		IIa類中・中 — — — — 20.3	内外 淡橙褐色	やや硬質。明茶褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。頸部に対する胴部の張りは約9%。蓋受け部端部は肥厚し、部分的に断面三角状を呈す。把手は蓋受けに対して約115°に位置し、やや下方向を向く。頸部内径17.0cmで、底端部径約18.7cmの蓋が対応すると思われる。底部から胴上部、及び把手を含む蓋受け部下面にスス付着。特に底部のススは著しい。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.2 3層	
第40図 図版 33~36	銅	11	IIa類中・中 — — — — 21.8 — — [丸底]	外面 淡橙褐色 内面 明橙褐色	やや硬質。明橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子・石灰質砂粒(貝殻含む)。	回転ヘラ成形とナデ調整。頸部に対する胴部の張りは約8%。蓋受け部端部は断面三角状を呈す。把手は蓋受けに対して約120°に位置し、起きる。焼成良好。頸部内径18.8cmで、底端部径約20.3cmの蓋が対応すると思われる。底部から胴上部、及び把手を含む蓋受け部下面にスス付着。内面にも炭化物が若干付着。	レキ充填部 No.1 1・2層 レキ充填部 No.2 3層
		12	IIb類中・中 — — — — 20.6 12.0 [丸底]	内外 淡橙褐色	胎土分析対象資料。やや硬質。明茶褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・石灰質砂粒(貝殻含む)。	回転ヘラ成形とナデ調整。頸部に対する胴部の張りは約6%で、張りはやや弱い。蓋受け部のツメは不明瞭。把手は蓋受けに対して約100°に位置し、やや下方向を向く。頸部内径17.0cmで、底端部径約18.8cmの蓋が対応すると思われる。底部から胴上部、及び把手を含む蓋受け部下面にスス付着。特に底部のススは著しく、内面にも炭化物が付着。	レキ充填部 No.1 1層
		13	IIb類中・中 — — — — (21.4)	内外 淡橙褐色	やや硬質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。頸部に対する胴部の張りは約4%で、張りは極めて弱い。蓋受け部のツメは不明瞭。把手2つ欠損。焼成良好。頸部内径18.0cmで、底端部径約19.7cmの蓋が対応すると思われる。ススは底部に付着。ただし、口頸の大半が欠損する。	レキ充填部 No.1 1・2層 レキ充填部 No.2 3層
		14	IIb類大 — — — — (25.5)	外面 明橙褐色 内面 淡橙褐色	やや硬質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。頸部に対する胴部の張りは約3%で、張りは極めて弱い。把手は蓋受けに対して約110°に位置し、やや下方向を向く。頸部内径21.2cmで、底端部径約23.4cmの蓋が対応すると思われる。器面は所々が剥離する。ススは底部上位から胴部及び把手に付着する(底部不明)。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.2 3層
		15	IIb類大 — — — — (26.2)	内外 淡橙褐色	やや硬質。明茶褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。胴部成形痕明瞭。頸部に対する胴部の張りは約9%。蓋受けのツメは明瞭。把手は蓋受けに対して約110°に位置し、やや下方向を向く。頸部内径22.4cmで、底端部径約24.3cmの蓋が対応すると思われる。胴部と蓋受け部下面のそれぞれ一部にスス付着。	レキ充填部 No.1 2層
第41図 図版 36~38	羽釜	16	— — — — (15.7)	外面 淡橙褐色 内面 明橙褐色	軟質。明橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	ナデ調整。口唇やや肥厚し、やや内傾する。頸部をerasる。頸部に至る。類似資料から羽釜の口縁部を想定した。口縁直下には丸彫りの圏線が2条廻る。ススの付着は見られない。	南北ミゾレキ
		17	— — — — —	内外 明橙褐色	軟質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	ナデ調整。口唇丸味を若干肥厚させ、やや下向きに貼付する。口唇上面には縁に沿って1条の圏線が廻る。口唇下面には僅かにススが付着する。朱の塗布は見られない。	レキ充填部 No.1 2層
	鉢	18	Ia類 — — — — (17.4)	外面 明橙褐色 内面 淡橙褐色 明橙褐色	硬質。灰黄褐色・明橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。胴下部成形痕明瞭。口唇丸味を帯びて口縁内側に丸彫り。口縁部に4目程の櫛状工具で波状文を施した後、その上部に丸彫りの圏線を1条施す。	レキ充填部 No.1 1・2層
		19	Ia類 — — — — (21.1)	内外 淡橙褐色	やや硬質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口唇丸味を帯びて口縁内側に丸彫り。口縁部に4目程の櫛状工具で緩やかな波状文を施した後、その上部に比較的浅い丸彫りの圏線を1条施す。	ミゾ3 3層 南北ミゾレキ 1層 2トレ Ia層
		20	Ib類 — — — — (15.1) 7.6 8.0	内外 淡橙褐色	胎土分析対象資料。やや硬質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口唇丸味を帯びて口縁内側に丸彫り。口縁部は立ち上がりはヨコナデで調整されるため、僅かに括れる。底部は1/3程が欠損するが、立ち上がり部分には、ほぼ等間隔で3箇所に指の痕が残る。底部は糸底。	レキ充填部 No.1 2層
		21	Ib類 — — — — (16.0) 7.2 8.2	内外 明橙褐色	やや硬質。明橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子・石灰質砂粒(貝殻含む)。	回転ヘラ成形とナデ調整。外面成形痕明瞭。口唇丸味を帯びて口縁内側に丸彫り。口縁部は立ち上がりはヨコナデで調整されるため、僅かに括れる。底部は1/3程が欠損するが、立ち上がり部分に明瞭に残る指の痕は2箇所。底部は糸底。	レキ充填部 No.1 1層 南北ミゾレキ
		22	Ib類 — — — — (21.0)	内外 明橙褐色	硬質。明橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口唇丸味を帯びて口縁内側に丸彫り。口縁部に5目程の櫛状工具で波状文を施した後、その上部をヨコナデで調整し、口唇をやや幅広く成形する。	レキ充填部 No.1 1層
		23	II類 — — — — (17.2)	内外 淡橙褐色	軟質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口唇平坦で口縁内側に丸彫り。口縁部に5目程の櫛状工具で波状文を施した後、その上部をヨコナデで調整し、口唇をやや幅広く成形する。	レキ充填部 No.1 2層 レキ充填部 No.1~2層
第42図 図版 38~39	播鉢	24	I or II類 — — — — (10.0)	内外 明橙褐色	やや硬質。明橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子・石灰質砂粒(貝殻含む)。	回転ヘラ成形とナデ調整。比較的混入物が粗いため、砂流の動きが明瞭。口唇丸味を帯びて口縁内側に丸彫り。口唇部は立ち上がりはヨコナデで調整されるため、僅かに括れる。底部は1/2程が欠損するが、立ち上がり部分には、2箇所に指の痕が残る。底部は糸底。波状文を施す水鉢の底部。	レキ充填部 No.1 2層
		25	I or II類 — — — — — 11.0	内外 明橙褐色	軟質。淡橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。底部は糸底。底部の立ち上がりはやや括れる。底部片のため文様は確認できないが、底径から推察して波状文を施す水鉢の底部である可能性がある。	南北ミゾレキ レキ充填部 No.2 層
		26	— — — — (22.7)	内外 橙褐色	硬質。橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁は逆し字状を呈し、沖繩産無釉陶器のIV類に類似する。焼成不良の沖繩産無釉陶器である可能性もあるが、陶器と言えほどの高温焼成が成されているとは言えない。	レキ充填部 No.1 層
		27	— — — — — 12.0	内外 橙褐色	胎土分析対象資料。硬質。橙褐色。黒色砂粒・白色砂粒・雲母・赤色粒子。	ナデ調整。底部内径は約1.5cmの幅でミガキのような調整が施される。アカムヌーの中では比較的焼成は良好であり、焼成不良の沖繩産無釉陶器とも思われる。ただし、陶器と言えほどの高温焼成が成されているとは言えない。	レキ充填部 No.1 2層

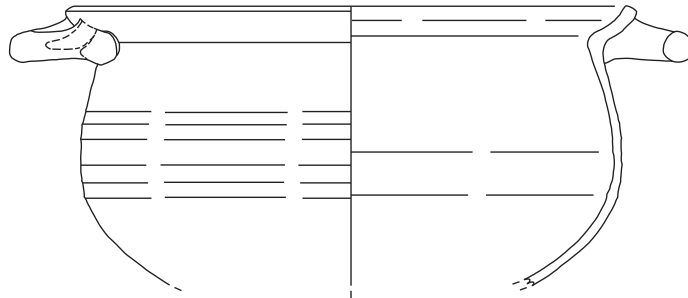
第11表 アカムヌー観察一覧2

単位: cm、(): 復元値、蓋の法量は上から順に撮径・器高・底端部径 (あるいは袴端部径)。

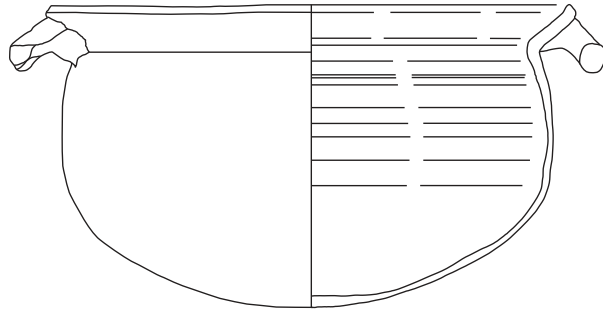
挿入番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器色	素地	観察事項	出土地		
第42図 図版39~41	急須蓋	—	ほぼ完形	1.6 3.2 6.0	外面 褐灰色 淡橙褐色 内面 淡橙褐色	硬質。淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。握みはやや形の崩れた宝珠形を呈す。袴端部の直径から、比較的小型の急須に対応すると思われる。焼成は良好。混入物に赤色粒子が認められない。	レキ充填部 No.1 1層	
		—	握み~袴	2.0 3.0 (6.6)	内外 淡橙褐色	軟質。淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	ナデ調整。握みはいわゆる饅頭形。底の端部は破損する。小型の急須に対応すると思われる。	1トレ Ia~b層	
	急須	I a類	口縁部	(7.0) —	内外 明橙褐色	やや硬質。明橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。内面成形痕明瞭。口縁を僅かに折り曲げるもので、口唇は丸味を帯びる。肩部は丸味を帯びる。把手は上手で、平面形状を呈す。注口欠損。	レキ充填部 No.1 2層	
		II a類	口縁部	(7.0) —	内外 淡橙褐色	やや硬質。淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁は直口気味に立ち上がる。比較的短頸。口唇外面はやや肥厚する。また、口唇上面は平坦に成形する。ススの付着は見られない。	南北ミゾレキ遺構内	
		II b類	口縁部	— —	内外 橙褐色	硬質。橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	ナデ調整。蓋受けを作る口縁部。口縁は肩部から若干内傾気味に立ち上がる。比較的短頸。口唇はやや平坦。蓋受けの器壁は厚く、端部は丸味を帯びる。器壁が厚く焼成良好で、30~31・33~35に比べて縁相が異なる。沖繩産無釉陶器の可能性も考えられる。	レキ充填部 No.1 1層	
			ほぼ完形	8.3 (11.3) [丸底]	内外 淡橙褐色	胎土対象分析資料。 やや硬質。淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	底部の多くを欠損するもの、ほぼ完形。回転ヘラ成形とナデ調整。口縁は直口気味に立ち上がる。肩部は丸味を帯び、胴部は「ハ」の字状に開く。胴下部で稜線を作り、丸味を帯びて屈曲し、底部に至る。ススは底部を中心に付着し、注口下位にも付着する。	レキ充填部 No.1 1層	
		II a類	口縁~底部	7.8 — [底部]	淡橙褐色	やや硬質。淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁は直口気味に立ち上がる。器形は33と同等。ススは底部を中心に付着し、胴部や把手の外面にも広がる。特に底部の付着は著しい。	レキ充填部 No.1 1~2層 レキ充填部 No.2 3層	
		II a類	ほぼ完形	7.4 11.3 [丸底]	外面 淡橙褐色 内面 明橙褐色	やや硬質。明橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。内面成形痕明瞭。口縁は直口気味に立ち上がる。肩部は丸味を帯びるが、胴部はやや内彎し、明瞭な稜線を作った底部に屈曲する。ススは胴部の一部に付着するもの、底部には認められない。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.2 3層	
		第43図 図版42~43	I 類	口縁~ 胴下部	(15.0) — —	内外 明橙褐色	胎土対象分析資料。 やや硬質。明橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁内面やや肥厚。白化粒土による圏線が口縁から把手の間に少なくとも3条、把手から下位に少なくとも4条露された形跡あるもの、ほぼ消失。ススは、口縁内側と受け部の先端を覆うようにして帯状に付着。	レキ充填部 No.2 5層
			I 類	口縁部	(14.0) — —	内外 淡橙褐色	やや硬質。明橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	ナデ調整。口縁内面やや肥厚。火窓が僅かに残り、白化粒土による圏線が口縁から把手の間を5条廻る。口縁内面の受け部は口唇に対して概ね水平に貼付。ススは火窓を中心として内外面に付着。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.2 1層
I 類	胴上部~ 底部		— — 7.6	内外 淡橙褐色	軟質。淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。高台の高さは約0.6cm、幅約0.5cmで、雑に成形される。高台断面形状を呈す。高台内は平坦。内底は丸味を帯びる。白化粒土の圏線は数条認められるもの不明瞭。ススは火窓の縁に沿って内外面に付着する。	レキ充填部 No.2 5層		
I 類	底部		— —	外面 明橙褐色 淡橙褐色 内面 淡橙褐色	やや硬質。淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子・石灰質砂粒(貝殻 含む)。	回転ヘラ成形とナデ調整。高台の高さは約0.8cm、幅約0.5cmで、比較的丁寧に成形される。高台断面三角状を呈す。高台内は平坦。白化粒土の圏線は約8条認められるもの不明瞭ではない。ススは、内底面に僅かに付着する。	レキ充填部 No.1 1・2層		
			(12.0)	内外 橙褐色	硬質。橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。高台の高さは約0.6cm、幅は約1.2cmで、低く幅の広い高台を作る。高台断面三角状を呈す。高台内・内底は共に平坦。白化粒土の圏線は概ね明瞭に残り、高台側面に僅かに認められるものを含めて13条確認できる。ススの付着は認められない。	レキ充填部 No.2 2層		
第44図 図版43	II a類		口縁部	(12.8) — —	内外 橙褐色	胎土対象分析資料。 硬質。橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁はやや肥厚し、口唇丸味を帯びる。内側に屈曲した口縁の幅は約2.5cm。最大胴径17.0cm。口縁には丸彫りの圏線が2条廻る。また、把手下の胴上部には平彫りの圏線が2条廻る。ススは口唇の一部にのみ付着する。	レキ充填部 No.1 1層	
	II a類		口縁部	(10.8) — —	内外 橙褐色	硬質。橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁は内側にやや肥厚し、口唇平坦。内側に屈曲した口縁の幅は約3.5cmを測り、41に比べて長い。最大胴径17.4cm。火窓2つ残る。把手の直上には2条の圏線が廻る。	北ミゾレキ 2層	
	II a類		口縁部	(11.0) — —	内外 橙褐色	硬質。橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁は内側にやや肥厚し、口唇平坦。内側に屈曲した口縁の幅は少なくとも4.0cmを測り、42よりさらに長い。口縁部には1条の圏線が廻る。口唇にスス付着。	K13 II a層	
	II b類	口縁部	(14.2) — —	内外 明橙褐色	やや硬質。明橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子・石灰質砂粒 (貝殻含む)。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁は断面三角状に肥厚し、その下位に段が1条廻る。そのため、口縁には2条の稜線が廻る。器形は火炉II a類と大きく変わらない。内側に屈曲した口縁の幅は約2.7cm。最大胴径18.0cm。ススの付着は認められない。	レキ充填部 No.1 1層		
	II b類	口縁部	(12.6) — —	内外 淡橙褐色	軟質。淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁は丸味を帯びて肥厚し、その下位に段が1条廻る。内側に屈曲した口縁の幅は約2.8cm。最大胴径16.8cm。把手欠損。ススは口唇外縁に沿って付着。	レキ充填部 No.2 1層		
	II b類	口縁部	(12.6) — —	内外 明橙褐色	軟質。明橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁は断面三角状に肥厚し、その下位に段が1条廻る。胴部の屈曲部は44・45に比べてやや鋭角状に張り出し、稜線を作る。そのため、口縁部の稜線は3条廻る。屈曲部は内側に屈曲した口縁の幅は約2.4cm。最大胴径16.4cm。ススは口唇内側に沿って付着する。	レキ充填部 No.1 2層		
	II c類	口縁部	(13.6) — —	内外 淡橙褐色	軟質。淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁は胴部上位から段を作り、角度を変えて内傾する。屈曲部の鋭角状を呈す張り出しは、46に比べて意識して作り出される。内側に屈曲した口縁の幅は約1.5cmと火炉II a~b類に比べて極端に短い。また、その立ち上がりは6に比べて急であり、ほぼ直状となる。口縁は内側にやや肥厚して口唇を幅広くする。ススは口唇内側に一部付着する。	南ミゾレキ 2層		
	III 類	口縁部	(16.4) — —	内外 淡橙褐色	軟質。淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	ナデ調整。口唇内外縁部は三角状に肥厚し口唇を広くするため、口縁断面ラフ状を呈す。受け部は上を向く。白化粒土による圏線は、口唇外縁部から6条見られる。ススは口唇から口縁外面にかけて付着。同一個体と思われる口縁部片2点あり。それぞれレキ充填部No.1の2層とレキ充填部No.1~2で出土。	南北ミゾレキ		
第45図 ~46図 図版44~46	IV 類	口縁部	(21.2) — —	内外 淡橙褐色	軟質。淡橙褐色・褐灰色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	回転ヘラ成形とナデ調整。口縁内彎し器壁は厚くなる。口唇内外を肥厚させるため、口縁断面はT字状を呈す。口唇は丸味を帯びる。口唇内側に一部にススが付着する。	1トレ Ia~b層		
	V 類	口縁部	(18.0) — —	内外 淡橙褐色	胎土対象分析資料。 やや硬質。橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子・石灰質砂粒 (貝殻含む)。	五徳の代わりとなる部位。回転ヘラ成形とナデ調整。口縁は断面三角状に肥厚し、口唇を幅広く成形する。口縁は胴部半ばで緩やかに外反する。口縁内面には受け部の一部が確認できるが、ほぼ欠損する。類似資料から本来は3つ貼付されたと考えられる。ススは、口縁内面を中心に著しく付着する。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.1~2		
		口縁部	(24.8) — —	内外 淡橙褐色	やや硬質。明橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	五徳の代わりとなる部位。回転ヘラ成形とナデ調整。口縁の内外面を肥厚させ、断面三角状を呈して口唇を幅広くする。受け部は2つ確認できるが、1は大半を欠損する。ススの付着は不明瞭。	レキ充填部 No.1 2層		
		口縁~ 底部	6.6 — —	内外 淡橙褐色	やや硬質。淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	方形状の部位。ヘラ成形とナデ調整。口縁は断面三角状に肥厚し、口唇を幅広くする。器壁は約1.5~2.0cmを測り、厚い。ススは、口唇内側を中心に、外側にも一部付着する。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.1~2		
		口縁~ 底部	— 5.7 —	外面 淡橙褐色 内面 明橙褐色	硬質。明茶褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	方形状の部位。ヘラ成形とナデ調整。全体的に比較的丁寧に成形される。口縁は、外面に器壁とほぼ同じ厚さの粘土を貼付するため断面逆L字状を呈して口唇を幅広くする。ススの付着は認められない。	レキ充填部 No.2 2層		
	不明	—	把手	— — —	胎土対象分析資料。 硬質。淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子・粗粒。	器種不明の把手と思われる資料。大型の器種に貼付されたとと思われる。端部はやや上方を向く。下半はススの付着が認められ、特に側面の付着が著しく、U字状に集って見える。また、素地には粉粒の混入が確認できる。	レキ充填部 No.1		



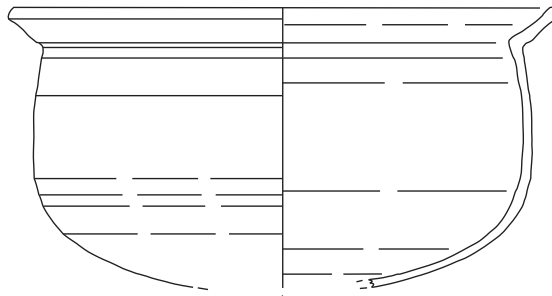
第39図 アカムヌー1 鍋蓋(1~3)、鍋(4~10)



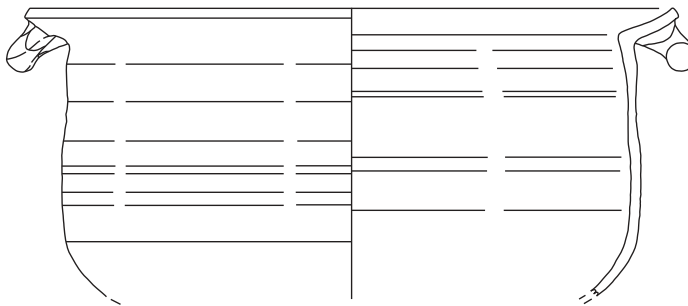
11



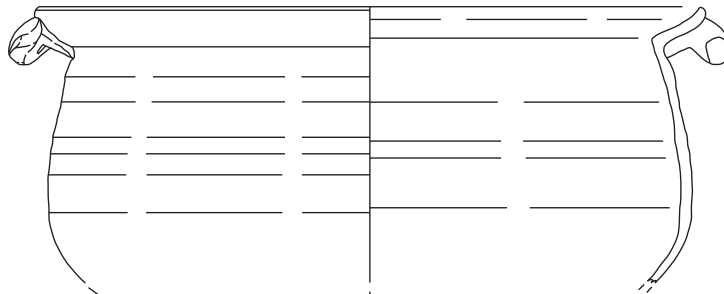
12



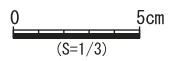
13



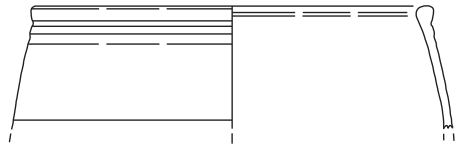
14



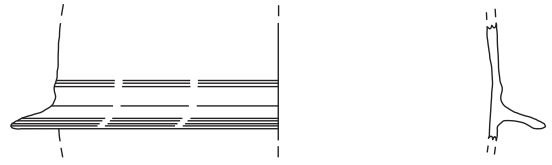
15



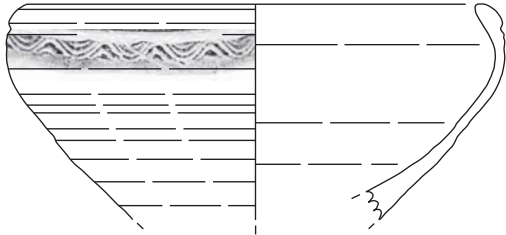
第40図 アカムヌー2 鍋



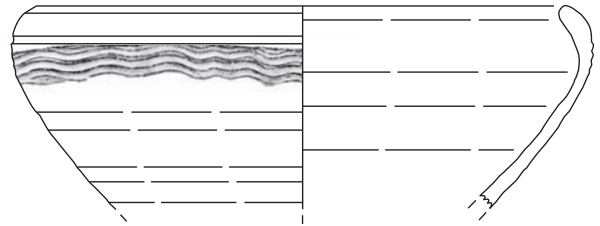
16



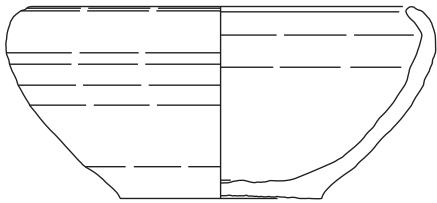
17



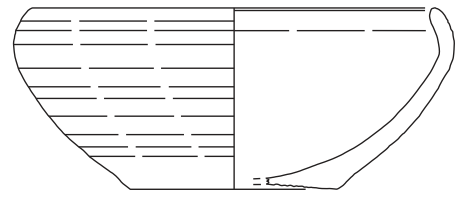
18



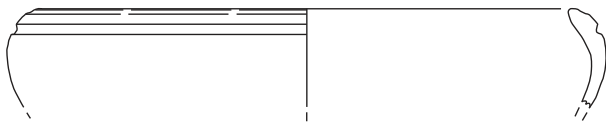
19



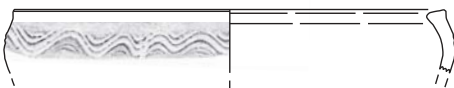
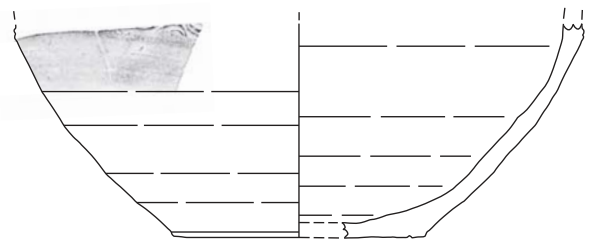
20



21



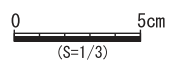
22



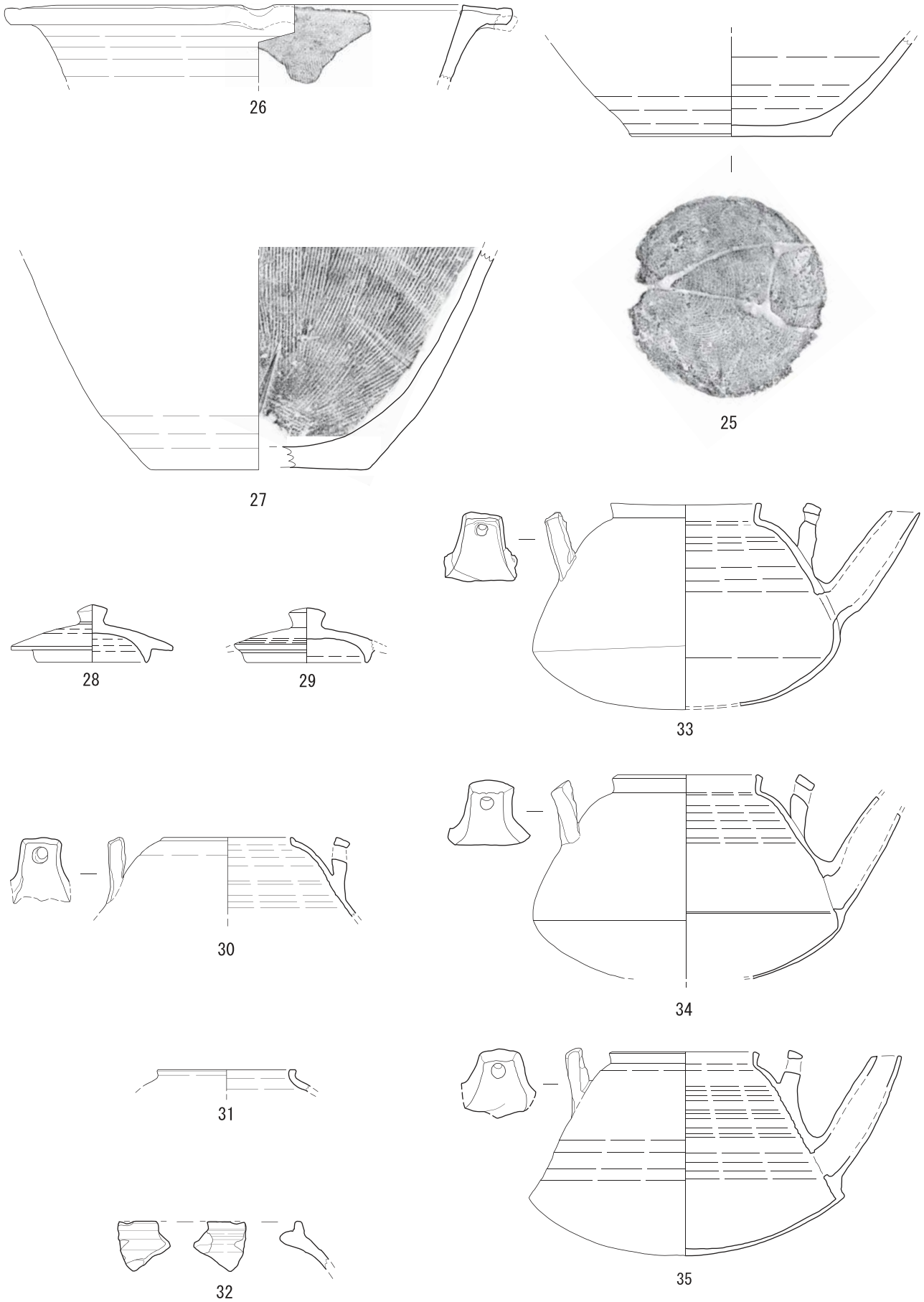
23



24

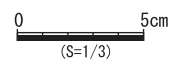
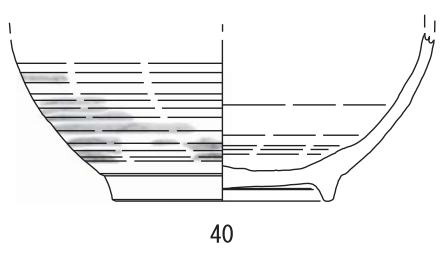
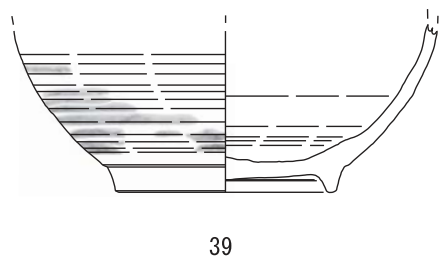
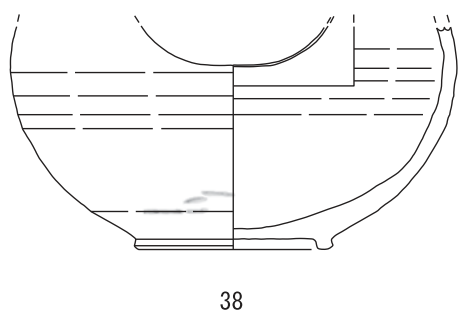
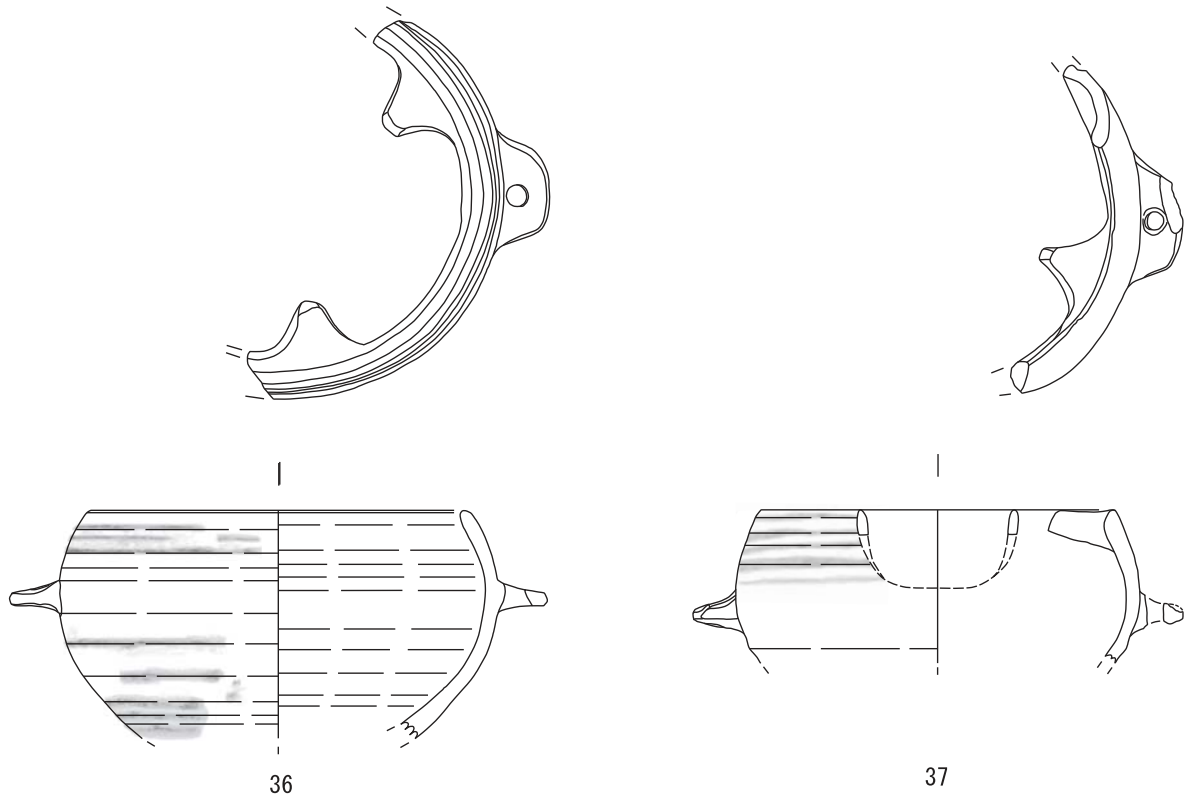


第41図 アカムヌー3 羽釜(16~17)、鉢(18~24)

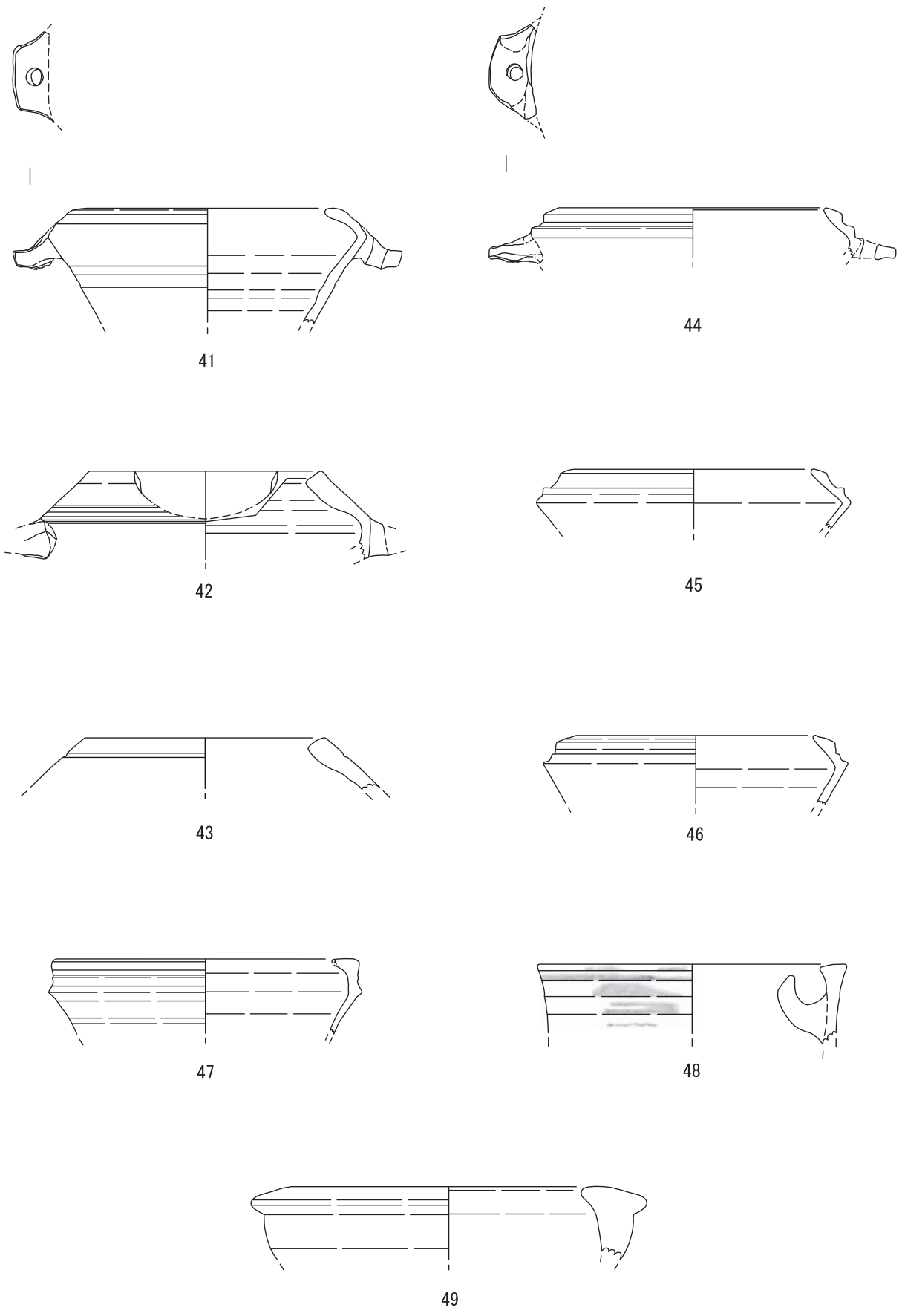


0 5cm
(S=1/3)

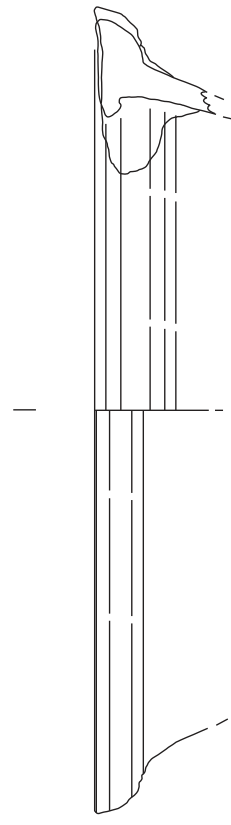
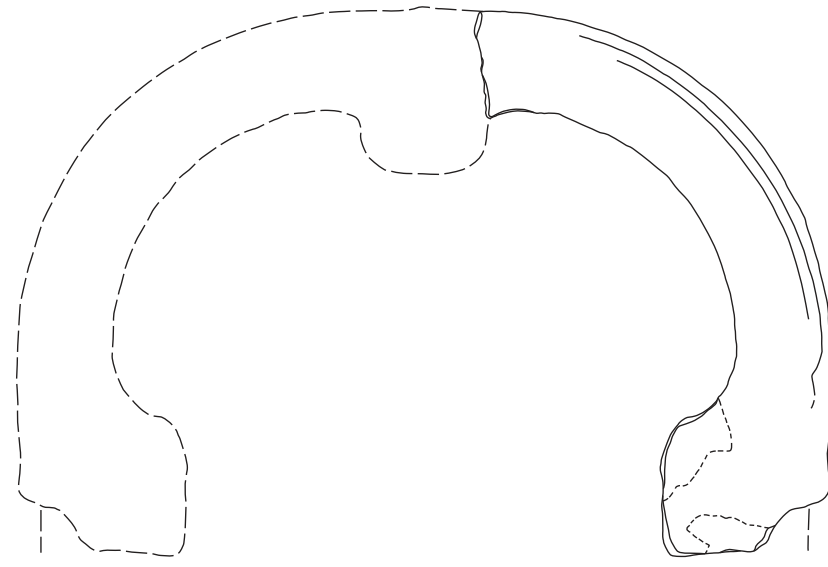
第42図 アカムヌー4 鉢 (25)、播鉢 (26・27)、急須蓋 (28・29)、急須 (30～35)



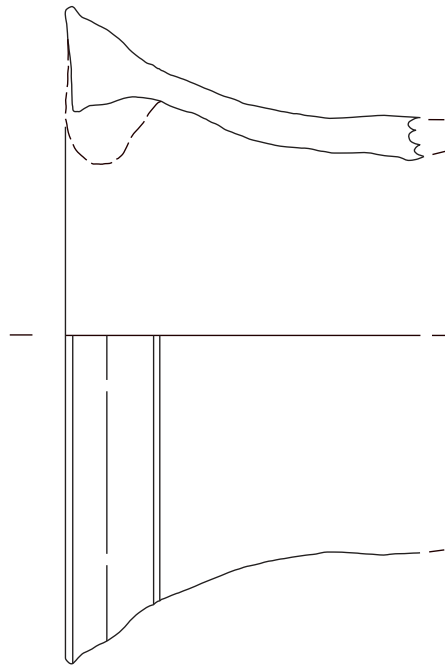
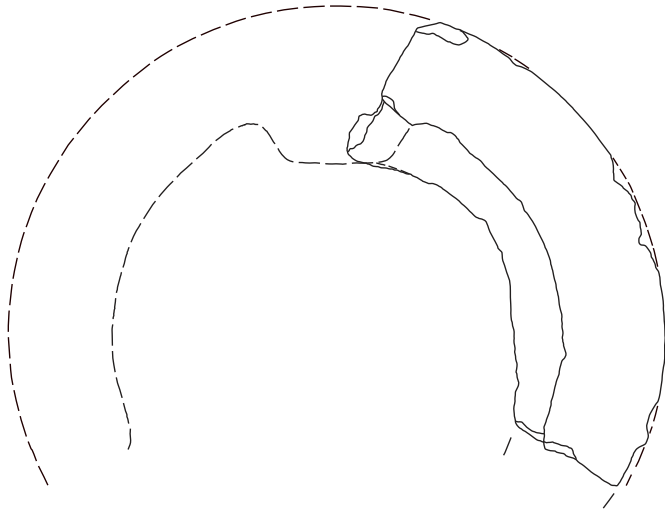
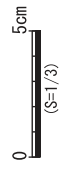
第43図 アカムヌー5 火炉



第44図 アカムヌー6 火炉

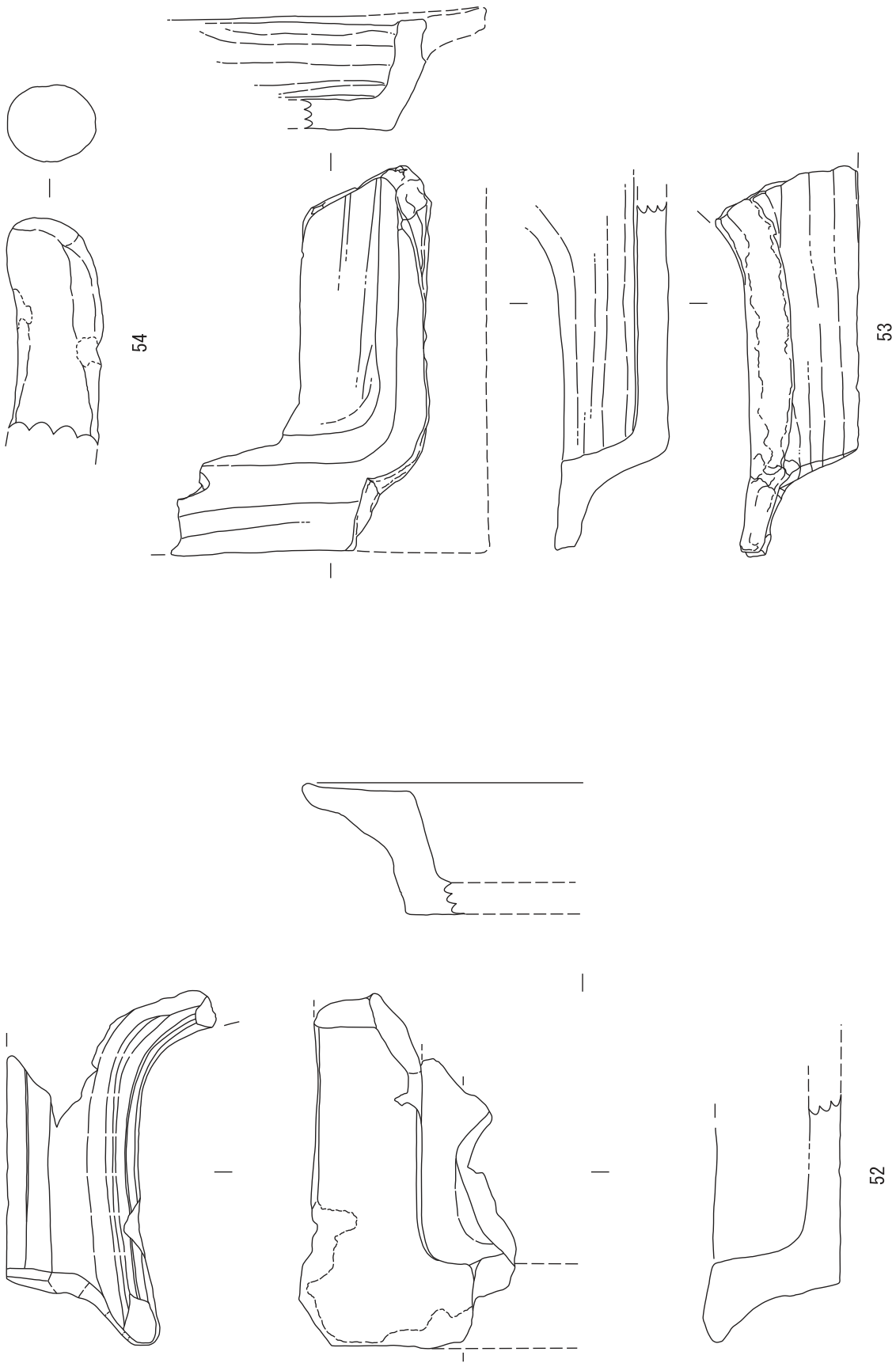


51



50

第45図 アカムヌー7 火炉



第46図 アカムヌー8 火炉 (52・53)、不明 (54)

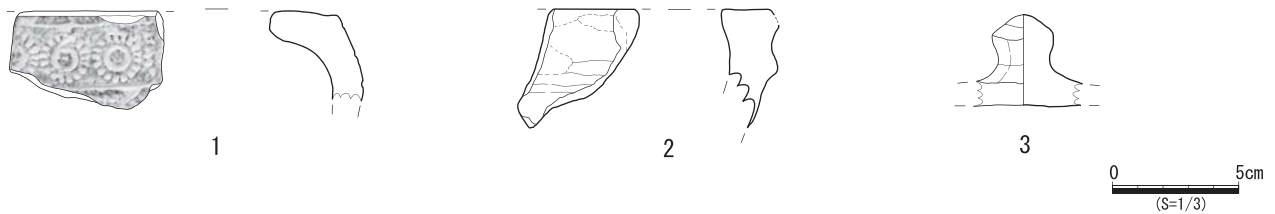
第 13 表 沖縄産瓦質土器観察一覧

単位：cm

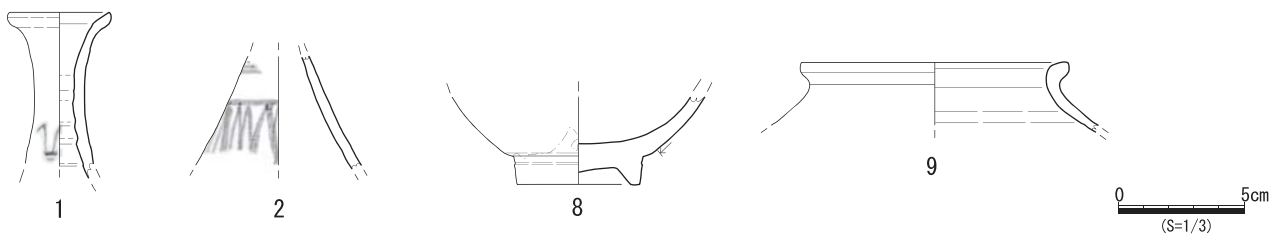
挿図番号 図版番号	器種	部位	法量	器色	素地	観察事項	出土地	
第47図 図版47	1	火鉢	口縁部	—	内外 淡橙褐色	胎土分析対象資料。 褐灰色・淡橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母・ 赤色粒子。	ナデ調整。口縁内傾して、口唇を広く成形する。口唇平坦。口縁部には、2条の圈線の間に、菊花文のスタンプが施される。肉眼観察では、混入物はアカムヌーと同様と思われたが、胎土分析の結果では、これとは別の地域で採取された土が使用された可能性が指摘されている(第IV章参照)。	南ミゾレキ3~4層
	2	鉢	口縁部	—	内外 橙褐色	褐灰色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母。	ナデ調整。口縁は直口気味に起き上がる。口唇平坦。口縁外面を肥厚させ、内面もやや肥厚させる。口縁外面の肥厚帯の下位には同様の肥厚帯が廻る。この2つが別々に貼付されたものか幅広の粘土帯を貼付した後にコナデによって2条の肥厚帯を表出させたものか明確ではない。	L14~15 I b ~南ミゾレキ 1層
	3	蓋	撮み	撮径 2.4	内外 褐灰色	胎土分析対象資料。 褐灰色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母。	ナデ調整。宝珠形の撮み部片。胎土分析の結果、沖縄産無釉陶器やアカムヌーと同様の土が使用された可能性が指摘されている(第IV章参照)。このことから、沖縄産無釉陶器の可能性も考えられる。	不明

第 14 表 本土産陶磁器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	分類	部位	口径 底径	釉	素地	産地	観察事項	出土地	
第49図 図版48	1	瓶	染付	口頸部	3.9 —	青白色	灰白色。 密度は細かい。	肥前	内面成形痕跡明瞭。頸部下位に網目文と2条の圈線を施す。17c末。	南北ミゾレキ
	2	瓶	染付	肩部	— —	青白色	灰白色。 密度は細かい。	肥前	破片中央に1条の圈線、その下位に網目文を施す。肩部上位にも2条の圈線と僅かに網目文が確認できる。17c末。	K13 II b層
	3	碗	印判手	口~底部	11.7 4.8	青白色	灰白色。 密度は細かい。	砥部	口縁直口。型紙摺り。外面は馬蹄形の地文に鶴文や草花文、高台脇に連続文を施す。口縁内面には環状文を施す。器高4.4cm。	レキ充填部No.1 1層
	4	碗	印判手	口~腰部	7.2 —	青白色	灰白色。 密度は細かい。	砥部	口縁外反。腰部は丸味を帯びる。型紙摺り。外面は梅花文や連続文を施す。内面は梅花文や圈線を施す。	北ミゾレキ 2層
	5	皿	印判手	口~底部	16.0 6.3	青白色	灰白色。 密度は細かい。	砥部	口縁直口。高台低い。型紙摺り。外面は鶴文を施す。内面は地文を密に施し、内底に楕円文を施す。器高2.5cm。	南北ミゾレキ
	6	湯呑?	印判手	口縁部	4.7 —	青白色	灰白色。 密度は細かい。	砥部	口縁直口。口禿(内面口唇下約1.0cmまで釉剥ぎ)。銅版転写。草花文などを施す。	レキ充填部No.1 1層
	7	碗	印判手	口~腰部	7.8 —	青白色	灰白色。 密度は細かい。	不明	口縁直口。ゴム判。外面は草花文や圈線を施す。	表採
	8	碗	—	底部	— 4.9	銅緑釉	浅黄褐色。 白色砂粒。	肥前	畳付断面は台形状を呈し、外底面中央はやや突起する。焼成不良で軟質。	レキ充填部No.1 2層
	9	壺	—	口縁部	10.0 —	褐色系	褐灰色。 黒色砂粒・白色砂粒・雲母。 白色砂粒多く含み粗い。	薩摩系	内面僅かに轆轤痕残る。口禿。口縁外面やや丸味を帯びて肥厚する。口唇舌状。器壁は0.3~0.4cmを測り、薄い。同一個体と思われる胴部片数点出土。	南ミゾレキ 3~4層
	10	鉢?	—	胴部 (底部付近)	— —	鮫肌釉	赤褐色・にぶい黄褐色。 黒色砂粒・白色砂粒を多く含み、粗い。	薩摩系	筒状の器形を呈すと思われる。	南北ミゾレキ



第 48 図 沖縄産瓦質土器



第 49 図 本土産陶磁器

6. その他の近世～現代遺物

ここでは、これまでに報告したもの以外の資料を一括して扱う。主な遺物は、円盤状製品・煙管・簪・古銭である。なお、瓦は247点得られており、表採を含めて約81%が遺構外からの出土である(第15表)。残りの良いものはないため、図や写真は割愛した。高麗瓦は次年度の報告を予定している。

陶製置物の類 (図版 49)

置物や装飾品の類をここに整理した。出土点数は6点で、全形の窺える資料はないが、無釉陶器の獅子像や、焼成不良の典型的なアカムヌーなどが得られている。

円盤状製品 (第50図)

33点が出土した。沖縄産の施釉陶器や無釉陶器、瓦などを転用したものが得られており、播鉢を含めた無釉陶器で作られたものが全体の約82%を占めて最も多い。

ビーズ (第51図14)

ガラス製の資料が1点得られている。M12 グリッドⅡ a層からの出土で、直径0.8 cm、孔径0.3 cm、厚さ0.5 cmで、重量0.4 gを測る。

煙管 (第51図15～22)

9点の出土で、残りの良い8点を図化した。陶器製や真鍮製のものが主に得られているが、中には石製や木製と思われる資料も出土した。

簪 (第51図23～25)

4点の出土で、比較的残りの良い3点を図化した。完形資料は得られていない。

古銭 (第51図26～31)

6点出土した。概ね全形を残す資料であるが、全て状態が悪く、有文・無文の判別もできなかった。

第15表 赤瓦集計表

種類 出土位置・層位	丸瓦			平瓦			不明	合計
	玉縁片	玉縁 欠落片	筒部	筒部	端部			
表採	1	2	5	21	5	34		68
Ⅰ	a		1	4		9	14	
	b	1	2	5	10	8	42	68
a～b		1	1	3	2	20	27	109
Ⅰ a～Ⅱ a						2		2
Ⅰ b～Ⅱ a					1	1		2
Ⅱ	a					9	9	
	b				1	7	8	
	a～1			1		1	2	19
南溝状礫敷	1層			1		1	2	
	1～2層			1		2	3	
	3層		1			1	3	
	3～4層			1	3	1		13
北溝状礫敷					2	5	2	
南北溝状礫敷	1		1	6		3	11	
溝	1層 遺構内					1	1	
	3層			1		3	3	4
レキ 充填部	No.1 1層			1	4	1		6
	No.2 2層				2	2	1	5
	No.2 3層				1			1
	No.1～2 遺構内						3	3
表採・Ⅰ b層					1			1
合計	3	6	14	57	24	143		247

第16表 円盤状製品集計表

種類 出土位置・層位	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器		瓦	合計
		播鉢	その他		
Ⅰ	a		1		1
	a～b	2	3		5
Ⅱ	a		1		1
	a～1		1	2	3
南溝状礫敷			1		1
南北溝状礫敷	1		6		7
レキ 充填部	No.1 1層	1		5	7
	No.1 1～2層			1	1
	No.2 2層			4	4
	No.2 3層			1	1
No.1～2一括	1		1		2
合計	5	2	25	1	33

第 17 表 陶製置物の類観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	部位	器色	素地	観察事項	出土地	
図版 4 9	1	不明	不明	明橙褐色	軟質。淡橙褐色。 赤色粒子・黒色砂粒・ 雲母・石灰質砂粒。	ナデ調整。器壁約1.0cmの器面に装飾を貼付したもの。天地不明。 アカムヌーに属す資料であるが、便宜上ここで扱った。	レキ充填部No.1~2
	2	獅子像	頭部	橙褐色	硬質。橙褐色。 白色砂粒・雲母。	ナデ調整。胎土は細かく、3~5とは別個体。内面は指の押圧による成形痕が著しい。白化粧土を塗布する。素地の密度などからアカムヌーに似るが、混入物が異なる。	ミゾ3・3層
	3~5	獅子像	頭部	橙褐色	硬質。橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	同一個体。石灰質砂粒を多量に含み、粗い。獅子像の頭部と思われるが、出土資料が少ないため具体的な部位は判然としない。やや大型になると思われる。無釉の陶器。	南北ミゾレキ 北ミゾレキ2層 レキ充填部No.2 5層

第 18 表 円盤状製品観察一覧

挿図番号 図版番号	分類		器色/釉調	素地	法量				観察事項	出土地	
	種類	器種			長径	短径	厚さ	重量			
第 5 0 図 ・ 図 版 5 0	6	沖無	壺か甕?	外面 灰褐色 内面 明茶褐色	暗赤褐色。 黒色・白色砂粒。	2.7	2.4	0.9	9.4	袋物の破片を内側から打ち欠いて成形。作りはやや雑。	1トレ I a~b層
	7	沖無	壺か甕?	外面 灰褐色 内面 暗赤褐色	暗赤褐色。黒色・ 白色砂粒・雲母。	3.6	3.1	1.2	19.7	袋物の破片を内側から打ち欠いて成形。作りはやや雑。	南北ミゾレキ
	8	沖無	壺か甕?	外面 濁った明茶褐色 内面 明茶褐色	明茶褐色。 黒色・白色砂粒。	4.5	4.3	0.9	24.6	袋物の破片を内側から打ち欠いて成形。内側は均整な円形に打ち欠かれるが、外面は歪となる。	O14 II a~1層
	9	沖無	播鉢	内外 灰褐色	暗赤褐色。 黒色・白色砂粒・ 赤色粒子。	6.8	6.0	1.2 ~1.6	81.2	播鉢 (I or II 類?) の底部付近を転用したもの。内側から打ち欠いて成形。作りは雑。	M15 II a~1層
	10	瓦	—	内外 明橙褐色	明橙褐色。 黒色・白色砂粒・ 赤色粒子・雲母。	4.2	4.0	1.2	22.4	赤瓦を転用したもの。作りは雑で、内面の一部と外面が大きく割れて歪となる。	レキ充填部 No.1 1層
	11	沖施	碗か皿	内外 灰白色 (光沢あり)	浅黄褐色。 黒色・白色砂粒。	7.0	7.0	2.0	81.8	白化粧を施す碗 (沖施III類) の高台を転用したもの。畳付は釉剥ぎされる。貫入あり。内側からやや雑に打ち欠いて成形。	レキ充填部 No.1~2
	12	沖施	小碗	外面 黒褐色 内面 灰白色 (光沢あり)	明黄褐色。 黒色・白色砂粒。	4.9	4.6	1.6	35.7	黒褐色の釉と白化粧を掛け分ける小碗 (沖施II類) の高台を転用したもの。畳付は釉剥ぎされる。内底面円錐状。内側から雑に打ち欠いて成形。	1トレ I a~b層
	13	沖施	小碗	内外 灰白色 (光沢あり)	明黄褐色。 黒色・白色砂粒。	3.9	4.1	1.4	21.8	白化粧の碗 (沖施III類) で、見込みに花文を施す高台を転用したもの。畳付は釉剥ぎされる。貫入あり。内側からやや雑に打ち欠いて成形。	レキ充填部 No.1 1層

第 19 表 煙管観察一覧

挿図番号 図版番号	部位	材質	全長	法量				観察事項	出土地	
				火皿外径 火皿内径	小口外径 小口内径	口付外径 口付内径	重量			
第 5 1 図 ・ 図 版 5 0	15	雁首	石製?	—	1.9x? 1.1x?	(1.0x1.0)	—	2.0	大半が欠損する。釣鐘状ないし筒状を呈す雁首。火皿にはススが付着する。	ミゾ1 1層
	16	雁首	陶製	2.7	1.4x1.3 1.1x1.0	(1.2x1.2) (0.9x0.9)	—	3.2	火皿上面観方形状。肩は丸味を帯びる。全体に透明釉を施すが、小口は露胎する。	O15 I a層
	17	雁首	陶製	—	—	(1.2x1.2) (0.7x0.7)	—	3.9	火皿の大部分が破損し、小口が欠損する。首部は約0.1cm間隔で調整される。	K12 I a~b層
	18	吸口	木製?	2.6	—	1.3x1.3 1.0x0.9	0.5x0.5 0.2x0.2	2.3	完形。口付がやや肥厚して吸口は括れる。また、肩は丸味を帯びる。緑色系の彩色を施す。	南ミゾレキ 1層
	19	吸口	陶製	—	—	(1.4x1.4) (1.1x1.1)	—	1.3	大半が欠損し、口付の形状は不明。全体に透明釉を施すが、小口は露胎する。	L12~13 II a層
	20	雁首	真鍮製	3.9	0.9x0.9 0.8x0.8	1.1x0.9 1.0x0.8	—	4.0	完形。小口から継ぎ目が若干浮く。上面はやや潰れ、断面は楕円状となる。	O14 I b層
	21	雁首	真鍮製	—	—	1.1x1.1 1.0x0.9	—	11.3	脂反しで破損し、火皿欠損。小口は継ぎ目でやや裂ける。上面は中央でやや潰れる。	1トレ I a~b層
	22	雁首	真鍮製	—	—	1.0x1.0 0.8x0.8	—	3.3	脂反しで破損し、火皿欠損。首部は比較的短い。断面円形状。	O14 I b層

第 20 表 簪観察一覧

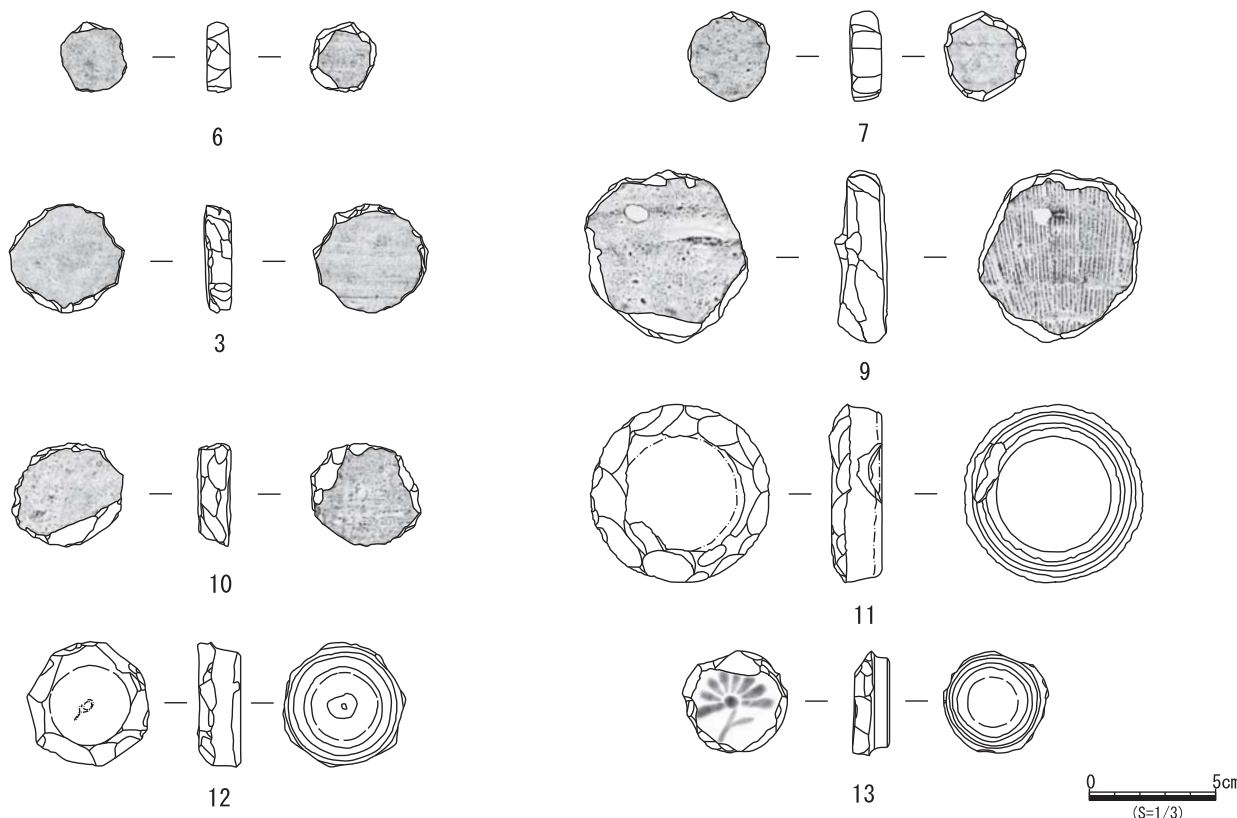
単位：cm、g

挿図番号 図版番号	種類	部位	カブ形状	断面形		法量				観察事項	出土地	
				カブ	竿	カブ 大きさ	カブ 厚さ	竿 厚さ	重量			
第 51 図・ 図版 50	23	副簪	カブ	耳掻き状	半月状	円形状	2.5×0.5	0.2	0.1~0.2	2.3	歪に蛇行する。	L13 II b層
	24	副簪	カブ下端~竿	—	—	円形状	?×0.5	—	0.2~0.3	4.8	竿は先細りとなる。歪に蛇行する。	レキ充填部 No.1 1層
	25	本簪	竿	—	—	方形状	—	—	0.4~0.5	8.0	竿は若干先太りとなる。	南ミソレキ 1層

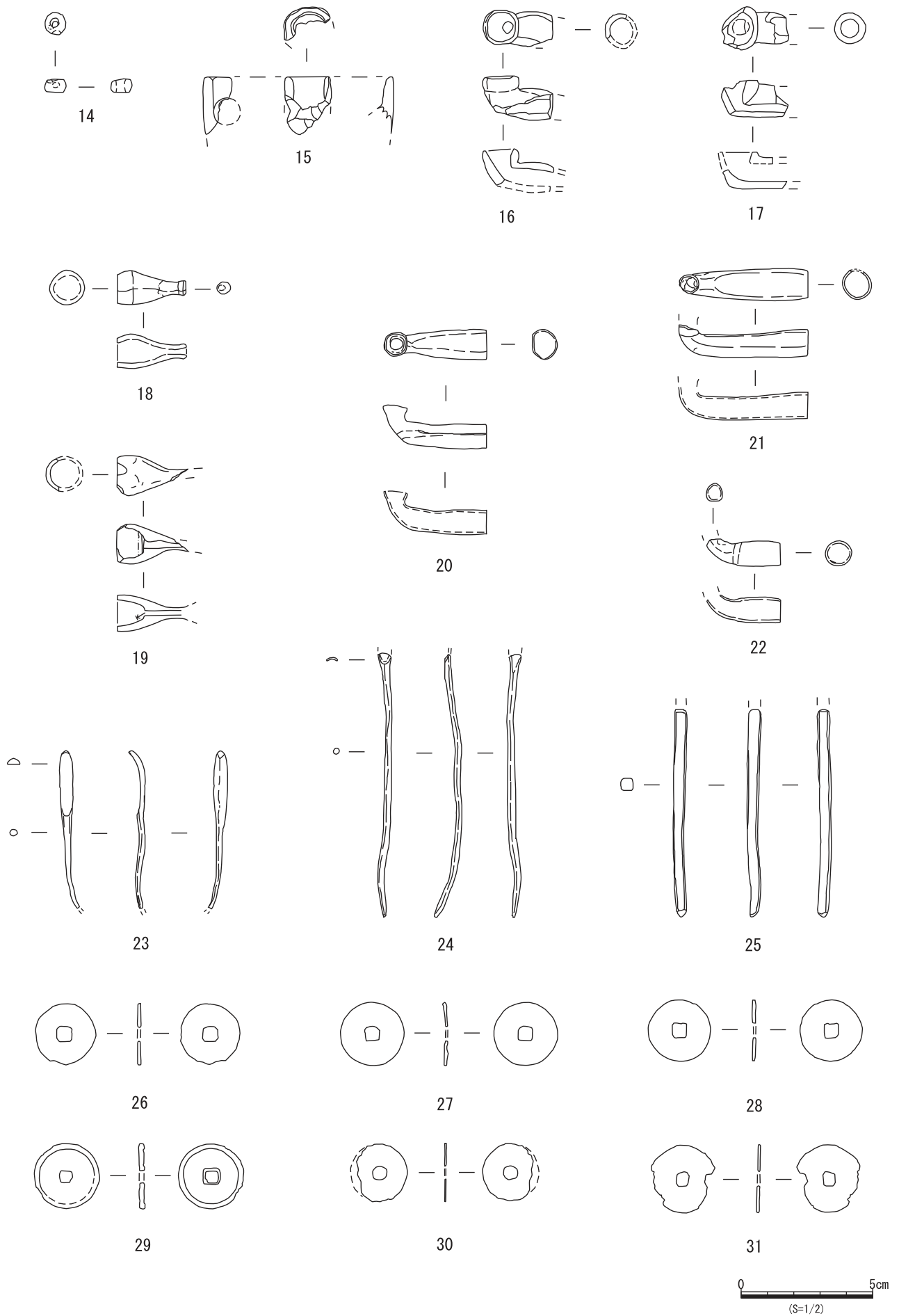
第 21 表 古銭観察一覧

単位：cm、g

挿図番号 図版番号	法量				観察事項	出土地	
	銭径	孔径	銭厚	重量			
第 51 図・ 図版 50	27	2.3×2.3	0.6×0.6	0.1	2.5	サビ等によって有文・無文の別不明。	N16 II a層
	28	2.4×2.4	0.5×0.5	0.1	2.6	サビ等によって有文・無文の別不明。	南ミソレキ 2層
	29	2.4×2.3	0.5×0.5	0.1	3.3	サビ等によって有文。判読不可。	N15 I b層
	30	2.5×2.5	0.5×0.5	0.2	3.1	サビ等によって有文か。判読不可。	M14 No.88 直上 (次年度報告予定)
	31	2.2×2.1	0.5×0.5	0.1	0.8	サビ等によって有文・無文の別不明。状態悪い。表面剥離。	南ミソレキ 2層
	26	2.6×?	0.5×0.5	0.1	1.5	サビ等によって有文・無文の別不明。状態悪い。	M14 No.37 3層 (次年度報告予定)



第 50 図 その他の遺物 1 円盤状製品



第 51 図 その他の遺物 2 ビーズ (14)、煙管 (15 ~ 22)、簪 (23 ~ 25)、古銭 (26 ~ 31)

第IV章 自然科学分析調査の成果

はじめに

宜野湾市に所在する嘉数トゥンヤマ遺跡では、これまでの発掘調査により、近世とされる焼物が出土している。これらは、素焼きのアカムヌーと無釉陶器および施釉陶器などに分類され、いずれも沖縄本島において生産されたものと考えられており、特に陶器は、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器と称されている。本報告では、嘉数トゥンヤマ遺跡から出土したアカムヌー、沖縄産と想定された瓦質土器、沖縄産無釉陶器および沖縄産施釉陶器の各焼物を対象とし、その材質(胎土)について、自然科学の手法を応用した分析を行い、その特性を把握する。ここでは、その特性として、胎土中に認められた鉱物片や岩石片の組成を用い、それらの由来する地質学的背景を推定し、周辺地域や沖縄本島の地質との比較を行うことにより、特に製作地域に関わる検討をする。

1. 試料

試料は、嘉数トゥンヤマ遺跡から出土した近世の焼物の破片 31 点である。内訳は、アカムヌーが 8 点と沖縄産と思われる瓦質土器 2 点、沖縄産無釉陶器 10 点と、沖縄産施釉陶器が 11 点である。各試料の器種や発掘調査所見による分類等は、一覧にして第 22 表に示す。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料の中でもアカムヌーや沖縄産無釉陶器のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる焼物の分析では、鉱物組成や岩片組成を求める方法の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。その方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか(1999)の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での製作事情の解析も可能である。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径 0.5mm 以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の 3 次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

薄片観察により計数した鋳物片および岩石片の粒径別の割合を第 52 図～第 54 図に示す。試料全体に共通して、胎土中の砂粒の主体は細砂径以下の石英である。また、石英に次いで多い砂粒として、斜長石の鋳物片を含む試料が多く、さらに試料によってはカリ長石を比較的多く含む胎土も認められる。これら 3 つの鋳物片以外の鋳物片や岩石片は、いずれの試料においても少量～微量である。しかし、胎土の由来となる地質を推定する場合には、少量～微量の鋳物片や岩石片の種類が指標となる。今回の試料では、鋳物片および岩石片の種類構成から、以下の胎土分類が設定できる。

第 22 表 胎土分析試料一覧および胎土分類

種類	器種	分類	図番号	胎土分類							
				I				II	III	IV	
				a	b	c	d			a	b
アカムヌー	鍋	II b類	12								
	火炉	I 類	36								
	火炉	II a類	41								
	火炉	V 類	50								
	急須	II 類	33								
	鉢	I b類	20								
	播鉢	—	27								
	その他	筒状把手	54								
瓦質土器	火鉢	—	1								
	蓋	—	3								
沖縄産 無釉陶器	壺	II a類	3								
	壺	IV 類	9								
	壺	III 類	6								
	甕	III 類	14								
	鉢	I a類	28								
	鉢	III 類	31								
	播鉢	I a類	16								
	播鉢	IV 類	24								
	火炉	—	37								
	急須	—	36								
沖縄産 施釉陶器	碗	I 類灰釉	4								
	碗	I 類鉄釉	12								
	碗	I 類黒釉	16								
	碗	III類白化粧	19								
	碗	III類白化粧	26								
	鉢	I 類	51								
	鉢	II 類	49								
	急須	I 類	63								
	香炉	I 類鉄釉	70								
	鍋	I 類鉄釉	81								
	鍋	II 類白化粧	85								

I 類: チャートや頁岩および砂岩の堆積岩類が比較的多く、これに千枚岩あるいは粘板岩といった変成岩類を伴う組成。石英および長石類以外の鉱物片では、角閃石や黒雲母を含むものが多い。なお、I 類の試料によっては、他に伴う鉱物片や岩石片の種類あるいは割合が異なるため、以下のように細分した。

I a 類: I 類の典型的な組成とする。

I b 類: 流紋岩・デイサイトの岩石片を少量含む。

I c 類: 凝灰岩および花崗岩類の岩石片を少量含む。また、カリ長石の鉱物片が多く、斜長石の鉱物片が微量であることも本類の特徴である。

I d 類: 岩石片の種類構成は I a 類と同様であるが、石英・カリ長石・斜長石の 3 鉱物片の量比が近似する特徴により分類した。

II 類: 岩石片はチャートや頁岩など堆積岩類のみであり、他に多結晶石英を伴う。また、鉱物片ではカリ長石がほとんど含まれない。

III 類: 岩石片はチャートと凝灰岩および多結晶石英から構成され、変成岩類は含まれない。なお鉱物片は石英が突出して多く、微量のカリ長石と斜長石を含む。

IV 類: 岩石片はチャートおよび多結晶石英のみしか含まれない。鉱物片は石英が多いことと微量の黒雲母を伴うことは共通するが、斜長石を微量～少量伴う試料と斜長石を含まない試料とに細分される。ここでは前者を IV a 類、後者を IV b 類とする。また、IV 類の特徴として、黒雲母が非晶質化していることとムライトの晶出が顕微鏡下で認められることがあげられる。これらの特徴は、焼成温度が 1000℃を超える高温であったことを示している。

各試料の胎土分類は、試料一覧の第 22 表に併記する。アカムヌー試料 8 点のうち、4 点が I a 類に分類され、2 点が II 類に分類された。他に I b 類と I c 類が各 1 点ずつあった。沖縄産無釉陶器でも I a 類が 4 点と最も多く、次いで I d 類が 3 点あり、他に II 類が 2 点と I c 類が 1 点であった。沖縄産施釉陶器は全点ともに IV 類である。そのうち IV a 類が 8 点と多く、IV b 類は 3 点であった。上述したように IV 類は 1000℃を超える高温焼成を示す胎土であり、沖縄産施釉陶器が、アカムヌーや沖縄産無釉陶器とは焼成条件が異なっていたことを示唆している。

4. 考察

今回の試料では、大きく 4 種類の胎土が分類された。分類の基準とした岩石片の種類構成は、焼物の原材料である砂や粘土の採取地の地質学的背景を示している。したがって、今回の試料からは、地質学的背景の異なる 4 つの地域の原材料採取地が想定される。

I 類については、千枚岩および粘板岩の変成岩類が、その由来する地質の有効な指標となる。千枚岩および粘板岩は、沖縄本島を構成する主要な地質の一つである名護層の主体をなす岩石である。名護層は、中生代白亜紀の形成とされ、沖縄本島の北部から中部(恩納村付近)の西岸沿いに広く分布している(木崎編,1985)。一方、I 類の主たる構成要素である堆積岩類は、形成年代は地域により異なるが、沖縄本島全域に分布している。なお、チャートについては、沖縄本島における岩石としての分布は、本部半島にほぼ限定されるが、砂粒としてのチャートは沖縄本島南部の砂岩中にも含まれている。実際に氏家・兼子(2006)は、沖縄本島中・南部に広く分布する新第三紀の地層である島尻層群を構成する中城砂岩部層の砂岩碎屑物中にチャートを確認している。いずれにしても、変成岩類を含む砂あるいは粘土の分布は、名護層の分布域内であると考えられるから、I 類の原材料採取地は、沖縄本島北部から中部までの西岸沿いという地域を推定す

ることができる。

なお、Ⅰ類を細分類した岩石片のうち、Ⅰb類の特徴とした流紋岩・デイサイトは、おそらく名護層分布域に貫入する火山岩の岩脈に由来すると考えられる。岩脈の分布域は名護市から大宜味村までの西岸沿いに及んでおり、Ⅰb類の地域性もこの範囲に入る可能性がある。Ⅰc類は凝灰岩および花崗岩類を特徴とし、またカリ長石の多いことも特徴となる。これらのうち、凝灰岩は基質がガラス質で比較的新鮮であることから、新第三紀～第四紀の凝灰岩層に由来すると考えられる。沖縄本島では、新第三紀中新世～第四紀更新世の堆積岩からなる島尻層群中に多数の凝灰岩層が挟まれていおり、Ⅰc類の凝灰岩もこれに由来する可能性がある。ただし、島尻層群の分布は沖縄本島南部であり、上述した名護層の分布域よりも南側になる。したがって、Ⅰc類の地域性の可能性としては、名護層の南限と島尻層群の北限の接する読谷村～沖縄市～うるま市付近を想定することができる。なお、Ⅰc類の花崗岩類については、沖縄本島における広域の分布は認められていない。胎土中で認められた花崗岩類の岩石片は粒径が小さいことと円磨された外形および微量であることなどから、島尻層群を構成する堆積岩中に含まれる大陸起源の花崗岩類に由来する碎屑物である可能性がある。さらにⅠd類については、その特徴としたカリ長石の由来は花崗岩類あるいは流紋岩類などの岩石が考えられる。Ⅰd類に分類した沖縄産無釉陶器図番号6には花崗岩類の岩石片が認められていることを考慮すれば、カリ長石も花崗岩類に由来する可能性がある。その場合、花崗岩類については、上述したⅠc類と同様の事情が考えられることから、Ⅰd類の地域性についてもⅠc類とほぼ同様に考えることができる。

Ⅱ類の地域性については、その特徴である堆積岩類の分布は沖縄本島全域に及び、Ⅰ類で地域を示す指標となった変成岩類のような岩石がないことから、現時点では特定はできない。一方、Ⅲ類については、その特徴とした凝灰岩が、上述したⅠc類の凝灰岩と同様の由来であると考えられることから、島尻層群の分布する沖縄本島南部の地域性が想定される。

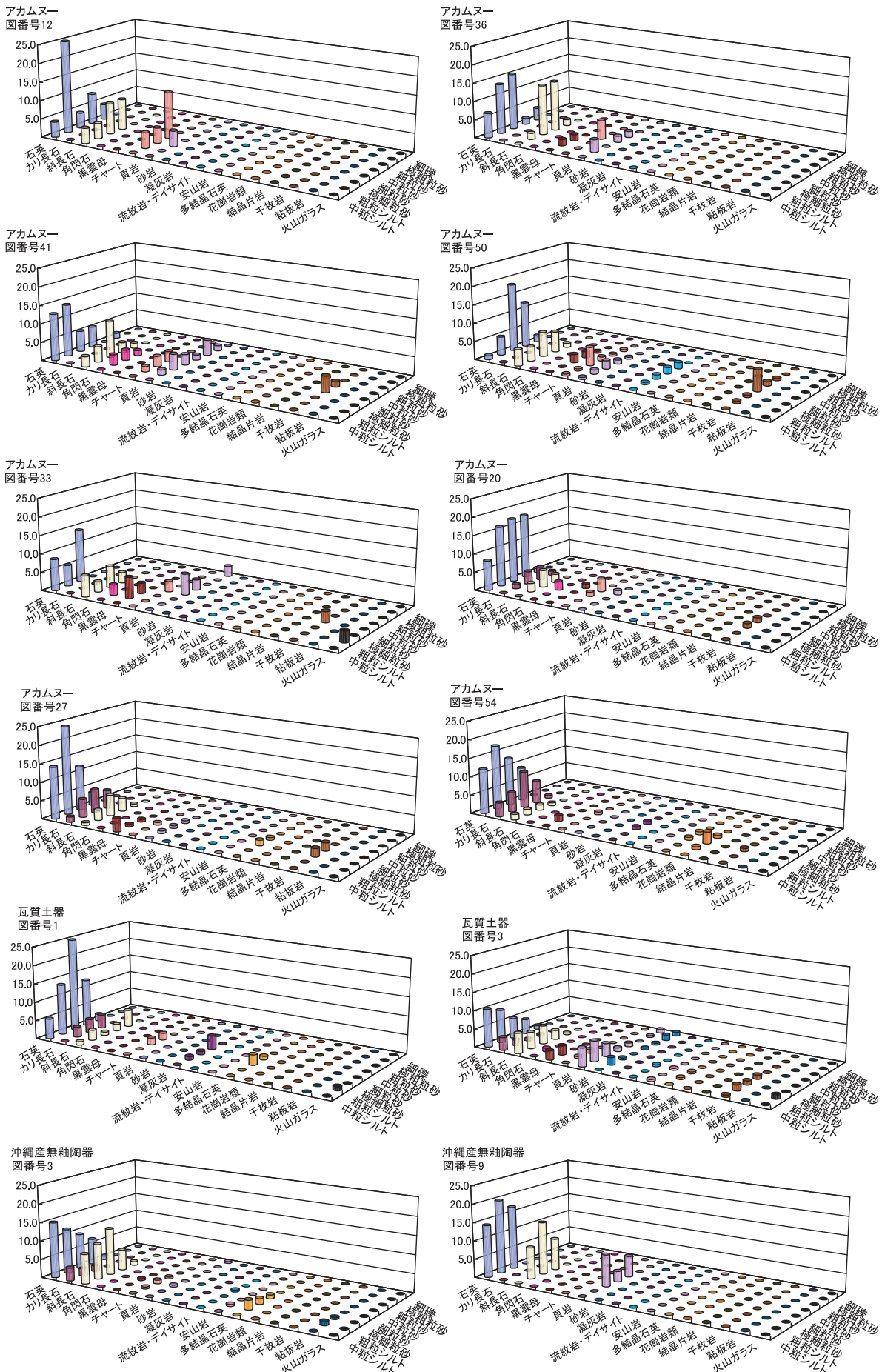
Ⅳ類は、施釉陶器に対応する胎土である。Ⅳ類の特徴は、鉍物片や岩石片の種類よりも高温焼成の状況が確認されることで他の胎土とは区別される。このような高温焼成の胎土の場合、胎土中の鉍物片や岩石片が変質や溶失を起こしていることもあることから、焼成前の素地土の鉍物片あるいは岩石片の種類構成は、Ⅳ類で認められたそれとは異なる可能性もある。現時点では、Ⅳ類には明らかに沖縄本島には産しないというような鉍物あるいは岩石は認められていないため、沖縄本島産ということに矛盾はない。今後、このような高温焼成の焼物については、蛍光X線分析などを用いた化学組成による検討も加える必要があると考える。

引用文献

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—,日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.

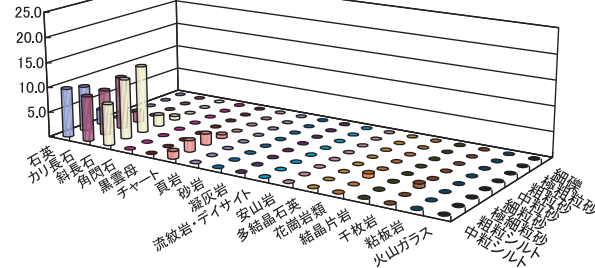
木崎甲子郎編著,1985,琉球弧の地質誌.沖縄タイムス社,278p.

氏家 宏・兼子尚知,2006,那覇及び沖縄市南部地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1図幅),産総研地質調査総合センター,48p.

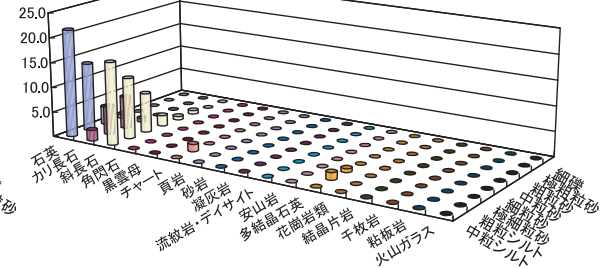


第 52 図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%)

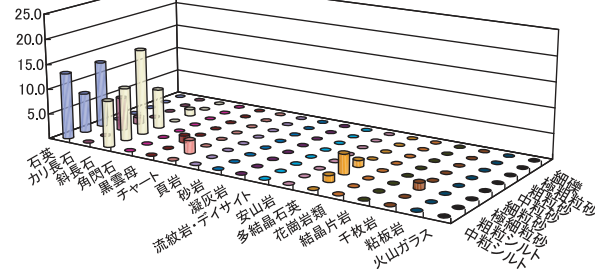
沖縄産無軸陶器
図番号6



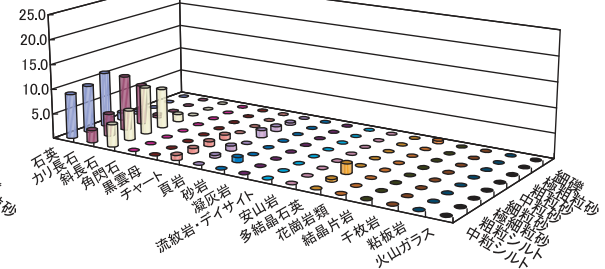
沖縄産無軸陶器
図番号14



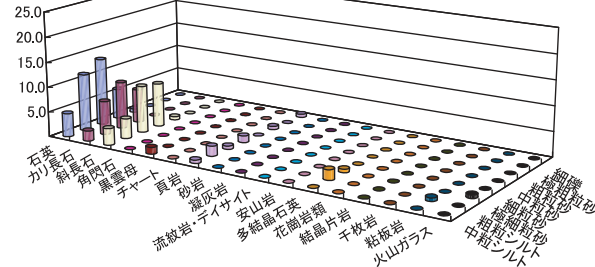
沖縄産無軸陶器
図番号28



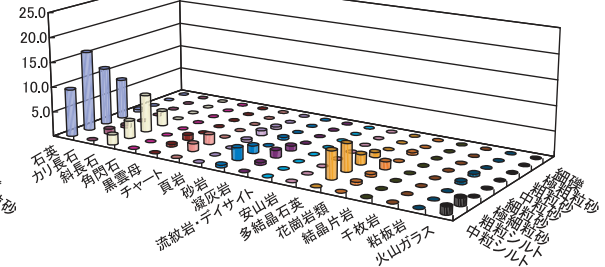
沖縄産無軸陶器
図番号31



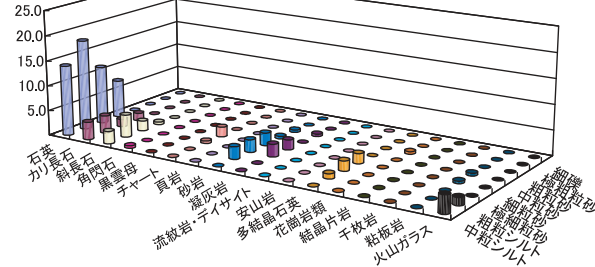
沖縄産無軸陶器
図番号16



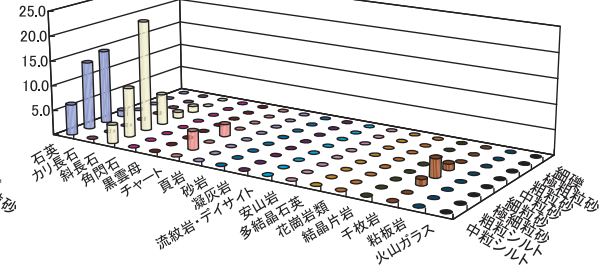
沖縄産無軸陶器
図番号24



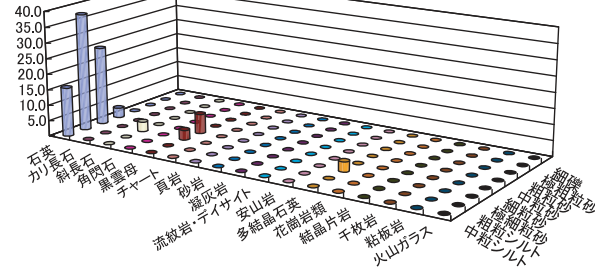
沖縄産無軸陶器
図番号37



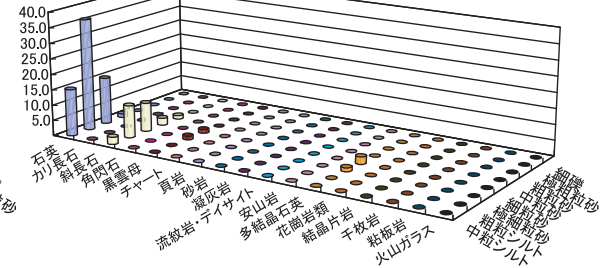
沖縄産無軸陶器
図番号36



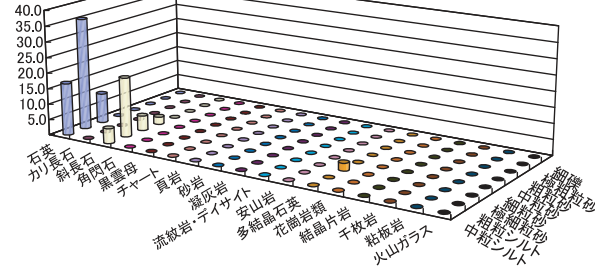
沖縄産施軸陶器
図番号5



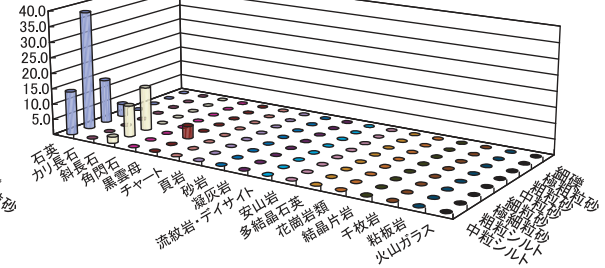
沖縄産施軸陶器
図番号12



沖縄産施軸陶器
図番号16

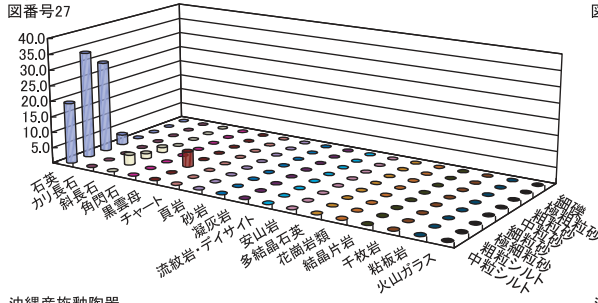


沖縄産施軸陶器
図版外

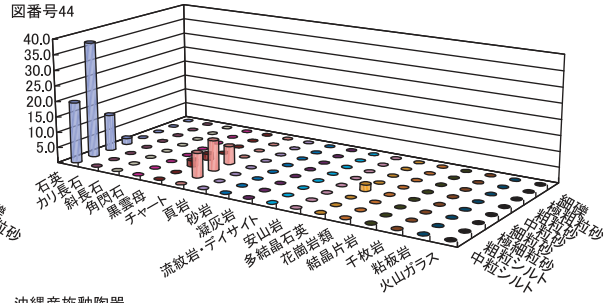


第 53 図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%)

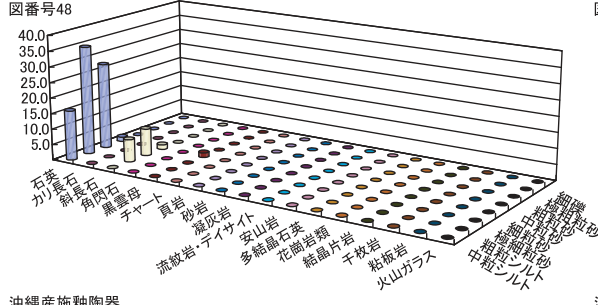
沖縄産施釉陶器
図番号27



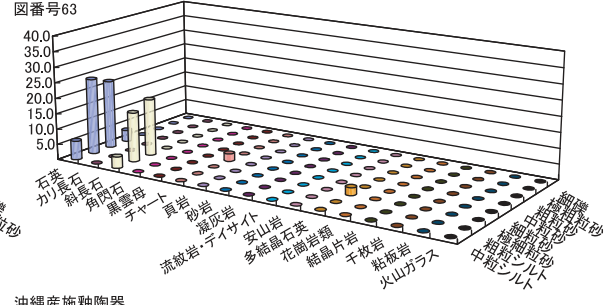
沖縄産施釉陶器
図番号44



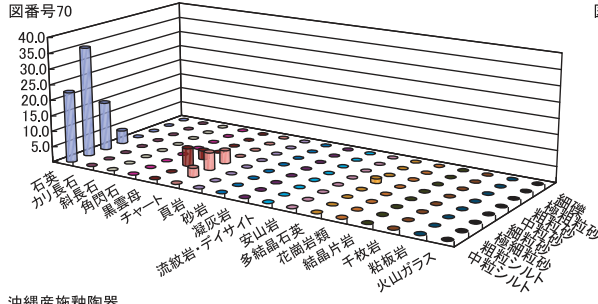
沖縄産施釉陶器
図番号48



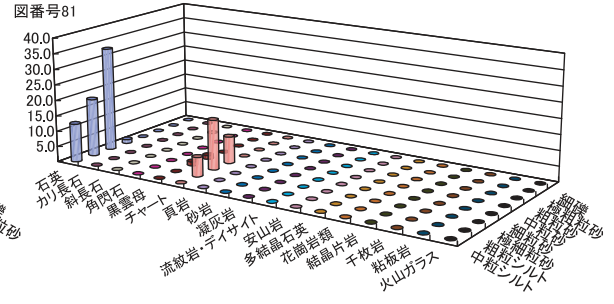
沖縄産施釉陶器
図番号63



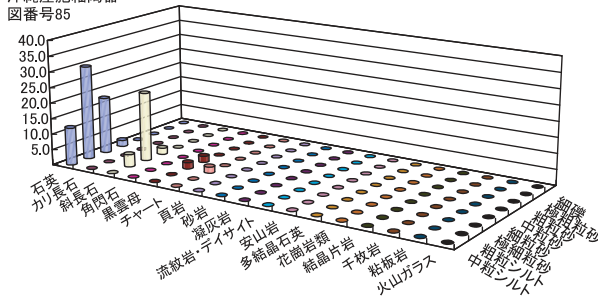
沖縄産施釉陶器
図番号70



沖縄産施釉陶器
図番号81



沖縄産施釉陶器
図番号85



第 54 図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%)

第V章 結語

嘉数タウンヤマ遺跡は宜野湾市嘉数の聖地「嘉数タウンヤマ」といわれる丘陵の裾に立地している。今回の調査地点は「嘉数タウン」や「地頭火の神」の祠が隣接し、遺跡の南側には近世来の地割制集落である嘉数区が位置していることから、グスク時代から近世集落の形成に係る成果が期待された。しかし、同地は耕作や重機による掘削を受けており、従来の包含層は消失し遺構は攪乱を免れた地山上に残るのみであった。

発掘調査により確認された遺構は溝状礫敷遺構、溝状遺構、土坑群などで、遺物はグスク時代から近代までの土器や陶磁器が得られている。特に溝状礫敷遺構の造成時に遺構内に充填された沖縄製陶器は数量、器種、復元資料とも突出しており、近世末の村落における沖縄製陶器の組成を把握する上で重要な事例である。今回の報告書では近世以降の沖縄製陶器を中心に、関連する遺構を報告する。

遺 構 沖縄製陶器が集中的に出土した遺構は北溝状礫敷遺構、南溝状礫敷遺構、レキ充填部No.1、レキ充填部No.2で、南溝状礫敷遺構には溝3が連結している。南・北溝状礫敷遺構の基本的構造は丘陵の傾斜軸を横に切り、並列して構築している。溝内には石灰岩礫と沖縄製陶器を充填している。両溝にはそれぞれに石灰岩基盤を掘削した土坑（レキ充填部No.1・No.2）が伴い、これにも礫と沖縄製陶器が充填されている。また、南溝状礫敷遺構には丘陵の傾斜に沿った溝3が連結している。礫・陶器の充填は溝上面が埋没しても溝内は礫と陶器の充填により隙間が多く水流を妨げない濾過機能がある。レキ充填部は排水柵、溝3は排水溝で、丘陵からの雨水を丘陵下の南・北溝状礫敷遺構で受けとめ、レキ充填部と溝3に排水する機能が考えられる。第3図の明治土地台帳付属地図の嘉数村全図には他の村にはほとんど見られない水路が多く記載されている。石灰岩堤を背後にする嘉数村は古くから丘陵からの雨水の管理に苦心しており、旧道沿いに排水路を設置し処置していたという。本調査区の西側の旧道沿いにも水路が記載されており、溝3もほぼ同位置にある。

遺 物 近世以降の人工遺物は18666点が出土した。その約58%にあたる10887点をアカムヌーが占める。範囲確認調査で得られた資料を加えると、13943点である。これは、一遺跡からの出土量としては際立って多いと言える。そして、今次調査では当該資料の約43%がレキ充填土坑No.1から出土した。その他の沖縄産陶器も当該土坑から多く得られており、その出土割合は本報告で扱った遺物の約37%に相当する。次いで、遺構では南北の溝状礫敷遺構からの出土量が多く、遺物の約19%にあたる。このうち、南溝状礫敷遺構からの出土量が北溝状礫敷遺構のそれを大きく上回る。なお、レキ充填土坑No.2での出土割合は、約3%に止まる。また、溝1～3における出土割合は全体でも約1%となっており、出土量は最も少ない。

当該遺跡のみならず、県内遺跡における出土状況からも目を見張る量が出土したアカムヌーは、鍋や急須の出土量が最も多い。中でも鍋は、様々な容量の資料が出土しており特徴的である。また、沖縄産陶器で最も特徴的な出土状況が窺えたものは播鉢である。多様な種類が得られており、概ね安里進による編年に沿う変遷が認められる。これらはレキ充填土坑No.1で多く出土しているが、播鉢が長年に亘って当該土坑に投棄されたとは言えない。これらは前述された目的で、一括投棄されたと考えるのが妥当である。

一般に、沖縄産施釉陶器は高温焼成に耐え得るように、無釉陶器やアカムヌーとは異なる陶土が使用されていることが知られるが、これは今回の胎土分析の結果からも示された。また、無釉陶器とアカムヌーの陶土は大きく異ならないため、胎土分析でもその違いは明確ではない。そのため、両者を分ける基準は焼成の仕方と考えられる。そのため本報告では、焼成不良の無釉陶器と思われる資料も便宜的にアカムヌーとして整理したが、これについては今後検討が必要である。なお、胎土分析の目的の1つに、各器種における陶土の選別の有無を考慮したが、これについては大きな差を認めることはできなかった。

参考文献

- 安里 進・上原政昌・家田淳一 1987「播鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『あじま』
(名護博物館紀要3) 名護博物館
- 新垣 力 2000「モデルとコピーの視点からみた窯業開始期の沖縄」『南東考古』第19号 沖縄考古学会
- 新垣 力 2002「第V章 第11節 沖縄産無釉陶器」『首里城跡 - 継世門周辺地区発掘調査報告書 - 』
(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第9集) 新垣力編 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣 力 2002「第5章 第11節 沖縄産無釉陶器」『首里城跡 - 城郭南側下地区発掘調査報告書 - 』
(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第19集) 知念隆博・新垣力編 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 大城精徳 1983「上焼」『沖縄大百科事典』中巻 (株)沖縄タイムス社
- 金城亀信 1995「瓦質土器」『湧田古窯跡』II (沖縄県文化財調査報告書第121集) 沖縄県教育委員会
- 島袋まき子 2004「荒焼の呼称について - 陶工からの聞き取りをもとに - 」『壺屋焼物博物館紀要』
第5号 那覇市立壺屋焼物博物館
- 下中直人編 1984『やきもの事典』(株)平凡社
- 城間 肇ほか 2008『嘉数タウンヤマ遺跡 I - 範囲確認調査報告書 - 』(宜野湾市文化財調査報告書第
43集) 城間肇編 宜野湾市教育委員会
- 瀬戸哲也 2004a「沖縄出土の本土系瓦質土器について」『グスク文化を考える - 世界遺産国際シンポジ
ウム〈東アジアの城郭遺跡を比較して〉の記録 - 』今帰仁村教育委員会
- 瀬戸哲也 2004b「本土系瓦質土器の産地についての補論 - 北部九州の瓦質土器と比較して - 」『沖縄埋
文研究』2 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 曾根信一 1983「アカムヌー」『沖縄大百科事典』上巻 (株)沖縄タイムス社
- 知念隆博・新垣 力 2003「第IV章 層序と遺構」「第V章 遺物」『御茶屋御殿跡 - 遺構確認調査報告書 - 』
(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第17集) 知念隆博・新垣力編 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 宮城篤正 1983「荒焼」『沖縄大百科事典』上巻 (株)沖縄タイムス社
- 山本正昭・上田圭一・矢作健二・石岡智武 2007「首里城跡御内原西地区発掘調査出土瓦の胎土分析と
その検証」沖縄県立埋蔵文化財センター

図 版



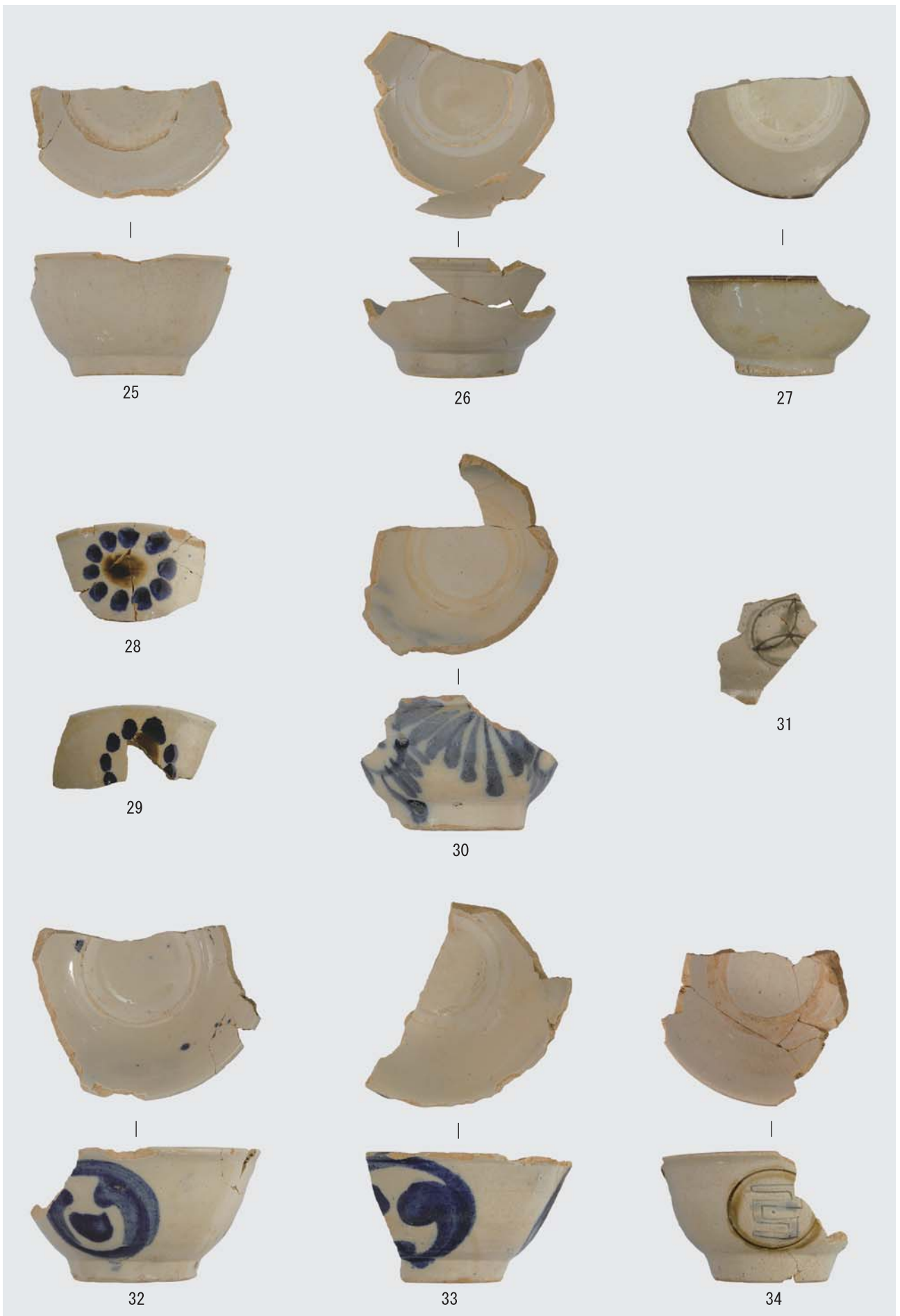
図版6 沖縄産施釉陶器 1 碗



图版7 沖縄産施釉陶器2 碗



図版 8 沖縄産施釉陶器 3 碗



図版9 沖縄産施釉陶器4 碗

0 5cm



図版 10 沖縄産施釉陶器 5 小碗



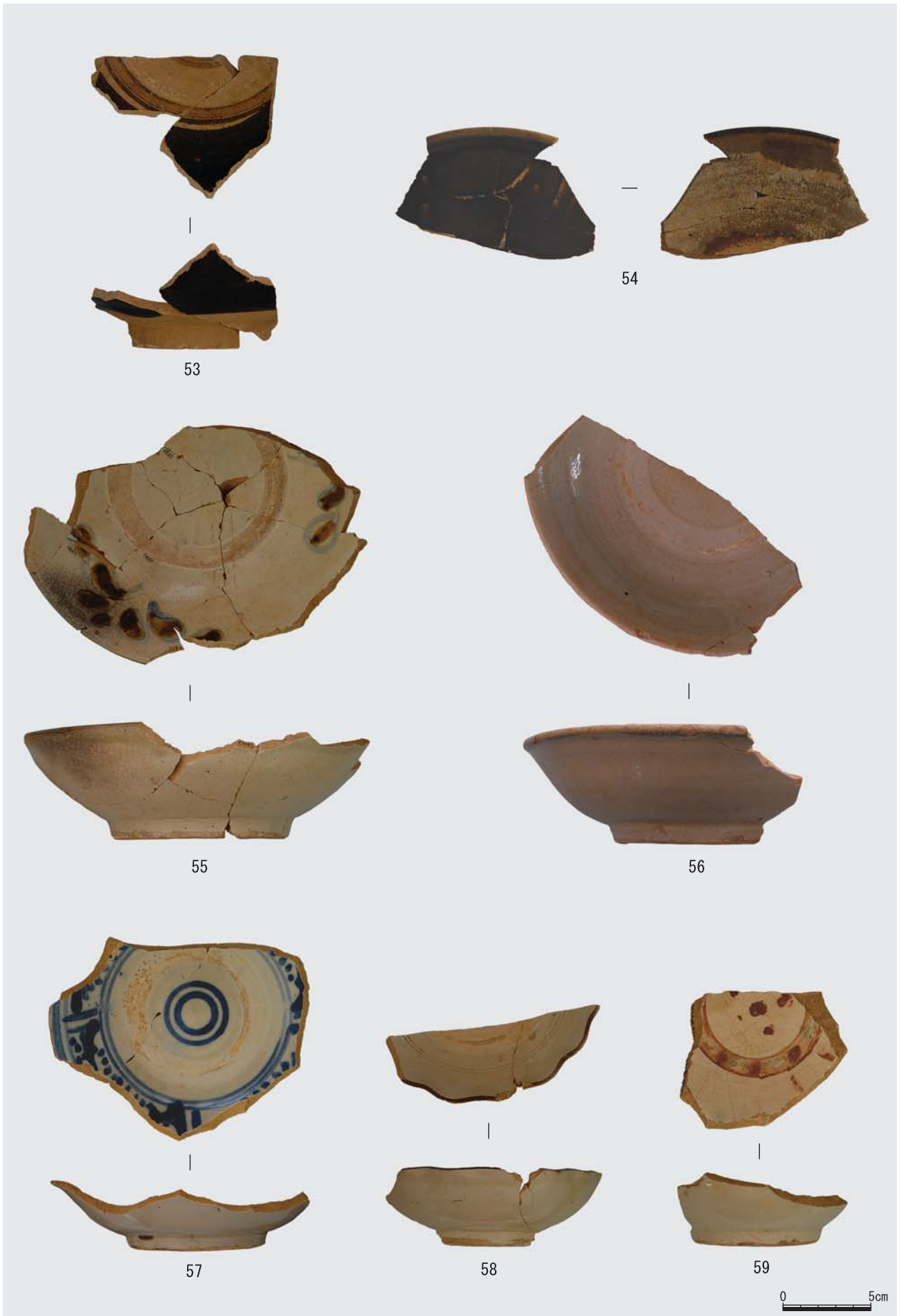
図版 11 沖縄産施釉陶器 6 鉢



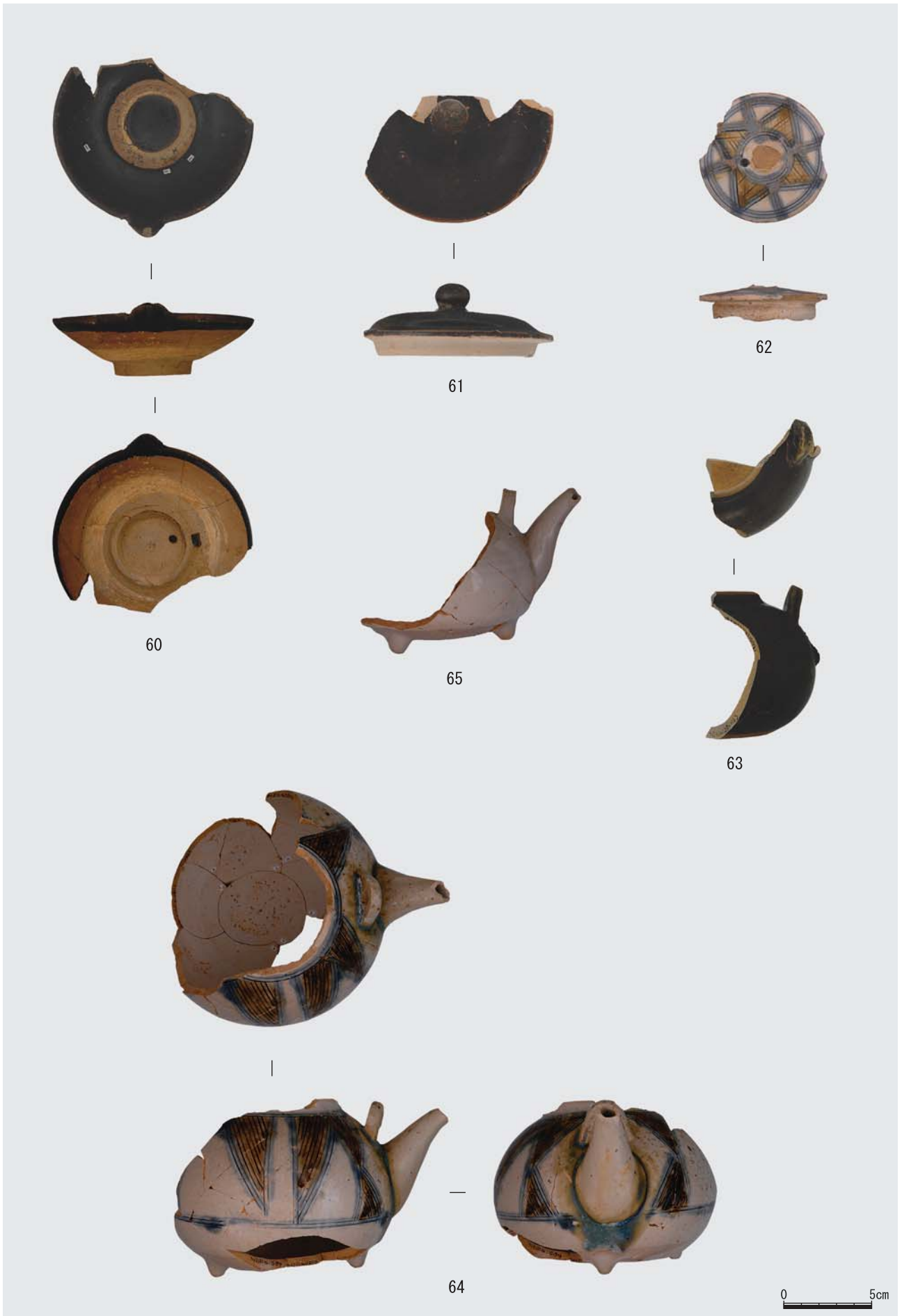
図版 12 沖縄産施釉陶器 7 鉢



図版 13 沖縄産施釉陶器 8 鉢



図版 14 沖縄産施釉陶器 9 III



図版 15 沖縄産施釉陶器 10 灯明皿 (60)、急須蓋 (61～62)、急須 (63～65)



図版 16 沖縄産施釉陶器 11 瓶 (66～67)、瓶子 (68～69)、香炉 (70～72)、花生け (73)



図版 17 沖縄産施釉陶器 12 火入れ (74 ~ 78)、酒器 (79 ~ 80)



図版 18 沖縄産施釉陶器 13 鍋 (81 ~ 85)、安瓶 (86 ~ 87)、壺 (88 ~ 90)



図版 19 沖縄産無釉陶器 1 壺



3



4



5



図版 20 沖縄産無釉陶器 2 壺



|



11



|



12



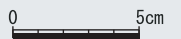
図版 21 沖縄産無釉陶器 3 甕



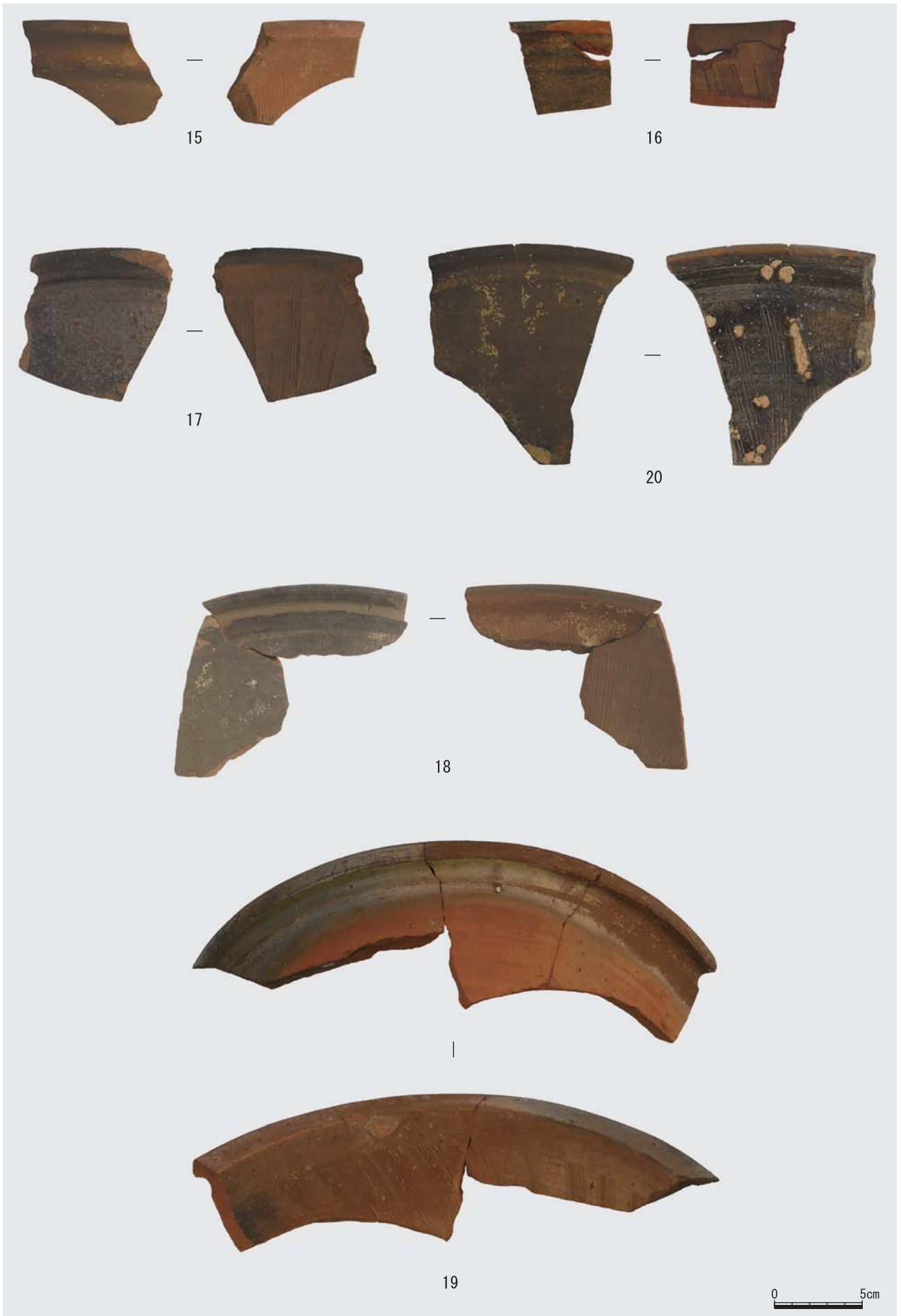
13



14



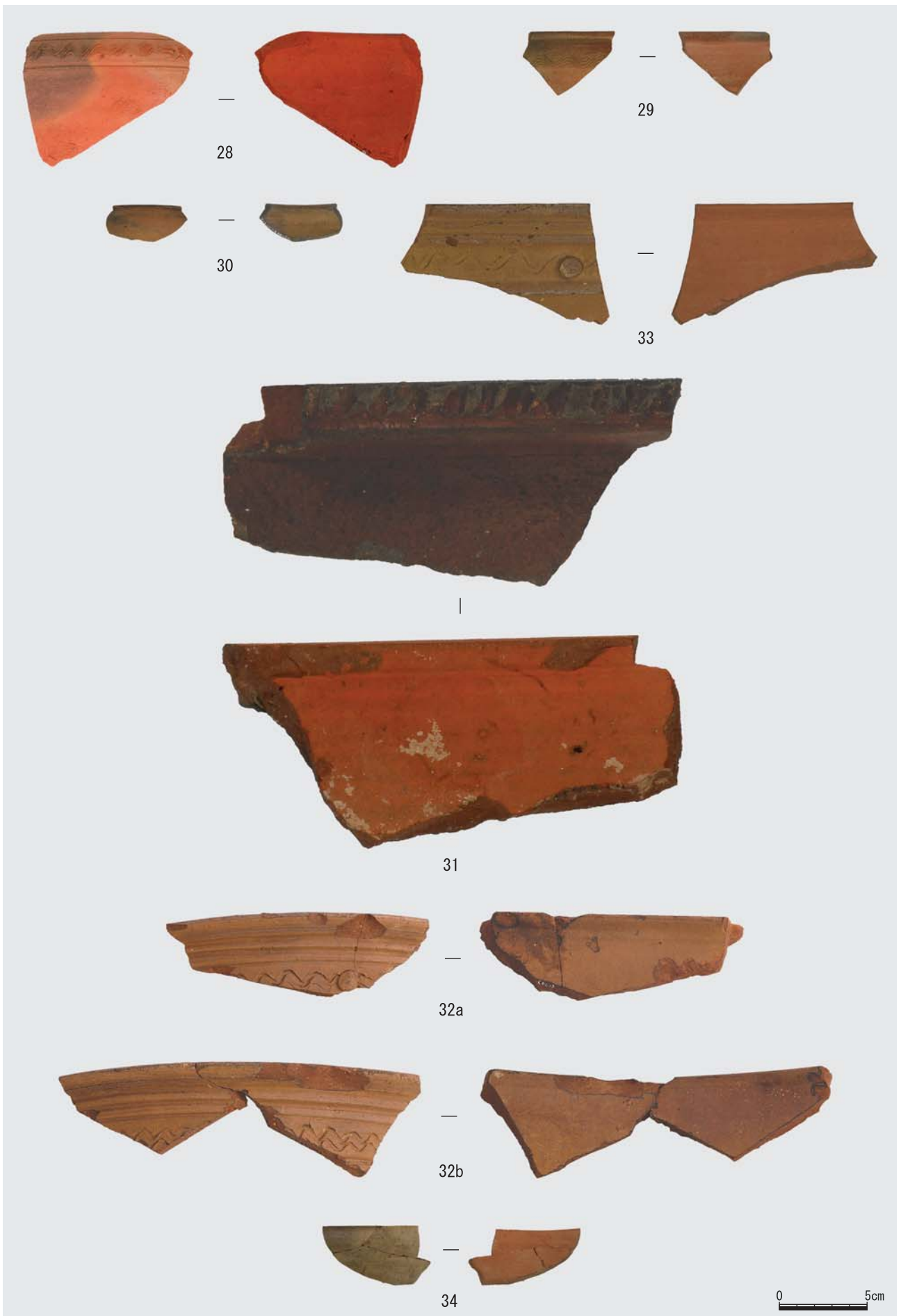
図版 22 沖縄産無釉陶器 4 甕



図版 23 沖縄産無釉陶器 5 播鉢



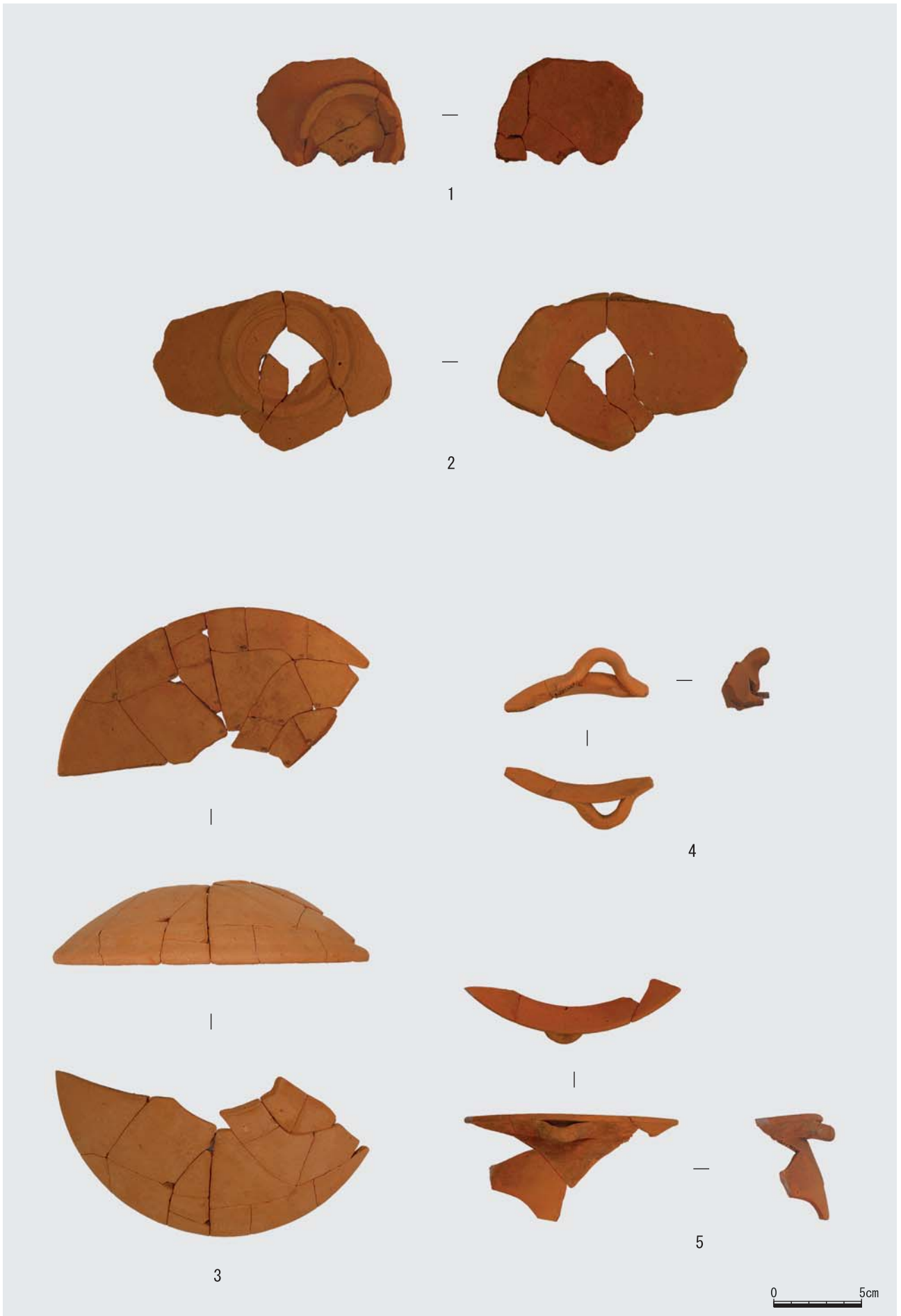
図版 24 沖縄産無釉陶器 6 播鉢



図版 25 沖縄産無釉陶器 7 鉢



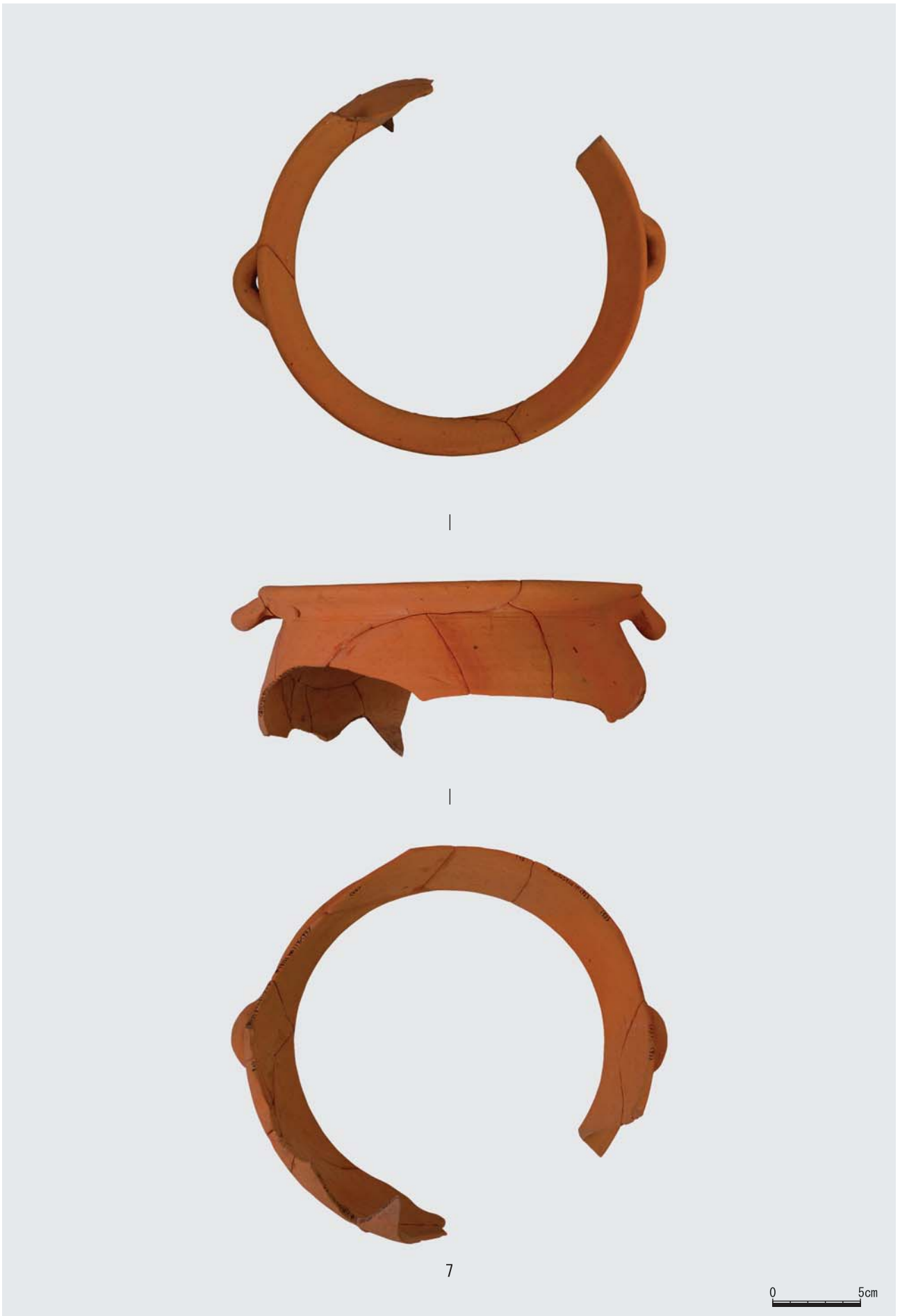
図版 26 沖縄産無釉陶器 8 皿? (35)、急須 (36)、火鉢 (37～38)、蓋 (39)、火入れ (40～41)



図版 27 アカムヌー1 鍋蓋 (1~3)、鍋 (4~5)



図版 28 アカムヌー 2 鍋



図版 29 アカムヌー 3 鍋



図版 30 アカムヌー 4 鍋



図版 31 アカムヌー 5 鍋



図版 32 アカムヌー6 鍋



図版 33 アカムヌー7 鍋



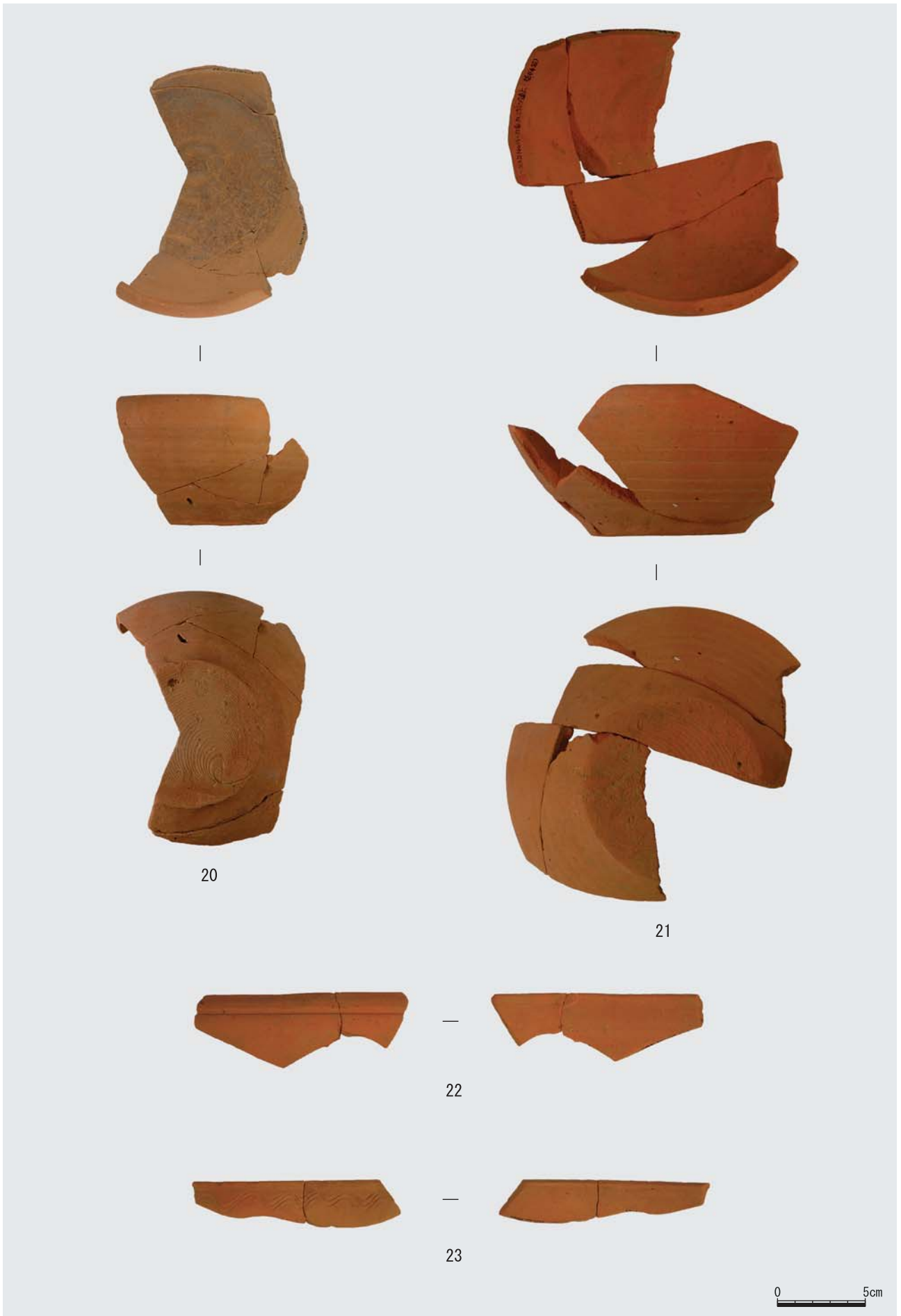
図版 34 アカムヌー 8 鍋



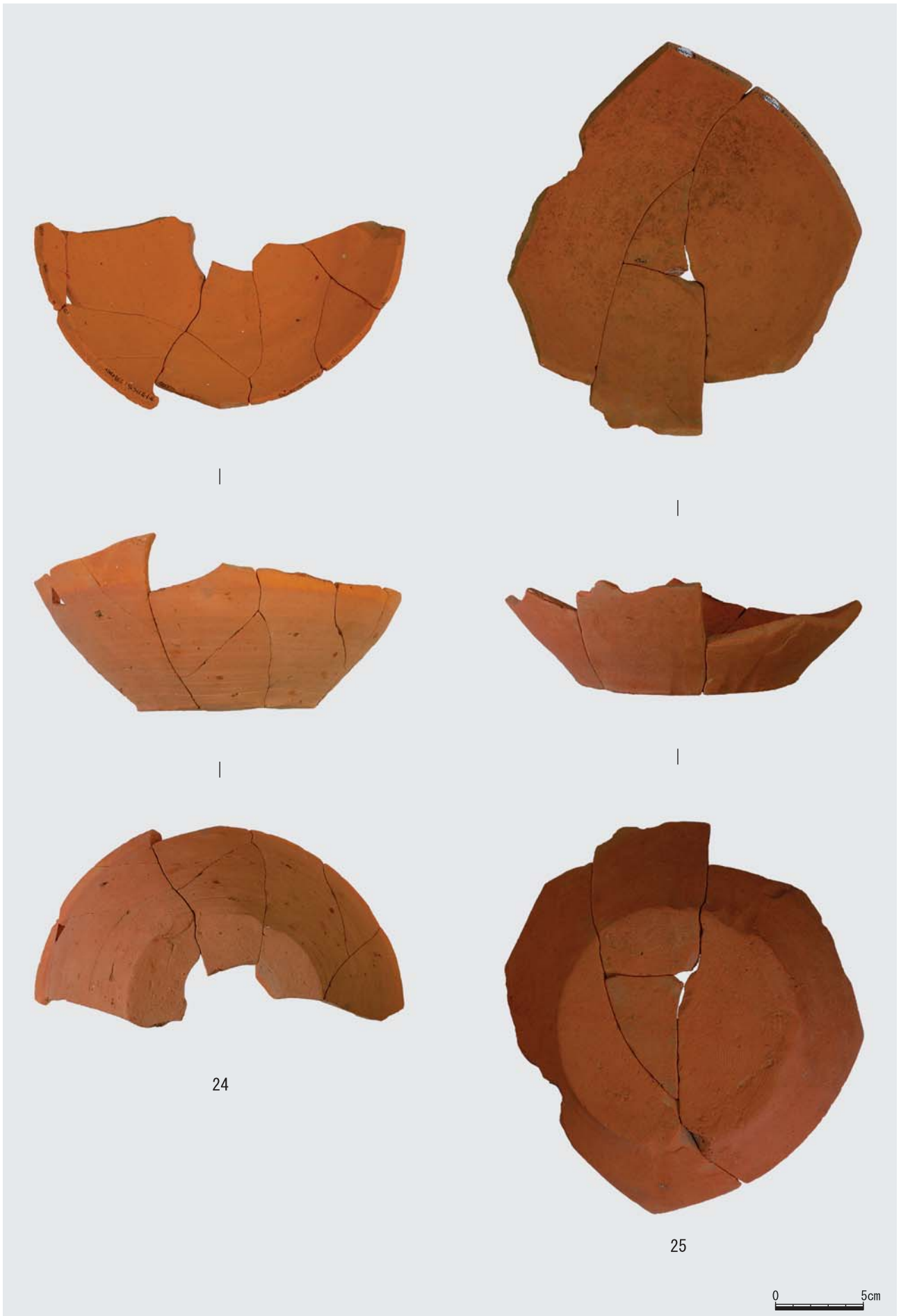
図版 35 アカムヌー9 鍋



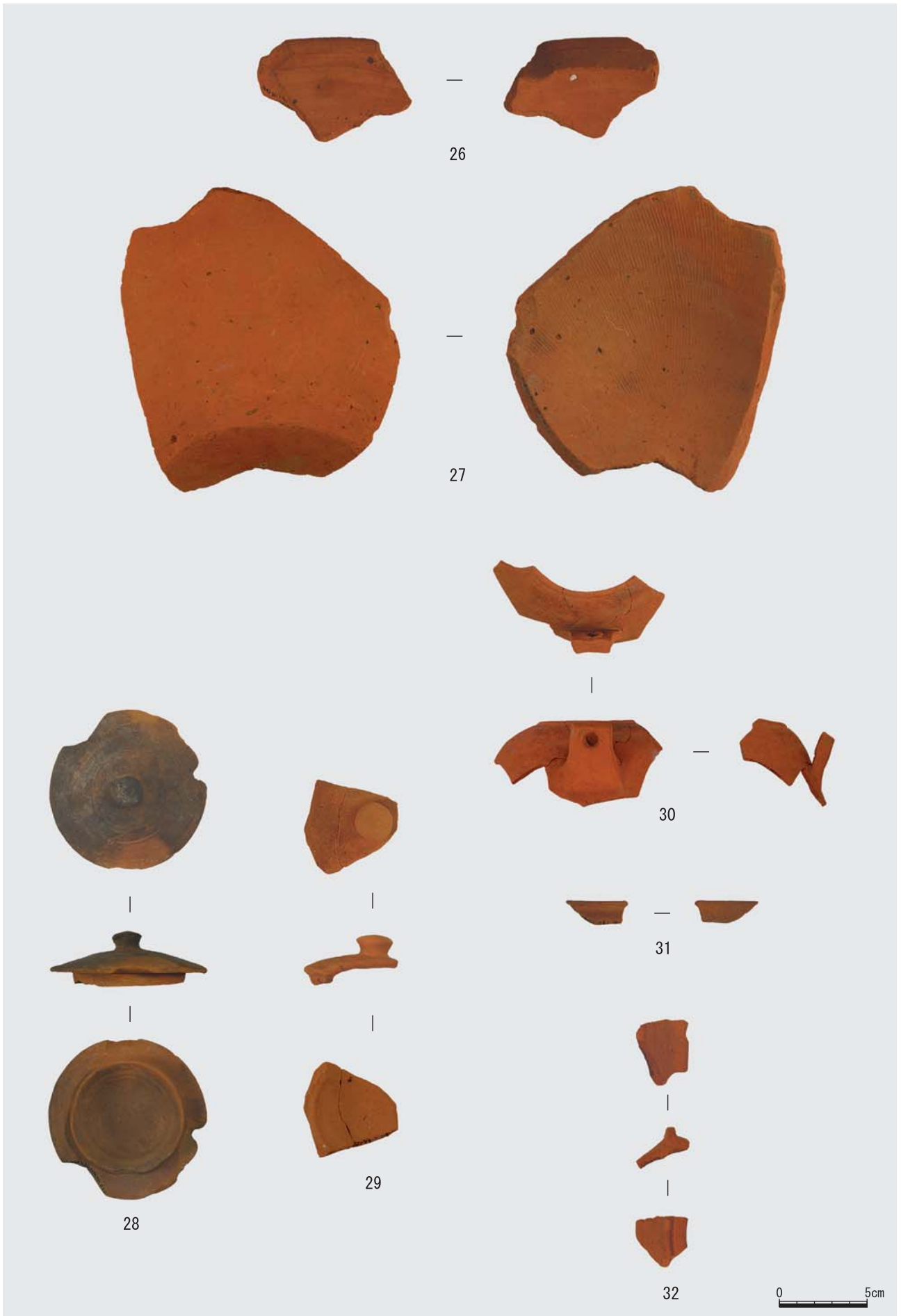
図版 36 アカムヌー 10 鍋 (15)、羽窯 (16～17)、鉢 (18～19)



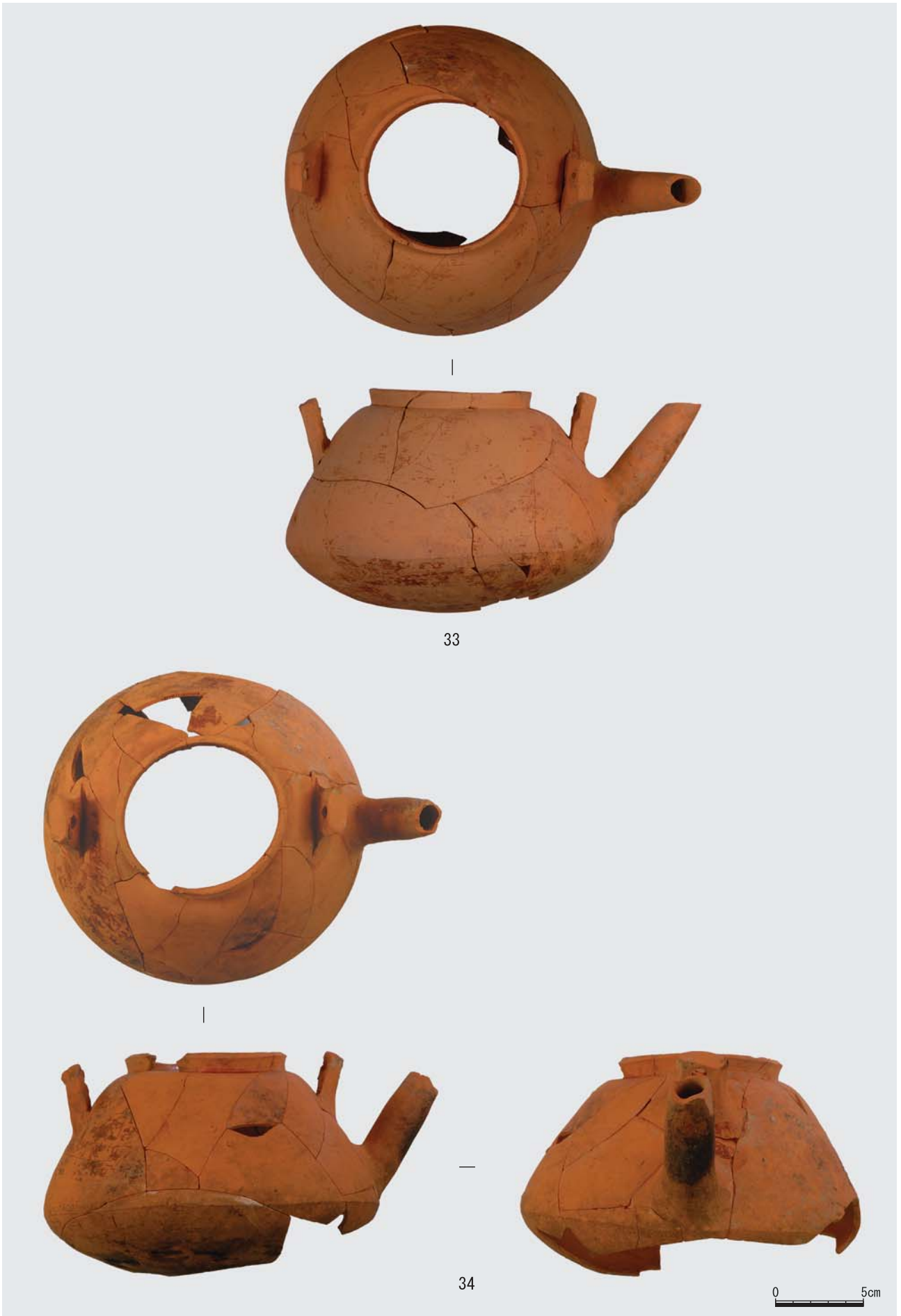
図版 37 アカムヌー 11 鉢



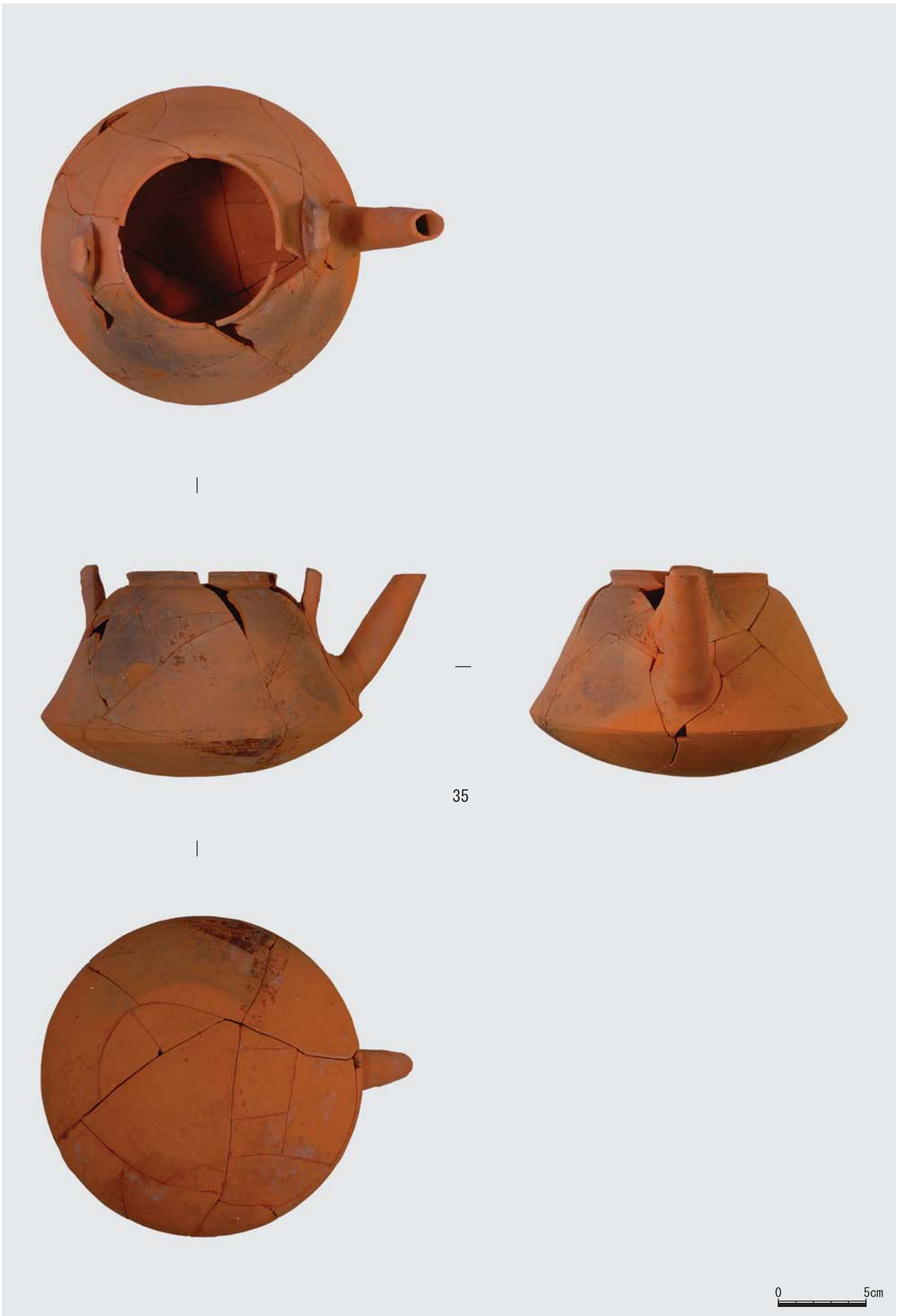
図版 38 アカムヌー 12 鉢



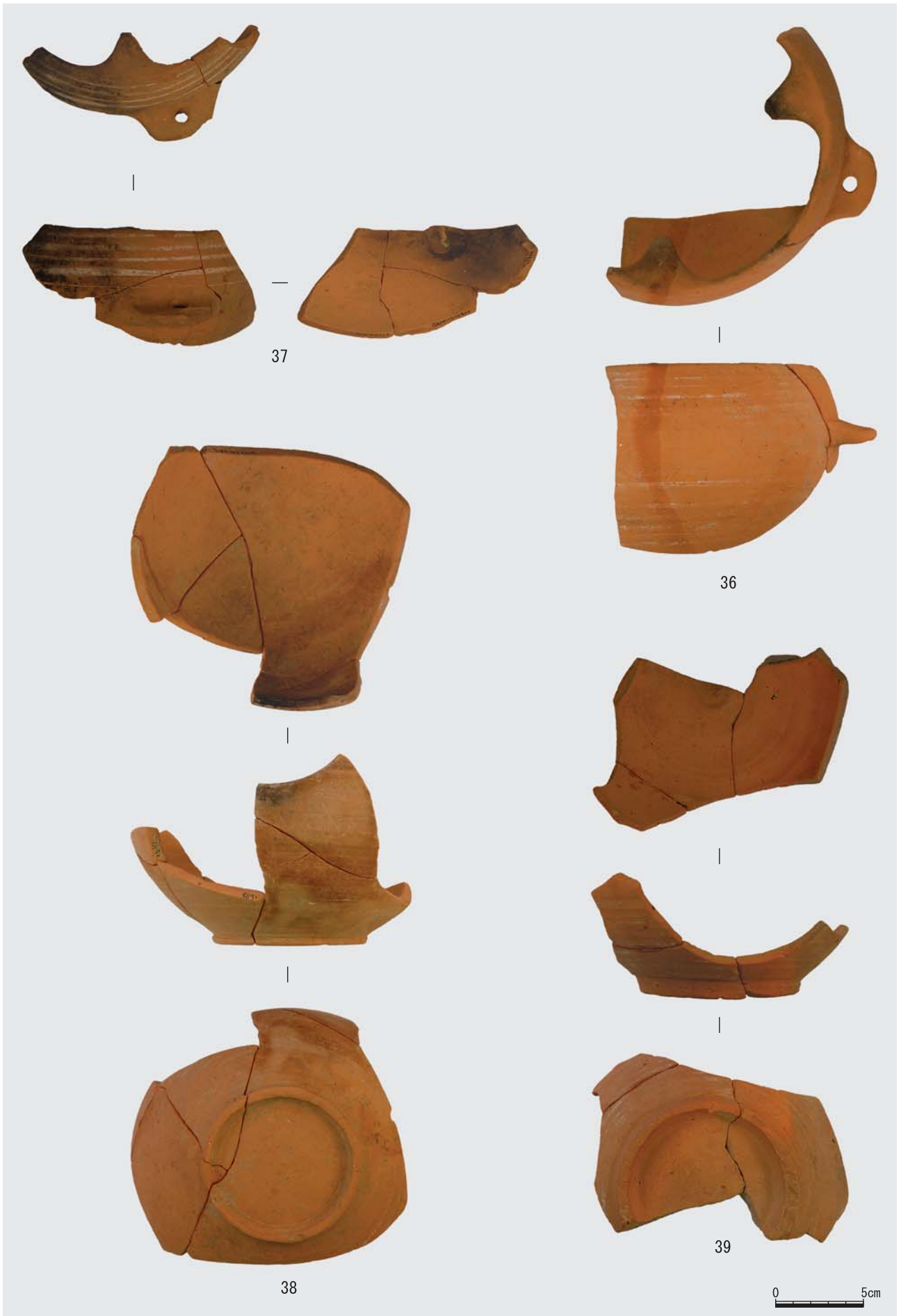
図版 39 アカムヌー 13 播鉢 (26～27)、急須蓋 (28～29)、急須 (30～32)



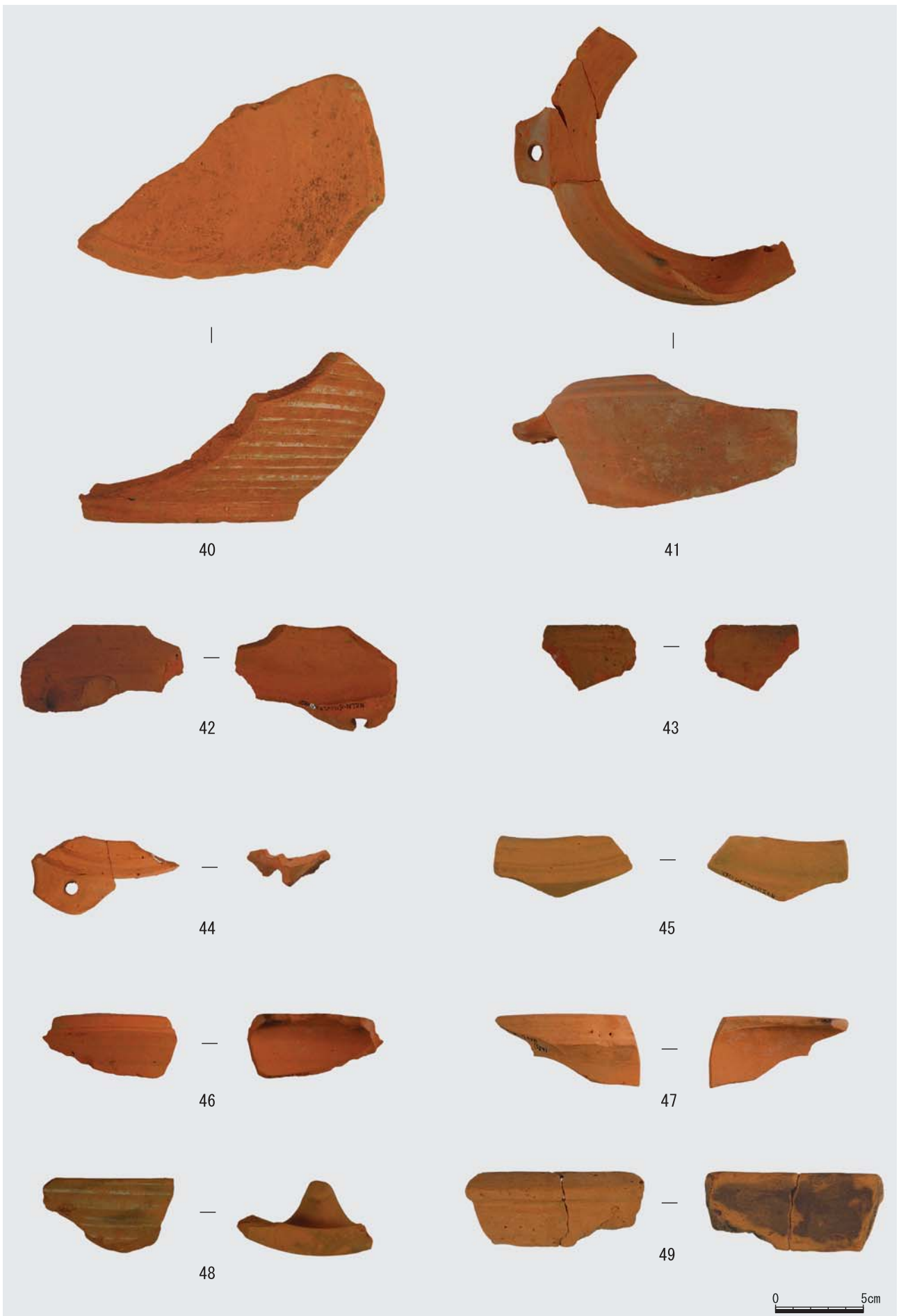
図版 40 アカムヌー 14 急須



図版 41 アカムヌー 15 急須



図版 42 アカムヌー 16 火炉



図版 43 アカムヌー 17 火炉



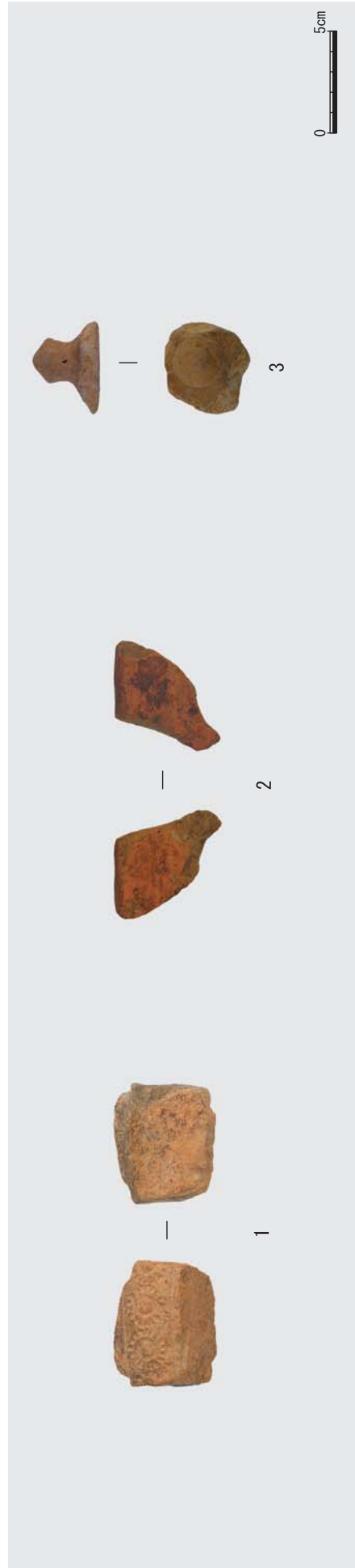
図版 44 アカムヌー 18 火炉



図版 45 アカムヌー 19 火炉 (52)、不明 (54)



図版 46 アカムヌー-20 火炉



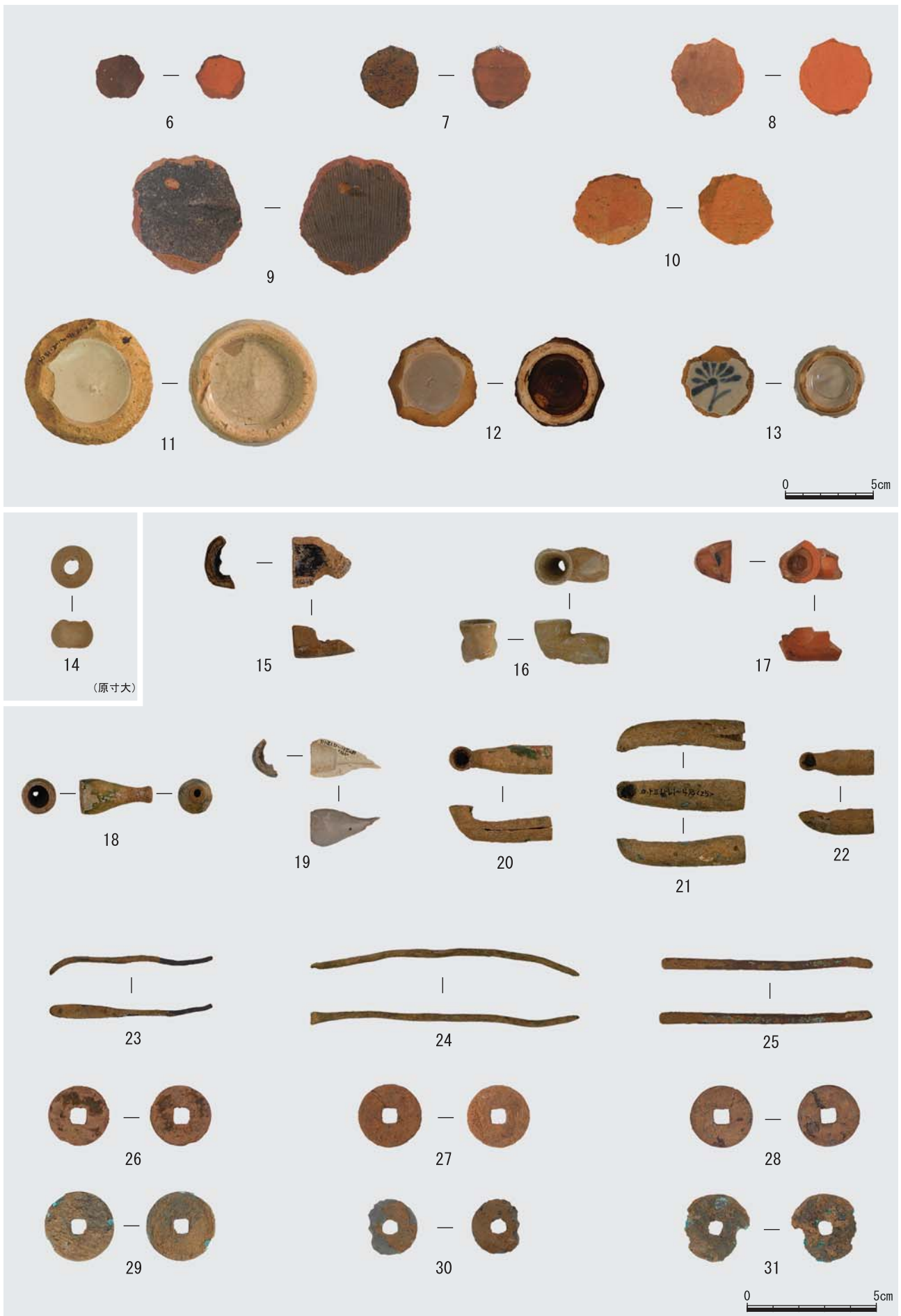
図版 47 沖繩産瓦質土器



图版 48 本土産陶磁器



図版 49 その他の遺物 1 シーサー (1~4)、不明 (5)



図版 50 その他の遺物 1 円盤状製品 (6~13)、ビーズ(14)、煙管(15~22)、簪(23~25)、古銭(26~31)

報告書抄録

ふ	り	が	な	かかずとうんやまいせき							
書			名	嘉数トウンヤマ遺跡Ⅱ							
副		書	名	個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査							
卷			次	—							
シ	リ	ー	ズ	名	宜野湾市文化財調査報告書						
シ	リ	ー	ズ	番	号	第45集					
編	著	者	名	豊里友哉、城間 肇、伊藤 圭、玉城夕貴、上田圭一、矢作健一							
編	集	機	関	沖縄県 宜野湾市教育委員会							
所	在		地	郵便番号 901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号							
発	行	年	月	日	2009年3月31日						
ふ	り	が	な	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所	収	遺	跡	所在地	市町村	遺跡番号				m ²	
				かかずとうんやまいせき 嘉数トウンヤマ遺跡	ぎのわんし 宜野湾市 か か ず 嘉 数 こあざくしほる 小字後原	4720	26° 15′ 78″	127° 44′ 50″	060601 070115	約 883 m ²	個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査
所	収	遺	跡	名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
				嘉数トウンヤマ遺跡	集落遺跡	中世～近世・近代	柱 穴 列状ピット群 土 坑 溝状礫敷遺構	沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 アカムヌー 沖縄産瓦質土器 本土産陶磁器 円盤状製品 ビーズ・煙管・簪・古銭	溝状遺構		
要 約				<p>本報告書は周知の埋蔵文化財である嘉数トウンヤマ遺跡の個人農地土地造成に係る緊急発掘調査の成果をまとめたものである。発掘調査により確認された遺構は溝状礫敷遺構、溝状遺構、土坑群などで、遺物はグスク時代から近代までの土器や陶磁器が得られている。特に溝状礫敷遺構の造成時に遺構内に充填された沖縄製陶器は数量、器種、復元資料とも突出しており、近世末の村落における沖縄製陶器の組成を把握する上で重要な事例である。</p> <p>今回の報告書では近世以降の沖縄製陶器を中心に、関連する遺構を報告している。</p>							

宜野湾市文化財調査報告書 第45集

嘉数タウンヤマ遺跡Ⅱ

— 個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査—

発行年 2009(平成21年)3月31日

編集 沖縄県宜野湾市教育委員会
発行

住所 〒901-2203
沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号
TEL 098-893-4430

印刷 合資会社 正美堂印刷所
TEL 098-898-4611